

宮崎市文化財調査報告書第41集

下 郷 遺 跡

宅地開発に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1999

宮崎市教育委員会

序

宮崎市では第三次総合計画を策定し、基本目標の一つとして「豊かな心と創造性をはぐくむ教育文化都市」の実現に向けて取り組んでおります。文化財行政におきましても現在進行中であります生目古墳群整備事業を一つの大きな柱として、市民に向けて文化遺産、埋蔵文化財への関心、理解を深めて頂きたいと努めております。

本書は平成9年度に発掘調査を行いました下郷遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書であります。下郷遺跡の周辺には垂水遺跡、柏田貝塚、下北方古墳群、宮崎城址等、宮崎市の歴史を語る上で重要な遺跡、文化財が多数存在しており、今回の調査の結果、下郷遺跡は弥生時代の特徴的な「環濠集落」であることが解り、環濠の他、竪穴住居跡など貴重な遺構が多数検出され、それに伴って多量の弥生土器が出土し、日向地方の弥生時代の歴史を解明する上で大変貴重な資料となるものと考えられます。

本書が学術研究、埋蔵文化財への理解、歴史教育の場で、僅かでも役立つならば幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査に従事された作業員の皆様、ご協力とご理解を頂きました関係機関の方々に心からお礼を申し上げます。

平成11年3月

宮崎市教育委員会

教育長 内 藤 泰 夫

例 言

1. 本書は株式会社[]による宮崎市下北方町下郷における宅地開発に伴う事前発掘調査の報告書である。
2. 調査は平成9年5月6日～平成9年9月10日までの期間で宮崎市教育委員会が実施した。
3. 調査主体 宮崎市教育委員会 文化振興課

(平成9年度)

調査総括	課長	野間重孝
	係長	井手上仁悟
庶務担当	技師	鳥枝誠
調査員	技師	中山豪
	技師補	宇田川美和
		稲岡洋道
補助員	嘱託	椎由美子
		松永光雄
		小川正子
		久富なをみ

(平成10年度)

	課長	野間重孝
	係長	永井淳生
庶務担当	主事	竹野隆司
整理担当	技師	稲岡洋道
補助員	嘱託	椎由美子
		松永光雄
		小川正子
		久富なをみ

4. 本書の執筆は稲岡が行った。
5. 掲載図面の実測、製図、図版の作成は中山、稲岡、宇田川、椎、松永、小川が行った。
6. 現場での写真撮影は中山、稲岡が行った。遺物写真撮影は稲岡が行った。
7. 本書の編集は稲岡、久富が行った。
8. 本書で使用した空中写真は株式会社スカイサーベイによるものである。
9. 本遺跡出土遺物は、宮崎市教育委員会が保管している。
10. 本書実測図内で使用した遺構略号は以下の通りである。

SA-住居 ST-竪穴状遺構 SC-貯蔵穴 SD-土坑 SF-土壙墓 SK-環濠
SE-溝状遺構 SB-掘立柱建物 SS-集積遺構 T-トレンチ

本文目次

第Ⅰ章	はじめに	1
第1節	調査に至る経緯	1
第2節	立地と歴史的環境	1
第Ⅱ章	調査の結果	7
第1節	調査の概要	7
第2節	弥生時代の遺構と遺物	8
(1)	遺構	8
(2)	遺物	36
第3節	縄文時代の遺構と遺物	82
(1)	集石遺構	82
(2)	遺物	82
第4節	旧石器時代の遺物	85
第5節	その他の時代の遺構と遺物	87
第Ⅲ章	まとめ	103

插 圖 目 次

第 1 圖	下鄉遺跡位置圖	3
第 2 圖	下鄉遺跡周辺圖	4
第 3 圖	下鄉遺跡遺構配置圖	5
第 4 圖	環濠 2・3・5・7・8・9 周辺実測圖	9
第 5 圖	環濠 1・6 周辺実測圖	10
第 6 圖	環濠 1 周辺実測圖	11
第 7 圖	環濠 3 西側周辺実測圖	12
第 8 圖	住居 1 実測圖	14
第 9 圖	住居 2、土坑 10・11・12 実測圖	14
第 10 圖	住居 4 実測圖	15
第 11 圖	住居 6、土坑 25 実測圖	15
第 12 圖	住居 5、豎穴状遺構 2、土坑 2・8 実測圖	16
第 13 圖	住居 5 実測圖	16
第 14 圖	土坑 2 実測圖	16
第 15 圖	豎穴状遺構 2、土坑 8 実測圖	16
第 16 圖	住居 7 実測圖	18
第 17 圖	住居 17、豎穴状遺構 19 実測圖	18
第 18 圖	住居 15、豎穴状遺構 16 実測圖	19
第 19 圖	住居 8、豎穴状遺構 12 実測圖	19
第 20 圖	住居 16 実測圖	20
第 21 圖	住居 21・27 実測圖	20
第 22 圖	豎穴状遺構 3-1 実測圖	24
第 23 圖	豎穴状遺構 3-2 実測圖	24
第 24 圖	豎穴状遺構 4 実測圖	24
第 25 圖	豎穴状遺構 5 実測圖	24
第 26 圖	豎穴状遺構 6 実測圖	25
第 27 圖	豎穴状遺構 10・11 実測圖	25
第 28 圖	豎穴状遺構 7、貯藏穴 4 実測圖	28
第 29 圖	貯藏穴 5 実測圖	28
第 30 圖	貯藏穴 6 実測圖	28
第 31 圖	貯藏穴 7 実測圖	29
第 32 圖	貯藏穴 8・15・16、土坑 9 実測圖	29
第 33 圖	貯藏穴 10、土坑 1、土墳墓 1 実測圖	30
第 34 圖	住居 3、貯藏穴 13、土坑 30 実測圖	30

第 35 图	貯藏穴 11 実測図	31
第 36 图	貯藏穴 12 実測図	31
第 37 图	住居 9、貯藏穴 14 実測図	31
第 38 图	貯藏穴 18 実測図	33
第 39 图	貯藏穴 19 実測図	33
第 40 图	土坑 4 実測図	34
第 41 图	住居出土土器実測図(1)	39
第 42 图	住居出土土器実測図(2)	40
第 43 图	住居出土土器実測図(3)	41
第 44 图	住居出土土器実測図(4)	42
第 45 图	住居出土土器実測図(5)	43
第 46 图	住居出土土器実測図(6)	44
第 47 图	竪穴状遺構出土土器実測図(1)	46
第 48 图	竪穴状遺構出土土器実測図(2)	47
第 49 图	貯藏穴出土土器実測図(1)	50
第 50 图	貯藏穴出土土器実測図(2)	51
第 51 图	貯藏穴出土土器実測図(3)	52
第 52 图	貯藏穴出土土器実測図(4)	53
第 53 图	土坑出土土器実測図(1)	55
第 54 图	土坑出土土器実測図(2)	56
第 55 图	土坑出土土器実測図(3)	57
第 56 图	環濠出土土器実測図(1)	59
第 57 图	環濠出土土器実測図(2)	60
第 58 图	環濠出土土器実測図(3)	62
第 59 图	環濠出土土器実測図(4)	63
第 60 图	環濠出土土器実測図(5)	64
第 61 图	環濠出土土器実測図(6)	65
第 62 图	環濠出土土器実測図(7)	66
第 63 图	環濠出土土器実測図(8)	69
第 64 图	環濠出土土器実測図(9)	70
第 65 图	環濠出土土器実測図(10)	71
第 66 图	環濠出土土器実測図(11)	72
第 67 图	環濠出土土器実測図(12)	73
第 68 图	環濠出土土器実測図(13)	74
第 69 图	環濠出土土器実測図(14)	75
第 70 图	溝状遺構 1 出土土器実測図	76

第 71 図	土器溜り出土土器実測図	77
第 72 図	一括土器	77
第 73 図	出土石器実測図(1)	79
第 74 図	出土石器実測図(2)	80
第 75 図	出土石器実測図(3)	81
第 76 図	集石遺構 1 実測図	83
第 77 図	集石遺構 2 実測図	83
第 78 図	集石遺構 3 実測図	83
第 79 図	集石遺構 4 実測図	83
第 80 図	縄文土器実測図	84
第 81 図	出土石器実測図(4)	84
第 82 図	出土石器実測図(5)	86
第 83 図	表面採集遺物実測図	88
第 84 図	掘立柱建物 1 実測図	88

表 目 次

第 1 表	出土土器観察表 1	89
第 2 表	出土土器観察表 2	90
第 3 表	出土土器観察表 3	91
第 4 表	出土土器観察表 4	92
第 5 表	出土土器観察表 5	93
第 6 表	出土土器観察表 6	94
第 7 表	出土土器観察表 7	95
第 8 表	出土土器観察表 8	96
第 9 表	出土土器観察表 9	97
第 10 表	出土土器観察表 10	98
第 11 表	出土土器観察表 11	99
第 12 表	出土土器観察表 12	100
第 13 表	出土土器観察表 13	101
第 14 表	出土土器観察表 14	101
第 15 表	出土石器計測表	102

図版目次

図版 1	下郷遺跡全景 1 (上空より)	111
図版 2	下郷遺跡全景 2 (東上空より)	112
図版 3	北側 1 段目、2 段目テラス周辺 (上空より)	113
図版 4	環濠 1 周辺 (上空より)	113
図版 5	環濠 4・9 周辺 (上空より)	114
図版 6	環濠 6 周辺 (上空より)	114
図版 7	環濠 3 土層断面	115
図版 8	環濠 3 周辺	115
図版 9	環濠 6 遺物出土状況①	115
図版 10	環濠 6 遺物出土状況②	116
図版 11	環濠 6 完掘状況①	116
図版 12	環濠 6 完掘状況②	116
図版 13	環濠 7 遺物出土状況	117
図版 14	環濠 7・8 合流点遺物出土状況	117
図版 15	環濠 9、貯蔵穴 2・20	117
図版 16	環濠 9g 遺物出土状況	118
図版 17	住居 1・2 遺物出土状況	118
図版 18	住居 4 遺物出土状況	118
図版 19	住居 9 遺物出土状況	119
図版 20	住居 15 遺物出土状況	119
図版 21	住居 20 遺物出土状況	119
図版 22	住居 21 遺物出土状況	120
図版 23	竪穴状遺構 2、土坑 2 完掘状況	120
図版 24	竪穴状遺構 6 完掘状況	120
図版 25	竪穴状遺構 13 遺物出土状況	121
図版 26	竪穴状遺構 15 遺物出土状況	121
図版 27	竪穴状遺構 24 遺物出土状況①	121
図版 28	竪穴状遺構 24 遺物出土状況②	122
図版 29	貯蔵穴 1 遺物出土状況	122
図版 30	貯蔵穴 4、竪穴状遺構 7	122
図版 31	貯蔵穴 8・15・16、土坑 9 遺物出土状況	123
図版 32	貯蔵穴 18 遺物出土状況①	123
図版 33	貯蔵穴 18 遺物出土状況②	123
図版 34	貯蔵穴 19 遺物出土状況①	124

図版 35	貯蔵穴 19 遺物出土状況②	124
図版 36	貯蔵穴 19 遺物出土状況③	124
図版 37	土坑 8 遺物出土状況	125
図版 38	集石遺構 1	125
図版 39	集石遺構 2	125
図版 40	集石遺構 3	126
図版 41	集石遺構 4	126
図版 42	トレンチ 1 遺物出土状況	126
図版 43	出土遺物 1	127
図版 44	出土遺物 2	128
図版 45	出土遺物 3	129
図版 46	出土遺物 4	130
図版 47	出土遺物 5	131
図版 48	出土遺物 6	132
図版 49	出土遺物 7	133
図版 50	出土遺物 8	134
図版 51	出土遺物 9	135
図版 52	出土遺物 10	136
図版 53	出土遺物 11	137

第I章 はじめに

第1節 調査に至る経緯

下郷遺跡はもともと山林であったが、株式会社[]より宅地造成計画が持ち上がり、平成7年2月、当該地域の埋蔵文化財の有無についての照会が文化振興課に提出された。文化振興課では当該地域の周辺に平和台下遺跡・大宮中学校校庭遺跡・宮崎大学茶園遺跡・垣下遺跡などといった周知の遺跡が多数存在していることから、開発に先立つ試掘調査が必要であると説明した。

それに基づいて、平成8年3月に試掘調査を行った結果、溝状遺構の検出と弥生土器片が確認され、本調査を行う旨を通知したが、山林の未伐採部分や同意書の未取得により調査できない部分が残されていた。そこで山林伐採・同意書取得後の同年10月、改めて試掘調査を行った。この際にも溝状遺構の検出と弥生土器片が確認され、調査範囲が確定された。

第2節 立地と歴史的環境

下郷遺跡は、宮崎平野の中央部を流れる大淀川下流北岸の標高約90mの洪積台地（通称垂水台地）から南へとなだらかに傾斜しながら伸びる下北方丘陵の東南部の先端に位置し、観音寺池によって遮断されるかたちで下北方丘陵とは独立した約30mの小丘陵上にあり、北側には丘陵が、東側と南側には沖積平野が広がり、宮崎平野が一望できる。

下北方丘陵の基幹をなす垂水台地中央部には平成5年度の調査でナイフ形石器、角錐状石器、スクレイパー、剥片尖頭器などの旧石器時代の遺物が出土した垂水第1遺跡や縄文時代早期の前平式土器、吉田式土器などの遺物が出土した伊屋ヶ谷遺跡など、旧石器時代や縄文時代の遺跡が多く存在する。垂水台地から南方へ伸びる丘陵は2つに分岐しており、ひとつが下郷遺跡の位置する下北方丘陵で、もうひとつは上北方低地を挟んだ西側に位置し、大淀川によって遮断される。その南端部は大正7年に浜田耕作らによって調査され縄文時代早期の柏田式土器（塞ノ神式土器）などが出土した柏田貝塚がある。また柏田貝塚の北側の丘陵斜面と上北方低地を挟んだ下北方丘陵の西北側には、瓜生野古墳群があり60基余りの横穴墓が確認されている。さらに、下北方丘陵には多くの古墳が分布する。丘陵のほぼ中央部に位置し、現在、平和が丘団地となっている辺りに池内横穴群がある。昭和43年天理大学により調査が行われ、30基の横穴墓が確認されたが、現在では4基が残されているにすぎない。丘陵南端部には、下北方古墳群があり、前方後円墳4基、円墳12基、地下式横穴墓9基により構成され、昭和26年に県教育委員会が主体となり調査を目的として組織された日向遺跡調査団により1号墳（指定13号墳）、2号墳（未指定）、3号墳（指定14号墳）が調査され1号墳、2号墳より、円筒埴輪や形象埴輪が出土しており、1号墳出土の円筒埴輪はV期にあたることから6世紀初頭の築造と考えられる。また、昭和44年に4号地下式横穴墓、50年に5号地下式横穴墓、57年に7・8・9号墳（いずれも円墳）、地下式横穴墓を2基、市教育委員会が調査し、5号地下式横穴墓からは金製垂飾付耳飾、玉類、変形獣形鏡、変形文鏡、直刀、剣、鉾、鉄鏃など多くの副葬品が出土

しており、築造年代は5世紀後半とされている。また、下北方古墳群の東南部の沖積平野部にある宮崎神宮内に船塚古墳が所在し、詳細は不明だが墳形から5世紀後半から6世紀前半にかけて築造されたと考えられる。また大淀川対岸の跡江台地を中心とする地域には国指定史跡生目古墳群が所在し、古墳時代前期から後期の7基の前方後円墳と15基の円墳が残存し、跡江台地の南東部には弥生時代中期から後期の環濠集落があり、V字溝、住居、周溝状遺構、土壙墓などが検出されており、表採資料ではあるが、小型仿製鏡が出土している。下郷遺跡に隣接する場所では多くの遺跡が存在する。西側に隣接する市立大宮中学校（大宮中学校校庭遺跡）からは、前述した日向遺跡調査団により弥生時代中期を中心とする遺物が出土している。また東側裾部には宮崎大学茶園遺跡、東側低地には垣下遺跡があり、宮崎大学茶園遺跡からは、攪乱中ではあるが弥生中期土器片が26点出土し、垣下遺跡からは竹製の筥や木製の鋏、大板、杭、炭化米の付着した土器が出土している。

平安時代にはこの地方は宇佐八幡宮（豊前国）の領地たる宮崎の荘となった。

さらに下北方丘陵中央部には宮崎城址がある。宮崎城は南北朝の内乱の際、延元元年（1336）に伊東氏の将凶師六郎入道慈円がこの城に拠って南朝に応じ兵を挙げたのが始まりである。その後宮崎城は一時は島津氏が入ったが、天正15年（1587）の豊臣秀吉の九州征伐で九州諸大名の国割りが行われ、宮崎は延岡藩の高橋氏の領土となり権藤種盛を城代とした。そして、慶長5年（1600）の関ヶ原の戦いの際、高橋氏は西軍に属し、東軍に属した飢肥藩の伊東祐兵は稲津掃部助をして宮崎城を攻めさせ城は落ちた。だが高橋氏は関ヶ原で東軍に寝返っており本領安堵となり、宮崎城も高橋氏に返された。その後、延岡藩主は有馬氏へと替り、元和元年（1615）の一国一城令で宮崎城は廃城となった。そのため延岡藩は代官所を置いて宮崎を治めることにした。この代官所の位置は現在の大宮中学校のある場所である。

〈参考文献〉

児玉幸多監修『日本城郭大系 16～大分・宮崎・愛媛～』新人物往来社 1980

「下北方地下式横穴墓第5号」宮崎市教育委員会 1977

「宮崎市遺跡等詳細分布調査報告書Ⅱ」宮崎市教育委員会 1990

「垣下遺跡」宮崎市教育委員会 1991

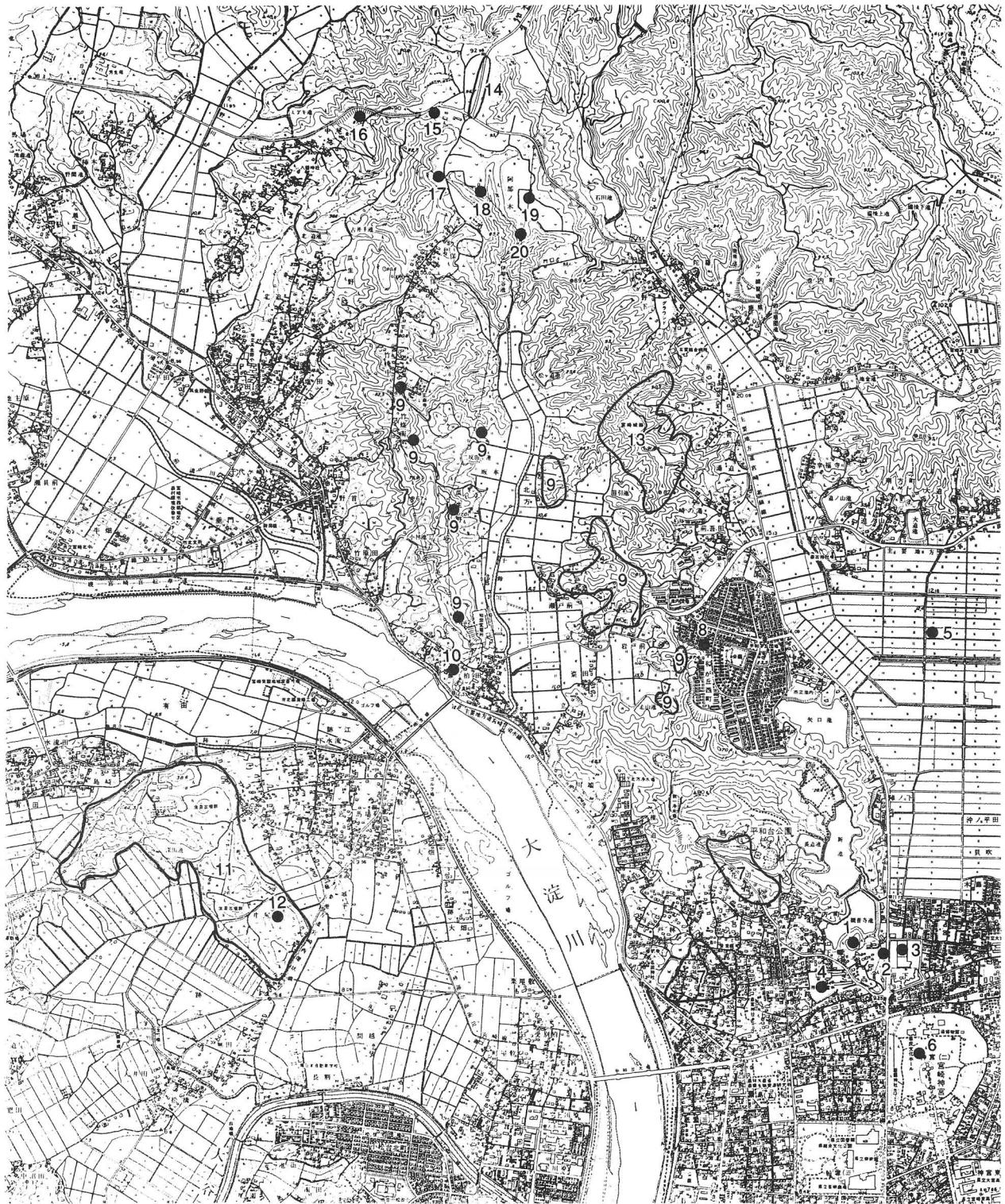
「垂水第1遺跡」宮崎市教育委員会 1994

「伊屋ヶ谷遺跡・小原山第1遺跡・小原山第2遺跡・金剛寺原第2遺跡・阿部ノ木遺跡」宮崎市教員委員会 1995

石川悦雄「日向考古資料Ⅰ」『研究紀要』No.10 宮崎県総合博物館 1984

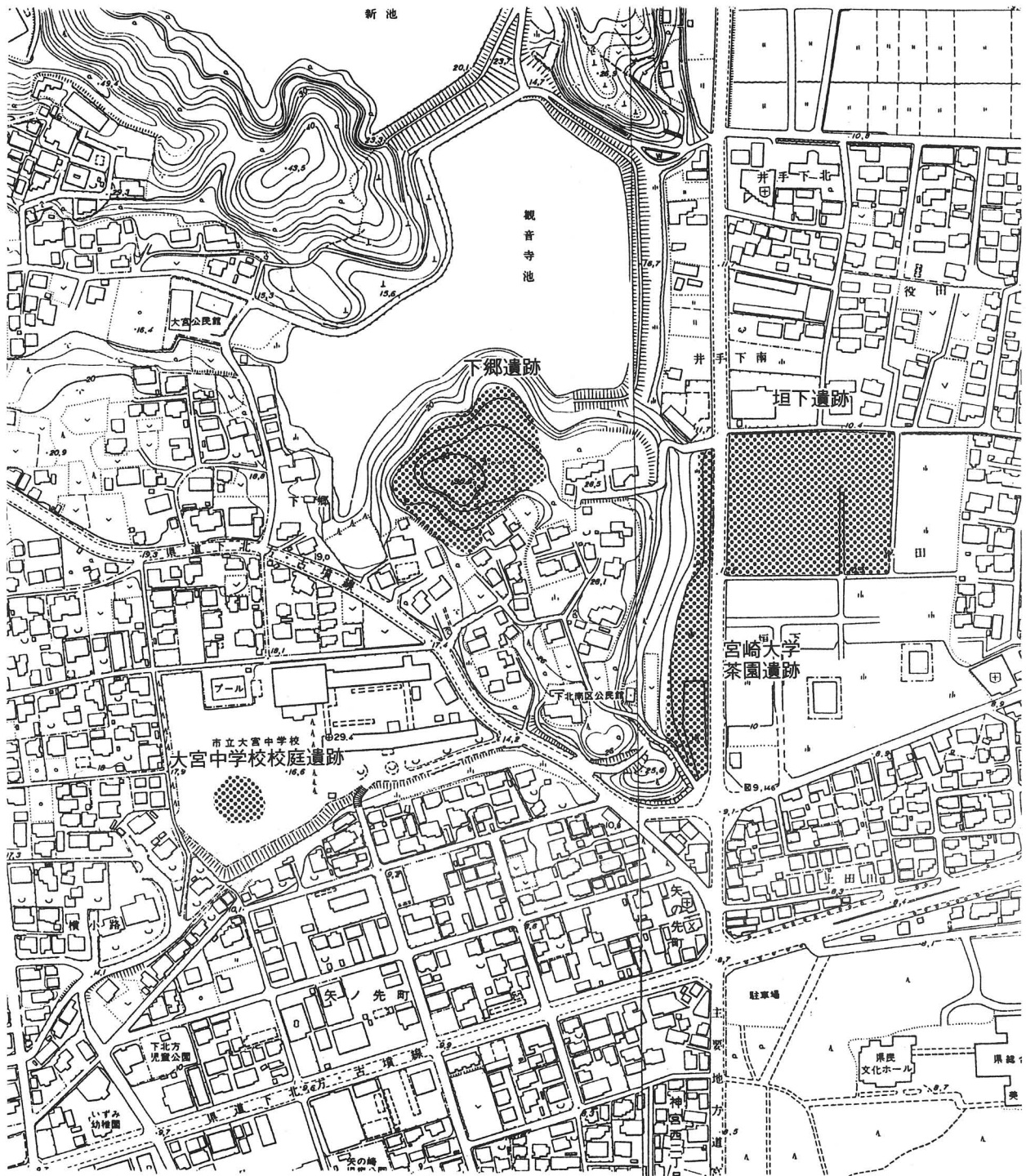
「柏田貝塚」『宮崎県史』資料編 考古1 宮崎県史刊行会 1989

「池内横穴群」「上北方横穴群」「下北方古墳群」「下北方地下式横穴群」「船塚古墳」『宮崎県史』資料編 考古2 宮崎県史刊行会 1993



第1図 下郷遺跡位置図

- | | | | | |
|--------------|-------------|-------------|--------------|--------------|
| 1. 下郷遺跡 | 2. 宮崎大学茶園遺跡 | 3. 垣下遺跡 | 4. 大宮中学校校庭遺跡 | 5. 黒太郎遺跡 |
| 6. 船塚古墳 | 7. 下北方古墳群 | 8. 池内横穴群 | 9. 上北方横穴群 | 10. 柏田貝塚 |
| 11. 生目古墳群 | 12. 石ノ迫第2遺跡 | 13. 宮崎城址 | 14. 垂水第1遺跡 | 15. 金剛寺原第1遺跡 |
| 16. 金剛寺原第2遺跡 | 17. 小原山第1遺跡 | 18. 小原山第2遺跡 | 19. 阿部ノ木遺跡 | 20. 伊屋ヶ谷遺跡 |



第2図 下郷遺跡周辺図



第3図 下郷遺跡遺構配置図

第Ⅱ章 調査の結果

第1節 調査の概要

下郷遺跡は宮崎市下北方町下郷6054-I外に所在し、発掘調査は、平成9年5月6日～平成9年9月11日までの期間実施した。発掘調査前の遺跡の現状は山林で、表土を剥いだ後も多くの樹根に悩まされながらの調査であった。

標高約30mの小丘陵上に立地しており、丘陵全体がドーム状になっており、平坦面が少なく、標高29～30mに当たる部分でしか平坦面が無く、南部分、東部分には平坦面が広がるものの西側、北側では僅かしか無い。東部分、南部分、南西部分の丘陵縁辺部のほとんどが現在の造成工事により旧地形が削り取られ急崖となっており、北西側は丘陵下の観音寺池に向かい標高約27m前後で1段のテラスを持ち、急勾配で下がっていく。南西側の約半分でもテラスがみられ、北側は西側に入り込んだ谷があるため丘陵が舌状に発達しており、標高28～29mで1段目テラスを持ち、標高25mで2段目テラスを持つ。

調査は平坦面とテラス面そしてそれらの縁辺部に絞られたが、平坦になる標高30mを超す丘陵墳頂部周辺一帯においては、表土除去後礫層が広がっており、礫層部分では遺構の検出は不可能であると考えられた。

下郷遺跡では基本層序といちばん平坦となる丘陵墳頂部周辺一帯において礫層となっており、比較的土の残りの良い東側、南側平坦面においても土層自体は傾斜しており、基本となるべき土層の厚さというものを計ることができなかった。I層-表土、II層-黒褐色土、III層-暗褐色土、IV層-褐色土、V層-黄色土(シラス 一部でAT)、VI層-礫層となっており、表土除去後、西側平坦面、西側テラス、北側2段目テラスは既にV層が露出しており、北側平坦面はIV層が、北側1段目テラスはIII層が露出していた。調査の結果、弥生時代の環濠が11条、住居22軒、竪穴状遺構25基、貯蔵穴19基、土坑22基、溝状遺構1条が検出された。環濠は丘陵の等高線とほぼ平行に巡っており、後世の造成が入る前からも現在ほどではないにしろ、独立丘陵であったことがうかがえる。弥生時代以外では、縄文時代の集石が4基、近世の溝状遺構が1条、時期不明の掘立柱建物が2軒検出された。南側、東側の平坦面に設定した3本のトレンチより、縄文時代の土器、旧石器時代のナイフ形石器、剥片尖頭器、三稜尖頭器等が出土した。

第2節 弥生時代の遺構と遺物

(1) 遺構

環濠

環濠1 (第5・6図)

東側斜面部で検出された。南北に巡っており、南側は崖部となっており不明である。全長約13 m以上、幅1.3 m、底幅0.5～0.9 m、深さ70～95 cmを計り、断面は逆台形を呈する。北から南に向かって約40 cmの2段の段落ちを持ちながら下っていく。住居11・12・20、竪穴状遺構25に切られている。遺物は底面で甕、壺、鉢が出土している。

環濠2 (第4図)

北側斜面部で検出された。環濠1の北側の延長上に南から西へ弧を描きながら巡っており、全長約10 m、幅2.0 m、底幅0.6 m、深さ70～95 cmを計り、断面はV字形を呈し、環濠3との間は陸橋部となる。環濠1と繋がる可能性があるが断面形が環濠1とは違いがあるため環濠2と名称は別とした。貯蔵穴1、住居10によって切られており、遺物は床面では出土しておらず、埋土中より、甕、壺などが出土している。

環濠3 (第4・7図)

北側斜面部で検出された。環濠2の西側の延長上に東から西へほぼ直線的に巡っており、全長約15 m、幅2.0 m、底幅0.4～1.3 m、深さ80～120 cmを計り、東から約10 mの位置で約40 cmの段落ちがみられ、その部分より東側は逆台形、西側はV字形の断面を呈する。竪穴状遺構1、貯蔵穴2、土坑13・22によって切られており、環濠2、環濠4との間は陸橋部となる。遺物は床面では出土しておらず、埋土中より、甕、壺、高杯等が出土している。

環濠4 (第4図)

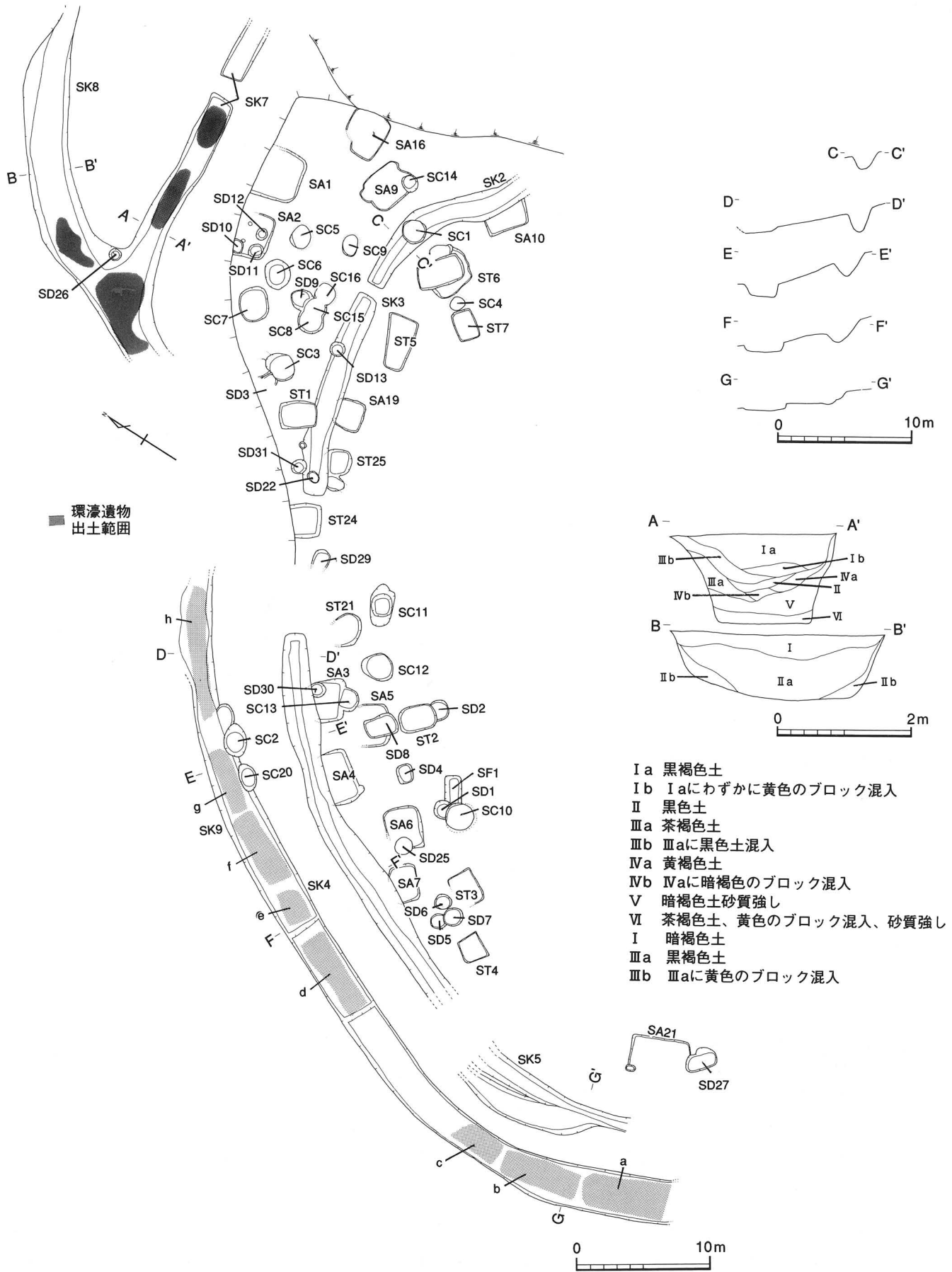
西側の斜面部で検出された。環濠3の西側の延長上に、東から南西へ大きく弧を描きながら巡っており、全長約30 m、幅1.8～2.5 m、底幅0.4～0.7 m、深さ150～170 cmを計り、断面はV字形を呈するが傾斜地であるため溝の外側の壁面の高さが約30 cmの部分もある。南西から東へ緩やかに下っていき、環濠3との間は陸橋部となる。遺物量は少なく、埋土中より甕、壺、高杯等が出土している。

環濠5 (第4図)

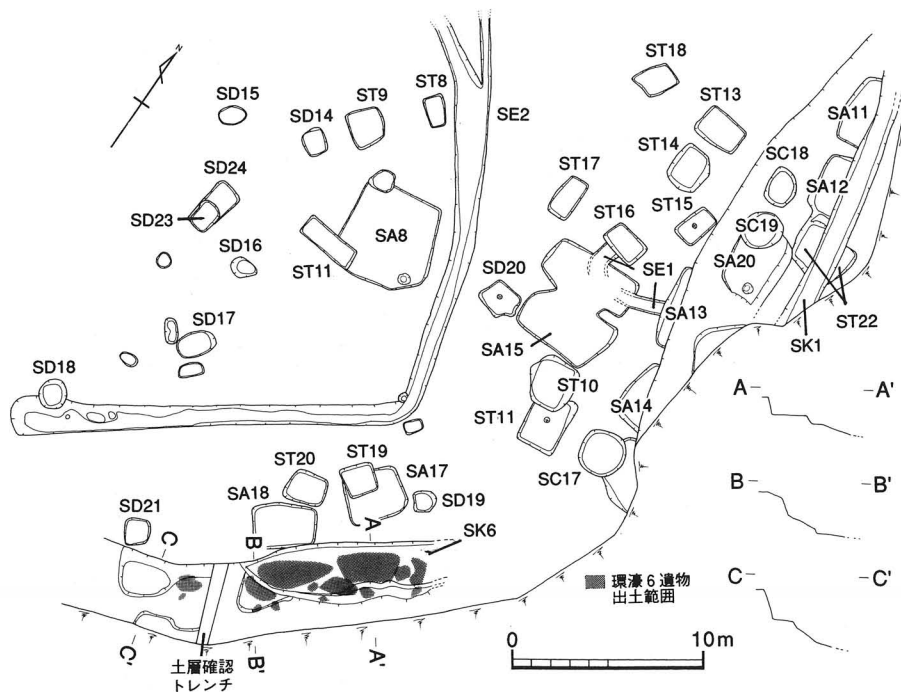
西側の斜面部で検出され、礫層面まで掘込まれてある。環濠4の南側の延長上に北から南へ弧を描きながら巡っており、全長11 m以上、幅1.0～4.0 m、底幅0.4～0.7 m、深さ150～170 cmを計り、南側の一部を除いて、溝が2条並行するような状態になっており、内側の溝が外側に1度立ち上がるものの、すぐその外側で溝状遺構がまた掘込まれている。同時期に存在したものか、溝の掘変えによるものかは埋土状況からは判断できなかった。遺物は、底面において完形の壺が破片になった状態で出土し、埋土中から甕等が出土している。

環濠6 (第5図)

南側の傾斜の急な斜面部で約18 m検出された。南西から北東に弧を描きながら巡っている。内側壁面は検出されたが、外側壁面及び底面は後世の造成によって確認することができなかつ



第4図 環濠2・3・4・5・7・8・9周辺実測図



第5図 環濠1・6周辺実測図

た。北側部分の掘込みより約1.0 m落ちたところで東西10 m以上、南北2.5 mのテラスを持ち、他にも2箇所テラスがみられる。遺構埋土が4層からなっており、上層からI層黒色土、II層黄色土、III層黒褐色土、IV層オリーブ色土が確認され、I層黒色土を除去しII層黄色土面に揃えた際、テラス部分の北側で長さ4.5 m、幅1.0 mの範囲で焼土が多量に確認された。遺物は各層で出土し、特にI層、II層で完形のものや破片が多数出土している。それらの多くは投棄されたものと考えられる。出土量は下層にいくに従い少なくなる。

環濠7 (第4図)

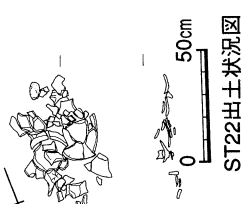
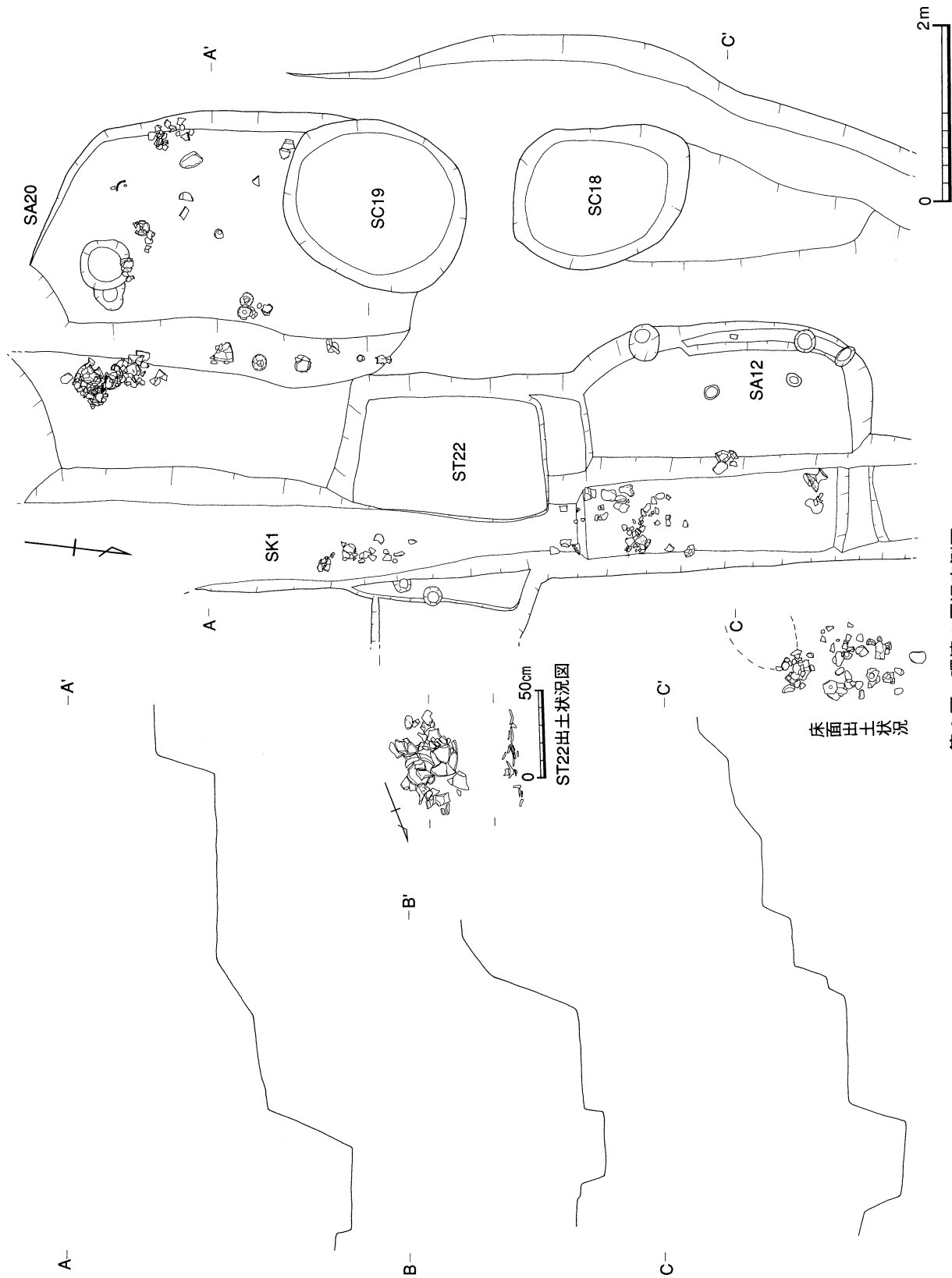
北側の2段目テラスで検出された。東側から西側へ緩やかな弧を描いて巡っている。全長約25 m以上、幅2.0 m、底幅1.0～1.5 m、深さ30～150 cmを計り、断面は逆台形を呈し、溝東部分で幅1.6 mの陸橋部がみられる。東側、西側は谷部となっており不明である。遺物は埋土中から多数出土しており、特に底面から約10 cm浮いた位置でほぼ完形の甕、壺、器台や多くの土器片が出土している。

環濠8 (第4図)

北側の2段目テラスで確認された。東側から西側へ弧を描いて巡っている。全長約20 m以上、幅3.5 m、底幅2.5 m、深さ55～90 cmを計り、断面は逆台形を呈する。東側は谷部となっており不明である。東から西に向かって下っていき、環濠7と合流する。遺物は環濠7と合流する部分の手前で甕、壺等の破片が床から約40 cmの位置でレンズ状に出土しており、埋土が堆積する段階での流れ込みと考えられる。

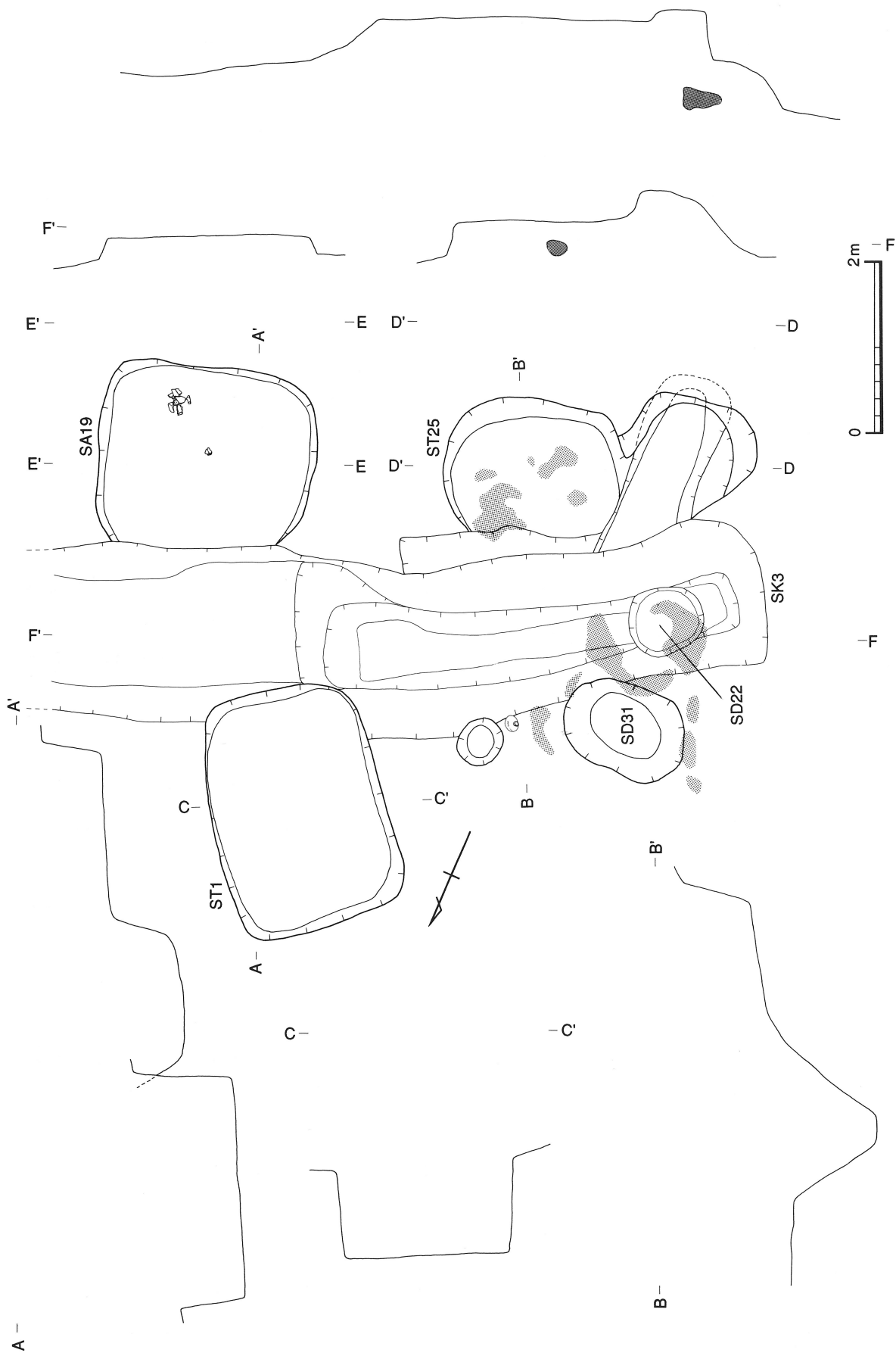
環濠9 (第4図)

西側の2段目テラスで検出された。南側から東側へ大きく弧を描いて巡っている。全長約60 m以上、幅2.5～3.5 m、底幅1.0～3.0 m、深さ10～75 cmを計り、断面は逆台形を呈す



床面出土状况

第6图 環濠1 周边实测图



第7图 环濠3西侧周边实测图

る。東側は谷部となっており、南側は後世の造成のため不明である。南から西に向かって下っていく。遺物は多数出土しており、遺物がほぼ床面で集中して出土したブロックが8箇所あり、一番東側のブロックではほぼ完形状態の甕、壺、破片状態の高杯などが多数出土しており、それらの多くは投棄されたものと考えられる。

環濠 10・11 (第3図)

西側の崖部で検出された。環濠 10 は東西 3 m 以上、環濠 11 は東西 5 m 以上を計り、後世の造成により環濠 10 は内側の壁面及び底面、環濠 11 は内側の壁面のみが検出された。2 溝共に丘陵の斜面と並行に巡っている。

住居

住居 1 (第8図)

1 段目テラスの北縁で検出された。南北 3.5 m 以上、東西約 4.0 m、深さ約 45 cm を計り、隅丸長方形プランを呈するが北壁は斜面部のため不明である。柱穴は検出されておらず、南壁寄りのほぼ中央部に直径 70 cm の土坑を持つ。遺物は床面にほぼ近い位置で、甕、壺、鉢、ミニチュア鉢が出土しており、大型の磨製石鏃等、埋土中からも多くの遺物が出土した。

住居 2 (第9図)

住居 1 の西側に近接する状態で検出された。南北 3.0 m 以上、東西約 4.5 m、深さ約 30 cm を計り、隅丸長方形プランを呈するが北壁は斜面部のため不明で、また土坑 10・11・12 と切り合っている。柱穴は 2 本検出されており、2 本とも支柱穴と考えられる。遺物は床面からはほとんど出土しておらず、埋土中から多くの土器片が出土した。

住居 3 (第34図)

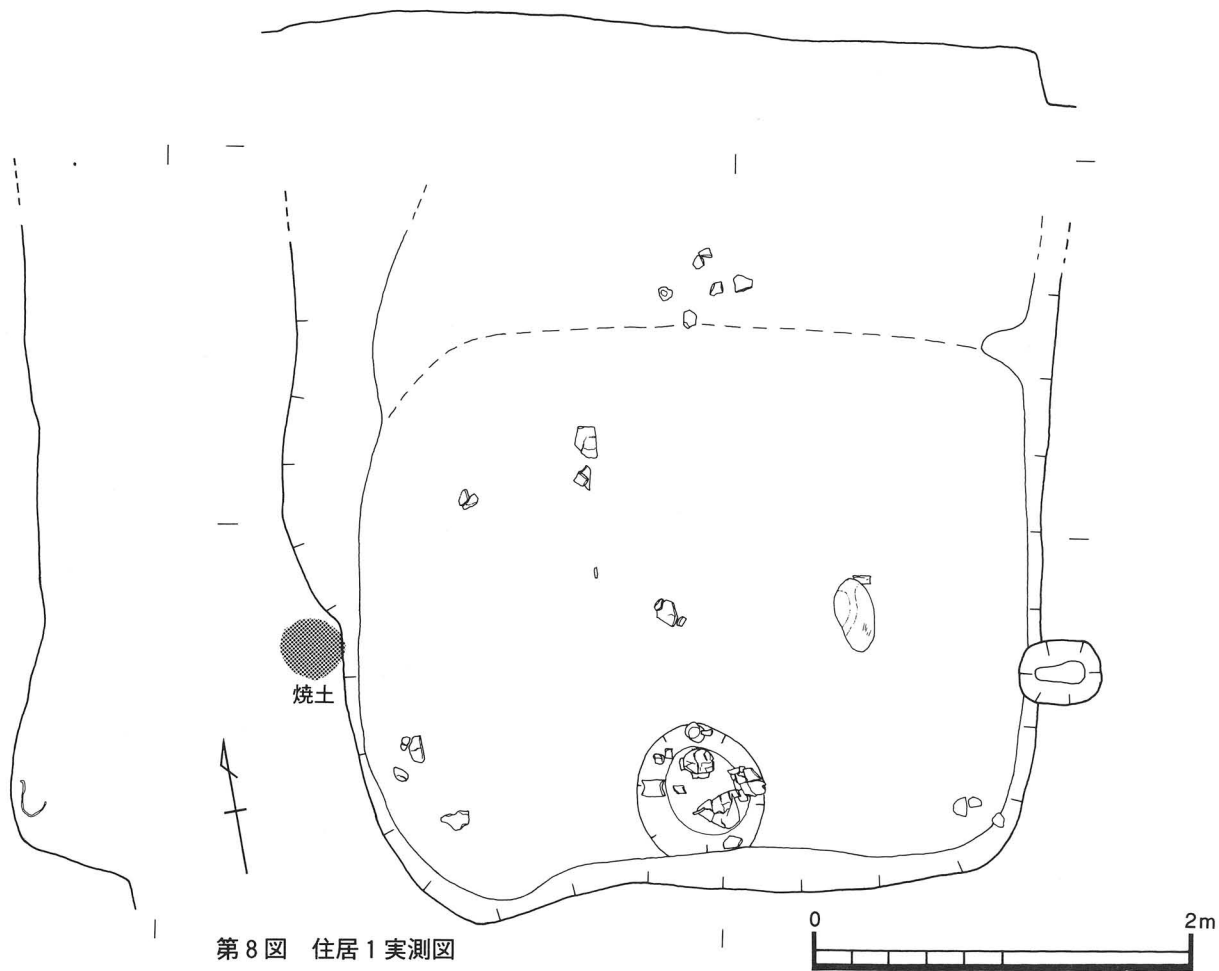
西側の斜面部で検出された。南北 1.8 m 以上、東西約 3.0 m、深さ 55 cm を計り、不定形なプランを呈する。斜面部に位置するため、約半分から北側は不明で、貯蔵穴 13 と土坑 30 と切り合う。南東の住居の隅で直径 48 cm、深さ 36 cm の柱穴を検出したが、位置的に支柱穴の可能性は低い。また南西寄りの位置で深さ 10 cm の土坑状の掘込みがあり、その床面から焼土と炭が確認された。遺物は床面近くで甕、壺、椀、蓋が出土している。

住居 4 (第10図)

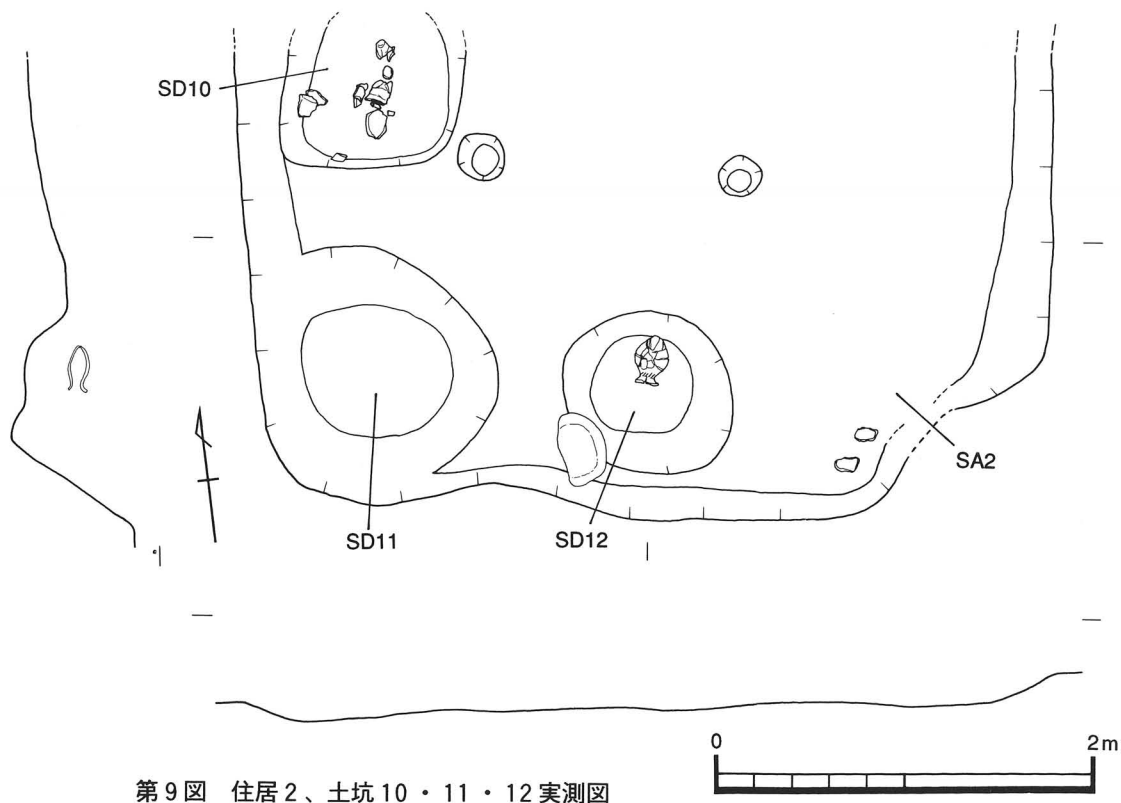
西側の斜面部で検出された。南北 2.0 m 以上、東西約 4.0 m、深さ約 35 cm を計り、方形プランを呈するが、斜面部に位置するため、約半分から北側は不明で、西南の住居の隅を水穴によって切られている。柱穴は 3 本検出されたが、深さ、位置的に支柱穴である可能性は低い。住居の至る所で炭、焼土が確認され、焼失による住居の廃絶が考えられる。遺物は床面からやや浮いた位置で土器片が多量に出土している。

住居 5 (第13図)

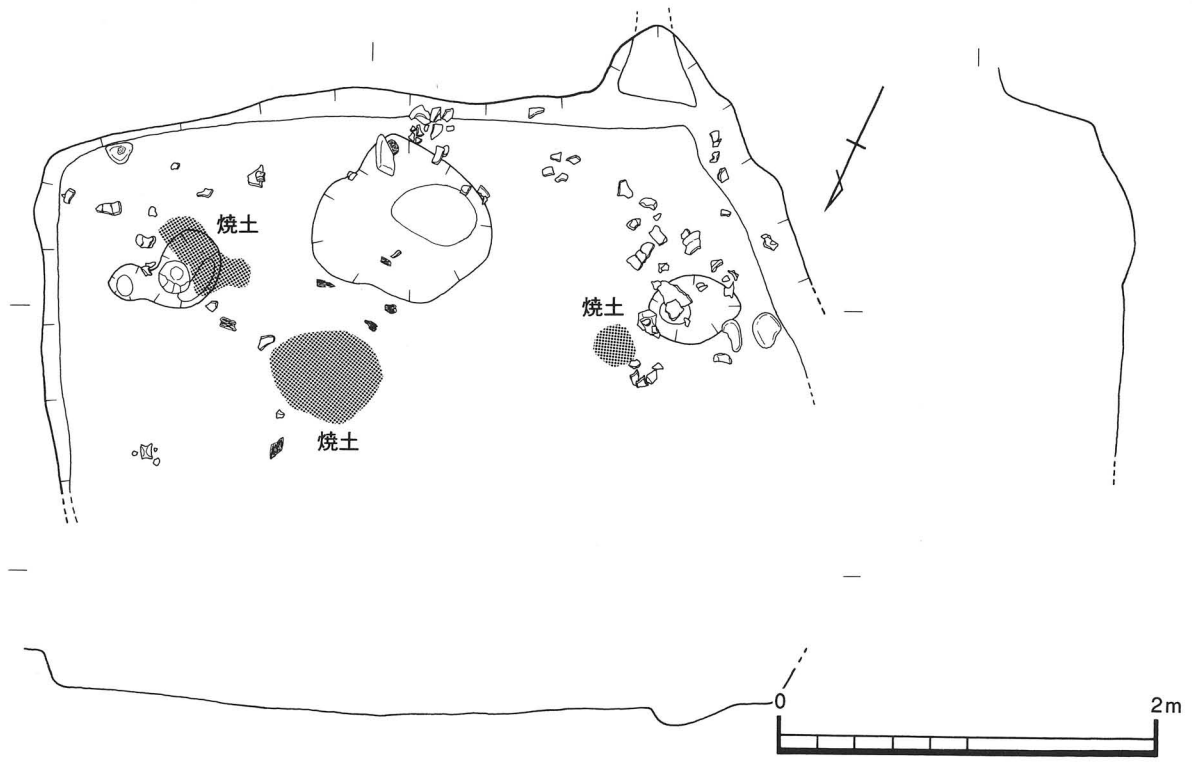
西側の斜面部で検出された。南北 2.6 m 以上、東西約 3.2 m、深さ約 25 cm を計り、隅丸方形プランを呈する。斜面部に位置するため、北壁は不明で、土坑 8 を切っている。柱穴は検出されていない。遺物は、ほぼ床面で多量に出土しており、甕、高杯が破片の状態、椀がほぼ



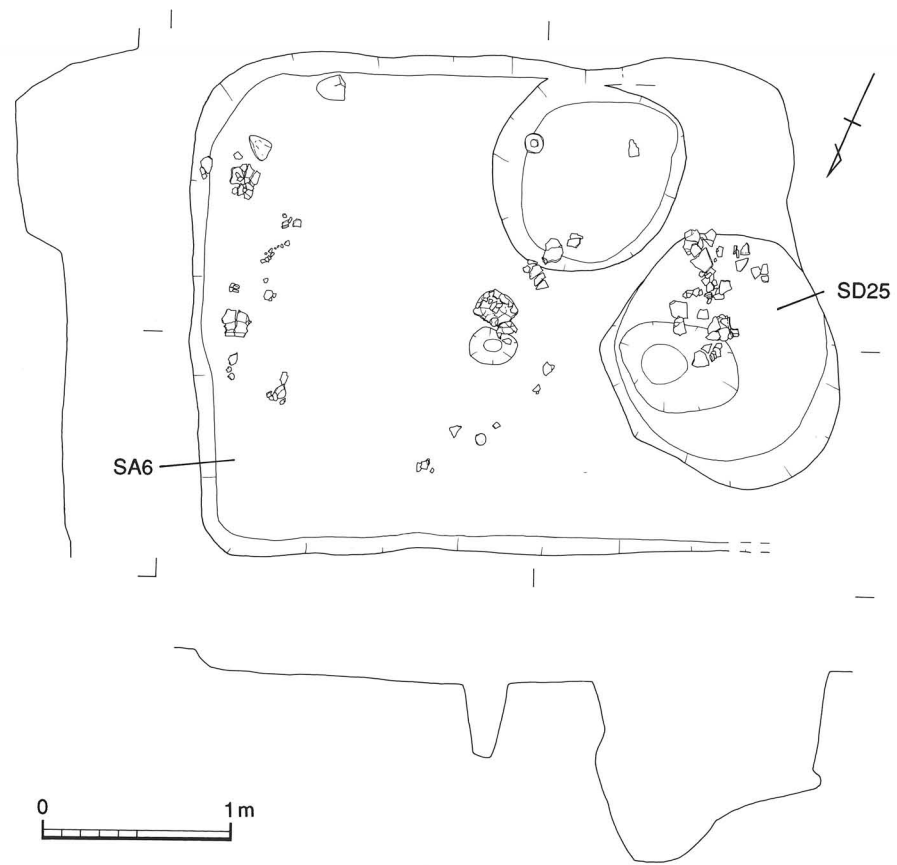
第8图 住居1 实测图



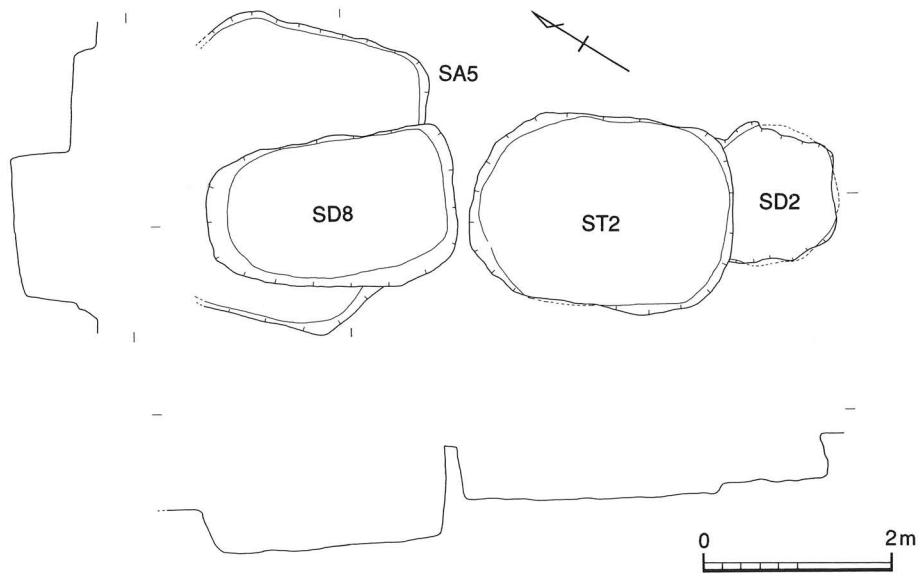
第9图 住居2、土坑10・11・12 实测图



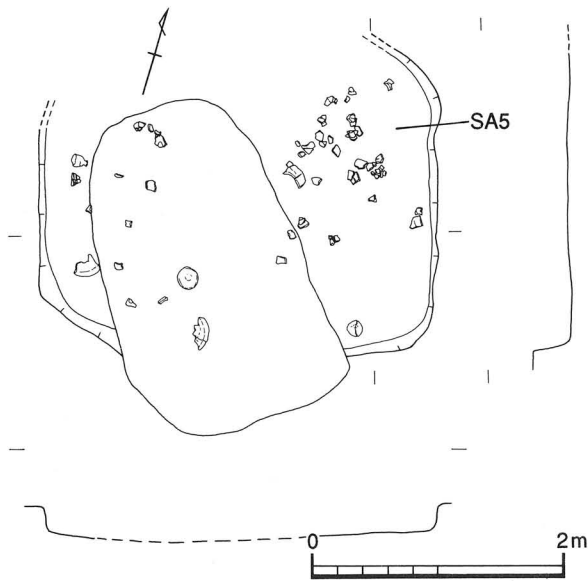
第10図 住居4実測図



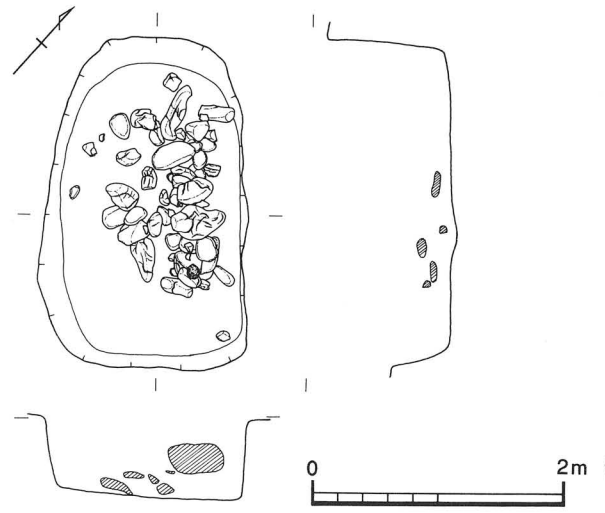
第11図 住居6、土坑25実測図



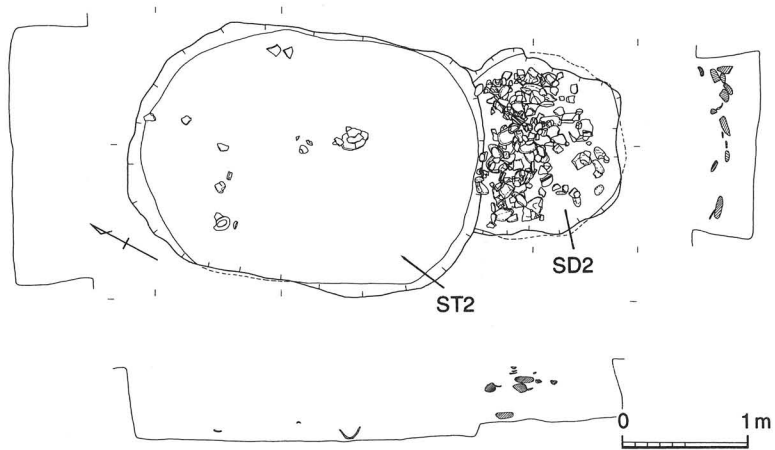
第12図 住居5、竪穴状遺構2、土坑2・8実測図



第13図 住居5実測図



第14図 土坑8実測図



第15図 竪穴状遺構2、土坑2実測図

完形の状態出土している。

住居 6 (第 11 図)

西側の斜面部で検出された。南北約 2.6 m、東西約 3.2 m、深さ約 36 cm を計り、隅丸長方形プランを呈する。斜面部に位置するため、北壁の立上がりは 3 cm しか残っておらず、住居西側隅は不明である。土坑 25 と切り合う。南壁寄りのやや西側に位置で直径 1.0 m、深さ 30 cm の土坑を持ち、住居のほぼ中央部で深さ 40 cm の柱穴が 1 本検出された。遺物は床面から約 10 cm 浮いた位置で甕、壺、高杯等が出土している。

住居 7 (第 16 図)

西側の斜面部で検出された。南北約 2.2 m、東西約 2.7 m、深さ約 25 cm を計り、隅丸長方形プランを呈する小型の住居である。斜面部に位置するため、北壁の約 4 分の 3 と西壁の約 3 分の 1 が不明である。柱穴は検出されていない。遺物はほぼ床面、もしくは床面から約 10 cm 浮いた位置で甕、壺、高杯等が出土しており、住居の東壁に近い部分において、甕が伏せられた状態で出土し、その中から壺が、またその中から朱がミニチュア鉢に入れられた状態で出土した。

住居 8 (第 19 図)

東側のほぼ平坦面で検出された。南北約 5.2 m、東壁長約 3.5 m、西壁長約 5.2 m、深さ約 10 cm を計り、台形プランを呈する。竪穴状遺構 12、土坑と切り合う。柱穴は検出されておらず、住居のほぼ中央部から焼土が 1.7×0.7 m の範囲で確認された。遺物は土器片が床面から約 10 cm 浮いた位置で出土した。

住居 9 (第 37 図)

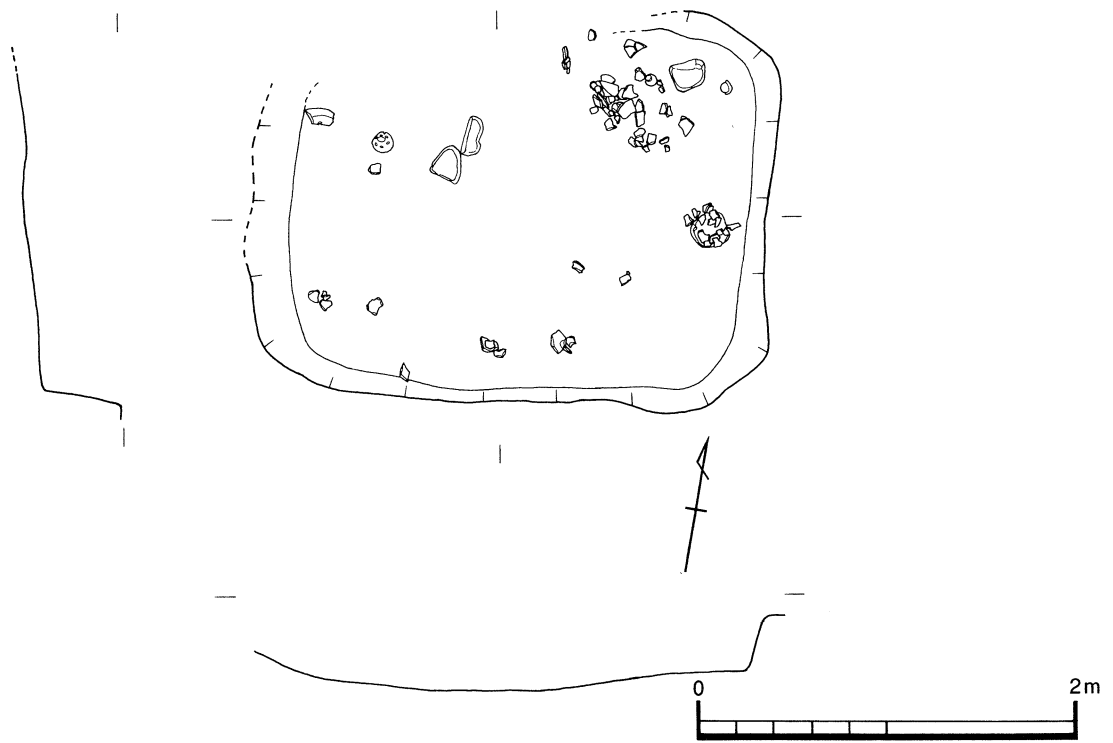
北側の 1 段目テラスで検出された。南北約 2.9 m、東西 3.7 m、深さ 15 cm を計り、貯蔵穴 14 と切り合う。また不定形なプランを呈するため、他遺構と切り合う可能性があるが土層断面での確認はできなかった。柱穴は確認されていない。遺物は土器片が床面からやや浮いた位置で出土している。

住居 10 (第 4 図)

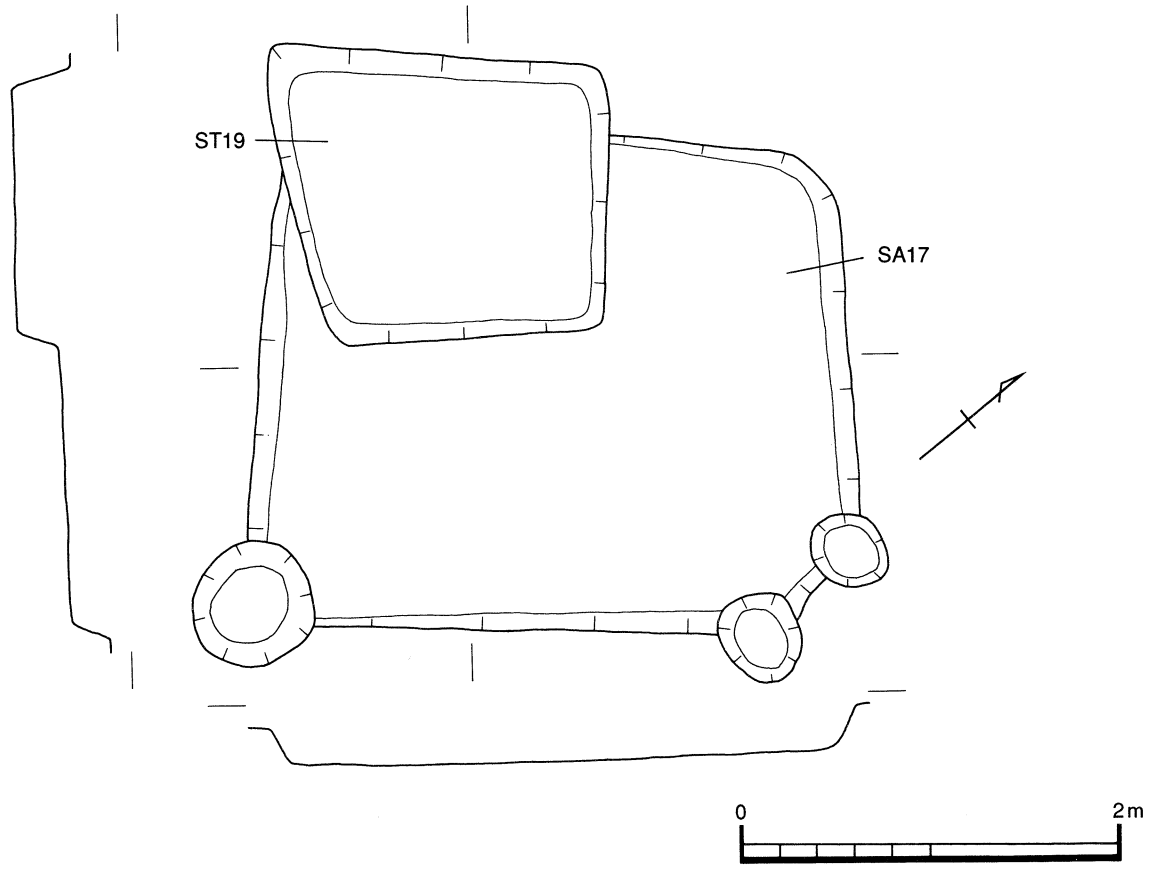
北側の斜面部で検出された。南壁 3.3 m、南北約 3.3 m 以上、深さ約 10 cm を計り、隅丸長方形プランを呈する。環濠 2 の上から切り合っており、環濠 2 を挟み崖部となっているため東側約 3 分の 1 は不明である。柱穴は検出されていない。遺物は甕、壺、鉢、器台、高杯とバリエーションに富むが、すべてが床面の高さで破片の状態出土している。また、10 cm 大の円礫が他の遺物に混じって出土しており、中には約 30 cm あるものもみられる。

住居 11 (第 5 図)

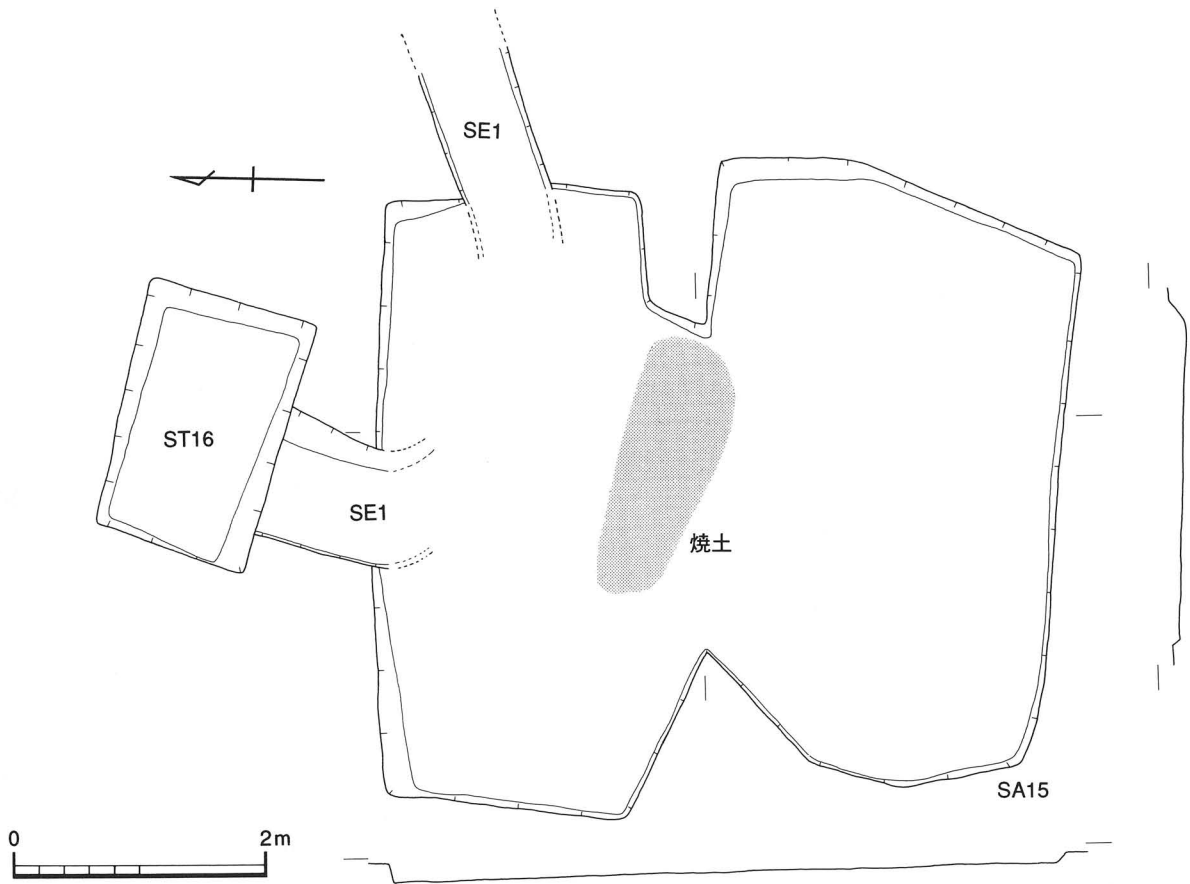
東側の斜面部で検出された。南北約 3.3 m、東西 1.7 m 以上、深さ約 40 cm を計り、西壁の一辺と北壁、南壁の一部しか残っておらず、環濠 1 を切っており、環濠 1 を挟み崖部となっているためプランは不明である。柱穴は検出されていない。隅丸長方形プランを呈する。床面で長さ 80 cm の炭化木が確認されている。遺物は埋土中から土器片が多数出土しており、住居廃絶後の流れ込みと判断される。



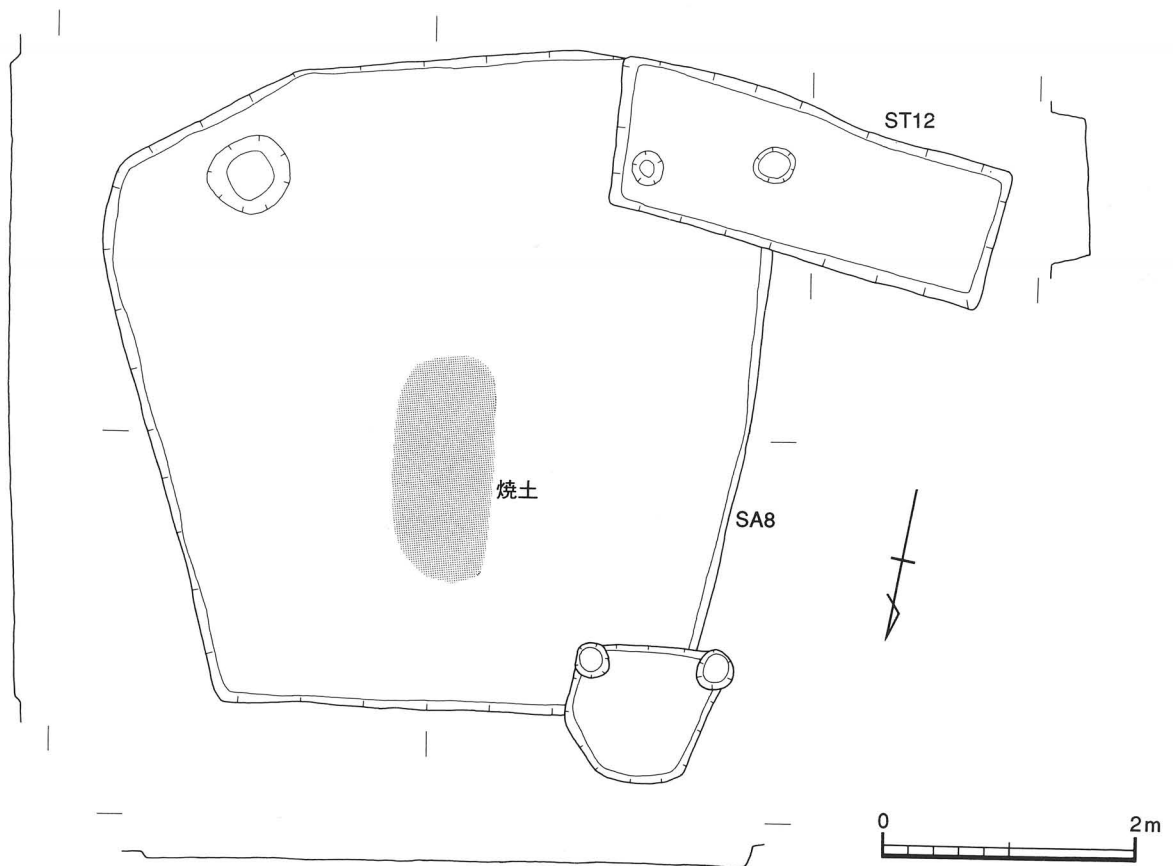
第16図 住居7実測図



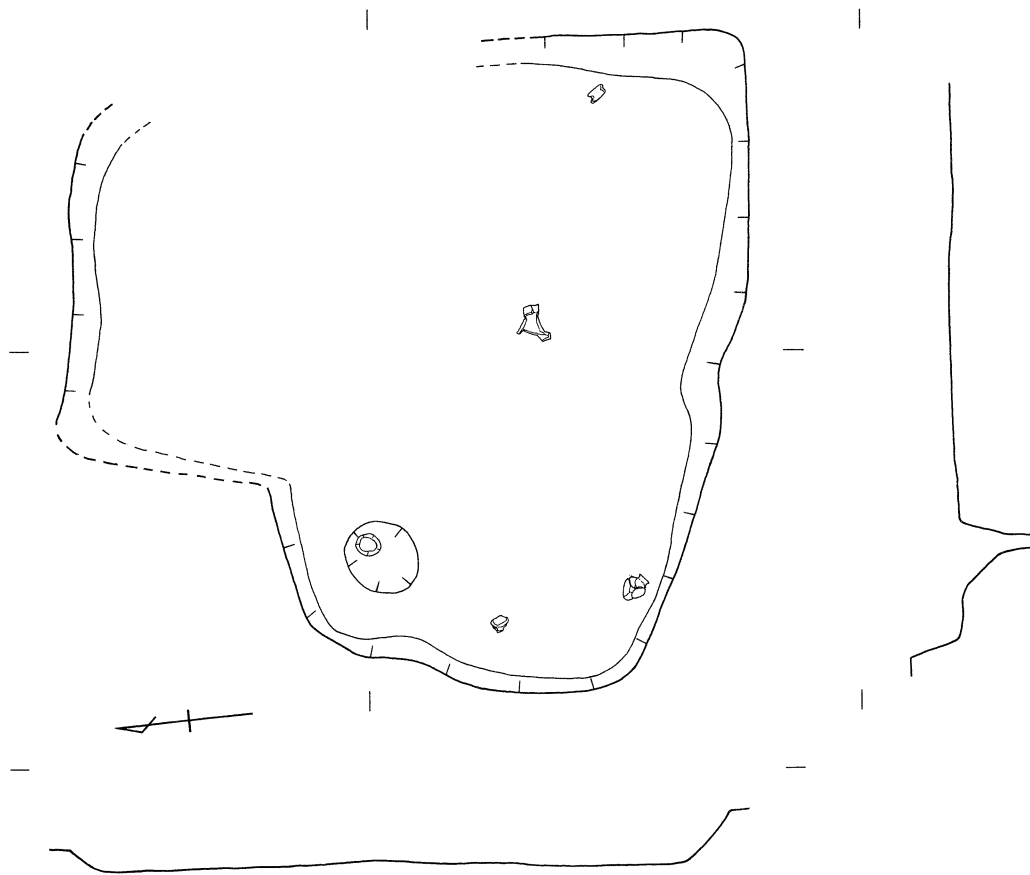
第17図 住居17、竪穴状遺構19実測図



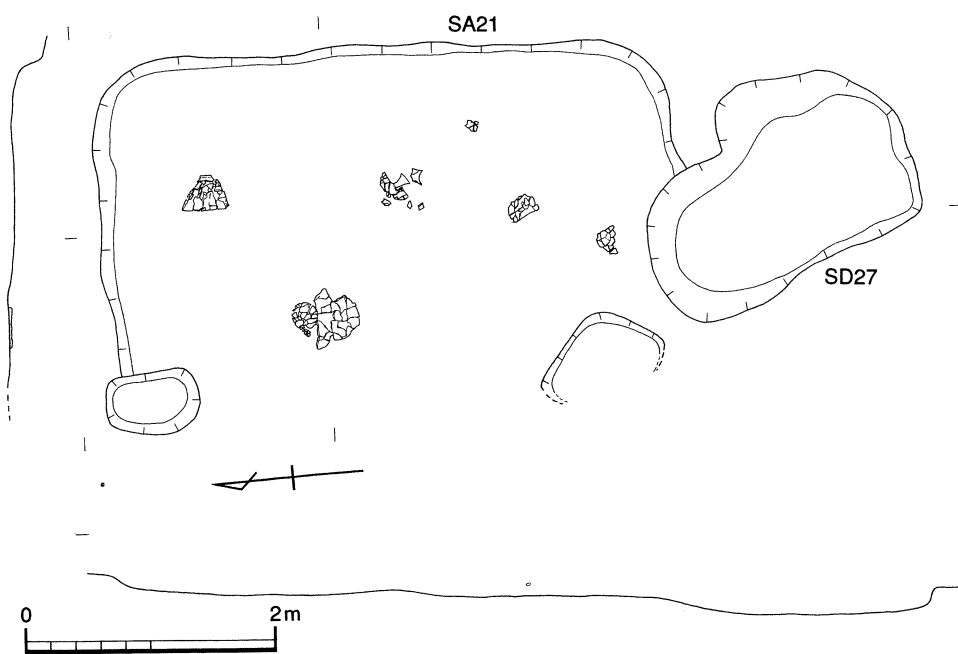
第18図 住居15、竪穴状遺構16実測図



第19図 住居8、竪穴状遺構12実測図



第 20 図 住居 16 実測図



第 21 図 住居 21・土坑 27 実測図

住居 12 (第 6 図)

住居 11 の南側に近接する状態で検出された。南北約 3.3 m、東西 2.8 m 以上、深さ約 55 cm を計り、環濠 1 を切っており、環濠 1 を挟み崖部となっているためプランは不明である。柱穴は 2 本検出されたが、住居西壁の中心軸に直行するライン上で直径 20 cm、深さ 35 cm の柱穴が主柱穴の 1 本と考えられるが、他の柱穴は検出することができなかった。遺物は埋土中から多量の土器片が出土しており、また完形の甕と壺が床から約 25 cm 浮いた位置で出土している。

住居 13・14 (第 5 図)

東側の丘陵縁辺部で検出された。それぞれ、西壁の一辺と北壁、南壁の一部しか残っておらず、プランは不明である。遺物は土器片が多量に出土しており、住居 13 ではほぼ完形の甕が出土している。

住居 15 (第 18 図)

東側のほぼ平坦部で検出された。南北約 5.0 m、東西 5.0 m 以上、深さ約 15 cm を計り、方形プランを呈し、南壁、北壁の中央部で 1.5 m の突出部がみられるため、「方形間仕切り住居」と考えられる。柱穴は確認できなかった。住居中央部で南北約 2.0 m、東西 0.7 m、西壁の中央部近くで焼土が確認された。北壁中央部、東壁北側で溝状遺構 1 と切り合う。遺物は床面から 10 cm 浮いた位置で土器片が多量に出土した。

住居 16 (第 20 図)

北側の 1 段目テラスで検出された。南北約 2.9 m、東西 3.7 m、深さ 15 cm を計り、また不定形なプランを呈するため他の遺構との切り合いが考えられるが、土層断面では確認することができなかった。遺物は床面よりやや浮いた位置で、高杯の破片、完形の壺等が出土しており、拳大の円礫も他の遺物に混じり出土している。

住居 17 (第 17 図)

南側の平坦部で検出された。南北約 3.2 m、東西 2.6 m、深さ 22 cm を計り、長方形プランを呈する。竪穴状遺構 19 と切り合う。柱穴は確認できなかった。遺物は土器片、拳大の円礫が床面から 10 cm 浮いた位置で出土した。

住居 18 (第 5 図)

南側の平坦部の縁辺部で検出された。南北 2.5 m 以上、東西 3.2 m、深さ 25 cm を計り、東西に長い長方形プランを呈する。柱穴は西側で 3 本検出されたがいずれも主柱穴とは考えられない。遺物は床面より 15 cm 浮いた位置で数十点出土している。

住居 19 (第 7 図)

環濠 3 を切って検出された。南北 2.6 m、東西 2.1 m 以上、深さ 80 cm を計り、隅丸方形プランを呈する。遺物は遺構北東部で土器片が集中して数点出土した。調査時は住居として取り扱ったが、竪穴状遺構であると考えられる。

住居 20 (第 6 図)

東側の傾斜の急な斜面部で検出された。南北約 3.6 m 以上、東西約 2.5 m 以上、深さ約 60 cm を計り、住居隅は南側部分が残るのみで北西部分は貯蔵穴 19 と切り合い、東側は環濠 1 を

挟み崖部になっているため、全体のプランは不明である。住居南壁寄りで直径 55 cm、深さ 78 cm の柱穴が 1 本検出され、支柱穴の可能性が高いが他は検出されなかった。遺物は床面近くで出土しており、甕、壺、鉢、高杯、器台、ミニチュア土器とバリエーションに富んでいる。

住居 21 (第 21 図)

西側傾斜の急な斜面部で検出され、礫層面まで掘込まれている。南北約 4.5 m、東西約 2.5 m 以上、深さ約 20 cm を計り、隅丸方形プランを呈する。斜面部に位置するため西側半分は不明である。南壁が土坑 27 と切り合っており、柱穴は検出されなかった。床面は斜面の傾斜方向と同じ方向に傾いている。遺物は床面の高さで、完形の甕が潰れた状態で出土している。

住居 22

北側の斜面部で検出された。環濠 2 の上から切り合う状態で存在していたと考えられるが、遺物が一定の高さで出土したのみで住居プラン、柱穴を検出することはできなかった。遺物は床面から約 10 cm 浮いた位置で出土しており、甕、壺が破片の状態で出土しており、ほぼ完形のものも出土している。また 10 cm 大の円礫も他の遺物に混じって多数出土している。

竪穴状遺構

竪穴状遺構 1 (第 7 図)

北側 1 段目テラス縁辺部で検出された。南北 2.4 m、東西 2.0 m、深さ 110 cm を計り、隅丸長方形プランを呈し、環濠 3 を切っている。柱穴は検出されていない。遺物は検出面より 15 cm 下がった位置で土器片が集中して出土し、遺構廃絶後投棄されたものと考えられる。

竪穴状遺構 2 (第 15 図)

西側の平坦部で検出された。南北 2.8 m、東西 2.0 m、深さ 55 cm を計り、南北に長い楕円形プランを呈し、土坑 2 を切っている。柱穴は検出されていない。遺物は床面および床面から 10 cm 浮いた位置で高杯、完形の椀が出土している。

竪穴状遺構 3 (第 22・23 図)

北側の平坦部で検出された。上下で竪穴状遺構が切り合っており、上を 3-1、下を 3-2 とする。3-1 は南北 2.0 m、東西 2.4 m、深さ 5 cm を計り、方形プランを呈する。縁辺部に位置するため北西の隅が不明である。北西部で 25 cm の範囲で焼土が確認された。遺物は床面で土器片が少量出土した。3-2 は南北 1.4 m、東西 2.0 m、深さ 25 cm を計り、長方形プランを呈する。

竪穴状遺構 4 (第 24 図)

西側の平坦部で検出された。南北 1.9 m、東西 2.0 m、深さ約 10 cm を計り、方形プランを呈する。柱穴は検出されていない。遺物は床面及び床面から 10 cm 浮いた位置で土器片、円礫が出土している。

竪穴状遺構 5 (第 25 図)

北側の平坦部で検出された。東西 4.0 m、東壁 2.2 m、西壁 1.2 m、深さ 25 cm を計り、台形プランを呈する。柱穴が北壁寄りの位置で 2 本、遺構南西隅近くで 1 本、土坑が遺構中央部

で確認された。遺物は床面から 15 cm 浮いた位置で大きめの土器片が数点出土した。

竪穴状遺構 6 (第 26 図)

北側の平坦部で検出された。上下で竪穴状遺構が切り合っており、上を 6-1、下を 6-2 とする。6-1 は南北 4.0 m、東西 4.2 m、深さ 13 cm を計り、不定形プランを呈する。6-2 は南北 3.6 m、東西 1.9 m、深さ 90 cm を計り、長方形プランを呈する。柱穴は 6-2 で 4 本検出されており、すべて深さ 10 cm 前後で主柱穴と考えられる。6-1 は中央部で検出面から約 5 cm 下がった位置で焼土が確認され、ほぼ同レベルで甕、壺の土器片が出土した。6-2 は床面から 20 cm 浮いた位置で完形の壺が出土しており、遺構廃絶後投棄されたものと考えられる。

竪穴状遺構 7 (第 28 図)

北側の平坦部で検出された。南北 1.6 m、東西 2.3 m、深さ 33 cm を計り、長方形プランを呈する。長軸ライン中央部やや東寄りの位置で直径 20 cm、深さ 40 cm の柱穴が 1 本のみ検出された。遺物は床面から 10 cm 以上浮いた位置で土器片が数点出土している。

竪穴状遺構 8 (第 5 図)

東側の平坦部で検出された。南北 1.0 m、東西 1.6 m、深さ 55 cm を計り、長方形プランを呈する。遺物はほぼ検出面で土器片が集中して出土した。

竪穴状遺構 9 (第 5 図)

東側の平坦部で検出された。南北、東西共に 2.0 m、深さ 10 cm を計り、方形プランを呈する。遺物は床面からやや浮いた位置で少量出土した。

竪穴状遺構 10・11 (第 27 図)

東側の平坦部で互いに切り合った状態で検出された。竪穴状遺構 10 は南北 2.8 m、東西 2.6 m、深さ 60 cm を計り、南北に長い楕円形プランを呈し、西側で 1 段のテラスを持つ。

竪穴状遺構 11 は南北 3.0 m、東西 2.2 m、深さ 40 cm を計り、南北に長い長方形プランを呈し、遺構中央部で直径 26 cm、深さ 20 cm の柱穴を検出した。

竪穴状遺構 12 (第 19 図)

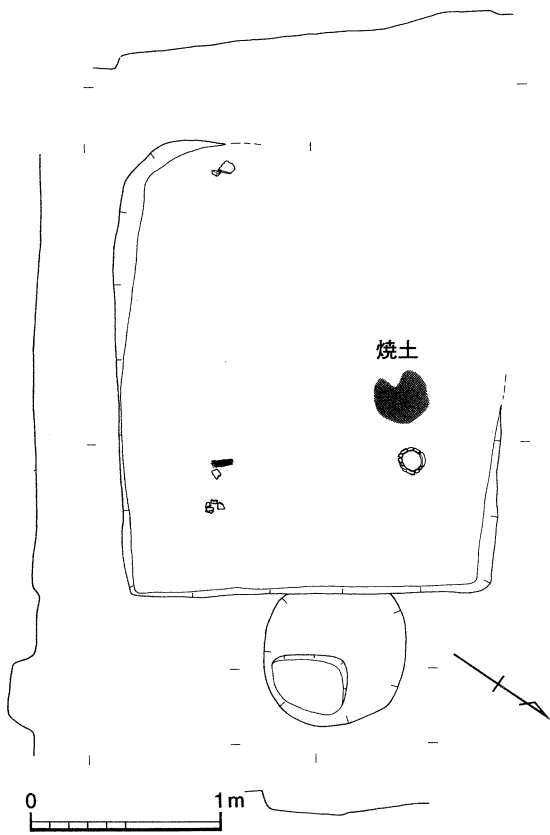
東側の平坦部で検出された。南北 1.1 m、東西 3.2 m、深さ 25 cm を計り、東西に長い長方形プランを呈する。遺構中央部と東壁に近い位置で確認された。遺物は検出面及び床面から 5 cm 浮いた位置で土器片が出土した。

竪穴状遺構 13 (第 5 図)

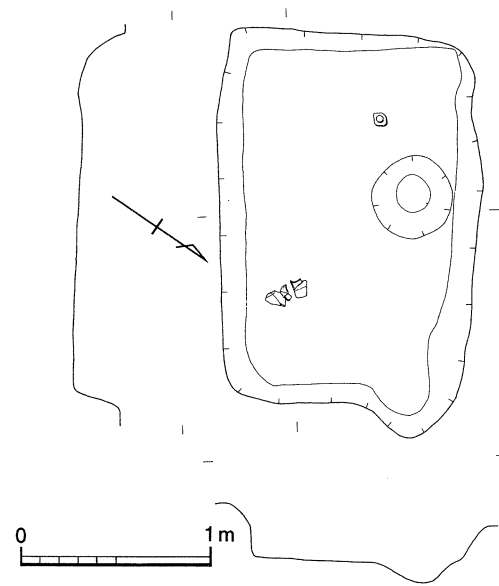
東側の平坦部で検出された。南北 1.7 m、東西 2.5 m、深さ 55 cm を計り、東西に長い長方形プランを呈する。遺物は床面から 10 cm 浮いた位置で完形になる壺が割れた状態で出土し、ほぼ同レベルで土器片、磨石、円礫が出土した。

竪穴状遺構 14 (第 5 図)

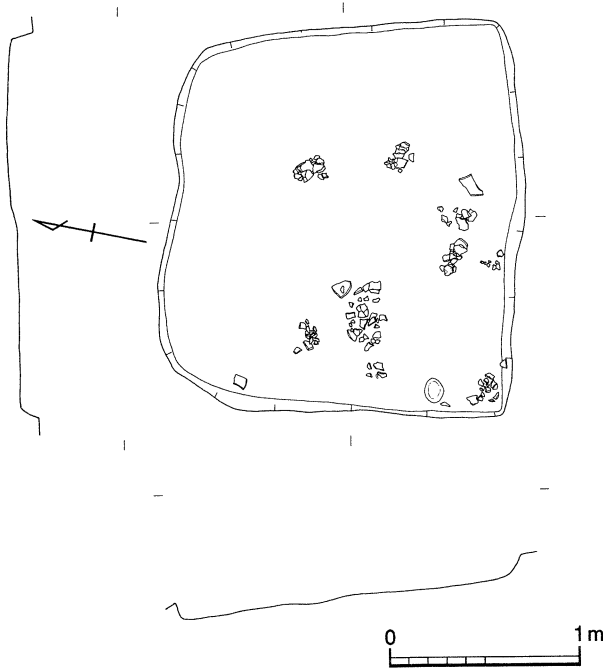
竪穴状遺構 13 の南側で隣接した状態で検出された。南北 2.2 m、東西 2.0 m、深さ 61 cm を計り、不定形なプランを呈する。



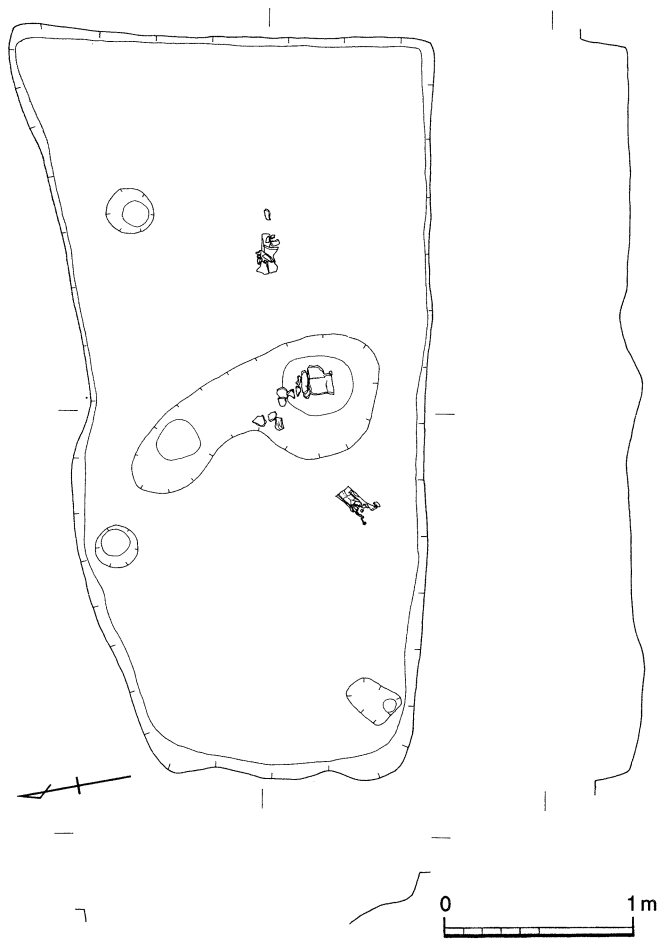
第22図 竪穴状遺構3-1実測図



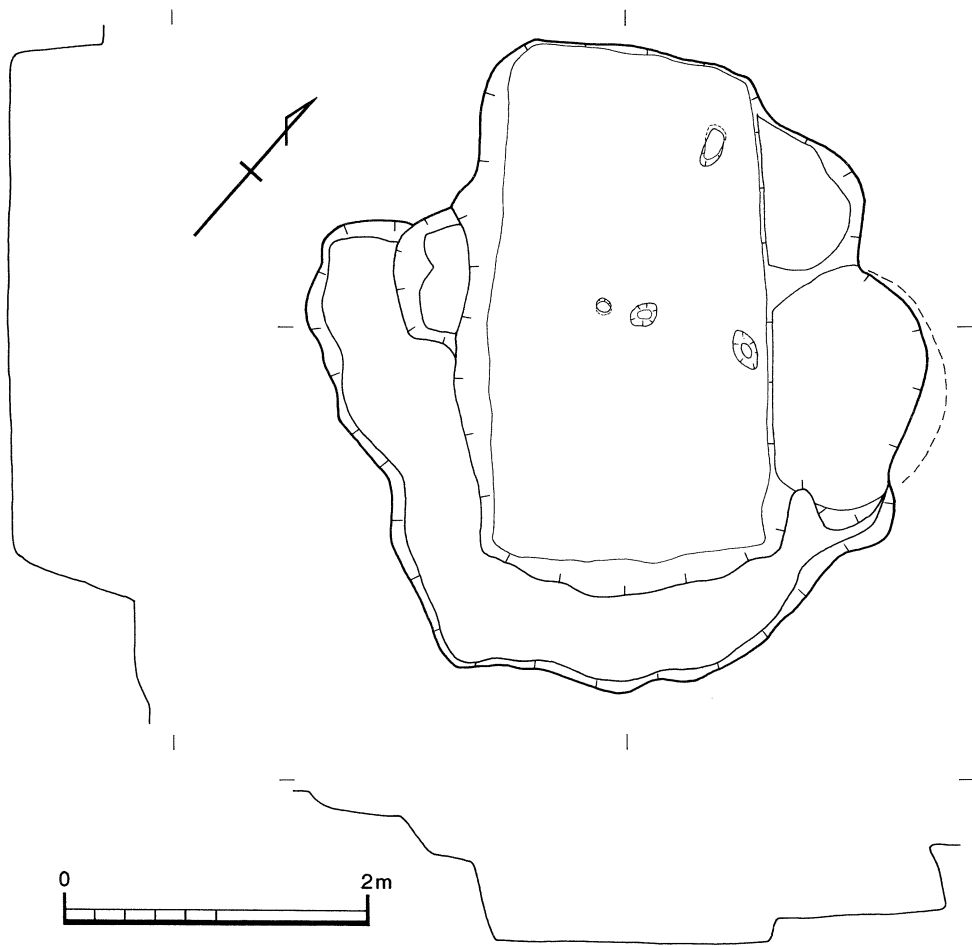
第23図 竪穴状遺構3-2実測図



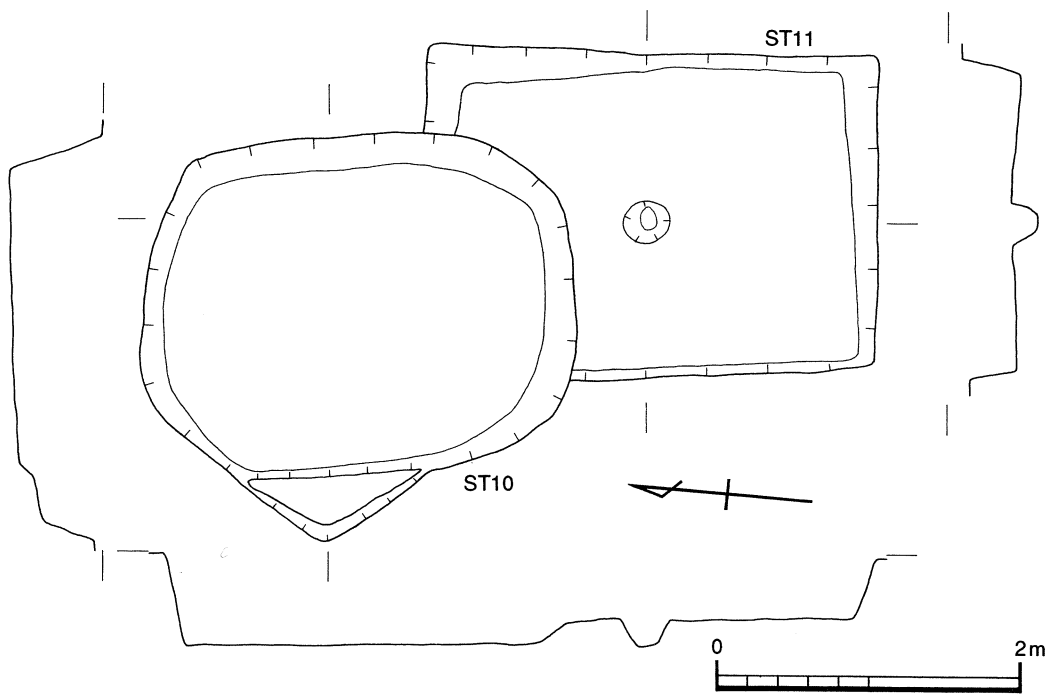
第24図 竪穴状遺構4実測図



第25図 竪穴状遺構5実測図



第26図 豎穴状遺構6実測図



第27図 豎穴状遺構10・11実測図

竪穴状遺構 15 (第 5 図)

東側の平坦部の縁辺部で検出された。南北 1.9 m、東西 1.2 m、深さ 50 cm を計る。遺構のほぼ中央部で直径 20 cm、深さ 15 cm の柱穴が検出された。遺物は埋土中位で 30 cm 大の円礫が出土した。

竪穴状遺構 16 (第 18 図)

東側の平坦部で検出された。南北 1.4 m、東西 2.0 m、深さ 60 cm を計り、東西に長い長方形プランを呈する。遺物は検出面とほぼ同レベルの遺構南西部隅近くで土器片、20 cm 大の円礫が集中して出土した。

竪穴状遺構 17 (第 5 図)

東側の平坦部で検出された。南北 2.2 m、東西 1.3 m、深さ 54 cm を計り、南北に長い長方形プランを呈する。遺物は床面から 15 cm 浮いた位置で遺構長軸ラインのやや北側寄りで完形になる甕の破片が出土した。

竪穴状遺構 18 (第 5 図)

東側の平坦部で検出された。南北 1.7 m、東西 1.5 m、深さ 36 cm を計り、南北に長いいびつな長方形プランを呈する。

竪穴状遺構 19 (第 17 図)

南側の平坦部で検出された。南北 1.6 m、東西 1.5 m、深さ 32 cm を計り、方形プランを呈する。住居 17 と切り合っている。遺物は床から 10 ~ 15 cm 浮いた位置で甕等の土器片、円礫が少量出土している。

竪穴状遺構 20 (第 5 図)

南側の平坦部で検出された。南北 1.7 m、東西 1.7 m、深さ 20 cm を計り、方形プランを呈する。遺物は床から 10 cm 浮いた位置で甕等の土器片、礫が集中して出土している。

竪穴状遺構 21 (第 4 図)

西側の斜面部で検出された。南北 2.0 m 以上、東西 2.5 m、深さ 20 cm を計り、楕円形プランを呈する。北側は斜面部に位置するため不明である。東側の壁面の中位で石錘が出土した。

竪穴状遺構 22 (第 6 図)

東側の傾斜の急な斜面部で検出された。南北、東西共に 2.5 m、深さ 130 cm を計り、方形プランを呈する。環濠 1 を切っている。遺物は埋土中位において土器溜り状に土器が集中して出土し、遺構廃絶後投棄されたものと考えられる。

竪穴状遺構 23 (第 3 図)

西側の崖部に近い位置で検出された。南北 1.4 m 以上、東西 2.4 m、深さ 25 cm を計り、東西に長い長方形プランを呈する。遺物は完形の甕が伏せられた状態で出土した。

竪穴状遺構 24 (第 4 図)

環濠 3 の西側に近接する状態で検出された。南北 2.5 m 以上、東西 2.6 m、深さ 90 cm を計り、北側が斜面部のためプランは不明である。遺物は西壁に接して床面からの高さ 20 cm の位置で完形の壺が置かれた状態で出土した。

竪穴状遺構 25 (第7図)

環濠3を切って検出された。南北1.8 m以上、東西2.1 m以上、深さ77 cmを計り、西壁は水穴によって削られているためプランは不明である。遺物は床面の高さで完形に近い甕等が土器溜り状に大量に集中して出土した。

貯蔵穴

貯蔵穴1 (第4図)

環濠2の上から切り合って検出された。直径1.7 m、底径1.5 m、深さ100 cmを計り、円形プランを呈し、断面はビーカー形を呈する。遺物は埋土中位より下の部分で甕、壺、器台が出土している。

貯蔵穴2・20 (第4図)

西側2段目テラスで環濠9と切り合う状態で検出された。貯蔵穴2は南北2.5 m、東西1.8 m、底径南北1.5 m、東西1.3 m、深さ190 cmを計り、貯蔵穴20は南北2.0 m、東西1.3 m、底径南北1.4 m、東西1.0 m、深さ190 cmを計り、それぞれ南北に長い楕円形プランを呈する。

貯蔵穴3 (第4図)

北側の1段目テラスで検出された。南北、東西共に2.0 m、底径2.3 m、深さ140 cmを計り、不定形プランを呈し、底面は円形プラン、断面は袋形を呈する。遺物は埋土上位より土器片が大量に出土した。

貯蔵穴4 (第28図)

北側の平坦部で検出された。南北、東西共に1.1 m、底径1.6 m、深さ70 cmを計り、円形プランを呈し、断面は袋形を呈する。床面で礫が1点出土した。

貯蔵穴5 (第29図)

北側の1段目テラスで検出された。南北1.5 m、東西1.8 m、底径1.9 m、深さ110 cmを計り、楕円形プランを呈し、底面は円形プラン、断面は袋形を呈する。遺物は床面から約10 cm浮いた位置で土器片が出土している。

貯蔵穴6 (第30図)

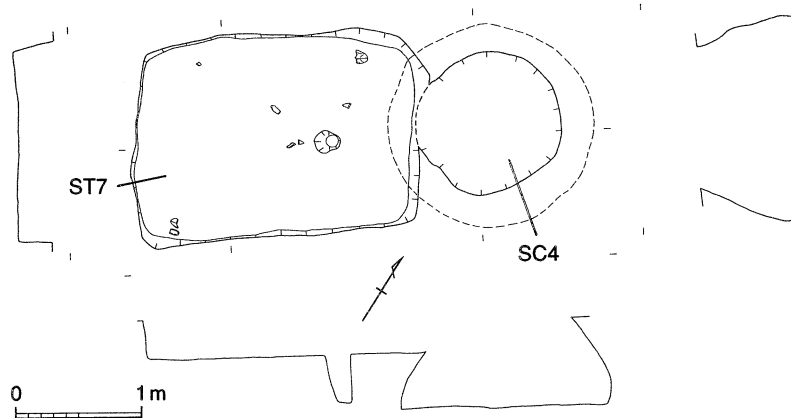
北側の1段目テラスで検出された。南北2.0 m、東西2.1 m、底径1.7 m、深さ180 cmを計り、円形プランを呈し、断面は袋形を呈し、中位で一旦くびれを持つ。遺物はほとんど出土しておらず、床から約20 cm浮いた位置で甕の破片が出土している。

貯蔵穴7 (第31図)

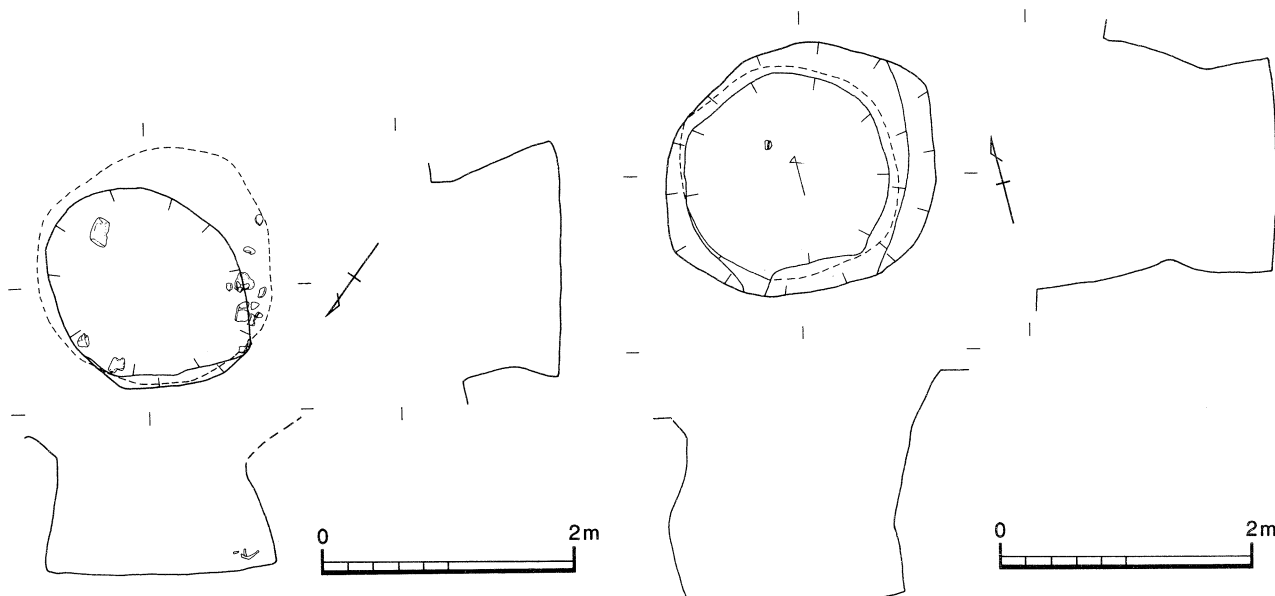
北側の1段目テラスで検出された。南北2.0 m、東西2.4 m、底径2.0 m、深さ130 cmを計り、東西に長い楕円形プランを呈し、断面はビーカー形を呈する。遺物は埋土中より出土しており、ほぼ完形の器台、完形のミニチュア土器、甕、壺の破片が出土しており、貯蔵穴廃絶後の流れ込みもしくは投棄されたものと考えられる。

貯蔵穴8・15・16 (第32図)

北側の1段目テラスで貯蔵穴が3基切り合った状態で検出された。貯蔵穴8は南北2.0 m、



第28図 竪穴状遺構7、貯蔵穴4実測図



第29図 貯蔵穴5実測図

第30図 貯蔵穴6実測図

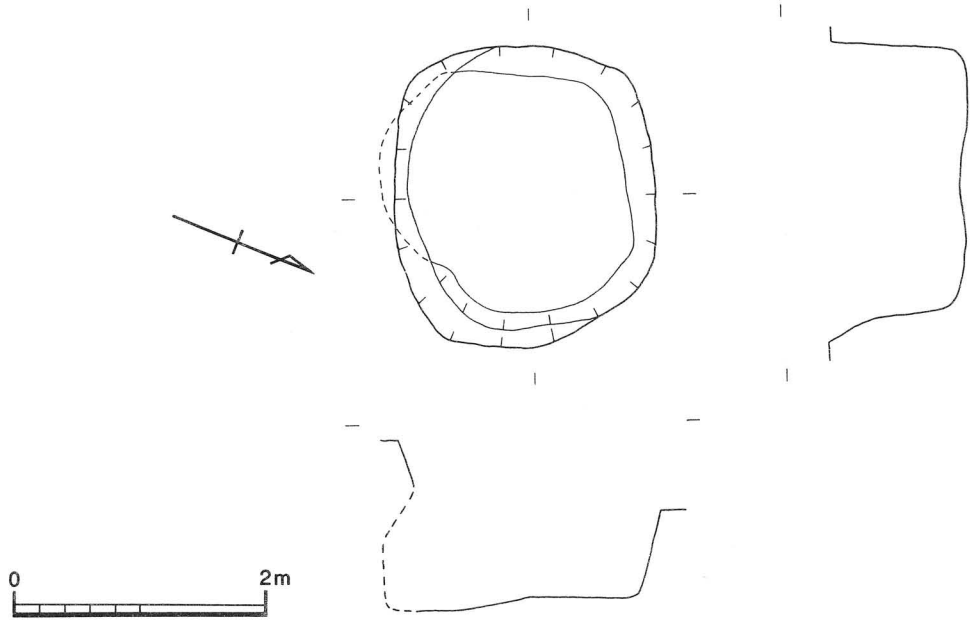
東西1.4 m以上、底径南北1.8 m、東西1.5 m以上、深さ130 cmを計り、貯蔵穴15は南北1.7 m、東西1.4 m以上、底径南北1.5 m、東西1.2 m以上、深さ140 cmを計り、貯蔵穴16は南北1.3 m、東西1.4 m以上、底径1.5 m、深さ130 cmを計り、貯蔵穴8・15は南北に長い楕円形プラン、貯蔵穴16は円形プランを呈し、貯蔵穴8・16は袋形、貯蔵穴15はピーカー形の断面を呈する。遺物は貯蔵穴15で床面において甕、壺の破片が出土しており、貯蔵穴廃絶直後に投棄されたものと考えられ、貯蔵穴16では埋土上位で完形の甕、土器片が集中して出土しており、貯蔵穴廃絶後埋土が堆積する段階において投棄されたものと考えられる。

貯蔵穴9 (第4図)

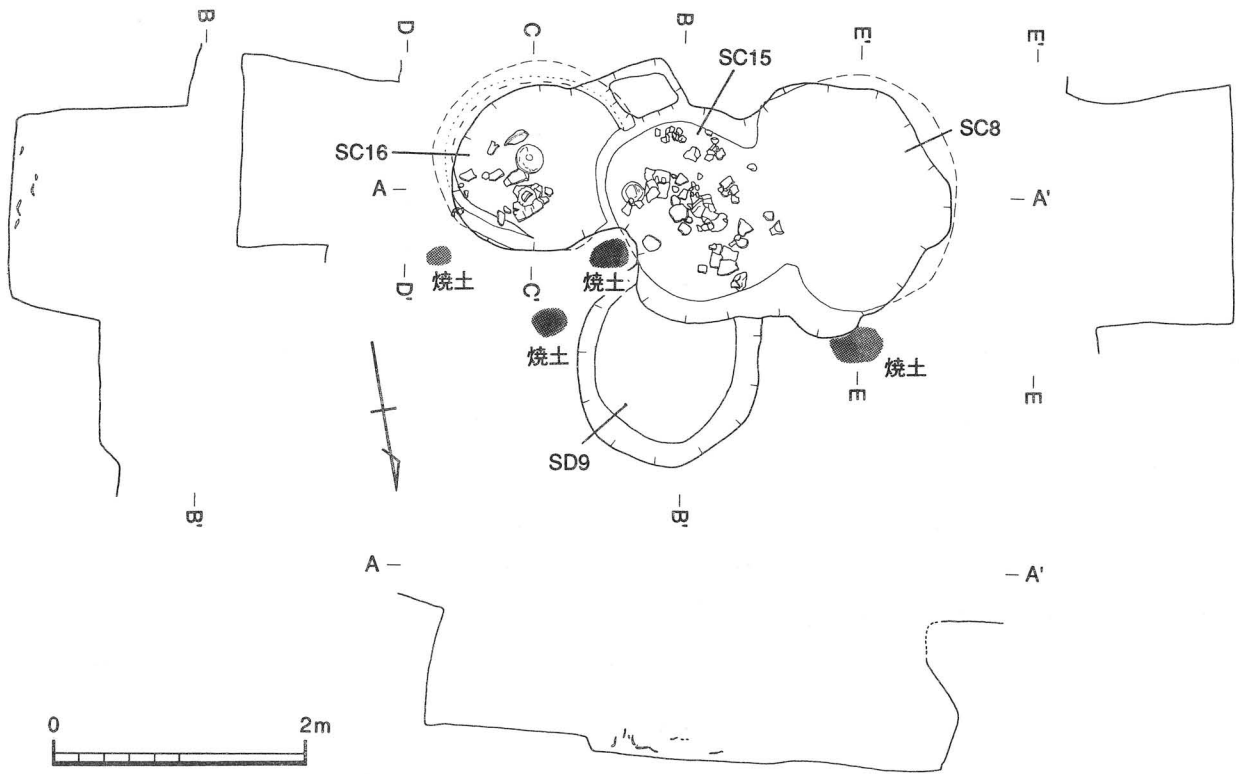
北側の1段目テラスで検出された。南北1.0 m、東西1.5 m、深さ50 cmを計り、東西に長い楕円形プランを呈し、内部は東側のみ膨らみを持つ。遺物はほとんど出土していない。

貯蔵穴10 (第33図)

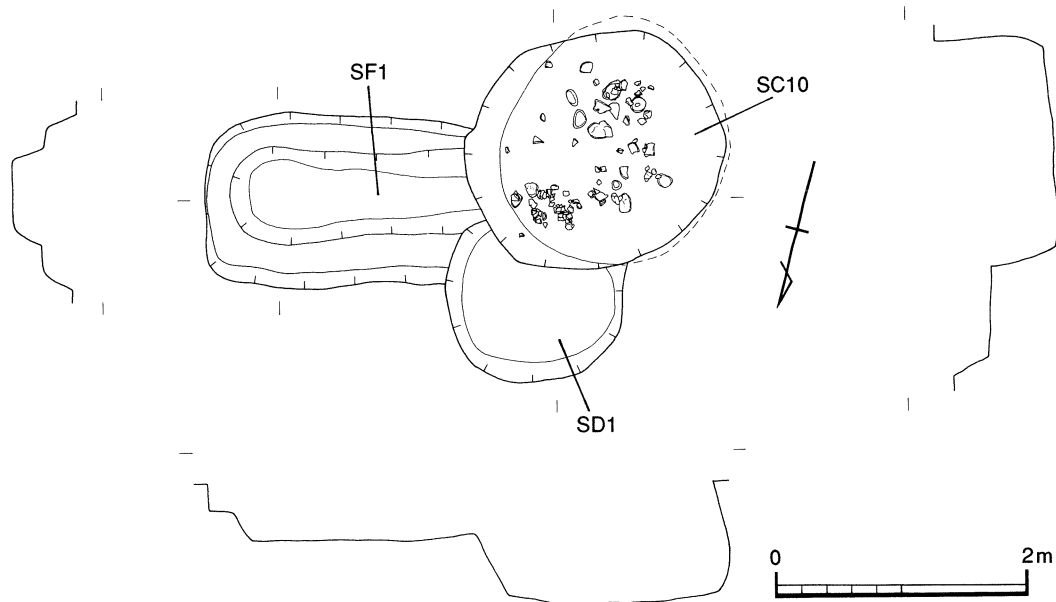
西側の平坦部で検出された。南北2.0 m、東西2.0 m、底径1.8 m、深さ90 cmを計り、円形プランを呈し、内部は南側のみ膨らみを持つ。土坑1、土壙墓1を切っている。遺物は検出



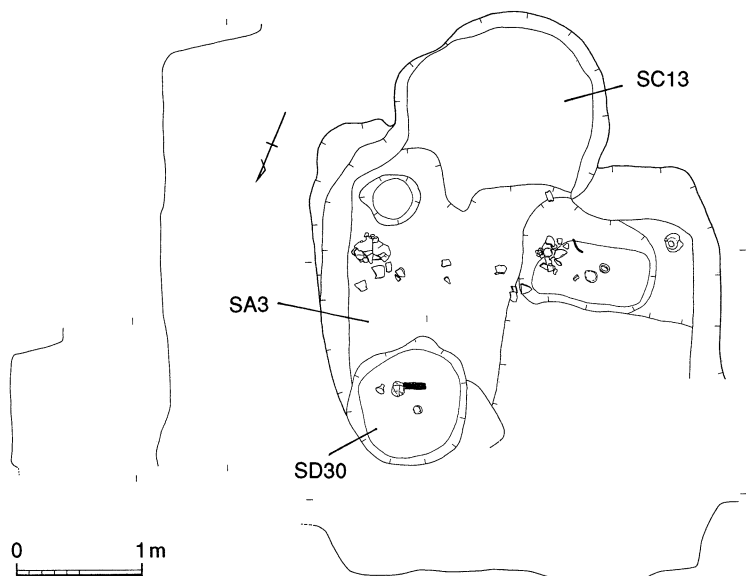
第31図 貯蔵穴7実測図



第32図 貯蔵穴8・15・16、土坑9実測図



第33図 貯蔵穴10、土坑1、土墳墓1実測図



第34図 住居3、貯蔵穴13、土坑30実測図

面で土器片が出土し、床面で拳大の円礫が数点、土器片が少量出土した。

貯蔵穴11 (第35図)

西側の平坦部で検出された。東側、南側で南北1.0 m、東西0.6 m、深さ15 cmの1段のテラスを持ち、貯蔵穴本体は南北1.6 m、東西1.7 m、底径1.2 m、深さ130 cmを計り、円形プランを呈する。遺物はテラス面、貯蔵穴埋土中から少量出土している。

貯蔵穴12 (第36図)

西側の平坦部で検出された。南北2.2 m、東西2.0 m、底径1.8 m、

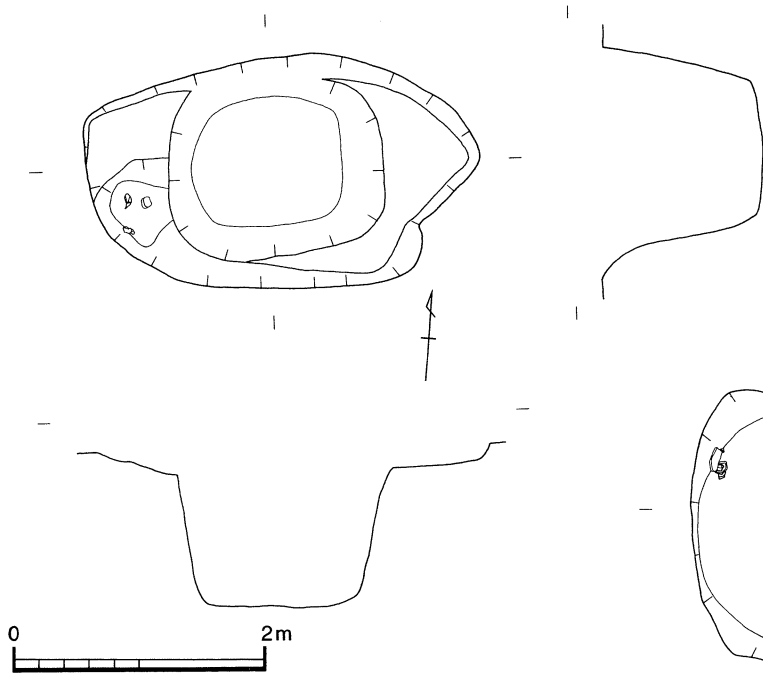
深さ100 cmを計り、円形プランを呈し、断面はビーカー形を呈する。遺物は床面において土器片が出土している。

貯蔵穴13 (第34図)

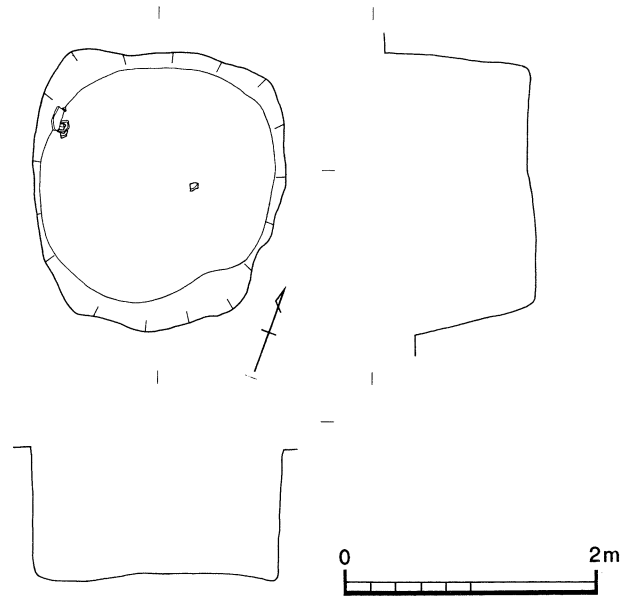
西側の斜面部で検出された。南北1.6 m以上、東西1.7 m、底径1.5 m、深さ80 cmを計り、円形プランを呈し、断面はビーカー形を呈する。遺物は埋土中から土器片が出土している。

貯蔵穴14 (第37図)

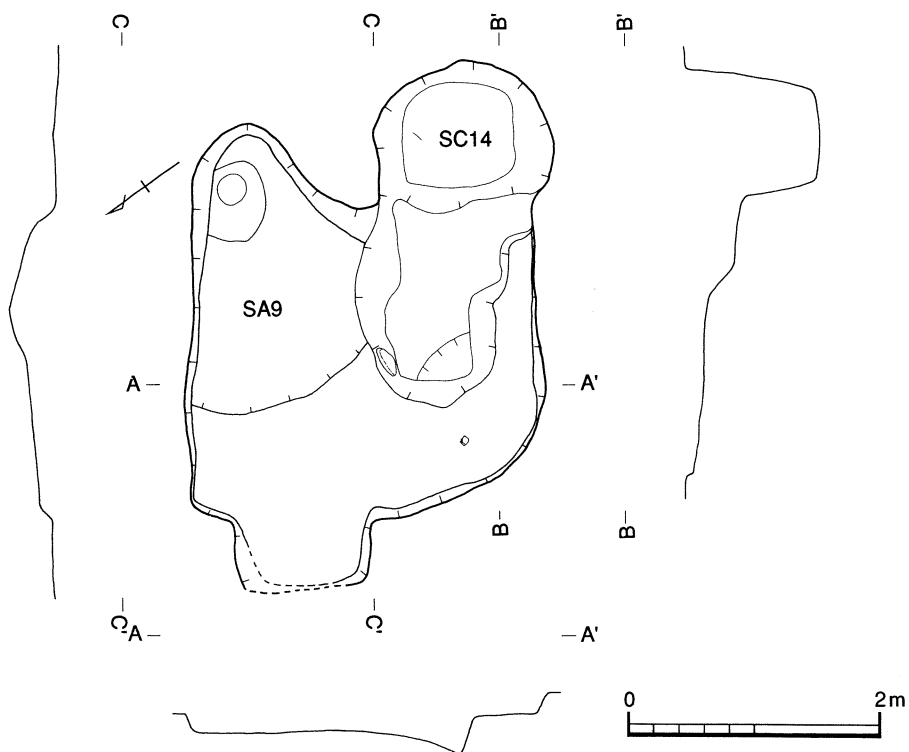
北側の1段目テラスで検出され、礫層面まで掘込まれている。南北1.4 m、東西1.2 m、底径0.8 m、深さ100 cmを計り、南北に長い楕円形プランを呈する。遺物は床面から20 cm浮いた位置で土器片が集中して出土している。



第35図 貯蔵穴11実測図



第36図 貯蔵穴12実測図



第37図 住居9、貯蔵穴14実測図

貯蔵穴 17 (第 5 図)

東側の丘陵縁辺部で検出された。南北、東西共に 2.0 m、底径 1.8 m、深さ 80 cm を計り、円形プランを呈する。

貯蔵穴 18 (第 38 図)

東側の傾斜の急な斜面部で検出された。南北 2.0 m、東西 1.6 m、底径南北 1.6 m、東西 1.4 m、深さ 110 cm を計り、南北に長い楕円形プランを呈する。遺物は底面から 20 cm 浮いた位置で完形の壺が壁に沿って配置されたような状態で出土し、うち 3 個には絵画と考えられる線刻が描かれている。底面近くでは 25 cm 大、15 cm 大の礫が出土している。配置された土器が底から 20 cm 浮いた位置で出土しているため、この高さがこの貯蔵穴の最終廃絶面と考えられる。

貯蔵穴 19 (第 39 図)

貯蔵穴 18 の南側に近接する状態で検出された。南北 2.1 m、東西 1.9 m、底径南北 1.8 m、東西 1.5 m、深さ 150 cm を計り、南北に長い楕円形プランを呈する。遺物は底面から 30 ~ 35 cm 浮いた位置で完形の甕が南側、北側で集中して出土し、うち北側で出土した器高 32 cm の甕の中に器高 15 cm の甕が入れられた状態で出土した。この高さがこの貯蔵穴の最終廃絶面だと考えられる。

土坑

土坑 1 (第 33 図)

西側の平坦面で検出された。南北 1.4 m、東西 0.9 m 以上、深さ 25 cm を計り、円形プランを呈する。貯蔵穴 10 に切られており、土壙墓 1 を切っている。

土坑 2 (第 15 図)

西側の平坦面で検出された。南北 1.1 m、東西 1.4 m 以上、深さ 50 cm を計り、円形プランを呈する。竪穴状遺構 2 によって切られている。遺物は土器片、10 ~ 20 cm の一部赤変した円礫、角礫が上層及び下層から 2 分して出土しており、上層で多量に出土した。

土坑 3 (第 4 図)

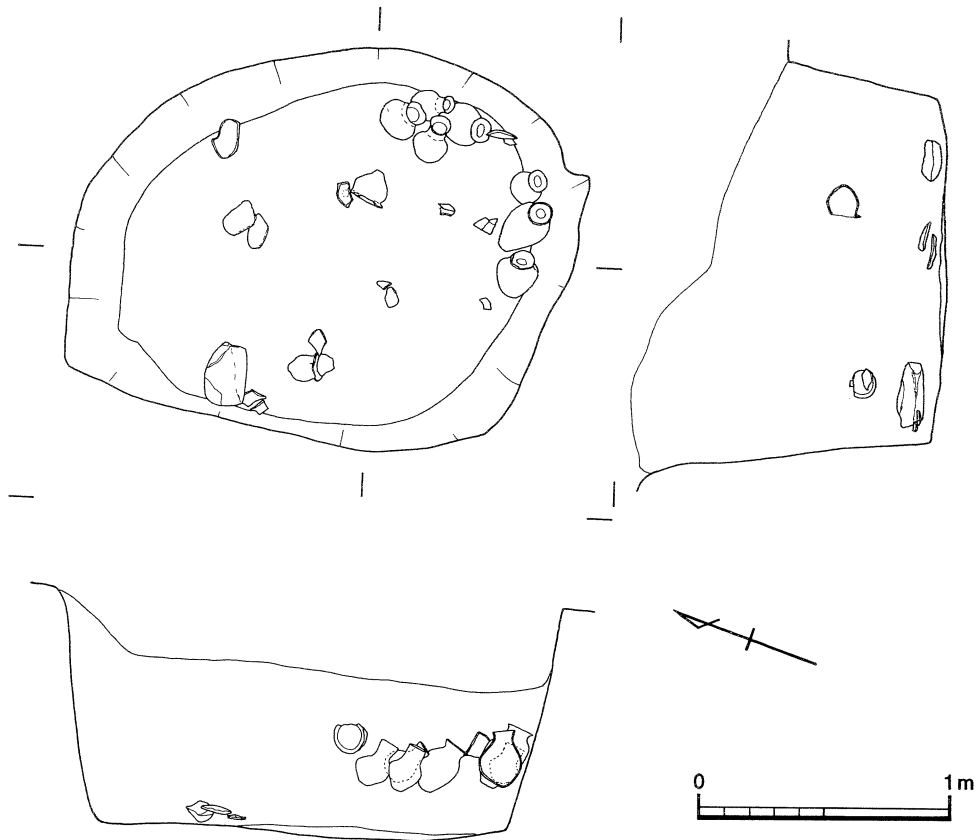
北側 1 段目テラス縁辺部で検出された。南北、東西共に 1.0 m 以上、深さ 30 cm 以上を計るが、北側が斜面部となるため、プランは不明である。遺物は埋土中より数十点の小土器片が出土した。

土坑 4 (第 40 図)

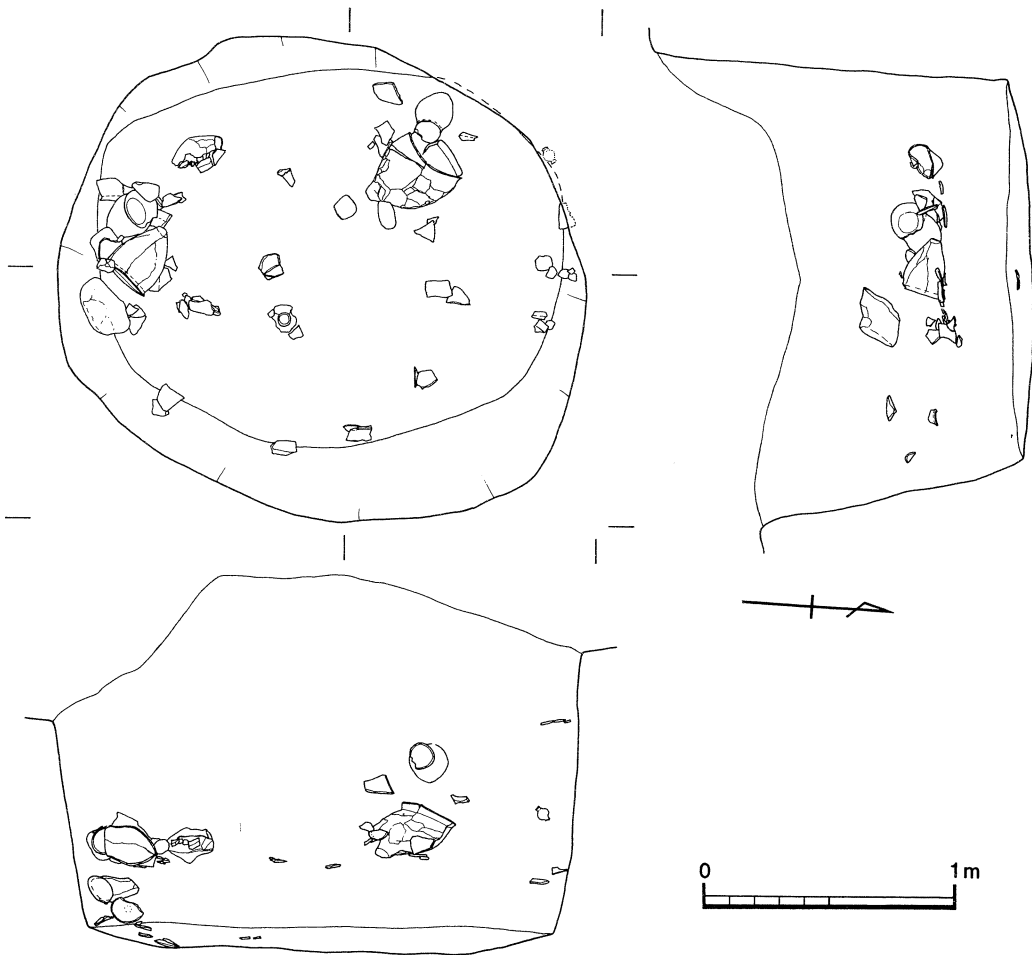
西側の平坦面で検出された。南北 1.5 m、東西 1.2 m、深さ 60 cm を計り、南北に長い楕円形プランを呈する。遺物は底面から 20 cm 浮いた位置で土器片が数点出土している。

土坑 5・6・7 (第 4 図)

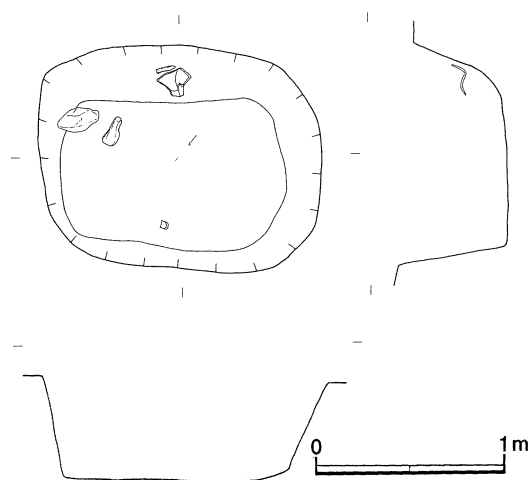
西側の斜面部で 3 基が集中して検出された。土坑 5 は直径 1.1 m、土坑 6 は直径 1.0 m、土坑 7 は直径 1.3 m、深さはそれぞれ 20 cm を計る。遺物は土坑 5 より土器片が底面より約 10 cm 浮いた位置で数十点出土し、土坑 6・7 は埋土中より小土器片が数点出土した。



第38図 貯蔵穴18実測図



第39図 貯蔵穴19実測図



第40図 土坑4実測図

土坑8 (第14図)

西側の平坦部で検出された。南北2.6 m以上、東西1.6 m、深さ65 cmを計り、南北に長い楕円形プランを呈する。住居5に切られている。底面から40 cmの範囲で30～45 cm大の円礫、10～20 cmの円礫、角礫が遺構北側に偏って出土している。規則的な配置はおこなっておらず、遺構に投棄されたような状態である。

土坑9 (第32図)

北側の1段目テラスで検出された。南北1.3 m以上、東西1.5 m、深さ15 cmを計り、円形プランを呈する。貯蔵穴15と切り合っている。遺物はほとんど出土していない。

土坑10・11・12 (第9図)

北側の1段目テラスで3基が集中して検出された。土坑10は直径0.5 m、深さ40 cm、土坑11は直径0.7 m、深さ70 cm、土坑12は直径0.9 m、深さ70 cmを計りそれぞれ円形プランを呈する。住居2と切り合っている。遺物は土坑10では床から20 cm浮いた位置で甕の土器片が出土し、土坑11では完形の壺が床から30 cm浮いた位置で出土した。

土坑13 (第4図)

北側の1段目テラスで検出された。直径1.0 m、深さ80 cmを計り、円形プランを呈する。遺物は埋土各層より大きめの土器片が多量に出土した。

土坑14・15 (第5図)

東側の平坦部で検出された。土坑14は南北、東西ともに1.3 m、深さ10 cmを計り、方形プランを呈する。南北1.5 m、東西1.1 m、深さ9 cmを計り、南北に長い楕円形プランを呈する。遺物は床面から5 cm浮いた位置で小土器片が少量出土した。

土坑16・17 (第5図)

東側の平坦部で検出された。土坑16は南北1.5 m、東西1.3 m、深さ56 cmを計り、土坑17は南北1.3 m、東西1.0 m、深さ50 cmを計り、それぞれ南北に長い楕円形プランを呈する。遺物は土坑17で検出面から5 cm下がった位置でほぼ完形の壺、甕等の土器片が大量に出土し、遺構廃絶後に投棄されたものと考えられる。

土坑18 (第5図)

南側の平坦部で検出された。直径1.5 m、深さ1.2 mの円形プランを呈する。溝状遺構2によって切られている。遺物は埋土中より土器片が出土した。貯蔵穴の可能性はある。

土坑19 (第5図)

南側の平坦部で検出された。南北、東西共に1.2 m、深さ50 mを計り、不定形プランを呈する。遺物はほぼ床面において土器片が少量出土している。

土坑 20 (第 5 図)

東側の平坦部で検出された。南北東西共に 1.7 m、深さ 25 cm を計り、不定形プランを呈する。遺物はほぼ検出面の高さで少量出土した。

土坑 21 (第 5 図)

南側平坦部縁辺部で検出された。南北 1.2 m、東西 1.4 m、深さ 25 cm を計り、方形プランを呈する。遺物は埋土中位より数点出土した。

土坑 22 (第 7 図)

環濠 3 西側端で環濠 3 を切って検出された。南北 0.9 m、東西 0.8 m、深さ 55 cm 以上を計り、円形プランを呈する。遺物は床面で土器片が数点出土し、検出面で土器溜り状にほぼ完形の甕や土器片が大量に集中して出土した。

土坑 23・24 (第 5 図)

東側の平坦部で検出され、土坑 24 を土坑 23 が切っている。土坑 23 は南北 1.6 m、東西 1.2 m、深さ 40 cm を計り、南北に長い長方形プランを呈する。土坑 24 は南北 1.1 m 以上、東西 1.3 m、深さ 40 cm を計り、プランは不明である。遺物は土坑 23 で土器片が埋土中より数十点出土し、遺構北側寄りの検出面より 15 cm 下がった位置で南北 100 cm、幅 40 cm の範囲で焼土が確認された。

土坑 25 (第 11 図)

西側の斜面部で検出された。南北 1.4 m、東西 1.3 m、深さ 100 cm を計り、円形プランを呈する。西側に深さ 60 cm の位置で 1 段のテラスを持つ。住居 6 によって切られている。

土坑 26 (第 4 図)

北側 2 段目テラスの環濠 7、環濠 8 が接する部分の内側で検出された。直径 1.0 m、深さ 30 cm を計り、円形プランを呈する。

土坑 27 (第 21 図)

西側の斜面部で検出された。南北 1.1 m、東西 0.8 m、深さ 10 cm を計り、南北に長い楕円形プランを呈する。住居 21 と切り合っている。

土坑 28 (第 3 図)

西側の斜面部で検出された。直径 0.5 m、深さ 10 cm を計り、円形プランを呈する。

土坑 29 (第 4 図)

調査区北側斜面部で竪穴状遺構 24 西側で検出された。南北 1.2 m、東西 1.2 m、深さ 50 cm を計り、西側は未調査のためプランは不明である。

土坑 30 (第 34 図)

西側の斜面部で検出された。直径 1.0 m、深さ 40 cm を計り、円形プランを呈する。住居 3 と切り合っている。遺物は床面から約 10 cm 浮いた位置で完形のミニチュア土器が 2 点出土し、同じ高さで、長さ 15 cm の炭化木が出土した。

土坑 31 (第 7 図)

調査区北側斜面部で環濠 3 の北側で検出された。南北 0.5 m、東西 0.7 m、深さ 40 cm を計

り、東西に長い楕円形プランを呈する。遺物は検出面の位置で土器片が大量に出土した。

土壙墓

土壙墓 1 (第 33 図)

西側の平坦部で検出された。南北 1.3 m、東西 2.2 m 以上、深さ 50 cm を計り、深さ 25 cm の位置で 1 段のテラスを持ち、南北 0.7 m、東西 1.8 m 以上、深さ 25 cm の掘込みがさらにみられる。貯蔵穴 10、土坑 1 によって切られている。遺物は土器片が埋土中より 1 点出土している。

溝状遺構

溝状遺構 1 (第 18 図)

東側の平坦部で検出された。幅 0.8 ~ 1.0 m、底幅 0.7 m、深さ 15 cm を計り、住居 13・15 と 竪穴状遺構 16 と切り合っており、竪穴状遺構の方向から始まり、住居 15 の中で L 字に曲がって住居 13 の方へ流れる。遺物は底面から 10 cm 浮いた位置で大量に出土した。

掘立柱建物

東側、南側平坦部で多数柱穴が確認されたものの、掘立柱建物と判断できるものはなかった。

(2) 遺物

・土器

住居 1 出土の土器 (第 41 図)

床面に近い位置で出土した。1・2 は甕で、1 はやや上げ底になる底部である。2 はほぼ完形の小ぶりの甕で口縁部は短く外反し、突出した底部を持つ。3 ~ 5 は壺で、4 は平底、5 はケズリ調整により丸底気味となっている。6 は鉢で、丸底気味の底部から立上がり口縁部は短く外反する。7 はミニチュアの鉢で、内外面共にミガキを施す。

住居 2 出土の土器 (第 41 図)

埋土より出土した。8 は鉢で、外に張ったやや上げ底気味の底部を持ち、口縁部でやや外反する。

住居 3 出土の土器 (第 41 図)

床面近くで出土した。9・10 は甕で 9 は胴部径と口径がほぼ同じになる。10 はやや上げ底の底部からほぼ直線的に立上がる。11・12 は壺で、12 は頸部が直線的に立上がり、口縁部で短く外反し、口唇部でわずかに肥厚する。13 は椀である。14 は完形の蓋で高さ 3 mm のつまみを持ち、口縁部で外反する。

住居 4 出土の土器 (第 41 図)

床面近くで出土した。15 は甕で口縁部は「く」の字に外反し、胴部はやや張るが最大径は口縁部にある。16・17 は壺で共に平底の底部である。18 はミニチュアの壺で口縁部を欠損

する。外面は丁寧なナデを施す。

住居 5 出土の土器 (第 42 図)

床面で出土した。19・20は甕で外に張った底部を持ち、口縁部径と胴部径がほぼ同じになる。20は小ぶりの甕で上げ底の外に張った底部を持ち、口縁部で僅かに外反する。21は鉢で上げ底の外に張った底部を持ち、口縁部で「く」の字に大きく外反する。22は高杯で脚部上位と下位で横2列にそれぞれ4個ずつ透しを持つ。口縁部は垂直に立上がり、口唇部で短く外反する。23・24は椀で23は僅かに内湾しながら立上がる。

住居 6 出土の土器 (第 42 図)

床面から10cm浮いた位置で出土した。25～27は甕で口縁部で「く」の字に外反し、最大径は胴部になる。27は上げ底の底部を持つ。28は壺の口縁部で口唇部で僅かに肥厚する。29は高杯で杯部は内湾気味に立上がり、口縁部で稜を持って外反する。脚部はゆるやかに外反する。

住居 7 出土の土器 (第 42・43 図)

床面と床面から10cmの間で出土した。31の中に32が入って、32の中に37が入った状態で出土した。30・31は甕で、30は口縁部が「く」の字に外反し最大径は胴部上位にある。32～34は壺である。32は胴部中位に最大径を持つ。33は長胴の壺で平底を呈する。34は二重口縁壺の頸部から上で短い頸部を持ち、口縁部はやや斜め方向に外反し、口唇部は丸みを持つ。35は高杯の口縁部で杯底部から直線的に立上がり、稜を持って斜め方向に外反する。36は器台の体部上位から上で2個の透しを持つ。37はミニチュアの鉢で口縁部で短く外反する。朱が入った状態で出土した。

住居 8 出土の土器 (第 43 図)

床面から10cm浮いた位置で出土した。38は甕で最大径は胴部上位にある。39は鉢で上げ底の底部を持ち、内湾気味に立上がり口縁部で短く外反する。胴部にミガキを施す。40は高杯の口縁部で1段の稜を持った後、外反し、口唇部で三角に立上がる。

住居 9 出土の土器 (第 43 図)

床面からやや浮いた位置で出土した。41はミニチュアの鉢で口縁部で僅かに外反する。42は器高4.0cmのミニチュアの甕でほぼ直線的に立上がる。41・42共に内外面共ナデを施す。

住居 10 出土の土器 (第 43 図)

床面の高さで出土した。43は甕の底部である。44は壺で肩部に線刻を施す。45は鉢で内湾気味に立上がる。46は高杯の脚部で「八」の字に開く。47は器台で口縁部で水平に外反し、口唇部で三角状に立上がる。また体部上位内面に断面台形のはり付け突帯を1条施す。現存で8個の透しを持つ。48はコップ形土器で平底を呈し、直線的にほぼ垂直に立上がる。

住居 12 出土の土器 (第 43 図)

埋土中から出土した。49は甕で口縁部は緩やかに「く」の字に外反し、最大径は胴部中位にある。50は壺で球形の胴部を持つ。胴部外面にミガキを施す。

住居 13 出土の土器 (第 44 図)

51は甕で口縁部で「く」の字に外反し、口縁部と胴部上位径がほぼ同じになる。52は高

杯の脚部で裾部が直線的に広がる。53はミニチュアの鉢で内湾しながら立上がる。ナデを施す。

住居 15 出土の土器 (第 44 図)

床面から 10 cm 浮いた位置で出土した。54 はソロバン玉形の胴部を持つ、いわゆる「免田系」の壺の胴部で、肩部に 7 条の平行沈線文を持つ。55 は椀である。

住居 16 出土の土器 (第 44 図)

床面からやや浮いた位置で出土した。56 はほぼ完形の壺で口縁部は緩やかに外反する。57 は高杯の脚部で、外面にミガキを施す。58 はミニチュアの壺の胴部以下でナデを施す。

住居 19 出土の土器 (第 44 図)

床面と埋土中から出土した。59・60 は甕で、共に上げ底を呈し、60 は口縁部で稜を持って緩やかに外反する。61・62 は壺で、61 は口縁部は短く外反し、口唇部が肥厚する。62 は長胴の壺で口縁部は僅かに外反し、肩部に「魚?」を描いた線刻、底部にヘラ記号を施す。63 は蓋で、つまみを持たず、やや内湾気味に広がり、口縁部で水平に外反する。鉢の可能性もある。

住居 20 出土の土器 (第 44 ~ 46 図)

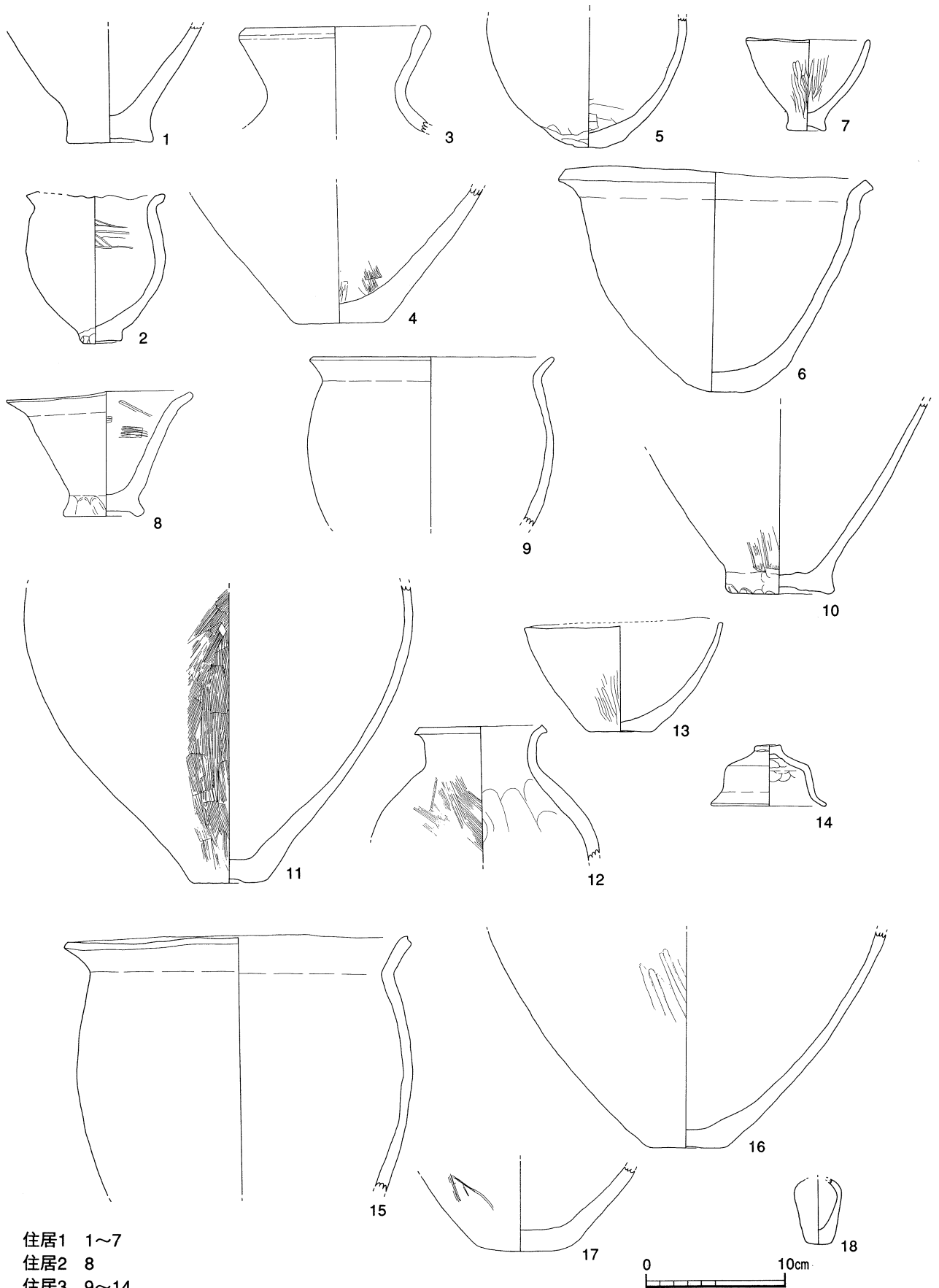
床面近くで出土した。64 ~ 70 は甕で、64・68・69 は上げ底を呈し、67 は平底を呈する。65 ~ 67・70 は最大径を口縁部に持ち、64 は最大径を胴部上位に持つ。64・65 は口縁部が強く「く」の字に外反し、64 は口唇部でつまみ上げている。65 は胴部上位でヘラ状工具による刺突を施す。66 は口縁部が緩やかに外反し、胴部最大径は中位にあり、67 は口縁部が内湾気味に外反する。71 ~ 78 は壺で、71 ~ 73 は口縁部が緩やかに外反する。71 は胴部上位にこぶ状の突帯を持ち、72 は胴部中位に、73 は肩部に線刻を施す。74 は口縁部が短く強く外反し、現存で頸部に穿孔を持つ。76 ~ 78 は丸底気味の平底で 77 は直線的に立上がる。79 は鉢で内湾しながら立上がる。80 ~ 83 は高杯で、脚部は緩やかに外反し、81 は端部が上方に立上がる。84 は器台で口唇部でつまみ上げている。体部に現存で 3 個の透しがみられる。85・86 は椀で、85 は直線的に立上がり、86 は内湾気味に立上がる。87 は蓋で、つまみを持たず、やや内湾気味に広がり、口縁部で水平に外反する。鉢の可能性もある。

住居 21 出土の土器 (第 46 図)

床面で潰れた状態で出土した。90 は甕で口縁部が短く外反し、口唇部でつまみ上げられている。胴部上位径と口縁部径がほぼ同じになる。91・92 は壺で、口縁部は「く」の字に外反し内湾気味に立上がる。92 は僅かに外反する。93 は鉢で、上げ底を呈しほぼ直線的に立上がる。

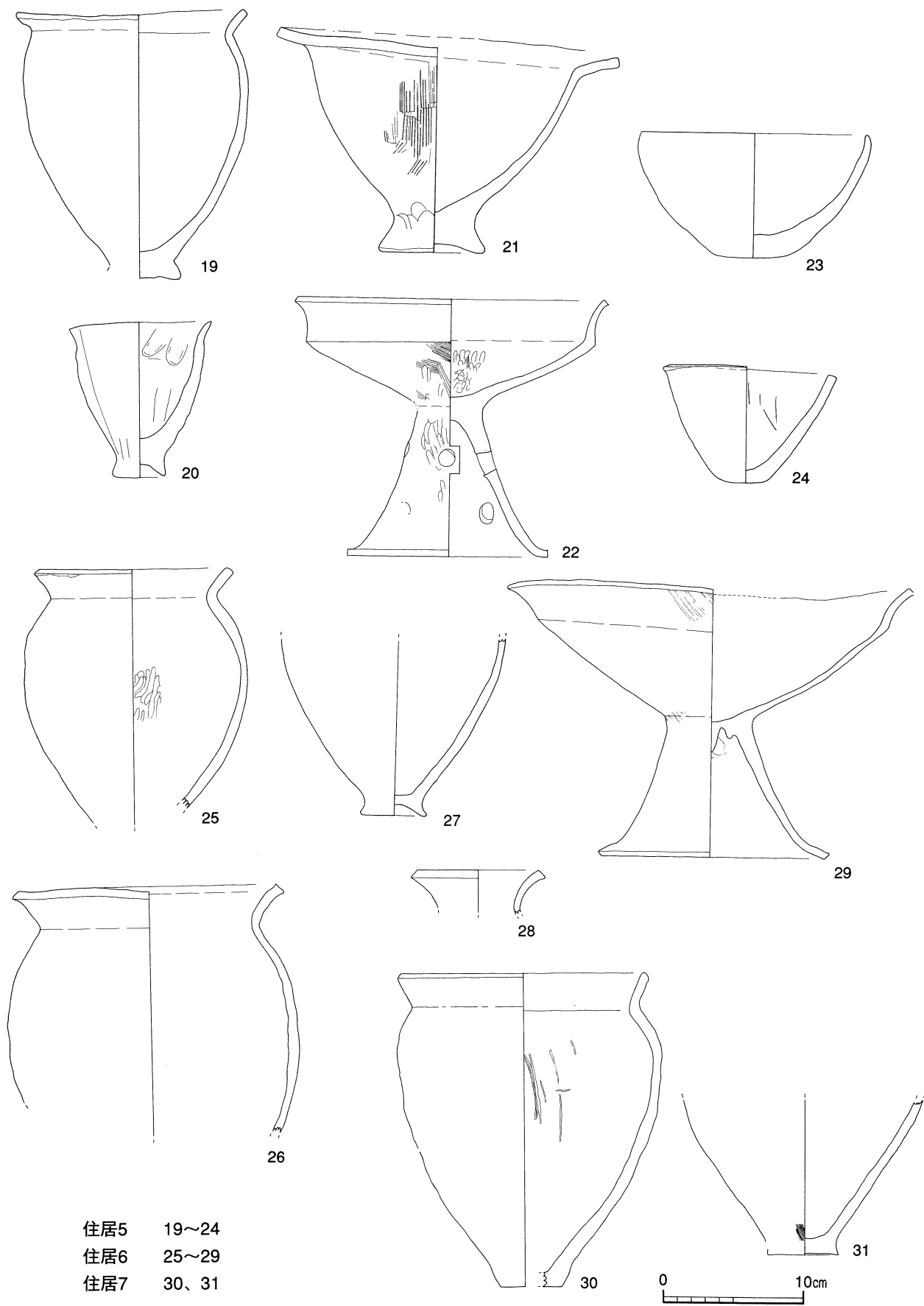
住居 22 出土の土器 (第 46 図)

床面から 10 cm 浮いた位置で出土した。94・95 は甕で、上げ底を呈し、内湾気味に立上がる。96 は高杯の脚部で緩やかに外反し、端部で上方に立上がる。脚部下位に透しを 6 個持つ。97 は土師器の小型丸底壺で扁球形の胴部を呈し、口縁部は斜めに直線的に立上がる。口縁部内面、胴部外面にミガキを施す。



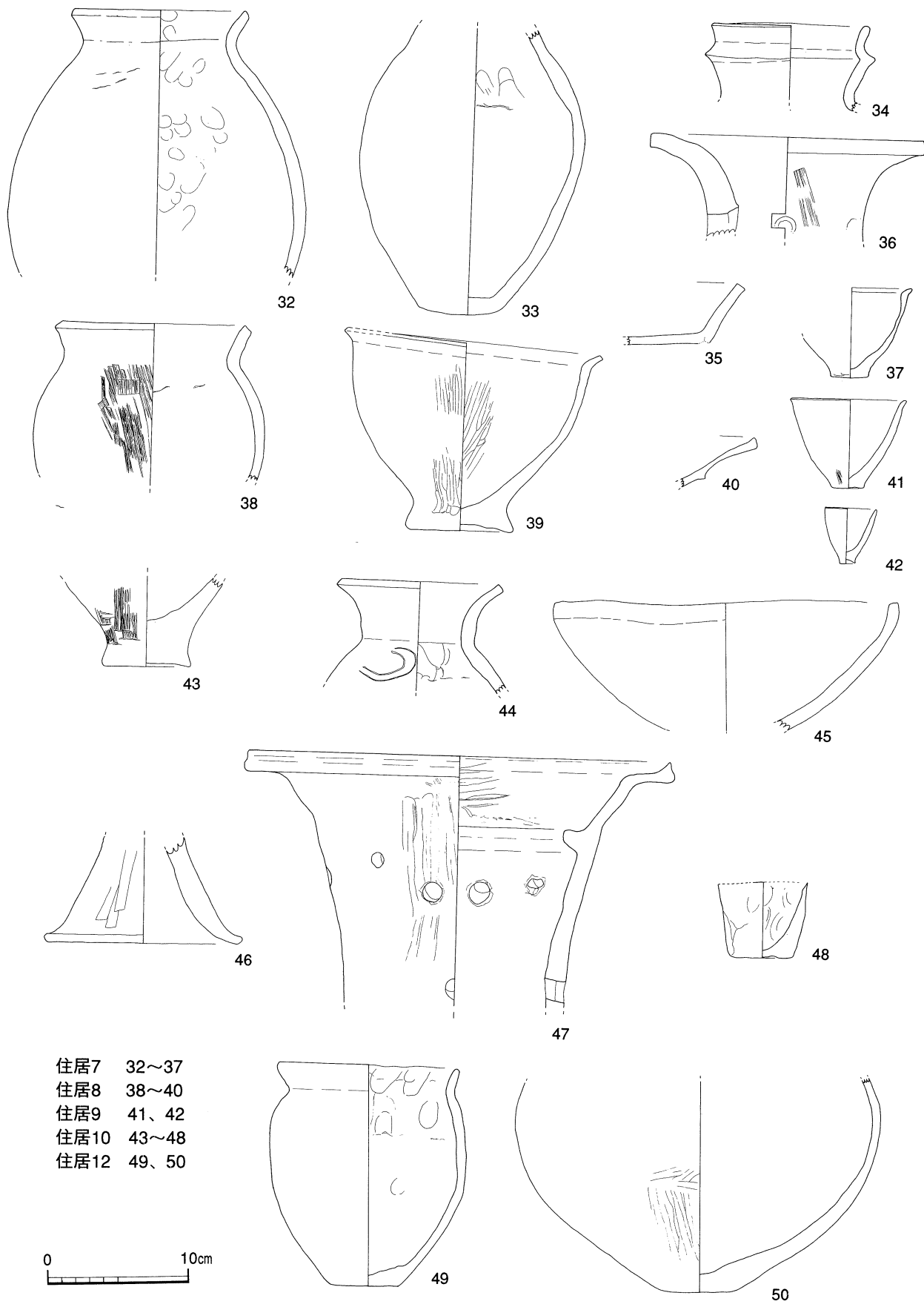
- 住居1 1~7
- 住居2 8
- 住居3 9~14
- 住居4 15~18

第41图 住居出土土器实测图(1)



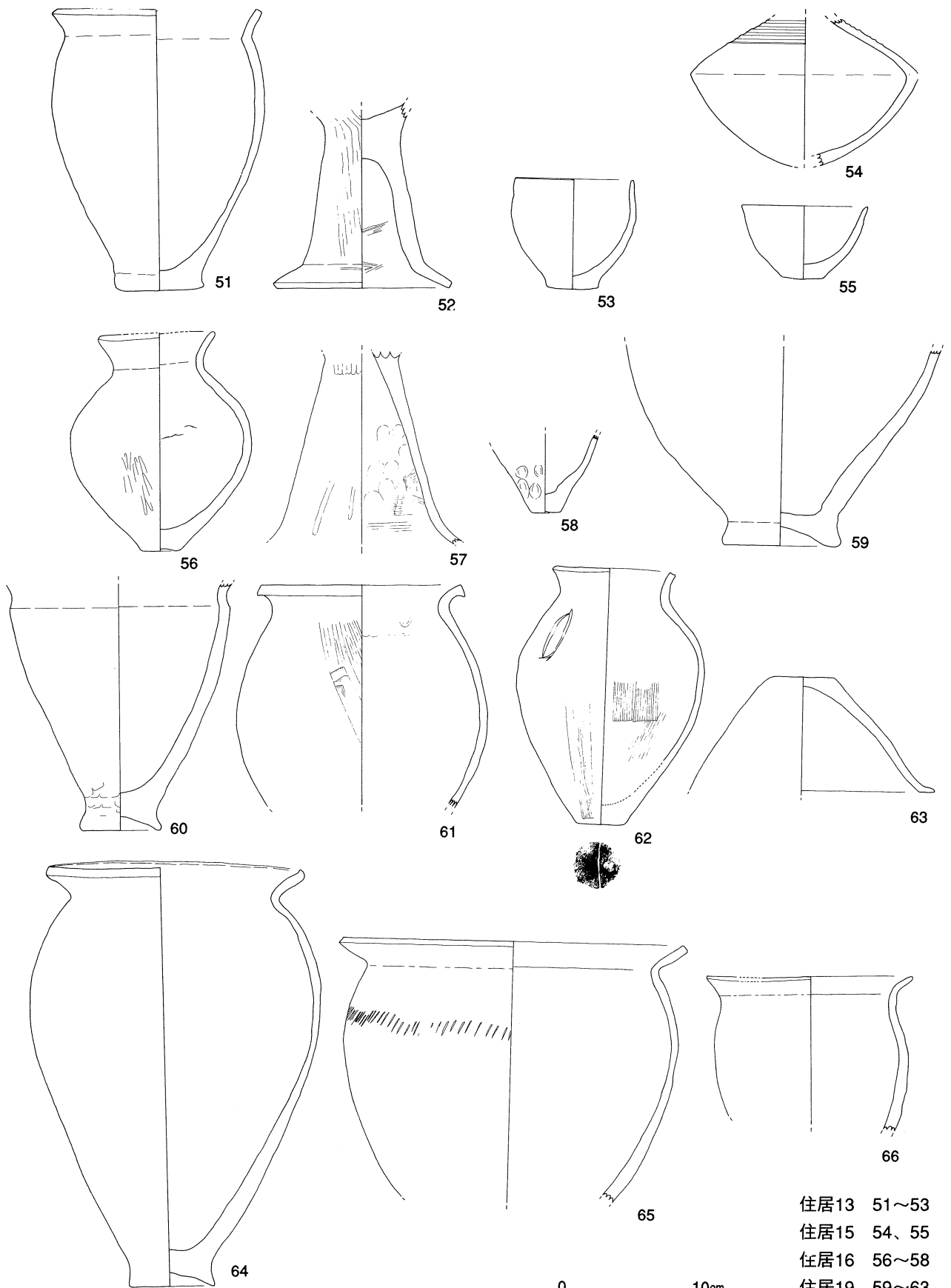
住居5 19~24
 住居6 25~29
 住居7 30、31

第42図 住居出土土器実測図(2)



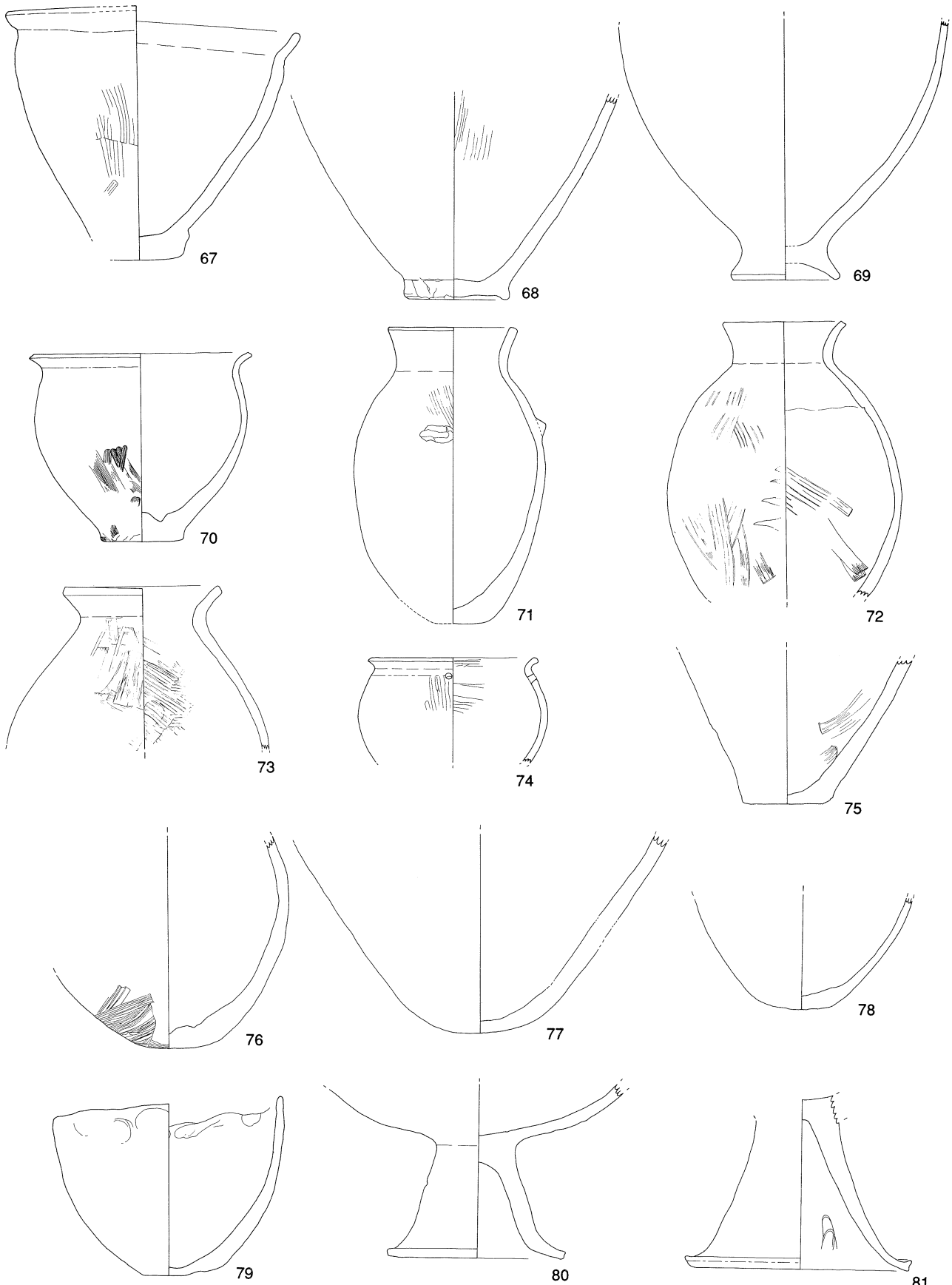
- 住居7 32~37
- 住居8 38~40
- 住居9 41、42
- 住居10 43~48
- 住居12 49、50

第 43 図 住居出土土器実測図(3)



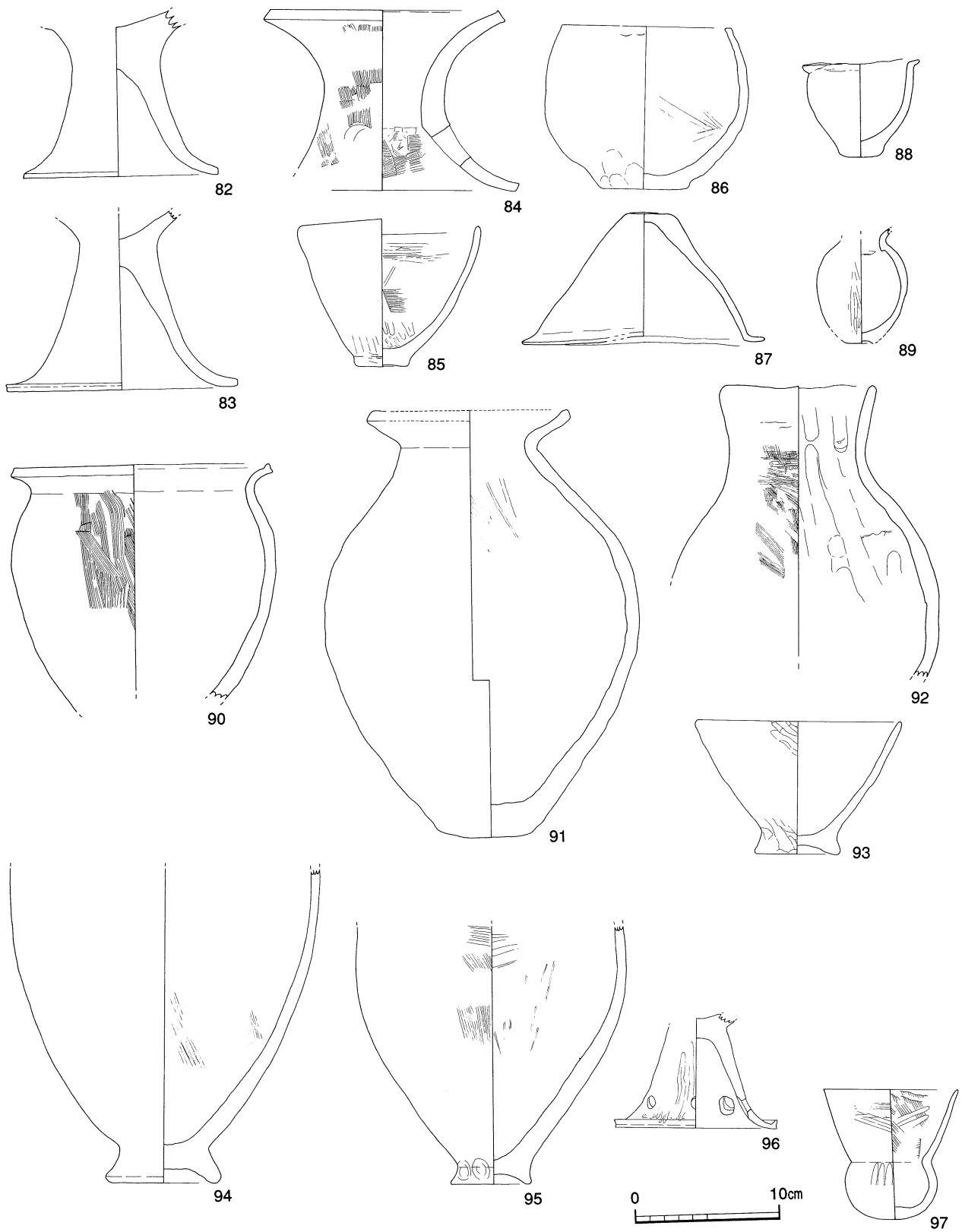
- 住居13 51~53
- 住居15 54、55
- 住居16 56~58
- 住居19 59~63
- 住居20 64~66

第44图 住居出土土器实测图(4)



住居20 67~81

第45図 住居出土土器実測図(5)



住居20 82~89
 住居21 90~93
 住居22 94~97

第46図 住居出土土器実測図(6)

豎穴状遺構 1 出土の土器 (第 47 図)

検出面より 15 cm 下がった位置で出土した。98 は甕で口縁部は緩やかに外反し、胴部上位径が口縁部径よりも大きい。99・100 は壺で、99 は口縁部が朝顔形に大きく開く。100 は鋤先形口縁で円形浮文を持つ。

豎穴状遺構 2 出土の土器 (第 47 図)

床面から出土した。101 は高杯の脚部で緩やかに外反する。102 はミニチュアの鉢で、ほぼ直線的に立上がり、口縁部で僅かに外反する。丁寧なナデを施す。103 は椀で、口縁部で僅かに内湾する。外面にミガキを施す。

豎穴状遺構 5 出土の土器 (第 47 図)

床面から 15 cm 浮いた位置で出土した。104 は甕で口縁部が「く」の字に外反する。胴部最上位にヘラ状工具による刺突を施す。105 は長頸壺でほぼ直線的に立上がり、僅かに外反する。外面に丁寧なナデを施す。106 は高杯で、脚部は緩やかに外反し、端部で僅かにつまみ上げられる。杯部は僅かに内湾しながら立上がる。

豎穴状遺構 6 出土の土器 (第 47 図)

6-2 の底面から 20 cm 浮いた位置で出土した。107 は壺で胴部中位よりやや上で著しく胴部が張り、口縁部は強く外反する。頸部に 4 個の穿孔を持つ。

豎穴状遺構 12 出土の土器 (第 47 図)

底面から 5 cm 浮いた位置で出土した。108 は壺で、肩部が張り、口縁部は朝顔形に開く。外面にミガキを施す。

豎穴状遺構 13 出土の土器 (第 47 図)

底面から 10 cm 浮いた位置で出土した。109 は甕で、上げ底を呈し、口縁部が「く」の字に外反し、胴部中位径が最大径となる。110 は壺で、口縁部は強く外反し、胴部は球形を呈し、中位が最大径となり、頸部に 4 個の穿孔を持つ。

豎穴状遺構 14 出土の土器 (第 47 図)

111 は甕で、口縁部は「く」の字に外反する。最大径は口縁部径である。

豎穴状遺構 17 出土の土器 (第 47 図)

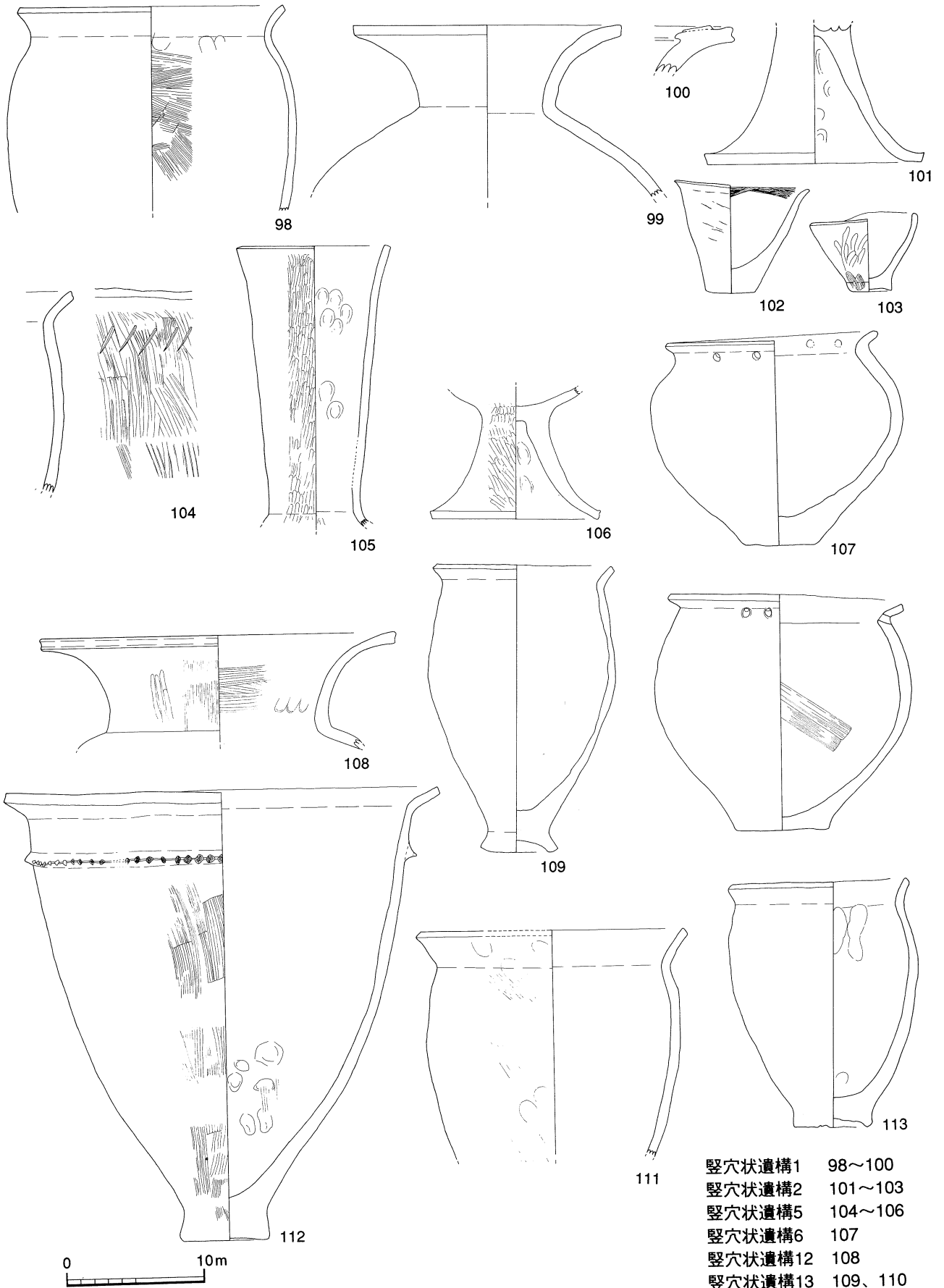
埋土中位から出土した。112 は甕で、充実した底部を呈する。口縁部は「く」の字に外反し、口縁部下に 1 条の刻目突帯を持つ。胴部最大径は胴部最上位になる。

豎穴状遺構 23 出土の土器 (第 47 図)

底に伏せられた状態で出土した。113 は甕で、上げ底を呈する。口縁部は緩やかに外反し、最大径は胴部中位よりやや上となる。

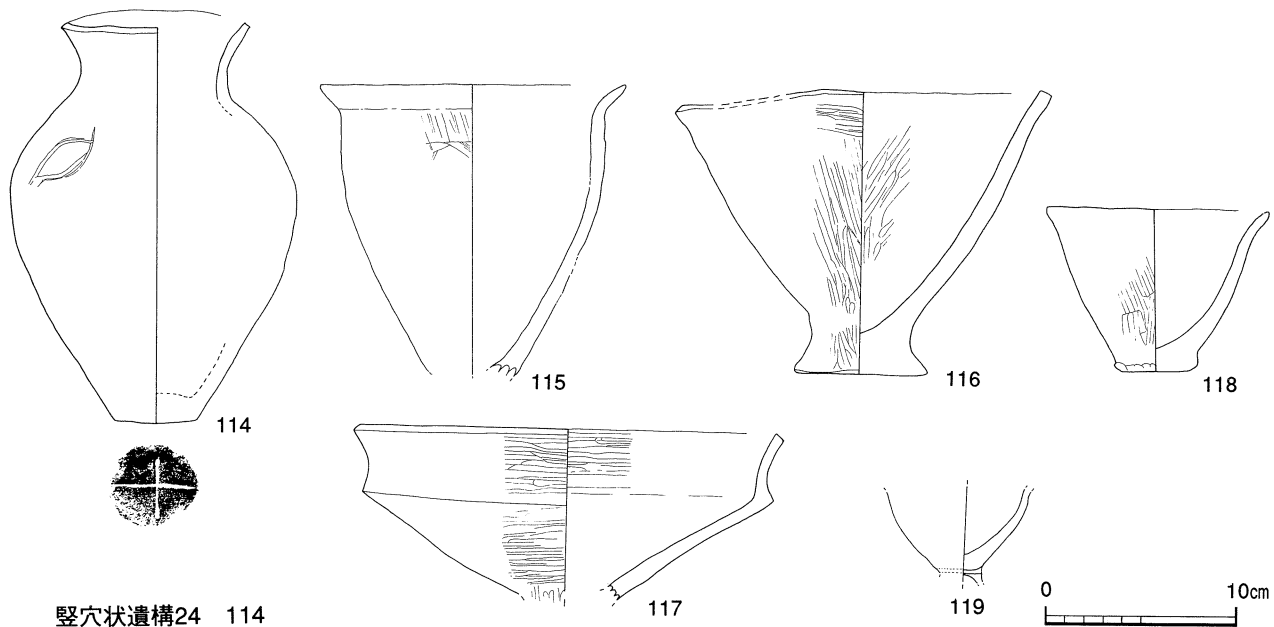
豎穴状遺構 24 出土の土器 (第 48 図)

底面から 20 cm 浮いた位置で置かれた状態で出土した。114 は壺で、平底を呈し、口縁部は緩やかに外反し立上がる。外面はナデを施し、肩部に絵画と思われる「魚」の線刻を施し、底部には十文字のヘラ記号を施す。



第 47 図 豎穴状遺構出土土器実測図(1)

- 豎穴状遺構1 98~100
- 豎穴状遺構2 101~103
- 豎穴状遺構5 104~106
- 豎穴状遺構6 107
- 豎穴状遺構12 108
- 豎穴状遺構13 109、110
- 豎穴状遺構14 111
- 豎穴状遺構17 112
- 豎穴状遺構23 113



竪穴状遺構24 114

竪穴状遺構25 115~119

第48図 竪穴状遺構出土土器実測図(2)

竪穴状遺構 25 出土の土器 (第48図)

床面で土器溜り状に出土した。115は甕で、胴部上位ではほぼ直線的に立上がり、そのまま「く」の字に外反する。116は鉢で充実した底部を呈し、ほぼ直線的に立上がる。内外面にミガキを施す。117は高杯の杯部でほぼ直線的に立上がり、1段の稜を持って口縁部は上方に外反する。外面及び口縁部内面にミガキを施す。118は碗でほぼ直線的に立上がり、口縁部で僅かに外反する。119は、ミニチュアの鉢で、底部に穿孔を施す。

貯蔵穴1出土の土器 (第49図)

埋土中位より下で出土した。120は甕で、口縁部は緩やかに外反し、胴部中位径と口縁部径がほぼ同じになる。121~124は壺で、121は肩部が張り、口縁部は強く外反する。

123・124は長頸壺で、123は丸底気味の底部を呈し、頸部は僅かに外反しながら直線的に立上がる。肩部に線刻を施す。124は平底を呈し、「く」の字気味に張りのある胴部を持つ。頸部は123に比べ細く直線的に立上がり、口唇部で僅かに外反する。胴部中位下で線刻を施す。125・126は器台で、125は裾部でほぼ水平に外反し、安定感がある。体部に残存で12個の透しを持つ。126は体部下位に残存で3個の透しを持つ。

貯蔵穴3出土の土器 (第49図)

すべて上層で出土した。127~130は甕で、胴部上位で張りをもち、127・128は口縁部が緩やかに外反する。128は甕もしくは壺で、平底を呈し、内湾しながら立上がる。129は上げ底を呈する。130は僅かに上げ底を呈し、直線的に立上がり、口縁部で僅かに外反する。131は高杯で、脚裾部が屈曲して内湾しながら開く。132は蓋で、つまみを持たず、口縁部で外反する。外面にミガキを施す。133はミニチュアの鉢で、尖底気味の平底を呈し、僅かに内湾しながら立上がる。外面にミガキを施す。

貯蔵穴4出土の土器（第50図）

底面から約10cm浮いた位置で出土した。134は甕で、口縁部は「く」の字気味に外反し、口唇部で僅かに肥厚し、最大径は口縁部径になる。胴部内外面にミガキを施す。

貯蔵穴5出土の土器（第50図）

埋土中から出土した。135は甕で、平底を呈するが底面中央に穿孔を施しており、甑的な使い方をしたのではないかと考えられる。

貯蔵穴7出土の土器（第50図）

埋土中から出土した。136は甕で、口縁部が「く」の字に外反し端部は丸みを帯びる。137・138は壺で、137は平底を呈し、「く」の字気味に張りのある胴部を持つ。138は口縁部が朝顔形に開く。頸部に三角断面の突帯を1条巡らす。139は器台で、体部上位で5個の透しを持ち、裾端部で上方に立上がる。裾部内面にミガキを施す。140はミニチュアの鉢で、上げ底の底部を呈する。器壁は分厚く、作りが粗い。

貯蔵穴15出土の土器（第50図）

底面から出土した。141・142は甕で、共に口縁部がカーブを描いて外反し、141は胴部上位に、142は口縁部に最大径がある。143は甕もしくは鉢の底部で上げ底を呈し、内湾しながら立上がる。144・145は壺で、144は平底で外面にミガキを施す。145は長頸壺で「く」の字に張る胴部を持ち、頸部は直線的に立上がり、口縁部で僅かに外反する。146は高杯で、杯部はやや内湾しながら立上がり、稜を持って口縁部は垂直よりやや斜め方向に外反する。脚部は緩やかに外反する。脚裾部以外の外面全体と杯部内面にミガキを施す。147はミニチュアの甕で、内湾しながら立上がる。底部は欠損するが脚台を持つと考えられる。作りは粗く、胴部外面下位にミガキを施すが口縁部内外面に指押さえの後が残る。

貯蔵穴16出土の土器（第51図）

すべて埋土上層より出土した。148～150は甕で、148・149は上げ底を呈し、口縁部が「く」の字に外反する。150は口縁部が緩やかに外反する。148・150は口縁部径と胴部径がほぼ同じになり、149は最大径が口縁部になる。

貯蔵穴17出土の土器（第51図）

埋土から出土した。151は甕で、充実したやや上げ底気味の底部を呈し、口縁部は「く」の字に外反する。口縁部直下に1条の刻目突帯を巡らす。胴部最大径は胴部最上位になる。

貯蔵穴18出土の土器（第51図）

152のみ一括で、他は底面より20cm浮いた位置で出土した。152～154は甕で、152・153は上げ底を呈し、154は平底を呈する。152は直線的に立上がり、胴部上位で内湾し口縁部は緩やかに外反する。153は胴部が張り、口縁部で強く外反する。154は口縁部が「く」の字に外反する。最大径は152・154は口縁部に、153は胴部中位にある。155～161は壺で、155は長胴の壺で平底を呈する。頸部はほぼ垂直に立上がり、口縁部は「く」の字に外反する。外面はハケ調整後ナデられた後、線刻が描かれている。線刻は肩部から胴部に描かれており、4つの水草と魚、肩部に幾何学文、中央部にカエル（人物？）が描かれており、水辺の風景を抽

象的に表現している。ヘラ様工具で浅く施されている。156は丸底気味の底部を呈する長胴の壺で、口縁部は緩やかなカーブを描いて外反する。頸部から胴部中位にかけてミガキを施す。157はほぼ丸底を呈し、胴部中位が張り、口縁部は緩やかに外反する。丁寧なナデの後線刻が描かれている。線刻は頸部から胴部にかけて描かれており、縦方向に2本（一部3本）の細かく蛇行した線と、3本の平行した線が途中で合流し、大きくカーブを描き、その終わり近くに幾何学文が描かれている。表現するものは不明である。櫛様工具とヘラ様工具で深く刻まれている。158は平底を呈し、内湾しながら立上がり、口縁部でカーブを描いて外反する。器面外面はハケ調整後ナデられ一部ハケが残り、その後線刻が描かれている。線刻は胴部中位に描かれ、羽ばたく鳥を横方向から抽象的に表現している。ヘラ様工具で浅く施されている。159～161は平底を呈し、159・160は胴部中位に「く」の字に張りを持ち、161は胴部上位に最大径を持つ。161は159・160に比べ頸部が長く、160・161は口縁部で緩やかに外反する。159は胴部中位より上、160は胴部下位から底部、161は外面全体にミガキを施す。

貯蔵穴19出土の土器（第52図）

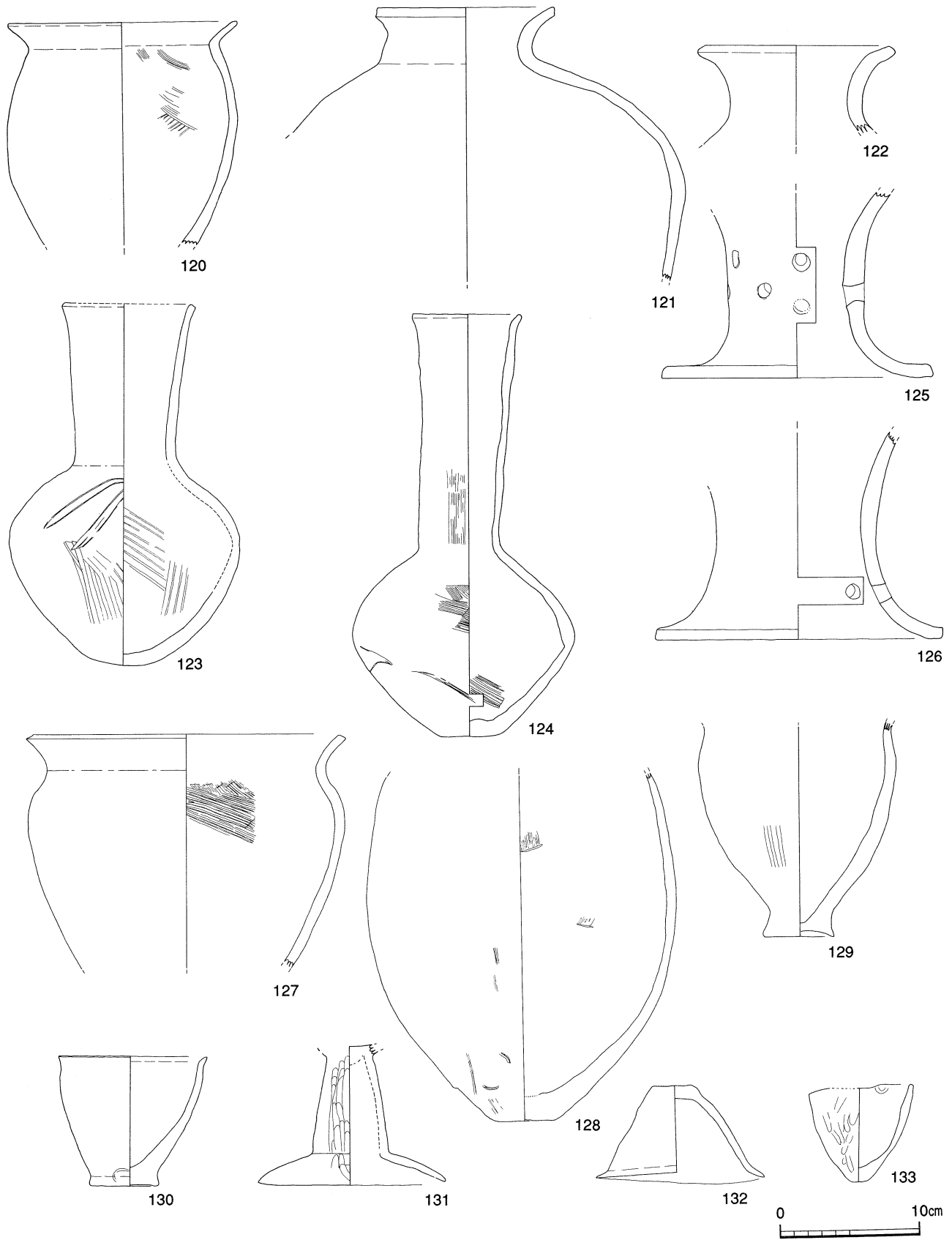
遺物は底面から30～35cm浮いた位置で出土した。162～166は甕で、162の中に165が入れられた状態で出土した。162・163は上げ底を呈し、164・165は平底を呈する。162は口縁部が「く」の字に外反し、口唇部で僅かに肥厚する。163～165は緩やかにカーブを描いて外反する。166は胴部最上位で内湾がきつくなつた後、口縁部が「く」の字に外反する。最大径は163～165が口縁部にあり、162・165は胴部上位にある。167～170は壺で、168・170は平底を呈する。167は胴部中位よりやや上、168は胴部中位で「く」の字気味に張った胴部を持ち、170は扁球形の胴部を持つ。167は口縁部が「く」の字に外反し、169は長頸壺の頸部で口縁部が僅かに外反する。171は壺もしくは甕の底部で平底を呈する。172はミニチュアの壺で脚台状の底部を呈し、丸みをもった胴部を持つ。外面にナデを施す。173は高杯で杯部は内湾気味に立上がり、1段の稜を持って口縁部は垂直に立上がった後、外反する。脚部は緩やかに外反し、端部に沈線を施す。脚部下位に8個の透しを持つ。

土坑2出土の土器（第53図）

すべて埋土上層の一定レベルで出土し、177は土坑4との接合資料である。174・175は甕で、胴部は内湾気味に立上がり、口縁部は直行する。175は胴部から口縁部までほぼ直線的に立上がる。174は、口縁部と胴部、175は口縁部と口縁部直下に刻目突帯を2条ずつ巡らす。「亀ノ甲タイプ」の甕か。176～178は壺で、176は頸部から口縁部、177・178は肩部から頸部にかけて、176は口唇部で沈線を施し、頸部外面、口縁部内面に1条ずつ刻目突帯を巡らし、177は頸部の内外面に刻目突帯を巡らす。178は頸部と肩部の境に2条の突帯を巡らし、その直下に縦方向に沈線を施し、調整は内外面ともにミガキである。

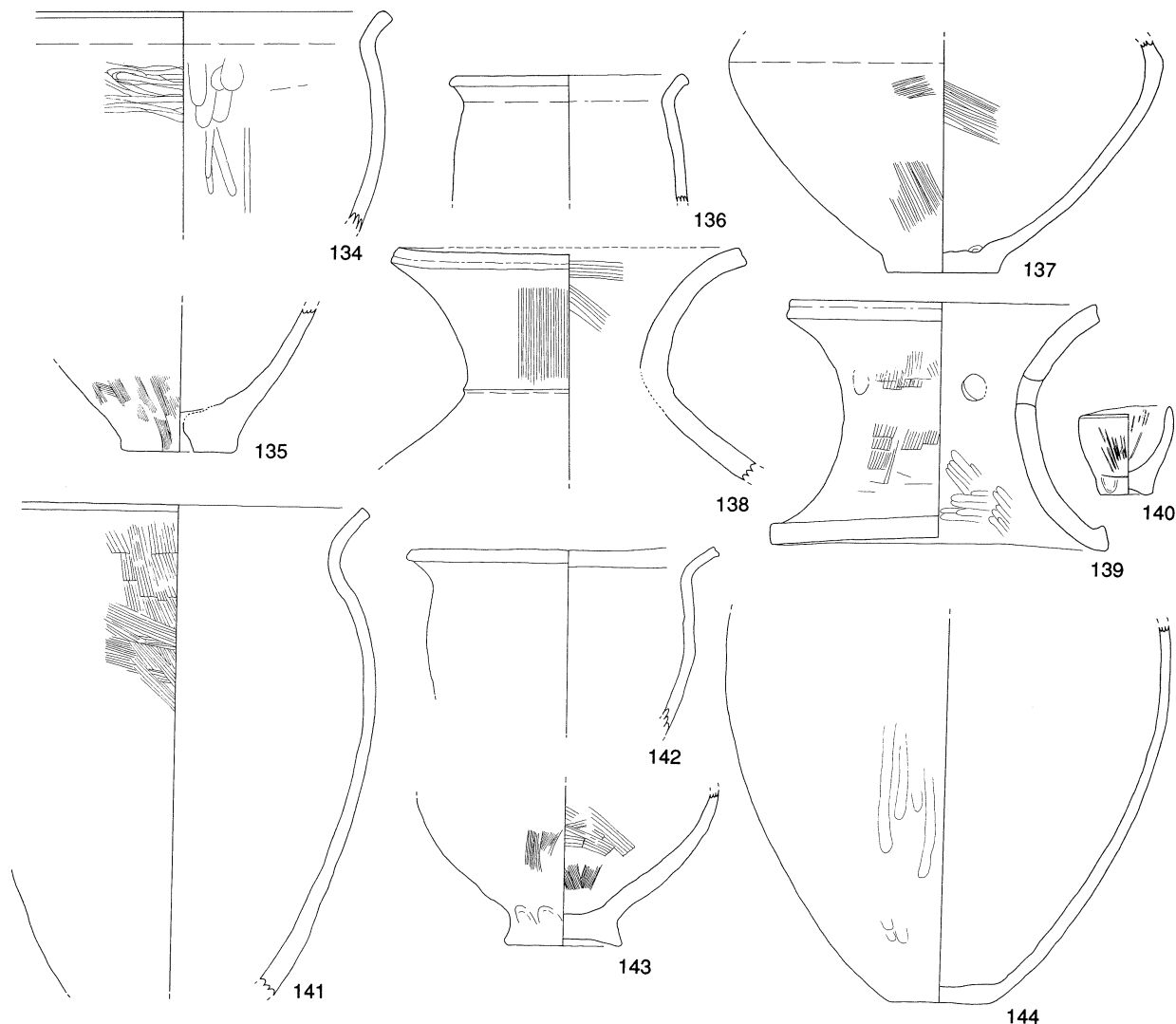
土坑3出土の土器（第53図）

179は貯蔵穴3、住居2、環濠7と、180は貯蔵穴3との接合資料である。179・180は甕で、共に口縁部が緩やかに外反し、最大径が口縁部になる。口唇部を僅かにつまみ上げている。

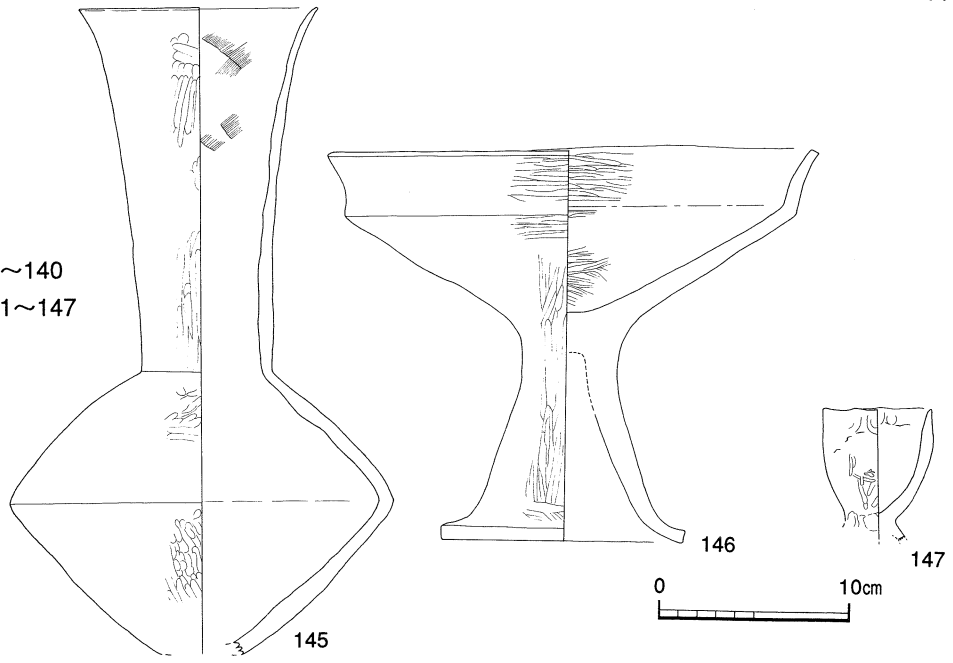


貯蔵穴1 120~126
 貯蔵穴3 127~133

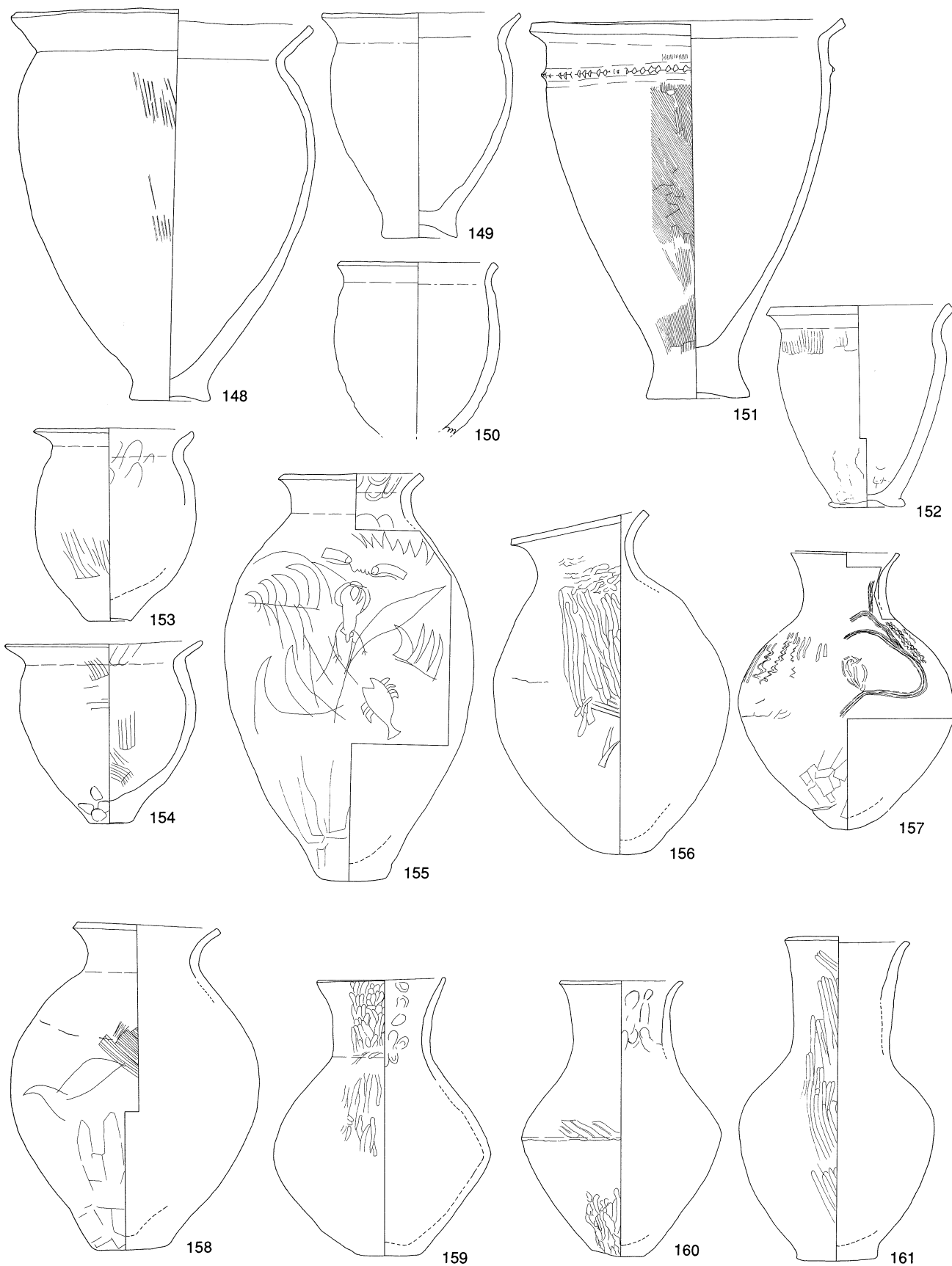
第 49 図 貯蔵穴出土土器実測図(1)



- 貯蔵穴4 134
- 貯蔵穴5 135
- 貯蔵穴7 136~140
- 貯蔵穴15 141~147



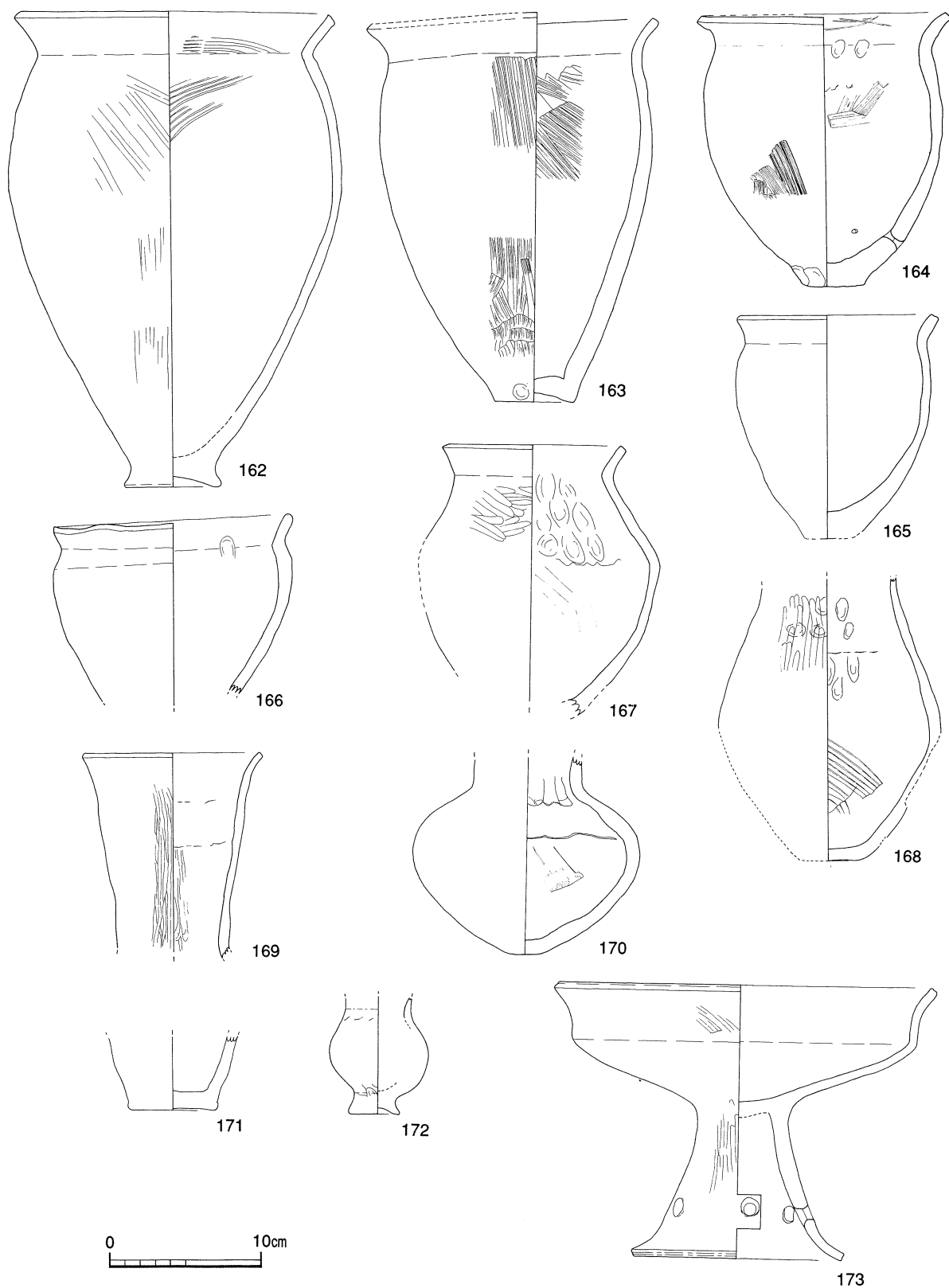
第 50 図 貯蔵穴出土土器実測図(2)



貯藏穴16 148~150
 貯藏穴17 151
 貯藏穴18 152~161

0 10cm

第51図 貯藏穴出土土器実測図(3)



貯藏穴19 162~173

第52図 貯藏穴出土土器実測図(4)

179 は口縁部下に上方に傾けてはり付けられた刻目突帯を持つ。181 は小型壺の胴部である。

土坑 12 出土の土器 (第 53 図)

182 は壺で、平底を呈し、口縁部はカーブを描いて外反する。肩部に線刻を施す。線刻はやや斜めの縦方向に 6 本平行してヘラ様工具で深く刻まれている。

土坑 17 出土の土器 (第 53 図)

検出面から 5 cm 下がった位置で出土した。183 は甕で、口縁部が「く」の字に外反し、最大径を胴部を持つ。184・185 は壺である。184 は長頸壺で、平底を呈し、丸みを持った胴部を持ち、頸部は僅かに外反しながら、口縁部で「く」の字に外反する。口唇部は肥厚する。頸部全体に 10 本の沈線を施す。「瀬戸内系」か。185 は鋤先口縁壺の口縁部で、口唇部に 4 個の円形浮文を施す。186 はミニチュアの無頸壺で、平底を呈し、直線的に立上がり胴部上位で内湾する。口縁部分はずつまみ様に僅かに立上がる。

土坑 19 出土の土器 (第 53 図)

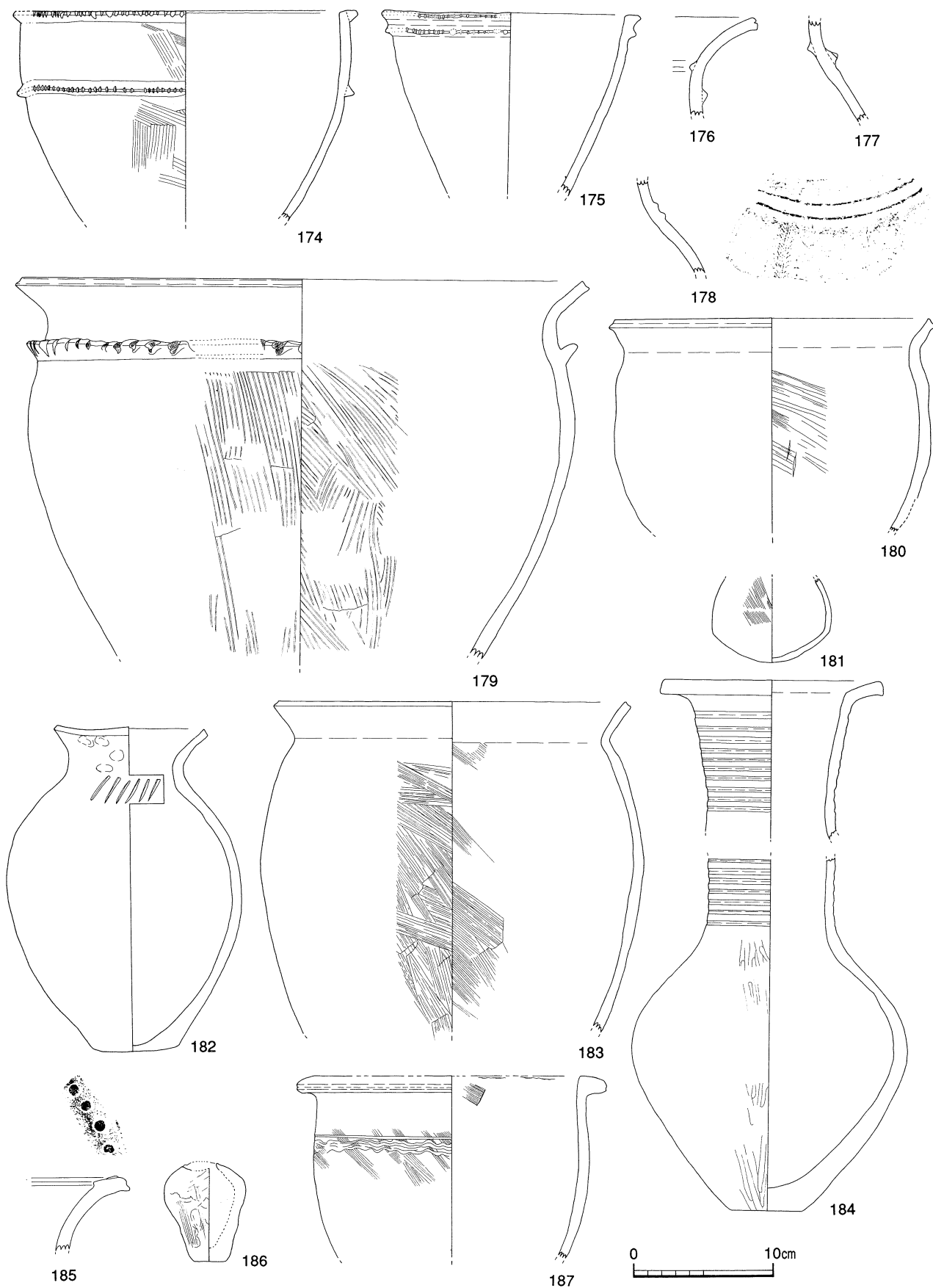
床面で出土した。187 は甕で口縁部は外反せず、口縁部は僅かに下方に垂れ下がった丸みを持った突帯を巡らし、胴部に波状文を施す。

土坑 22 出土の土器 (第 54 図)

198・200 を除いて、他は検出面で土器溜り状に集中して出土した土器である。198 は土器溜り状になる部分から東方向のやや離れた位置で出土しており、200 は土器溜りと底面で出土した。188～195 は甕で、188～191・194 は上げ底を呈する。193 は平底を呈し、直線的に立上がり胴部上位で僅かに内湾し、口縁部で僅かに外反する。内外面にミガキを施し、鉢の可能性もある。188～190・192 は口縁部が「く」の字に外反し、189・192・195 は口唇部が肥厚する。188～190 は口縁部に最大径があり、192 は胴部中位に最大径がある。196～199 は壺で、196 は平底を呈し、胴部は中位に最大径を持ち、口縁部はカーブを描いて外反する。胴部上位にカーブした突帯を持つ。197 は無頸壺で、平底を呈し胴部上位に最大径を持つ。頸部から上は見られず、端部は丸みを帯びる。198 は丸底気味の平底を呈し、丸みのある胴部を持ち、径幅の小さい頸部を持つ。199 は平底を呈し、丸みを持った胴部を持つ。外面は丁寧なナデを施した後、胴部中位から底部にかけて絵画と思われる線刻を施している。絵画は破損が激しく半分しか残っていないため、全容は解らないが、1箇所では蛇行する平行した 2 本の線を描き、もう一箇所では瞳様の模様が対に描かれているが、片方はほとんどが欠損する。その模様は右下方に左右に無数の引っ掻いたような線が入る。平行した 2 本の線は「蛇」を描き、瞳様と左右に引っ掻いた無数の線は人面を描いたと考えられる。200 は器台で、体部はほぼ垂直に立ち、口縁部、裾部は外反する。

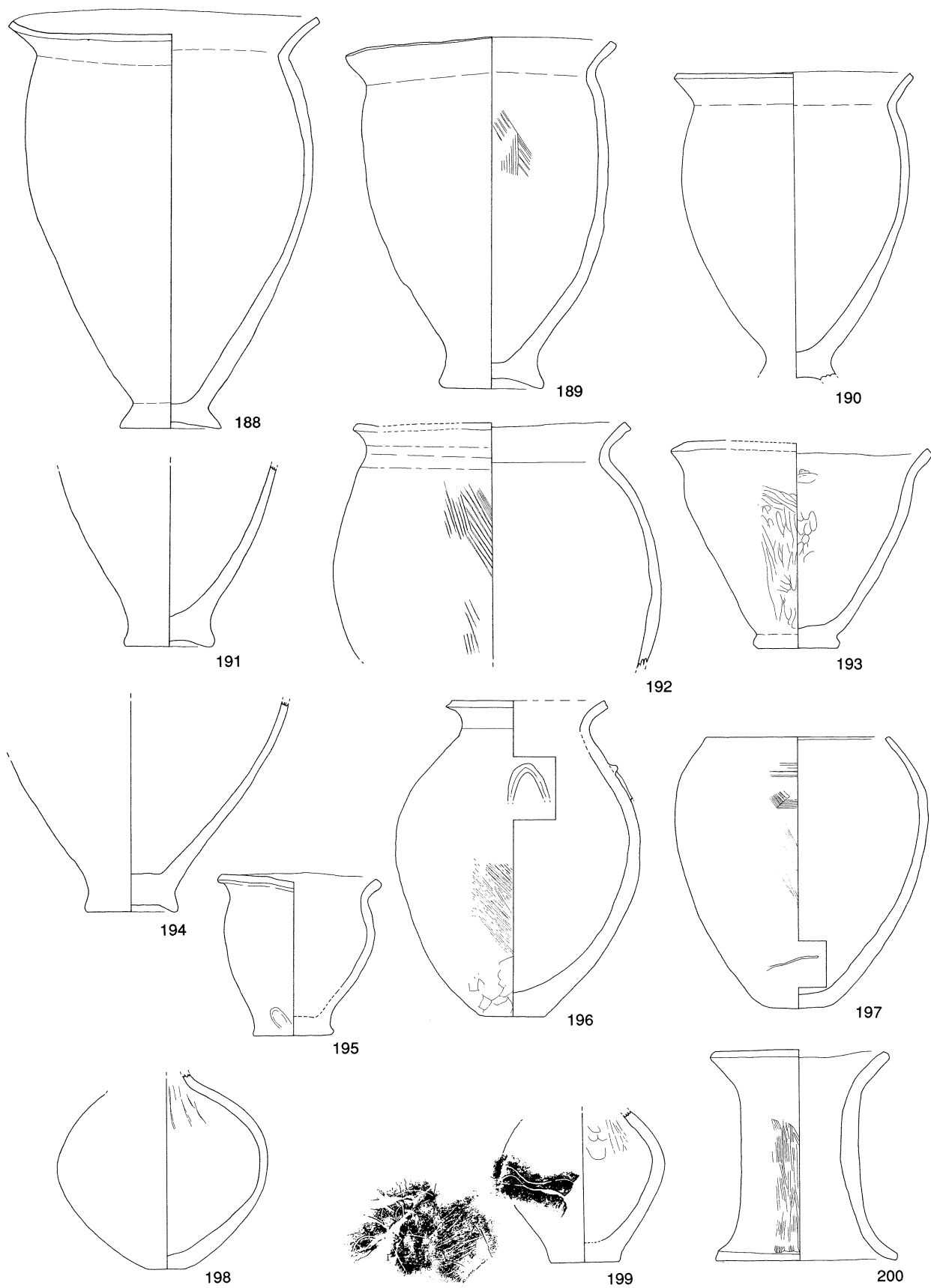
土坑 28 出土の土器 (第 55 図)

201・202 は甕で、201 は胴部中位からほぼ垂直に立上がり、202 は胴部中位から僅かに内湾しながら立上がる。口縁部は共に「く」の字に外反し、201 は口唇部が僅かに肥厚する。203 は壺で、肩部から口縁部が残存する。頸部から肩部にかけて、絵画と考えられる線刻が施されている。破片のため全容は解らないが、上から下に向けて平行した 2 本の線が走り、その



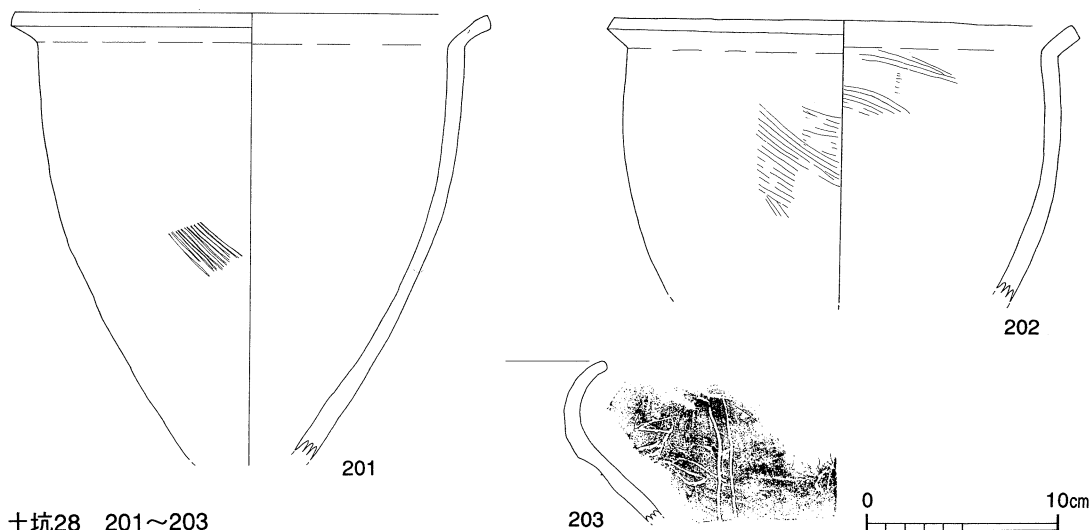
土坑2 174~178 土坑17 183~186
 土坑3 179~181 土坑19 187
 土坑12 182

第53图 土坑出土土器实测图(1)



土坑22 188~200

第54图 土坑出土土器实测图(2)



第 55 図 土坑出土土器実測図(3)

両側に三角形、S字の模様が入る。

環濠 1 出土の土器 (第 56 図)

底面から出土した。204 は甕で、胴部は僅かに内湾しながら立上がり、口縁部端で刻目突帯を巡らす。風化気味だが内外面共にミガキを施す。205 ~ 211 は壺で、205 は胴部との境に僅かに稜を持った平底を呈し、胴部は球形で、頸部との境に薄手の突帯を巡らす。頸部は短く、口縁部は強く、短く外反する。外面に横方向、斜方向にミガキを施す。206 は平底を呈し、球形の胴部を持つ。風化気味で僅かに外面にミガキが残る。207 ~ 210 は僅かに上げ底となり、207・209 は内外面、208 は外面にミガキを施し、209 の外面のみが縦方向で、他は横方向に入る。210 も僅かにミガキが残るが風化が激しく、はっきり解らない。211 は口縁部の破片で内外面に横方向、斜め方向にミガキが入る。212 は鉢で、脚台状の上げ底の底部を呈し、内湾しながら立上がり、口縁部は外反せず、端部に突帯を巡らす。

環濠 2 出土の土器 (第 56・57 図)

すべてが埋土中から出土した。213 ~ 216 は甕で、213 は口縁部が緩やかに外反し、やや上方向を向いた突帯を巡らす。最大径は胴部上位にある。214 は「く」の字に外反し、口縁部径と胴部中位よりやや上の径がほぼ同じになる。216 は口縁部が直行し、口唇部、口縁部直下に刻目突帯を巡らす。217 ~ 222 は壺である。217 は口縁部の破片で頸部と口縁部内面に突帯を巡らし、口縁部内外面にミガキを施す。218 は口縁部は強く外反し、頸部に沈線を巡らす。外面は口縁部から沈線までが斜方向に、沈線下は縦方向に、頸部内面は横方向にミガキを施す。219 は平底を呈し、球形の胴部を持つ。径幅の狭い頸部から口縁部は緩やかに外反する。220 は長頸壺で丸底を呈し、球形気味の胴部を持つ。頸部は僅かに外反しながら立上がる。肩部にヘラ様工具で肩部周囲の3分の2に8本の刺突を施す。221 は平底を呈し、胴部との境に稜が入る。222 は丸底気味の平底を呈し、丸く張った胴部を持つ。外面にミガキを施す。223 は鉢で、平底を呈し、丸く張った胴部を持つ。口縁部は短く外反する。外面にミガキを施す。224

はミニチュアの鉢である。

環濠 4 出土の土器 (第 57 図)

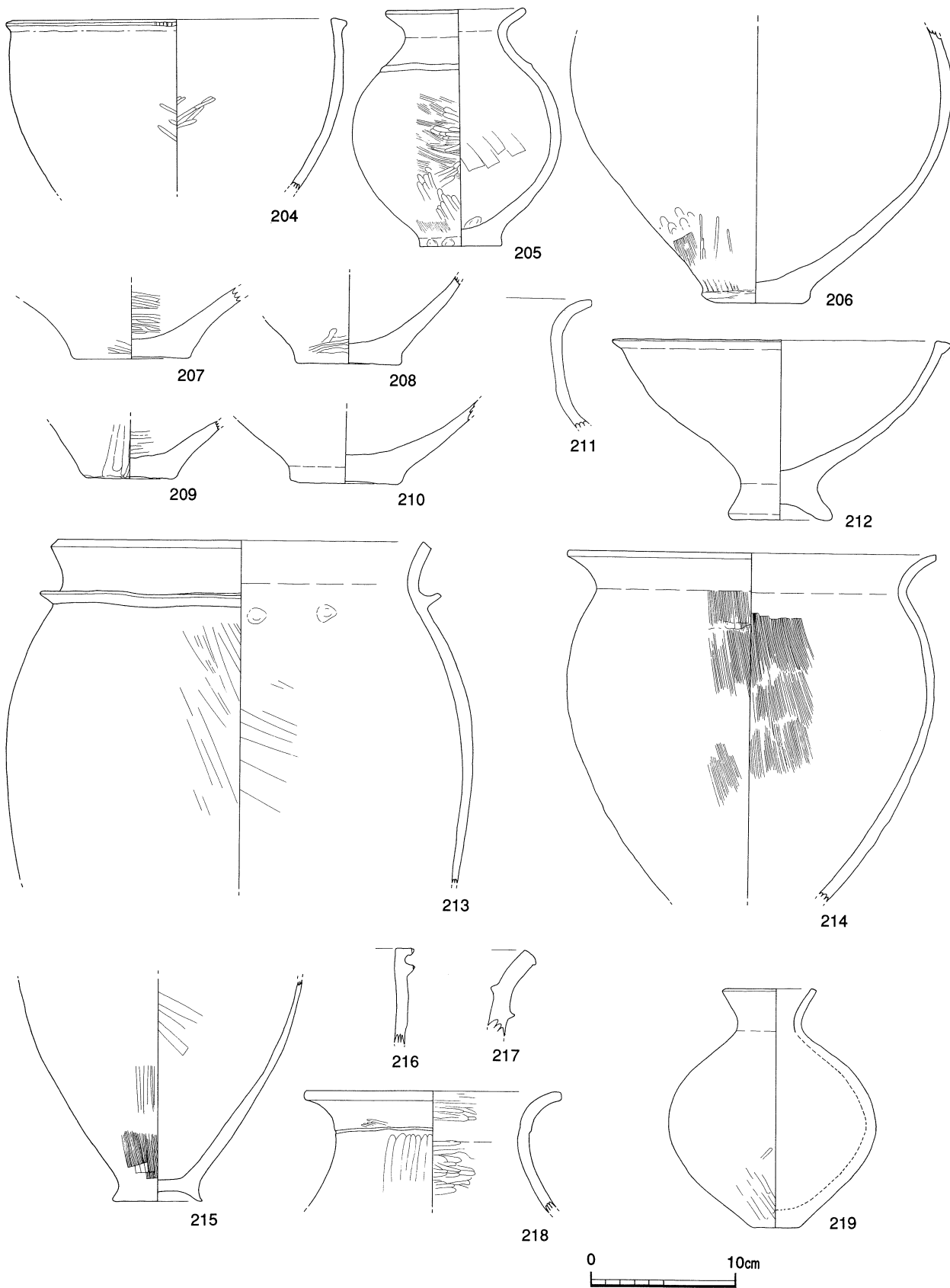
すべて埋土出土の土器である。225～228は甕で、225は僅かに内湾しながら立上がり、口縁部は外反せず口縁部と口縁部直下、胴部に2条ずつ刻目突帯を巡らす。外面にミガキを施す。226・227は充実した甕の底部で、平底を呈する。228は上げ底を呈し、胴部は直線的に立上がり、胴部上位で内湾し、口縁部は「く」の字に外反する。229・230は壺で229は僅かに上げ底を呈し、かなり膨らみを持って立上がる。230は平底を呈し、直線的に立上がる。共に、外面にミガキを施す。231は高杯で脚部は緩やかに外反し、杯部と脚部の境とその直下に2条の突帯を巡らす。

環濠 5 出土の土器 (第 58 図)

底面から出土した。232は甕で、ほぼ直線的に立上がり、口縁部は外反せず口縁部と口縁部直下、胴部に2条ずつ刻目突帯を巡らす。233・234は壺で、233は僅かに上げ底を呈し、膨らみを持って立上がり、胴部中位で著しく張る。肩部と頸部との境に2本の沈線を巡らす。頸部は直線的に立上がり、口縁部はカーブを描いて外反する。胴部に斜方向にミガキを施す。

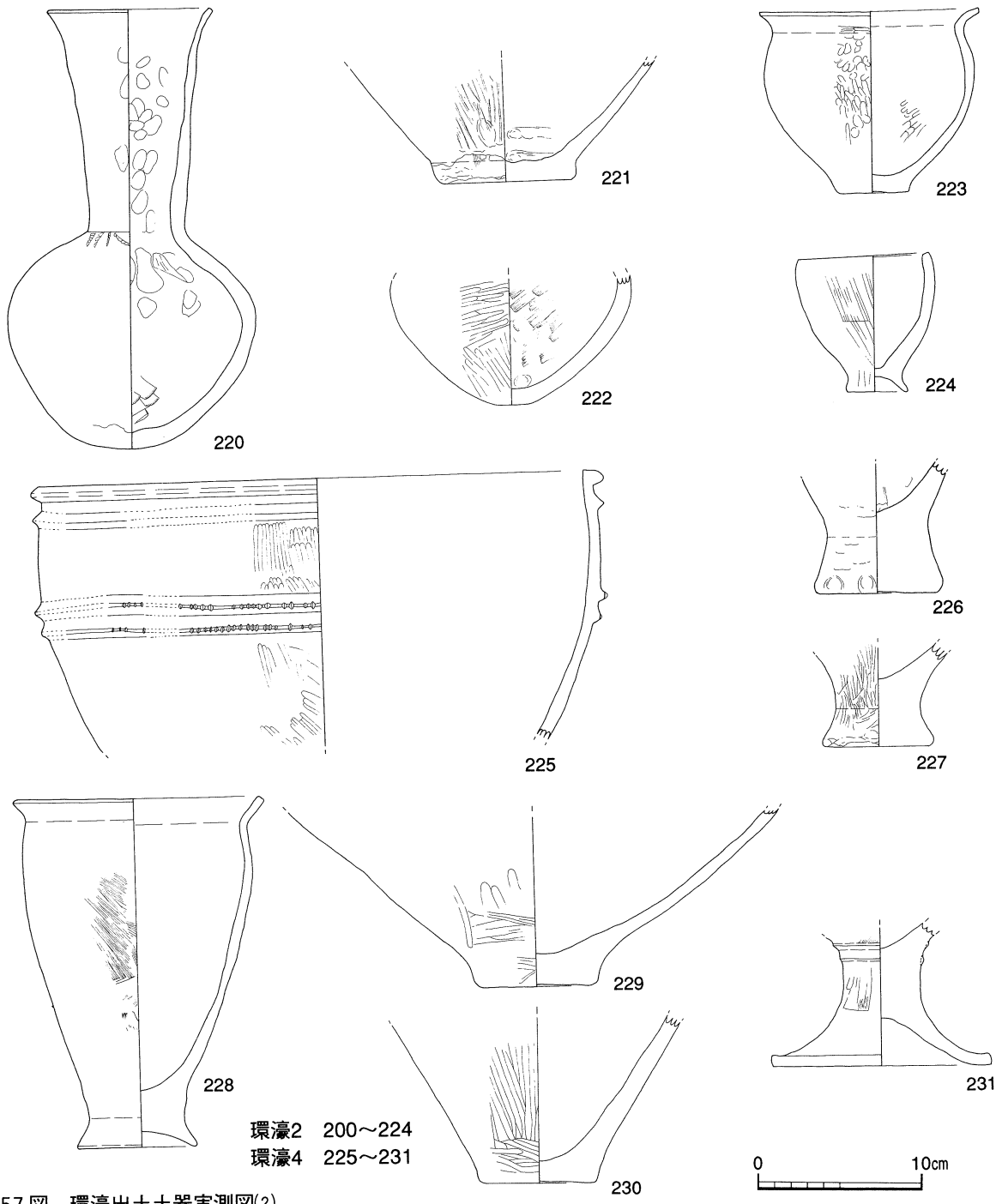
環濠 6 出土の土器 (第 58～63 図)

235～257はI層黒色土出土の土器である。235～243は甕で、235・237は平底を呈し、口縁部はカーブを描いて外反する。235は口縁部下にやや丸みを帯びた三角断面の突帯を巡らす。最大径は胴部中位よりやや上にある。236は上げ底気味の平底を呈し、口縁部は「く」の字に外反し、胴部径と口縁部径がほぼ同じになる。239・243は上げ底、241は充実した底部を呈する。238・240は口縁部が「く」の字に外反し、最大径を口縁部に持つ。242は口縁部が僅かに外反し、口縁部に突帯を持つ。壺の口縁部の可能性もある。244～251は壺で、244～246は平底を呈し、244は丸みを帯びた胴部を持ち、口縁部がカーブを描いて外反し、端部に沈線を持つ。245は長頸壺で胴部中位に張りを持つ。頸部から口縁部にかけて緩やかに外反し、口唇部で僅かに肥厚する。246は長胴の壺で肩部に1段の稜を持って頸部になる。頸部から口縁部にかけて緩やかに外反し、口唇部は肥厚する。胴部中位よりやや上にカーブを描いた線刻を施す。247は長頸壺だが肩が全く張らず、頸部にかけてほぼ直線的に内側に向けて立上がる。口縁部は「く」の字に外反し、口唇部が僅かに肥厚する。頸部に8本の沈線を持ち、その下にミガキを施す。「瀬戸内系」か。248は口縁部が強く「く」の字に外反し、口唇部が肥厚する。249は口唇部がT字気味に肥厚し、端部に2本の沈線を施す。「瀬戸内系」か。250・251は口縁部が肥厚した面を持ち、250は2列、251は1列の刻みのある楕円形浮文を持つ。共に端部に連続山形文を施す。252・253は鉢で、胴部は内湾しながら立上がり、252は口縁部が「く」の字気味に外反し、253は短く外反する。252は口縁部内面、胴部外面に横方向、口縁部外面に縦方向のミガキを施す。254・255は高杯で、脚部が緩やかに外反し、端部で僅かに立上がる。254は脚部上位に3個、下位に6個、255は4個の透しを持つ。256は器台で、体部は直線的に立ち、口縁部、裾部で緩やかに外反する。口縁部、裾部近くにそれぞれ5個ずつ透しを持つ。257は椀で、口唇部で僅かに外反する。



環濠1 204~212
 環濠2 213~219

第 56 图 環濠出土土器実測図(1)



第57図 環濠出土土器実測図(2)

258～282はⅡ層黄色土出土の土器である。258～266は甕で、258・266は平底を呈し、259・262は上げ底を呈する。258・263・264・266は口縁部が「く」の字に外反し、259・261・262はカーブを描いて外反する。260は胴部上位が直行気味に立ち口縁部で緩やかに外反する。最大径は258～262は口縁部にあり、263は胴部径と口縁部径がほぼ同じで、264・266は最大径が胴部にある。265は胴部が内湾しながら立上がり、口縁部に突帯を持ち、端部に沈線を巡らす。267～277は壺で、267は平底を呈し、胴部中位よりやや上で張る。口唇部で、丸みを持って肥厚する。268は口縁部が朝顔形に開き、口唇部で、T字気味に肥厚し、2本の沈線を巡らす。頸部と肩部間に突帯を巡らす。269は口縁部が「く」の字に外反し、口

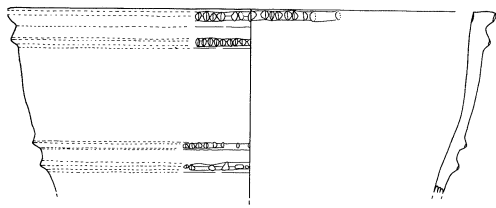
唇部が肥厚する。271は平底を呈し、「く」の字に張るソロバン形の胴部を持つ。272～274は平底を呈し、胴部は丸みを持ち、273は胴部中位で直線的に立上がる。275は胴部は丸みを持ち、肩が張らず、頸部から口縁部にかけて緩やかに外反する。276は僅かに上げ底を呈し、胴部は丸みを持つ。肩部に十文字の線刻を施す。277は二重口縁壺の口縁部で内傾気味に立上がり、波状文を施す。278～280は高杯で、278は杯部が直線的に伸び、口縁部は垂直よりやや外側に立上がり、口唇部は外側に肥厚する。279・280は脚部が緩やかに外反し、279は端部が僅かに立上がる。280は内外面にミガキを施し、3個の穿孔を持つ。281・282は器台で、281は体部が短く、281・282共に口唇部には2本、281は体部に8本、282は体部に19本の沈線を巡らす。282は2段に4個ずつの透しを持つ。

283・284はⅢ層黒褐色土出土の土器である。283は甕で、胴部中位よりやや上で張りを持ち、口縁部は「く」の字に外反した後僅かに内湾する。胴部内面にハケを施す。284は壺で平底を呈し、丸みのある胴部をもつ。口縁部は朝顔形に広がり、口唇部は肥厚する。肩部に3本の突帯を巡らし、胴部上位に2個の円形浮文を持つ。

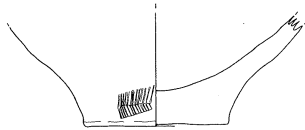
285～291はⅣ層オリーブ土出土の土器である。285～289は壺で、頸部が緩やかに外反し、口縁部で水平に開く。286は口縁部が朝顔形に開く。288は胴部は「く」の字に張るが、径の広い頸部を持つ。289は平底を呈し、胴部中位よりやや上で「く」の字に張る。外面にミガキを施し、胴部上位に平行沈線文とその上下に重弧文を施し、肩部に平行沈線文とその下に重弧文を施す。いわゆる「免田系」の壺である。290は高杯で脚部は緩やかに外反し、杯部は斜め方向に直線的に伸び1段の稜を持って、口縁部はやや外側に開き、口唇部で肥厚する。口縁部内外面に朱を施す。291は鉢もしくは壺で平底を呈し、内湾しながら立上がる。

環濠7出土の土器（第63・64図）

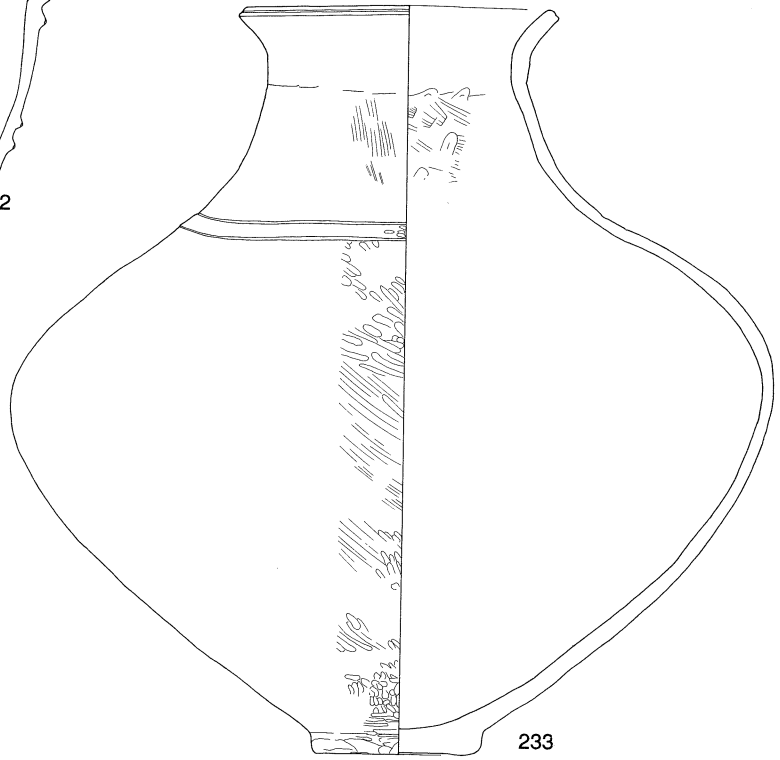
292～295・298・301～305・310は環濠7下層出土、296・297・299・300・306は環濠8と合流した位置出土、307～309は環濠7上層出土の土器である。292～295は甕で、292は上げ底気味の底部を呈し、293・294は上げ底を呈する。292は口唇部がT字気味に肥厚し、2本の沈線を巡らす。293～295は口縁部が「く」の字に外反し、294は口唇部が僅かに肥厚する。最大径はいずれも胴部上位にある。296は甕もしくは壺の底部で平底を呈する。297～304は壺で、297は強いカーブを描いて外反し、口唇部に沈線を施す。298は明瞭な肩部を持ち、頸部から緩やかに外反する。300は口縁部がカーブを描いて外反し、口唇部に波状文を施す。301は平底を呈し、丸みのある胴部を持ち、頸部は僅かに外を向いて直線的に立上がり、口縁部で外反する。肩部に線刻を施す。302・303は丸みのある胴部を持ち、302は胴部上位で直線的に立上がる。304は「く」の字気味に張った胴部を持ち、外面はミガキを施す。305は器台で外面にミガキを施し、体部中位に2本の沈線を巡らし、上中下3段に4個ずつ透しを持つ。306・307は椀で、306は平底を呈し、307は僅かに上げ底を呈し、内外面にミガキを施す。308・309は土師器の小型丸底壺で扁球形の胴部を持ち、口縁部は直線的に立上がり、308に比べ309の口縁部が外傾する。310は高杯で、下部で僅かに屈曲し、直線的に立上がる。



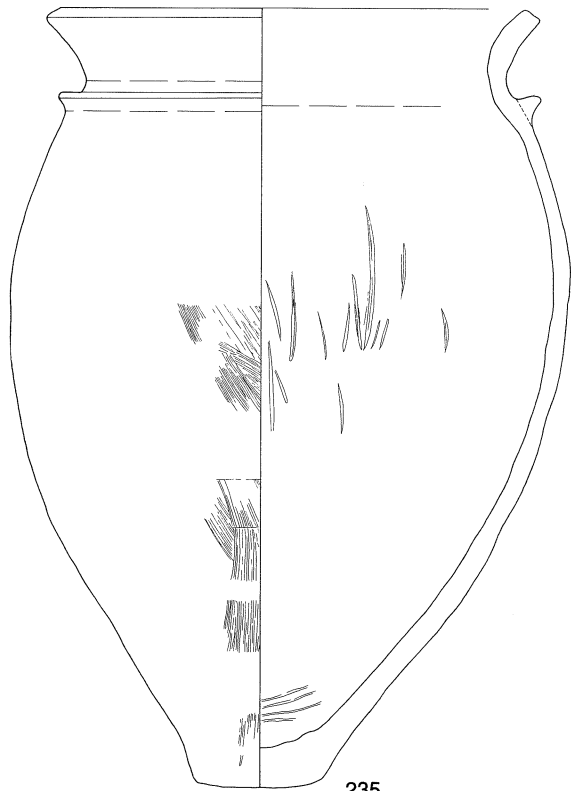
232



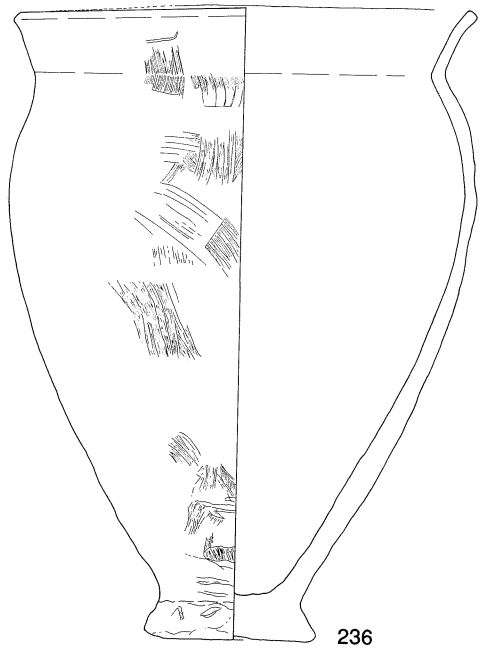
234



233



235

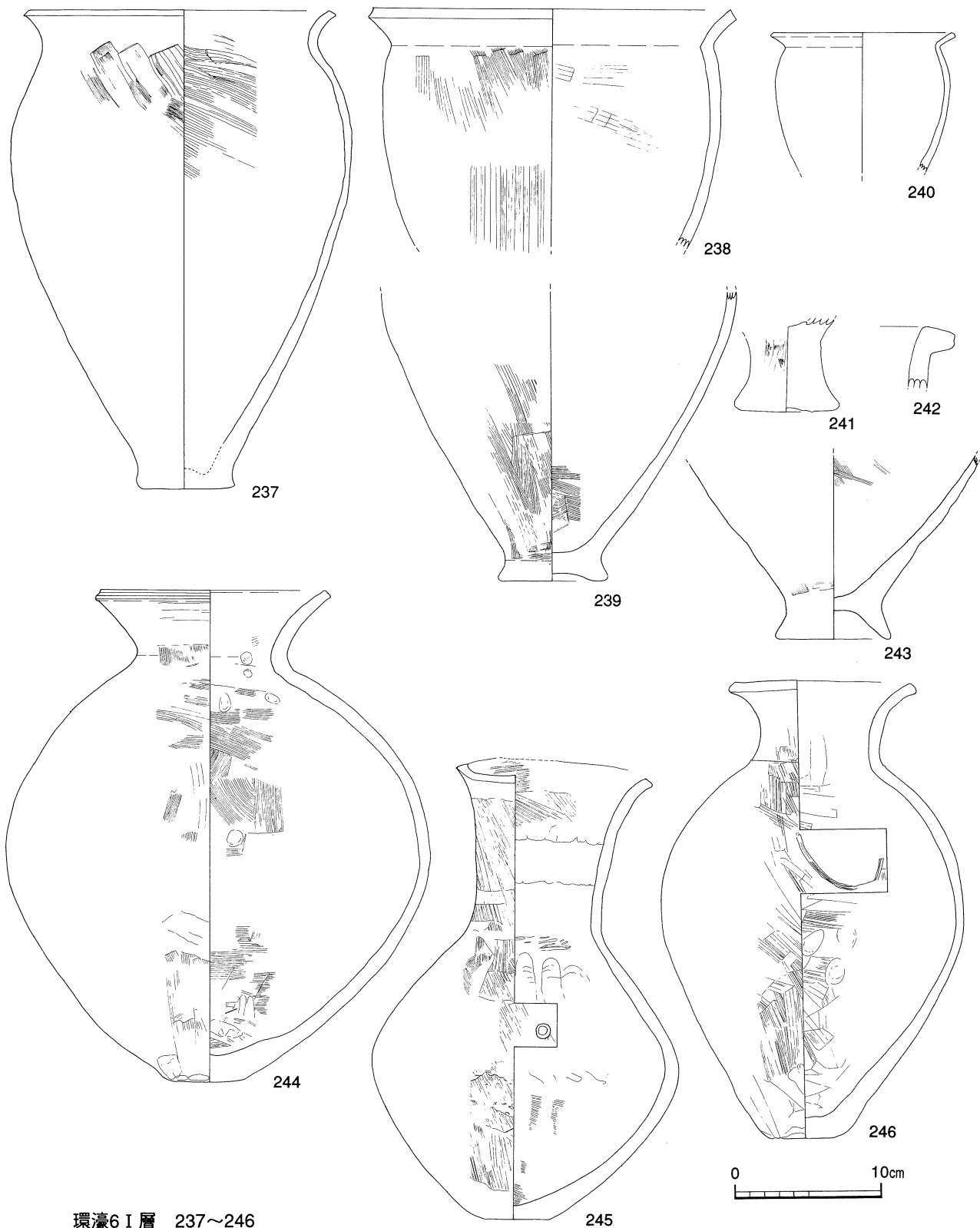


236



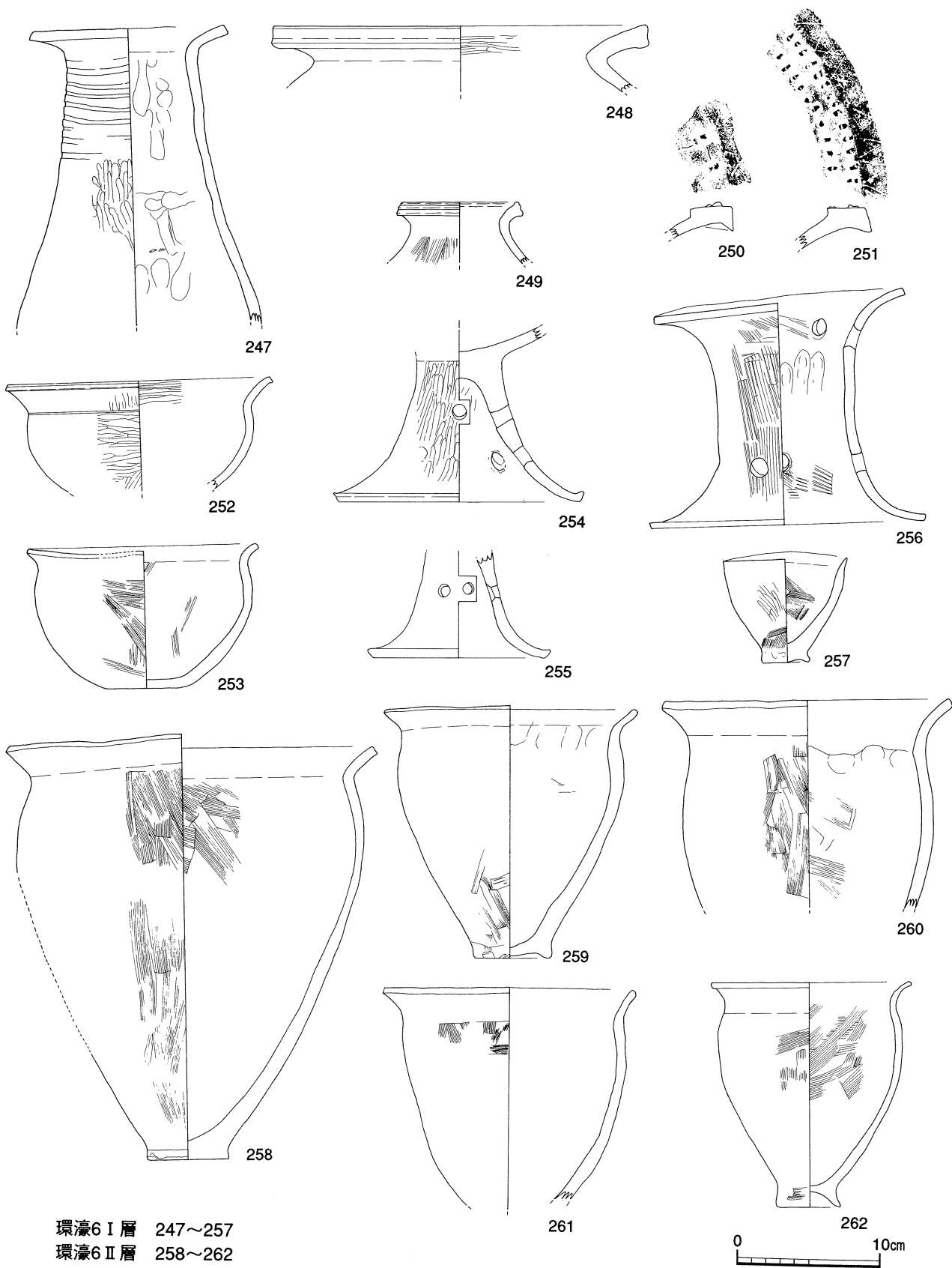
環濠5 232~234
環濠6 I層 235、236

第58図 環濠出土土器実測図(3)



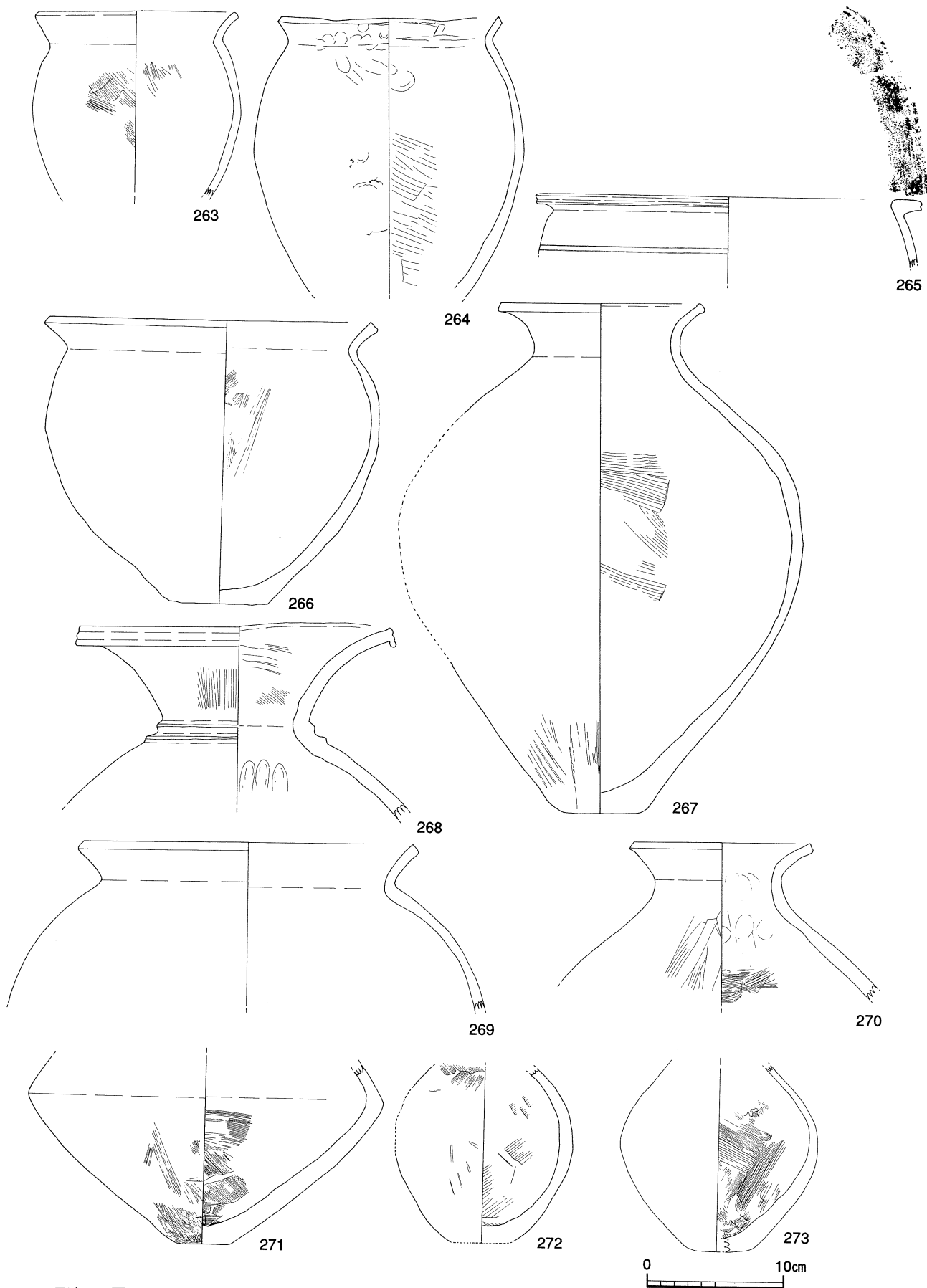
環濠I層 237~246

第59圖 環濠出土土器実測圖(4)



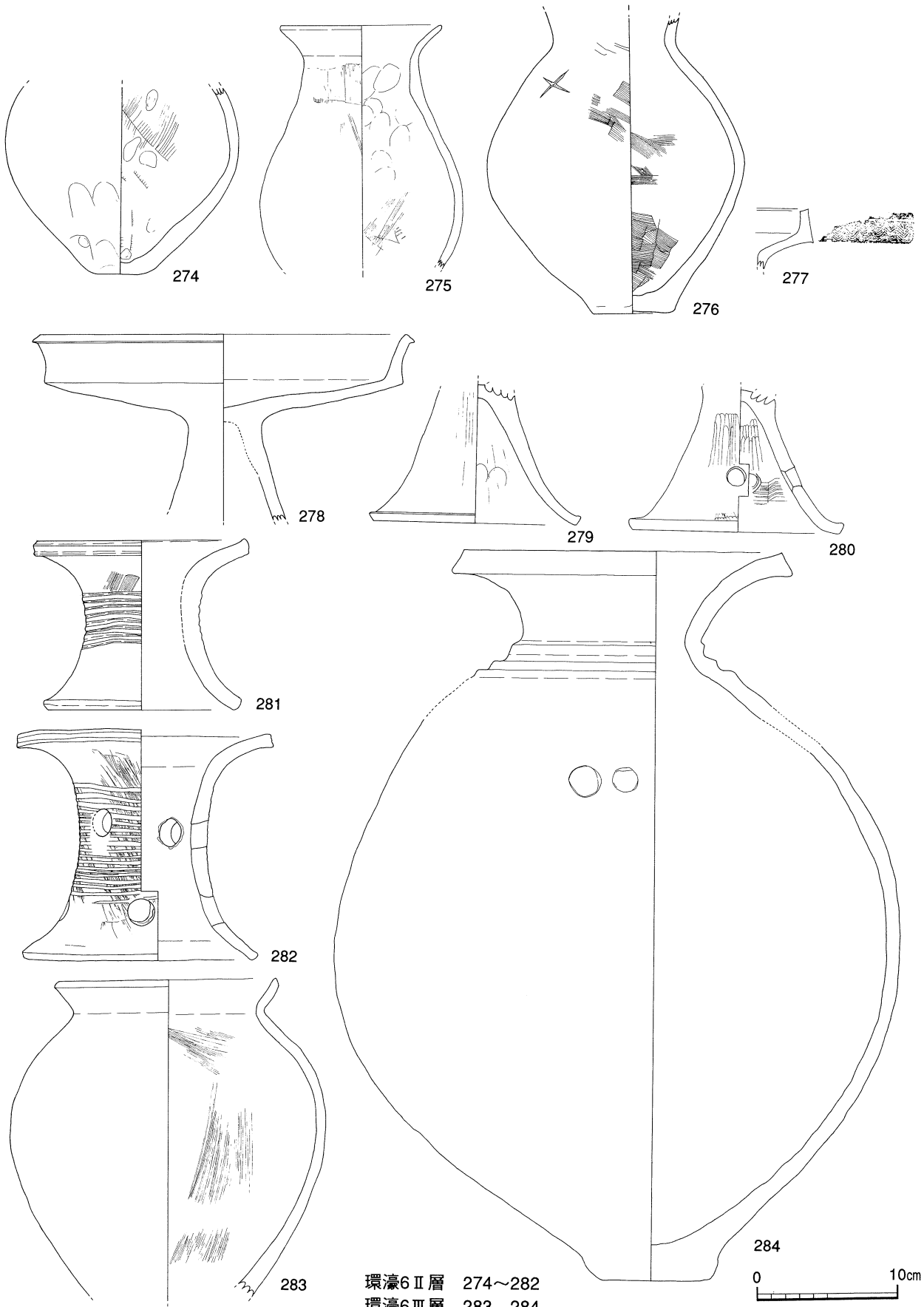
環濠6 I 層 247~257
 環濠6 II 層 258~262

第 60 図 環濠出土土器実測図(5)



環濠6Ⅱ層 263~273

第61圖 環濠出土土器実測図(6)



環濠Ⅱ層 274~282
 環濠Ⅲ層 283、284

第 62 図 環濠出土土器実測図(7)

環濠 8 出土の土器 (第 64・65 図)

西側部分の底面から 40 cm 浮いた位置で出土した。311・312 は甕で、ドーナツ状の上げ底を呈する。外面全体にタタキが見られる。畿内第 V 様式の甕である。313・314 は壺で、313 は平底を呈し、胴部中位よりやや上で「く」の字に張る。外面にミガキを施し、胴部上位に平行沈線文とその上下に重弧文を施し、肩部に平行沈線文とその下に重弧文を施す。いわゆる「免田系」の壺である。314 は頸部に薄手で幅広の刻目突帯を巡らす。

環濠 9 出土の土器 (第 65～69 図)

315～321 は環濠 9 a 出土の土器。315・316 は甕で、共に口縁部が「く」の字に外反し、315 は口縁部下に三角断面の突帯を巡らす。胴部が最大径となる。316 は口縁部下にヘラ様工具による刺突を施す。口縁部径と胴部径がほぼ同じになる。「瀬戸内系」か。317・318 は壺で、317 は長胴の壺で口縁部は短く外反する。胴部上位に縦方向に突帯を持つ。319 は高杯で、脚部が緩やかに外反する。320 は鉢で平底を呈し、口縁部は「く」の字気味に外反する。外面にミガキを施す。321 は椀で、平底を呈し、僅かに内湾しながら立上がる。

322～325 は環濠 9 b 出土の土器。322 は甕で、上げ底気味の平底を呈し、口縁部は「く」の字気味に外反する。最大径は口縁部にある。323～325 は壺で、323 は胴部がソロバン形を呈し、外面にミガキを施し、肩部に平行沈線文、重弧文を施す。いわゆる「免田系」の壺である。324・325 は長頸壺の頸部から上で共に直線的に立上がり口縁部で僅かに外反する。

326～328 は環濠 9 c 出土の土器。326～328 は壺で、326・327 はカーブを描いて外反し、328 は朝顔形に開く。327 は胴部上位に豆粒状の刺突を施す。

329～333 は環濠 9 d 出土の土器。329・330 は甕で、329 は胴部が直線的に立上がり、口縁部で「く」の字に外反する。331 は甕もしくは壺の底部である。332 は高杯で下部が直線的に伸び、稜を持って口縁部は緩やかに外反する。333 は壺で、平底を呈し、丸みのある胴部を持つ。

334～337 は環濠 9 e 出土の土器。334 は甕で、口縁部が「く」の字に外反し、口縁部下でヘラ様工具による刺突を巡らす。胴部径と口縁部径がほぼ同じになる。335 は甕もしくは壺の底部で、平底を呈する。336・337 は壺で 336 は平底を呈し、胴部中位でかなり張りを持つ。口縁部は強く、短く外反する。

338 は環濠 9 f 出土の土器。338 は甕で、上げ底を呈し、口縁部は「く」の字に外反し、最大径は胴部中位にある。

339・340 は環濠 9 g 出土の土器。339・340 は壺で、340 は平底を呈し、丸みのある胴部を持つ。口縁部は緩やかに外反し、口唇部が肥厚する。肩部に U 字の線刻を施す。

341～362 は環濠 9 h 出土の土器。341～346 は甕で、341・342 は上げ底を呈し、343 は尖底気味の平底、346 は平底を呈する。341～343・345 は口縁部が「く」の字に外反する。344 は口縁部が緩やかに外反し、346 は短く外反する。342・346 は胴部径が最大径となる。341・343～345 は口縁部径と胴部径がほぼ同じになる。347～355 は壺で、347 は長胴の壺で平底を呈する。348 は胴部中位に張りを持ち、口縁部はカーブを描いて外反する。349 は

丸底気味の底部を呈し、丸みのある胴部を持つ。口縁部は強く外反し、口唇部で丸く肥厚する。350は平底を呈し、351は長頸壺で平底を呈し、胴部中位で張る。351は直行気味に立上がり、口縁部は「く」の字に外反し、口唇部が肥厚し、僅かに下に垂れる。352は上げ底気味になり、丸く張った胴部を持つ。口縁部は短く、強く外反し、頸部に穿孔を持つ。内外面にミガキを施す。354は器壁が分厚く、口縁部が直行気味に立上がる。355はソロバン形の胴部を持ち、肩部に平行沈線文、重弧文を施す。いわゆる「免田系」の壺である。356～358は高杯で、356は高杯の口縁部で直行気味に外反し、口唇部で肥厚する。内外面にミガキを施す。357は杯部が直線的に立上がり、脚部は緩やかに外反し端部が僅かに立上がる。杯部内外面、脚部外面にミガキを施す。358は脚部が緩やかに外反し、端部で僅かに立上がる。外面にミガキを施し、脚部下位に6個の透しを持つ。359は鉢で脚台状の底部を呈する。胴部は内湾気味に立上がる。360・361は椀で、平底を呈し、内湾しながら立上がる。362は蓋で、つまみを持たず、直線的に開き、端部で僅かにつまみ上げている。

溝状遺構1出土の土器（第70図）

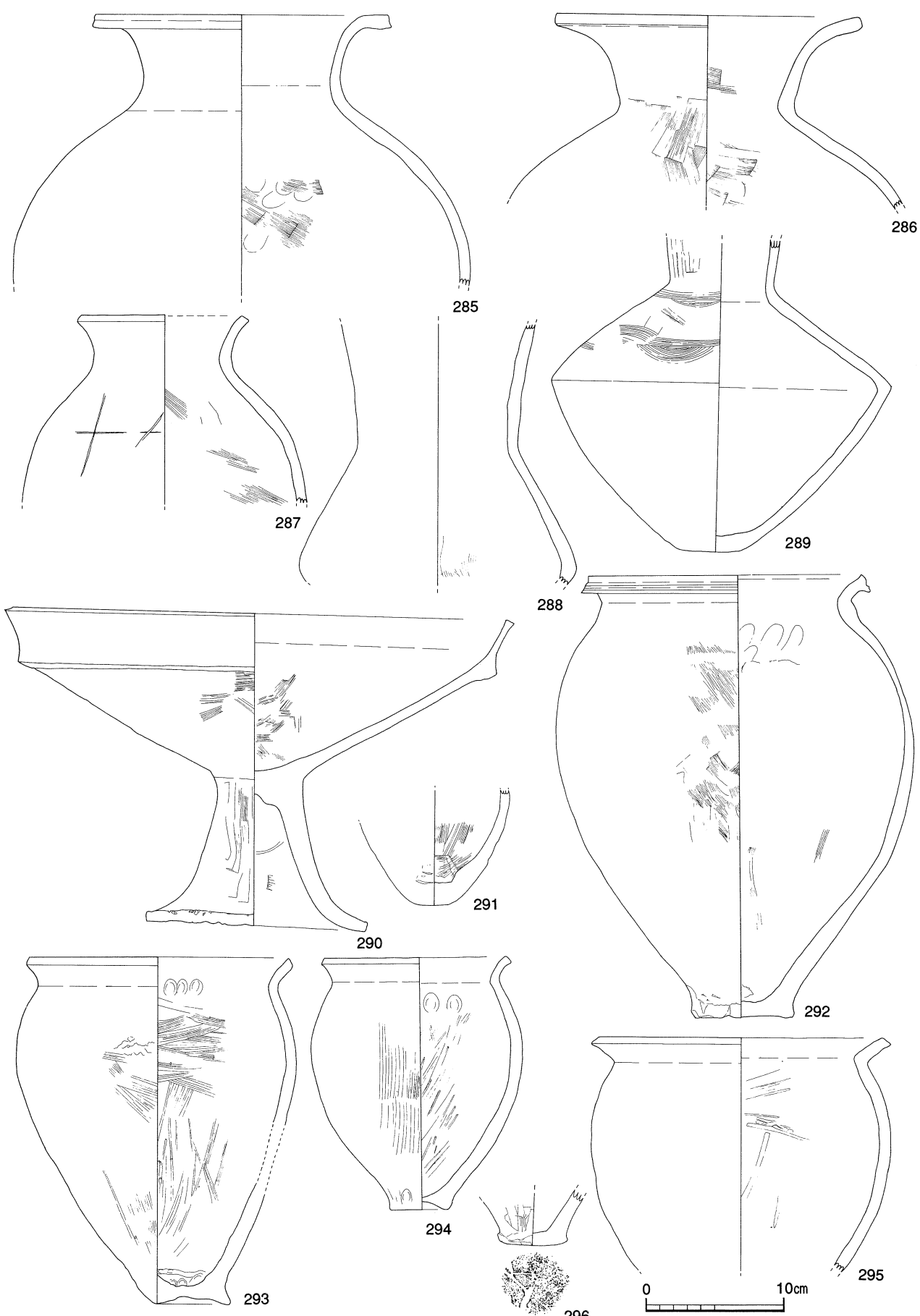
底面から10cm浮いた位置で出土した。363・364は甕、363は口縁部がカーブを描いて外反し、口縁部下に三角断面の突帯を巡らす。最大径は胴部中位になる。上げ底を呈し、胴部中位よりやや上で胴部最大径となる。365は長頸壺で、頸部が直行し、口縁部が「く」の字に外反し、口唇部が肥厚する。頸部に10本の沈線を持つ。366は器台で、体部が直行し、口縁部、裾部で外反し、口唇部で肥厚する。外面にミガキを施す。367はミニチュアの甕で、平底を呈し、口縁部は「く」の字に外反し、外面にミガキを施す。368はミニチュアの壺もしくは甕で、平底を呈し、丸く張った胴部を持つ。

土器溜り出土の土器（第71図）

竪穴状遺構22の埋土中位から出土した。369は甕の底部で、脚台状の底部を持つ。作りが粗く、指押さえの痕が多く残る。370は壺の底部で、僅かに上げ底を呈し、外面にミガキを施す。371～373は高杯で、371は杯部で下部から直線的に立上がり、1段の稜を持って口縁部が外反し、口唇部に沈線を巡らす。内外面にミガキを施す。372・373は脚部で372は緩やかに外反する。

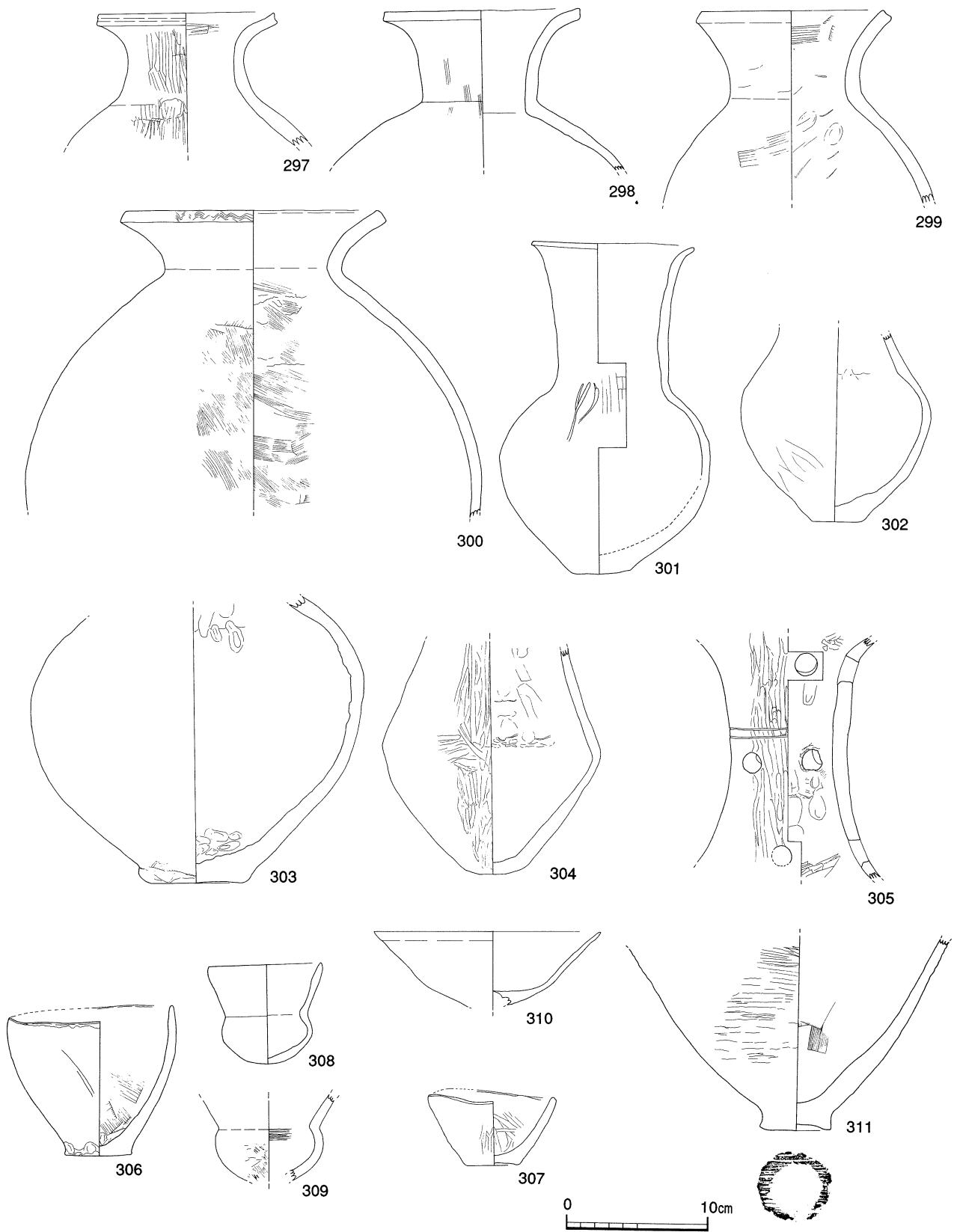
2段目テラス出土の土器（第72図）

2段目テラスより出土の一括の土器である。374は壺の底部で丸底を呈し、内外面に丁寧なナデを施す。375～377は高杯で、375は脚部が直線的に外反し、裾部が屈曲して内湾気味に開く。脚部中位に6個の透しを持つ。376は土師器で下部が直線的に立上がり、1段の稜を持ってさらに直線的に伸び、口唇部で僅かに外反する。内面に放射線状に暗文を施している。377は杯部で下部が直線的に伸び、口縁部が直行する。378は椀で、上げ底を呈し、内湾しながら立上がる。



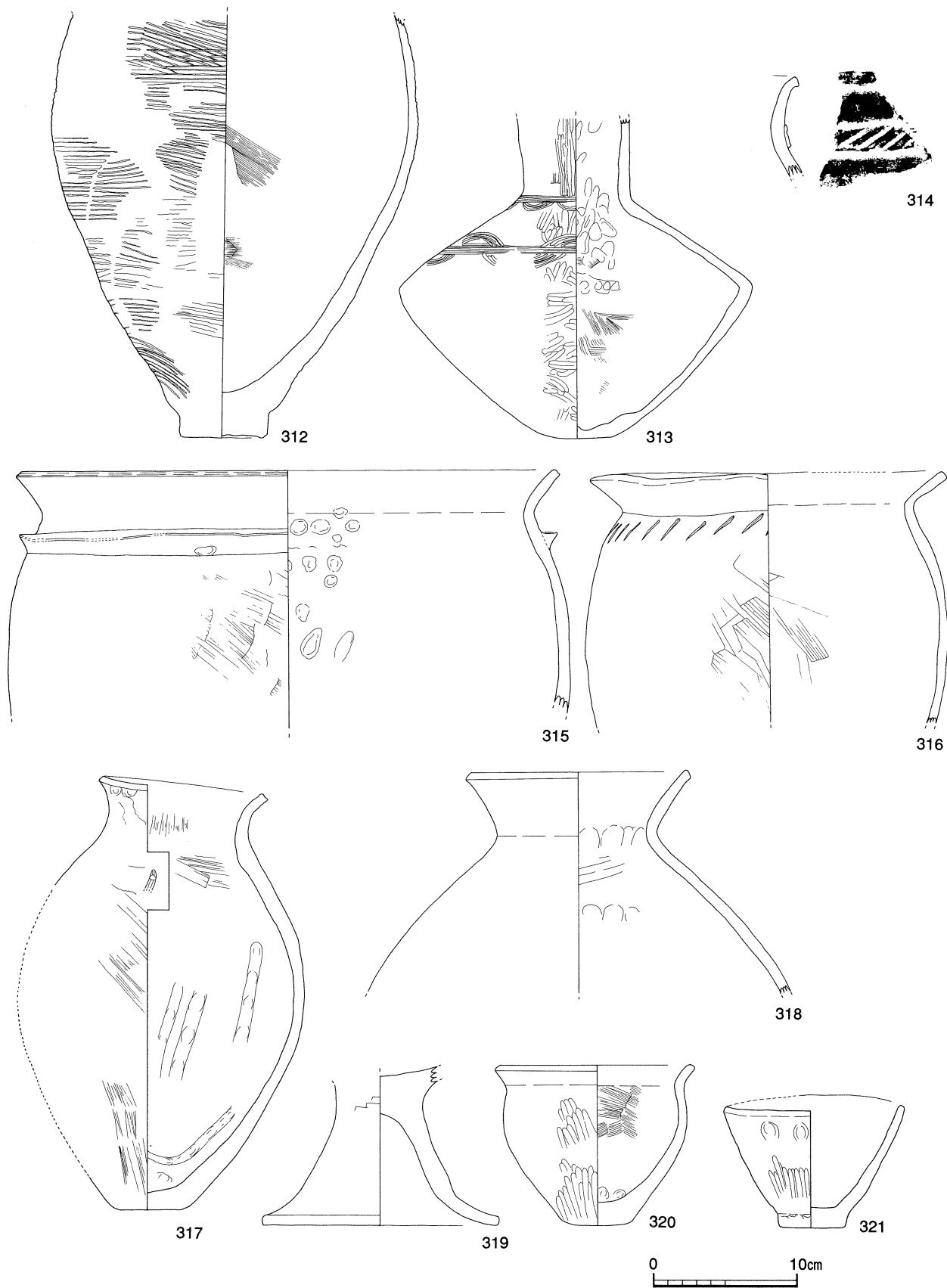
環濠6IV層 285~291
 環濠7 292~296

第 63 図 環濠出土土器実測図(8)



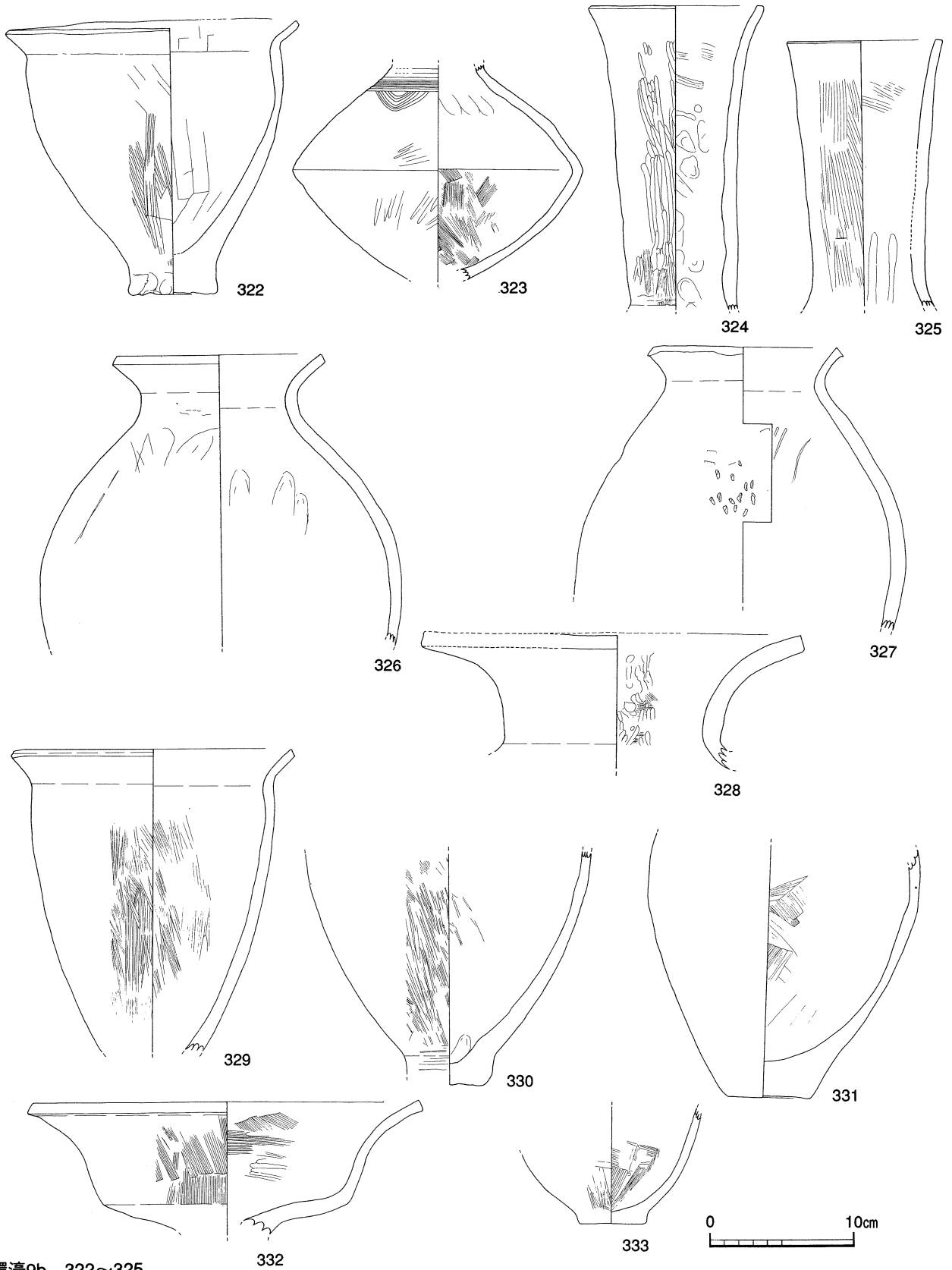
環濠7 297~310
 環濠8 311

第64圖 環濠出土土器実測図(9)



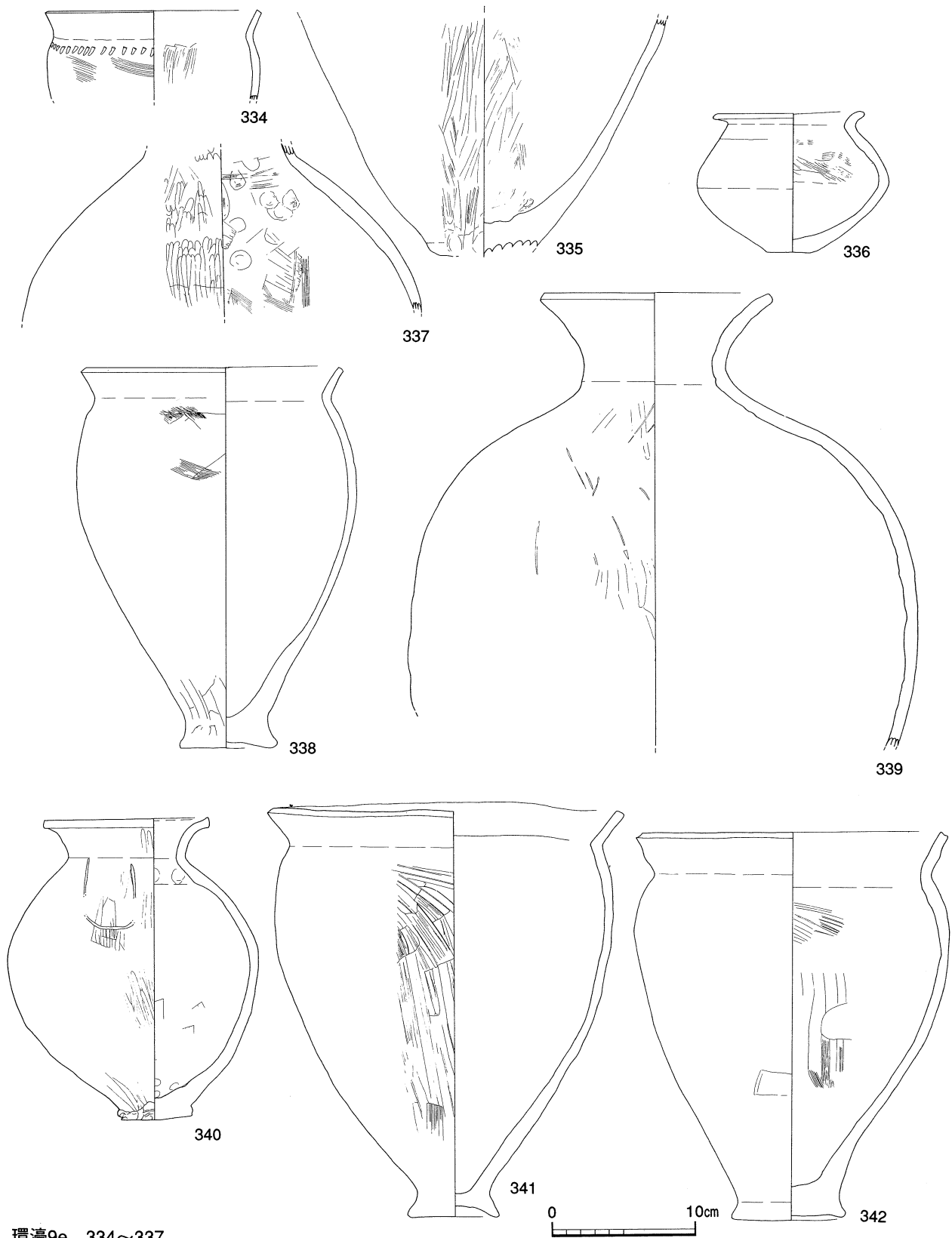
環濠8 312~314
 環濠9a 315~321

第65圖 環濠出土土器実測図(10)



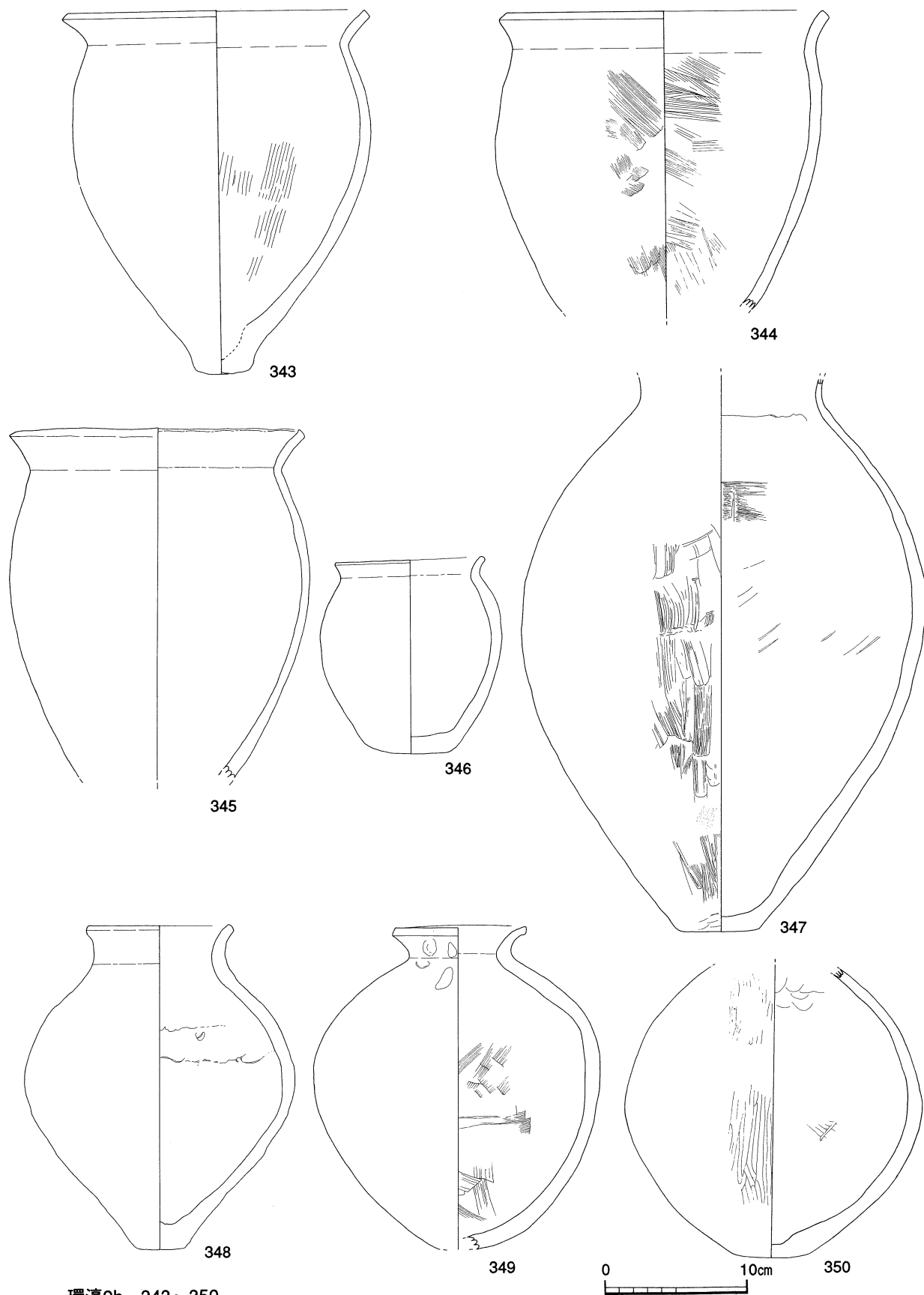
環濠9b 322~325
 環濠9c 326~328
 環濠9d 329~333

第66図 環濠出土土器実測図(11)



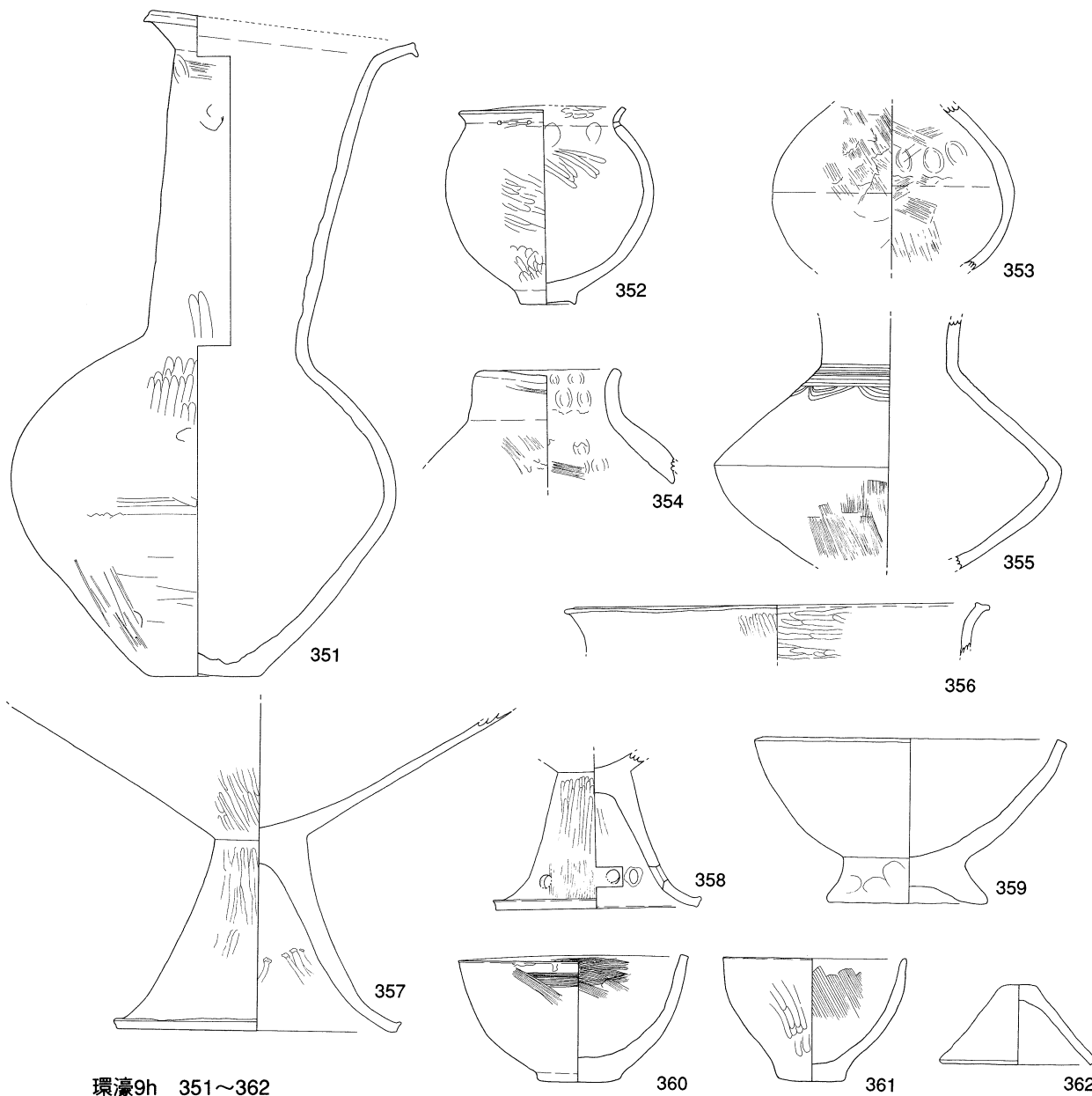
- 環濠9e 334~337
- 環濠9f 338
- 環濠9g 339、340
- 環濠9h 341、342

第 67 図 環濠出土土器実測図(12)



環濠9h 343~350

第 68 图 環濠出土土器実測図(13)



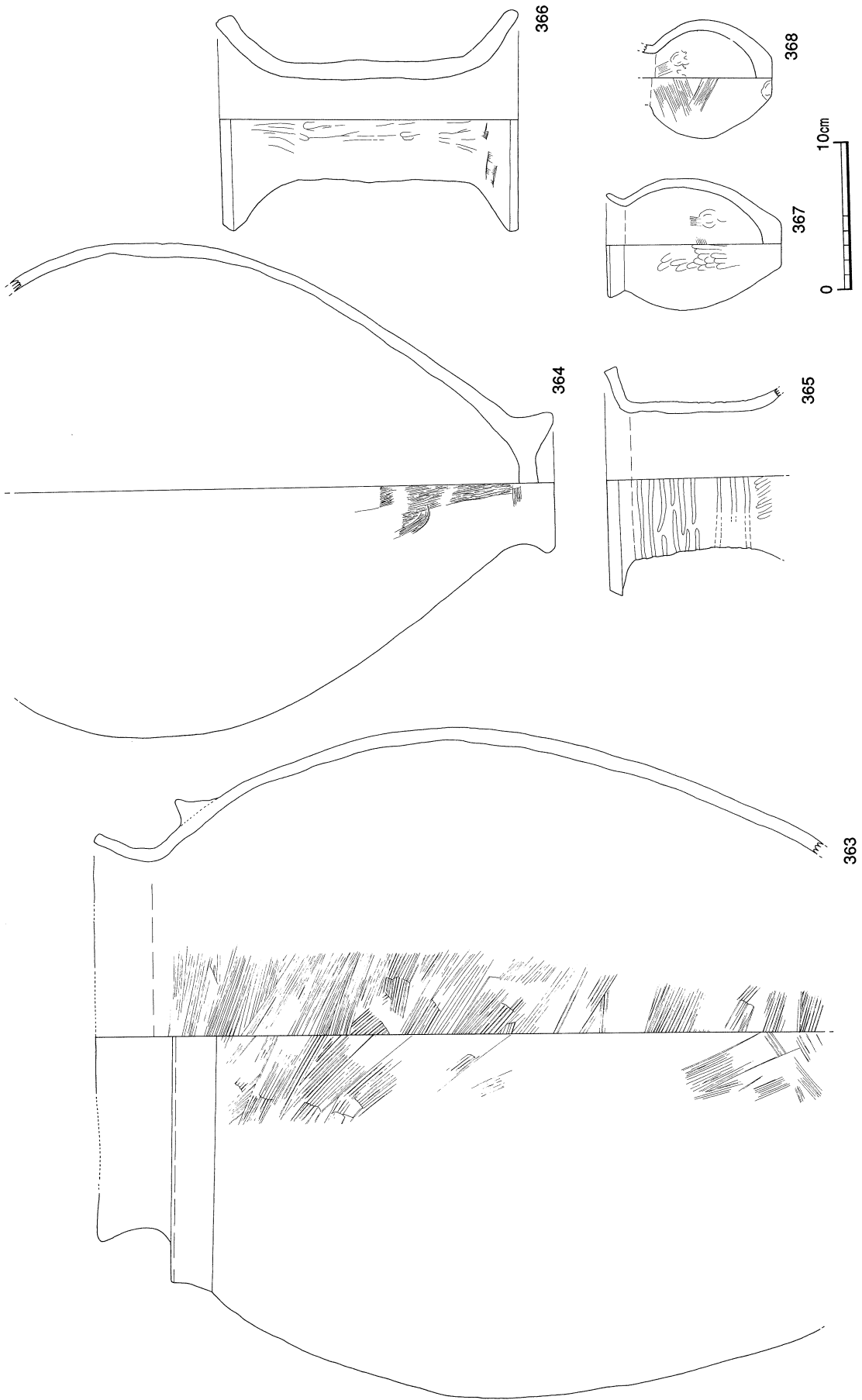
環濠9h 351~362

第69図 環濠出土土器実測図(14)

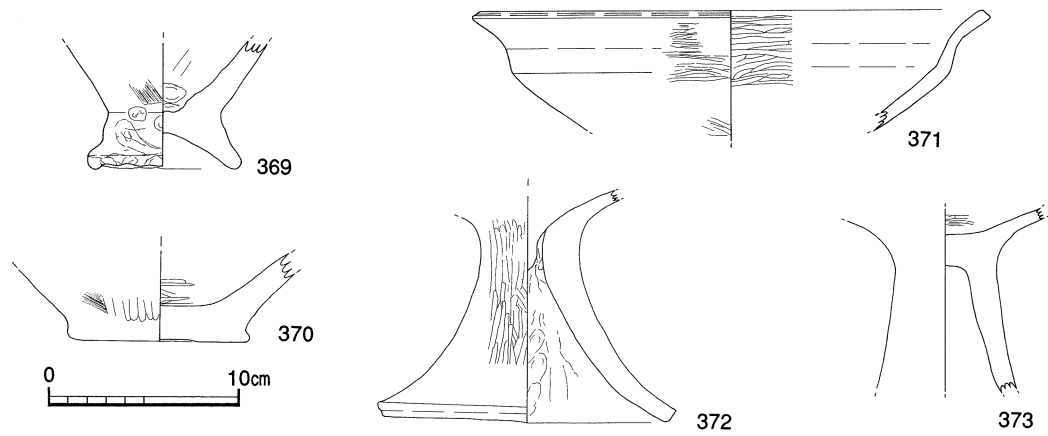


環濠6出土の土器 (第72図)

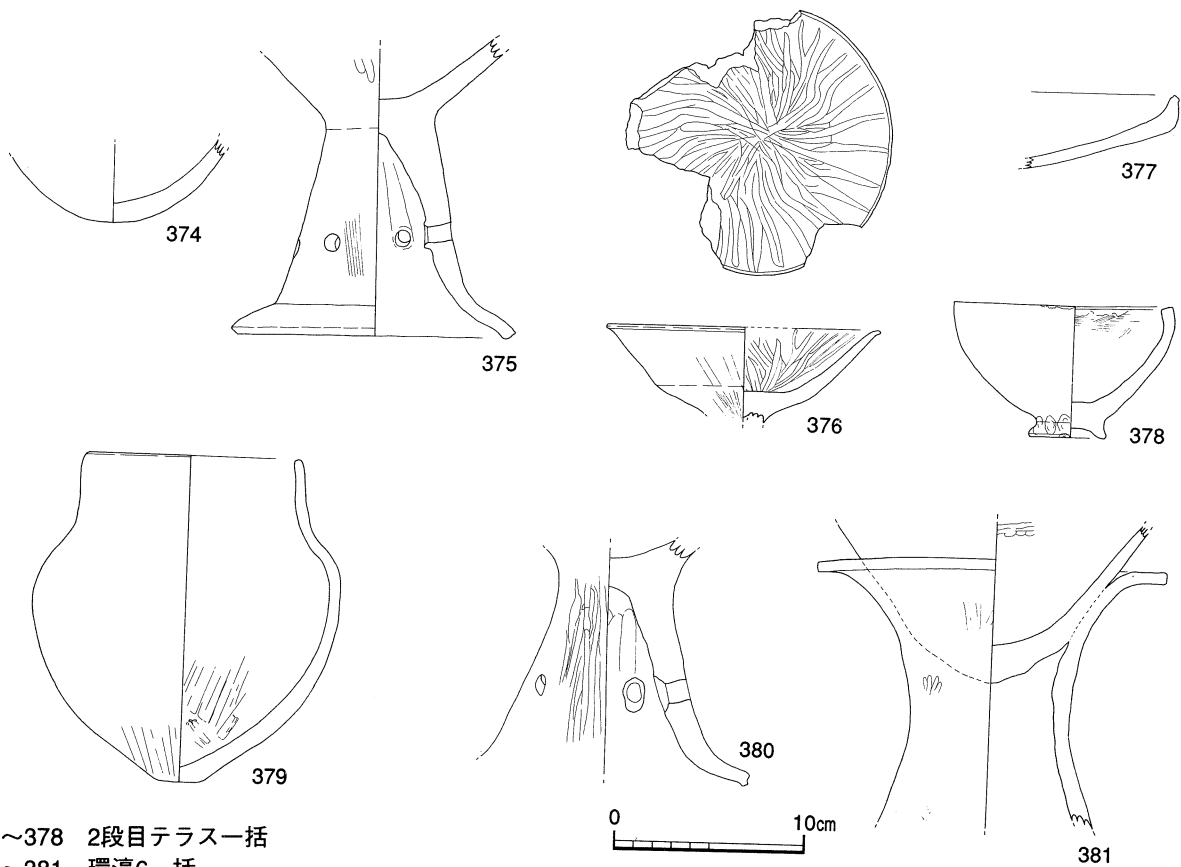
379は壺で、底部径が小さく、胴部上位で張りを持つ、口縁部は僅かに内傾する。380は高杯の脚部で、緩やかに外反し、裾部で外反が強くなり、端部で沈線を施す。脚部中位に5個の透しを持つ。381は複合土器で器台に丸底の壺を乗せたような状態になっている。器台口縁部は水平に外反する。壺は胴部中位以上、器台は体部下位以下が欠損しており、全容は解らない。風化が激しく、壺内面、器台外面に僅かにミガキが残る。



第70図 溝状遺構1出土器実測図



第71図 土器溜り土器実測図



374~378 2段目テラス一括
379~381 環濠6一括

第72図 一括土器

・石器

出土遺構については後出する「出土石器計測表」を参考にされたい。

磨製石鏃 (第73図)

382～390 磨製石鏃で、すべて両面に細かな擦痕を残す。382～384 は大型の磨製石鏃で、382・383 は基部のえぐりのカーブが「く」の字を呈し、384 は全体の形態が柳葉形をし、基部のカーブは緩やかである。385・389・390 は基部のえぐりのカーブが「く」の字を呈し、386 はほとんどみられず全体の形態が二等辺三角形を呈し、387 は全くみられず、基部が直線的で全体の形態が柳葉形を呈する。388 は下部が欠損しており、389 は上部が欠損している。390 も上部が欠損しており、基部の位置が器長の中心線よりもやや左にずれており他の石器からの転用が考えられる。

石庖丁 (第73・74図)

391～394 は穿孔を有し、395～398 は両端に抉入を有する石庖丁である。穿孔を有する石庖丁は両面ともに丹念に磨かれており、391 は半月形を呈するが、約3分の1が残存するのみで、393 は2孔を有し、両端が欠損している。394 はほぼ完形の状態で2孔を有する。両端に抉入を有する石庖丁は、穿孔を有する石庖丁に比べ磨きが粗雑で所々に自然面が残っており、395～397 は全体が長方形の形態を有しており、395・396 はえぐりのカーブが緩やかで、397 はえぐりが「く」の字を呈する。398 はえぐりの位置が他のものに比べやや高い位置にあり、また刃部が上下にみられることから他の石器からの転用が考えられる。

石錘 (第74図)

400～403 は打製石錘で、400 は長軸方向に打欠を有し、401～403 は短軸方向に打欠を有する。404・405 は切目石錘で長軸方向に切目を有する。

石斧 (第74・75図)

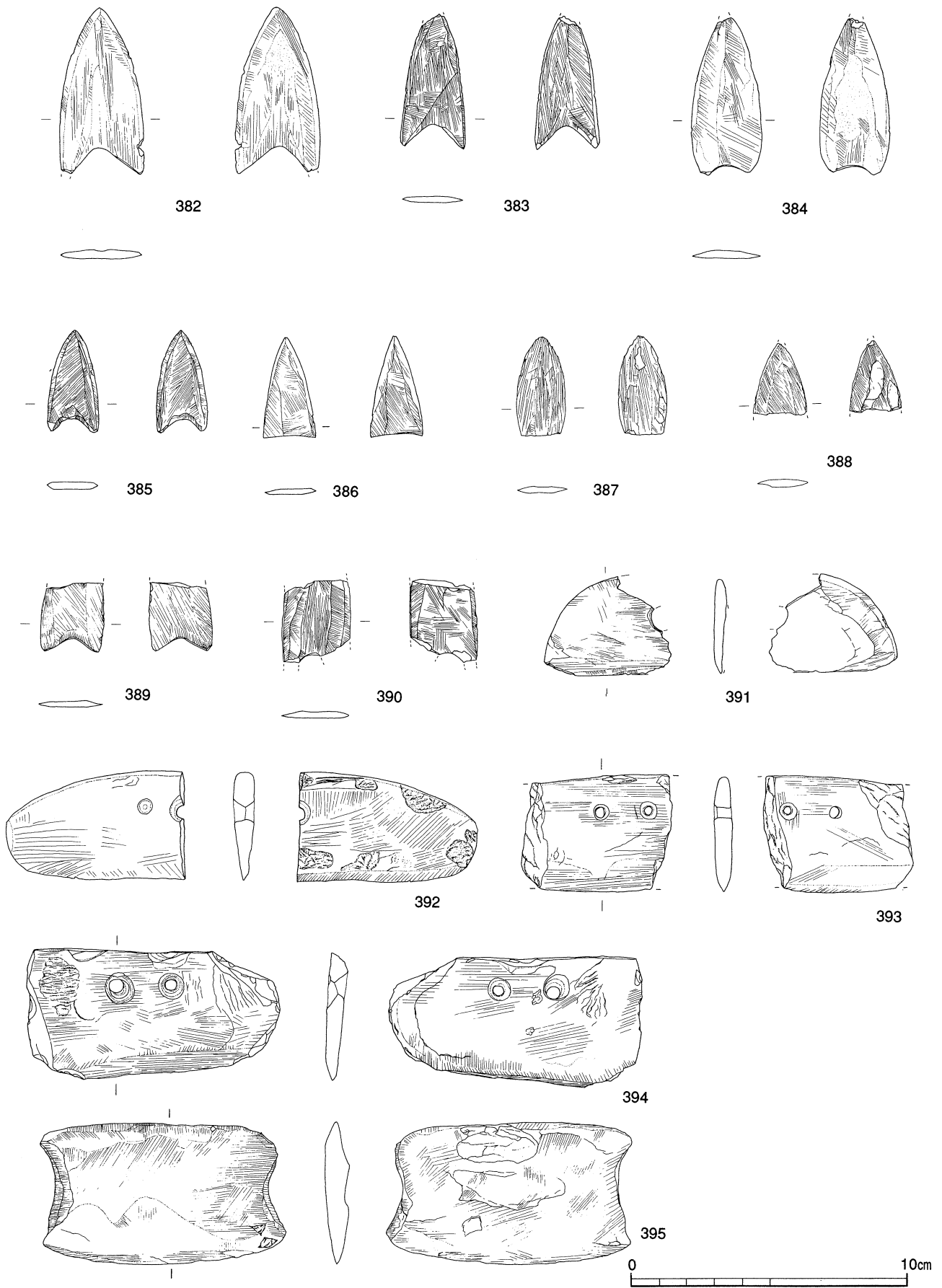
399 は小型の扁平片刃石斧で、両面ともに磨きが施され、表の面に2稜がミガキによって作り出されている。406 は蛤刃形石斧で側面の片面部分は製作過程に付いたものか、他の石器への転用、もしくはその逆の際に付いたものかは解らないが多くの敲打痕がみられ、その部分を除いては全体にミガキが施されている。

敲石 (第75図)

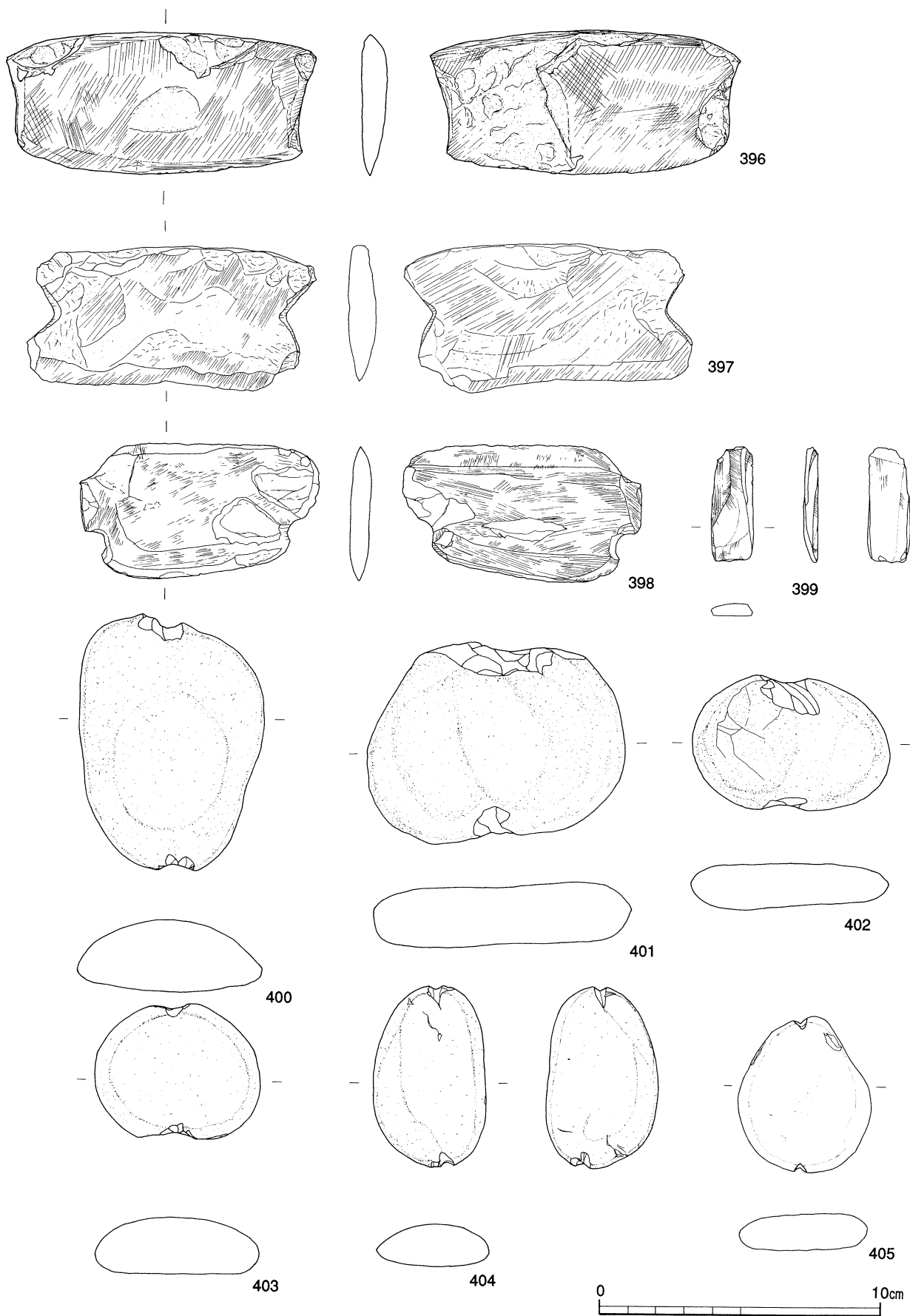
407 は敲石で両面中央部、側面全体に敲打痕が入り、それ以外はミガキが入っており、磨石からの転用だと考えられる。

砥石 (第75図)

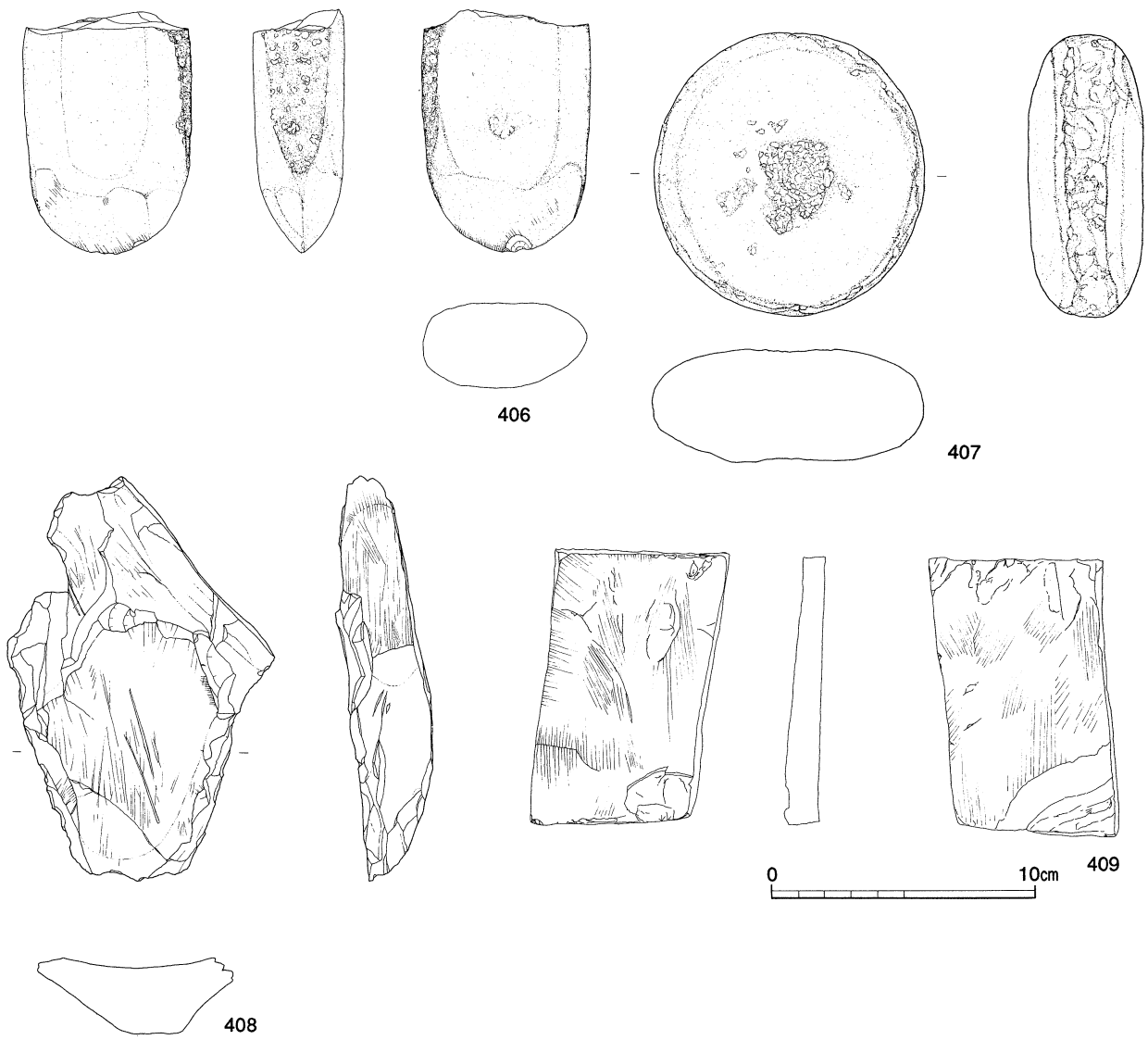
砥石は2点出土しており、408 は粗雑に打ちかいた石材をそのまま使用しており、表の面の約3分の2と右側面上部斜面を主に研ぎ面として使用しており、縦横、斜めに擦痕が入り、鋭利なものを研いだものと思われる深さ約1mmの溝状に入る擦痕もみられる。409 は厚みのない扁平な石材を使用し、全面に擦痕が入る。



第 73 图 出土石器实测图(1)



第 74 图 出土石器实测图(2)



第75図 出土石器実測図(3)

第3節 縄文時代の遺構と遺物

(1) 集石遺構

調査の結果、4基の集石遺構が検出された。いずれも、Ⅲ層暗褐色土での検出で弥生時代の遺構と検出面は変わらないが、遺構埋土と形態より縄文時代の集石遺構とした。

集石遺構1 (第76図)

約150×160cmの範囲で礫が集中しており、北側の傾斜する部分で検出されたため明瞭な掘込み面の確認はできなかった。10cm～20cmの円礫により構成され一部で角礫も見られる。半分程度が赤変している。

集石遺構2 (第77図)

約50×60cmの範囲で礫が集中しており、掘込み面は確認されず、一部を樹根により攪乱されている。5cm～10cmの円礫、角礫と15cm程の円礫により構成され、周囲にも拳大の礫が散乱しており、ほとんどが赤変しており一部の礫は黒変している。

集石遺構3 (第78図)

約60×70cmの範囲で礫が集中しており、46×36cm、深さ10cmのスリバチ型の掘込みを持つ。5cm～10cmの円礫、角礫により構成され、周囲に5cm程の角礫と15cm程の円礫が散乱しており、一部で赤変、黒変している。

集石遺構4 (第79図)

約140×140cmの範囲で礫が集中しており、掘込み面は確認されず、弥生時代の柱穴と竪穴状遺構19により切られている。多くは、5～15cmの円礫、角礫で構成され、3cm程の破碎礫もみられ、ほとんどが赤変しており一部の礫は黒変している。

(2) 遺物

比較的Ⅱ層黒褐色土以下の残存状況の良い調査区東側に3本のトレンチを設定した結果、トレンチ1より4点の縄文土器が出土した。また、弥生時代の遺構においても埋土中から縄文土器、石器が出土しており、一括資料として掲載する。

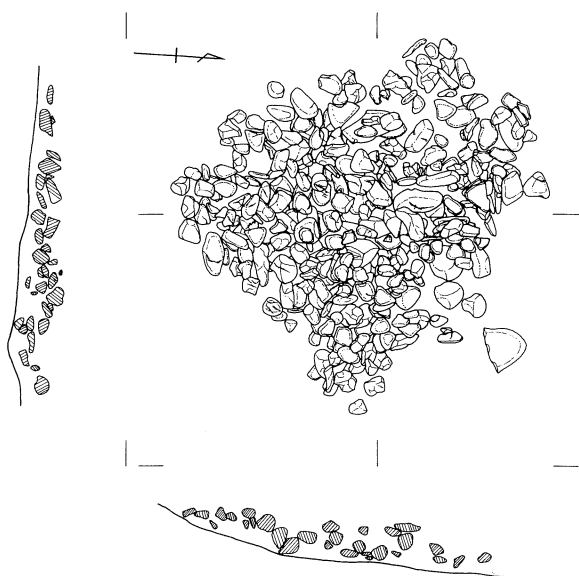
①縄文土器 (第80図)

410はトレンチ1出土の土器。深鉢形土器の口縁部の破片で、口縁部が内側にL字に内湾し、一部は口唇部がコップ状となる。口唇部、口縁部内外面に突帯を施し、口縁部外面には環状に3重の突帯を巡らす。「瀬戸内系」か。411は表面採集の土器。深鉢形土器の胴部上位で楕円押型文を横位に施す。412は住居15出土の土器。深鉢形土器の胴部下位の破片で山形押型文を横位に施す。413は環濠2の埋土出土の土器。ヘラ様工具による沈線を縦位、斜位に施す。「桑ノ丸系」か。414は土坑16埋土出土の土器。平椀式土器の胴部の破片で縄文を縦位に施す。415は環濠5埋土出土の土器。塞ノ神式土器の胴部の破片で幅狭な捺糸文帯を縦位に施す。416は住居3埋土出土の土器である。市来式土器の口縁部破片で口縁端部に貝殻文、その下位に爪形文を施す。417は土坑19出土の土器。波状口縁を呈し、口唇部が肥厚し、端部には刻みを、口

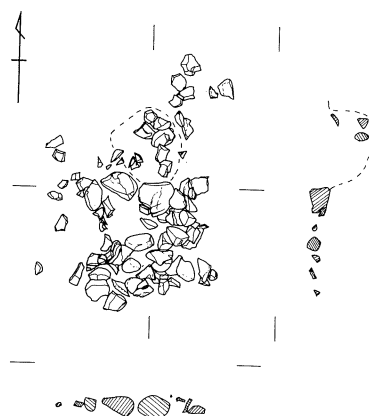
縁部外面に2本の平行した太めの沈線とU字に曲がる沈線を、その間と下に連点文を施す。418は住居10出土の土器。波状口縁を呈し、内面に条痕を施し、外面には口唇部に縦位に短い沈線が、その下に波状に沈線を施す。「阿高系」か。

②石器 (第81図)

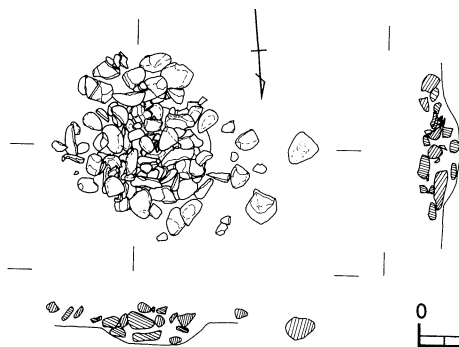
419、420は横型の石匙である。419は表面採集で、両面加工を施しており、刃部に対しつまみ部が大きく、刃部の欠損部分から判断するとつまみ部の位置が刃部の中央部よりやや右寄りに付けられている。420は環濠8出土で、一側面のみ加工が施されており、2回の打撃のみで刃部がつくられている。421は表面採集で本体がほぼ正三角形の形態を呈し、両面に加工が施され、1角は石鏃の先端部様に、2角は石匙のつまみ部様の加工が施されている。石鏃、石匙両方の性格を持ち、特定の名前を与えられないため、「異形石器」とする。



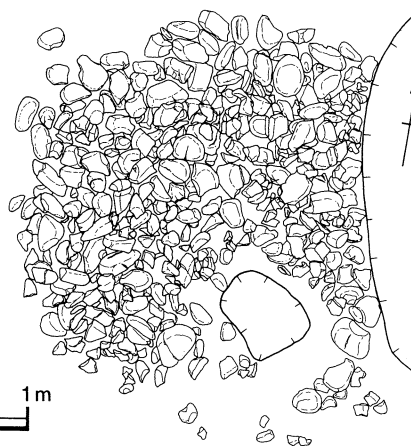
第76図 集石遺構1実測図



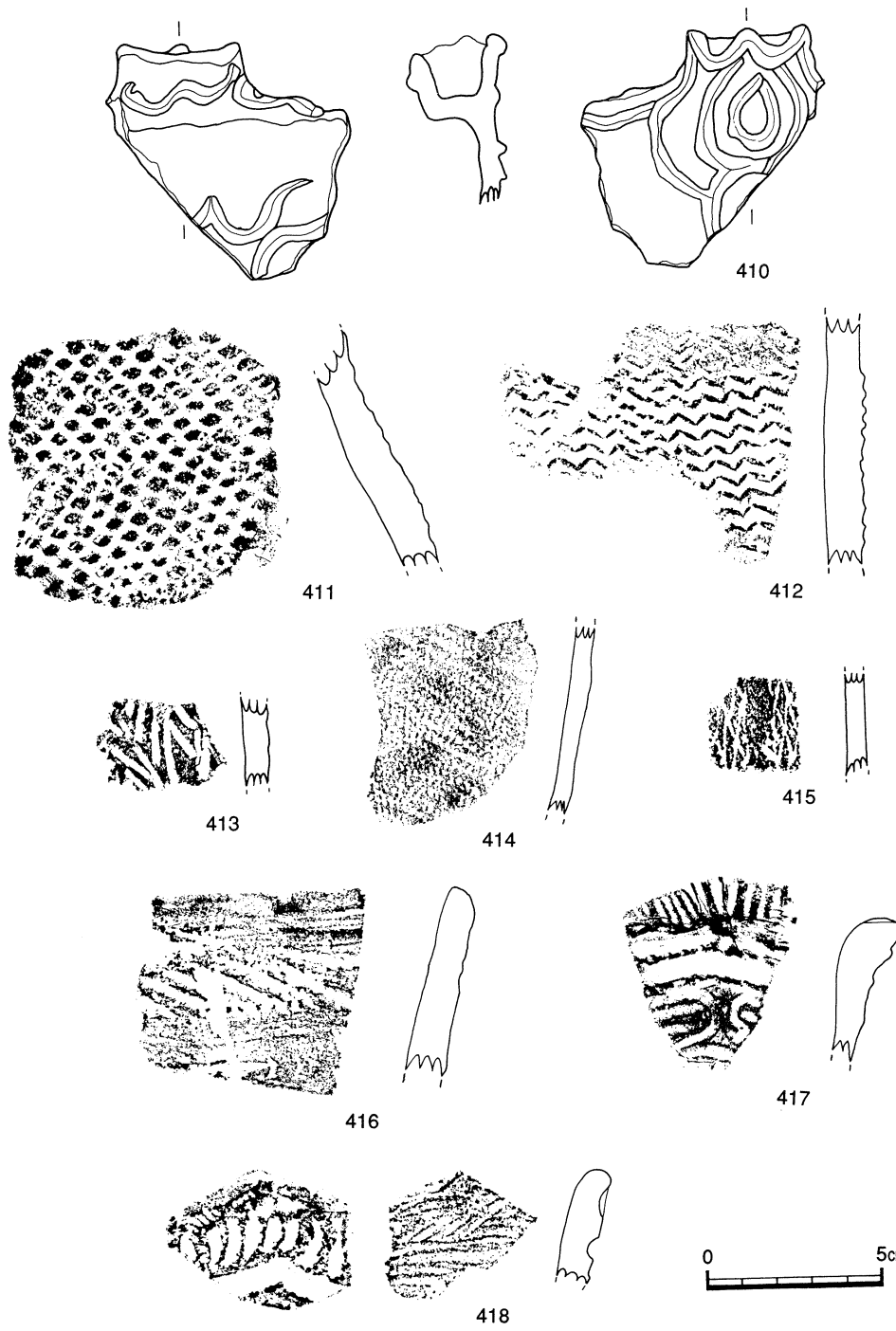
第77図 集石遺構2実測図



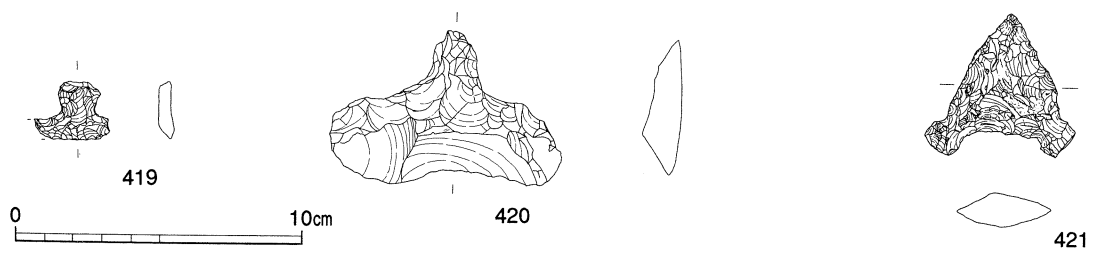
第78図 集石遺構3実測図



第79図 集石遺構4実測図



第 80 图 縄文土器実測図



第 81 图 出土石器実測図(4)

第4節 旧石器時代の遺物

旧石器時代の調査も縄文時代の調査の際設定したトレンチをそのまま尊重し、V層黄色土層上面（IV層褐色土）までの掘り下げを行った。結果は以下の通りである。

トレンチ1—当初東西2×10mのトレンチを設定した結果、III層茶褐色土において、旧石器時代の遺物と考えられる剥片等が、比較的、集中した状態で出土したため、集中した箇所を南5m西4m拡張した。その結果、剥片尖頭器が1点、ナイフ形石器3点、三稜尖頭器1点、使用痕剥片5点、剥片52点、碎片21点、石核1点の遺物が出土している。

トレンチ2—東西2×5mのトレンチを設定した結果、5cm程の円礫、角礫が5点出土したのみで、トレンチの拡張は行わなかった。

トレンチ3—東西2×5mのトレンチを設定した結果、5cm程の円礫が3点出土したのみで、トレンチの拡張は行わなかった。

旧石器時代の遺物も縄文時代同様、弥生時代の遺構の埋土に多く混入しており、また表面採集の土器も、一括資料として掲載する。

（出土遺物）

トレンチ1（第82図）

422は剥片尖頭器である。縦長剥片を素材とし、両側基部全体に加工を施しており、右側刃部、先端部が欠損している。

423～425はナイフ形石器である。それぞれ縦長剥片を素材とする。423は右側縁部に主要剥離面及び背面からブランディング加工を施し、左側縁部の刃部下位にもブランディング加工を施す二側縁加工のナイフ形石器である。424は右側縁部に主要剥離面からブランディング加工が施される一側縁加工のナイフ形石器で先端部が欠損している。425は右側縁部に主要剥離面及び背面からブランディング加工を施す一側縁加工のナイフ形石器で、左側刃部に使用痕がみられる。

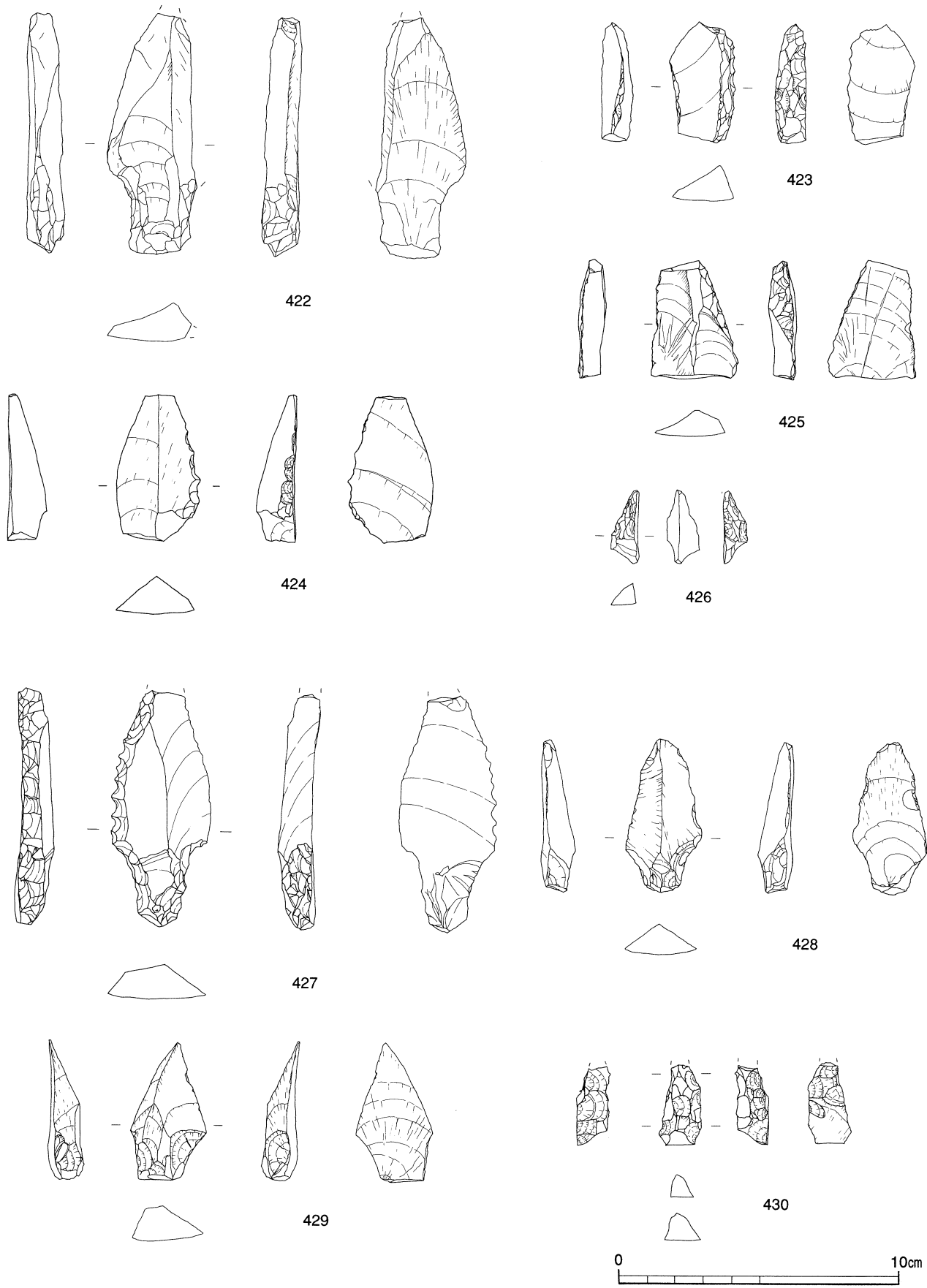
426は三稜尖頭器の上部である。厚みのある剥片を素材とし断面が三角形を呈しており、主要剥離面及び、稜上より加工を施している一側面加工の三稜尖頭器で、先端部以下は欠損している。ナイフ形石器の可能性もある。

一括資料・表面採集（第82図）

427は環濠2出土のナイフ形石器で、縦長剥片を素材とする。右側、左側基部全体に加工を施しており、左側縁部に背面から明瞭なブランディング加工を施しており、右側刃部に若干の使用痕がみられ、先端部が欠損している。剥片尖頭器の可能性もある。

428・429は表面採集の剥片尖頭器で縦長剥片を素材とし、428は両側基部全体に加工を施し左側縁端部にブランディング加工が施されており、両側刃部に使用痕がみられる。429は両側基部全体と主要剥離面より加工を施している。

430は表面採集の三稜尖頭器である。三稜上から加工を施しており、一側面のみは上部のみの加工となっており、先端部を欠損している。



第 82 图 出土石器实测图(5)

第5節 その他の時代の遺構と遺物

(1) 遺構

溝状遺構2 (第5図)

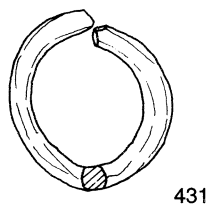
東側の平坦面から南側の平坦面ににかけて検出された。幅1.0 mの2本の溝が北西から南東方向へ3 m流れた位置で合流し、幅2 mの溝になる。その溝状遺構はそのまま北東方向へ14 m流れ、その後ほぼ直角に曲がって南西へ17 m流れる。溝が2本合流する前は礫層となっており、その伸びる先は不明である。深さは合流地点が8 cm、直角に曲がる部分が45 cm、南西側先端部が80 cmと合流地点が一番浅く、標高も合流地点の底面の深さが29.7 m、南西側先端部が27.5 mと南西の方が深くなるため、北西の方角から南西の方角に流れていたと考えられる。遺物は陶器、磁器、煙管等が出土しており、近代まで使用された溝状遺構と考えられる。

掘立柱建物1 (第84図)

礫層面で検出された。重機で表土を除去した際、丘陵中央部の標高30 mを超える地点では一帯に礫層が露出しており、この部分については調査対象からは外し、ピット状のものがみられるものの、礫層の中にあつて、そのピットの埋土も礫層とはほとんど変わらない礫を多く含む土だったため、調査以前は樹木が繁っていたことから多くが樹根痕と考えられていた。しかし、そのピット状のものの上端のみを実測した結果、掘立柱建物となる可能性がでてきたため、その実測図を掲載した。掘立柱建物は2通り考えられ、実測図中の実線のものを1-1、破線のものを1-2とする。1-1は梁行3間(5.9 m)、桁行4間(7.5 m)を計り、南側に廂を持つ。1-2は梁行3間(5.9 m)、桁行3間(5.7 m)を計り、総柱の建物と考えられる。1-1、1-2共に欠損する柱があるため、決定力に乏しく、先述した通り、調査が上端の実測のみで、掘下げを行わなかったため柱穴の相互関係を計ることはできなかった。また、この建物から北に13~15 mの位置にも、空中撮影の際、掘立柱建物と考えられるピット状のものが確認されたが、こちらは実際に現場において肉眼での検出は不可能であった。

(2) 遺物 (第83図)

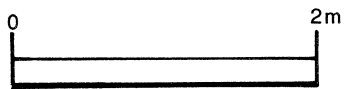
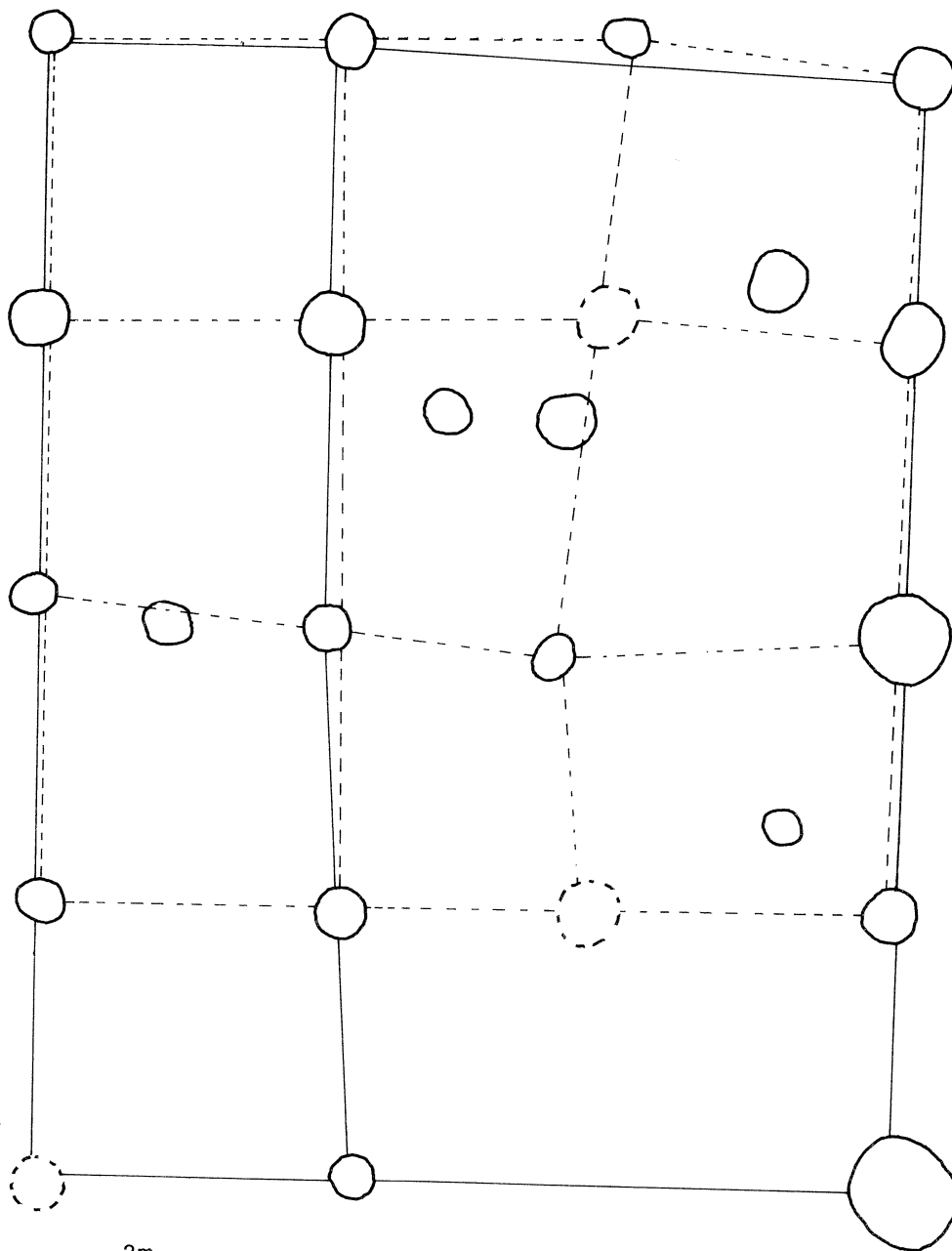
431・432は共に表面採集の遺物である。431は青銅製の環である。直径2.2 cmを計り断面は円形を呈する。金環か。432は「朝鮮通宝」で、直径2.4 cm、内径0.5 cmを計り、初鑄造年は1423年である。造りが良好なため舶載品だと考えられる。近世墓に伴ったと考えられる。



432



第 83 図 表面採集遺物実測図



第 84 図 掘立柱建物 1 実測図

出土土器観察表 1

遺物 番号	出土遺構	器 種	法 量 (cm)	器面調整		色 調	胎 土	備 考
				外 面	内 面			
1	住居 1	甕	底径 6.1	ナデ	ナデ	外 - にぶい褐 内 - にぶい黄橙	2 mm以下の粒を含む	
2	"	甕	口径10.1 器高11.1 底径 2.7	ナデ	ナデ	外 - 浅黄橙 内 - 浅黄橙	3 mm以下の粒を含む	
3	"	壺	口径13.2	ナデ	ナデ	外 - 橙 内 - 橙	砂粒を含む	
4	"	壺	底径 6.2	ナデ ハケ	ナデ	外 - 浅黄橙 内 - 褐灰	細砂粒、砂粒を含む	
5	"	壺	底径 1.9	ナデ ケズリ	ナデ	外 - にぶい黄橙 内 - 褐灰	砂粒を含む	
6	"	鉢	口径22.0 器高16.0 底径 2.0	ナデ	ナデ	外 - 浅黄橙 内 - 浅黄橙	3 mm以下の粒を多く含む	スス付着
7	"	ミニチュア鉢	口径 8.7 器高 6.6 底径 2.5	ナデ ミガキ	ナデ ミガキ	外 - にぶい黄橙 内 - にぶい黄橙	2 mm以下の粒を含む	スス付着
8	住居 2	鉢	口径13.3 器高 9.0 底径 5.4	ナデ	ナデ	外 - 橙 内 - にぶい橙	0.1~1 mm以下の粒及び0.5~4 mm程度の砂粒、砂礫を含む	
9	住居 3	甕	口径18.0	ナデ	ナデ	外 - 浅黄橙 内 - 浅黄橙	3 mm前後の粒を多く含む	
10	"	甕	底径 7.3	ナデ	ハケ	外 - にぶい褐 内 - 黒褐	1~4 mm程度の粒を含む	
11	"	壺	底径 4.6	ナデ	ハケ	外 - 明赤褐 内 - 黒	3 mm以下の砂粒を含む	
12	"	壺	口径 9.0	ナデ ハケ	ナデ ユビオサエ	外 - 浅黄橙 内 - 浅黄橙	2 mm以下の砂粒を含む	
13	"	椀	口径14.5 器高 8.3 底径 4.7	ナデ	ナデ ミガキ	外 - にぶい黄橙 内 - にぶい橙	0.5~4 mmの粒を含む	
14	"	蓋	口径 8.2 器高 4.5	ナデ	ナデ	外 - にぶい黄橙 内 - 橙		
15	住居 4	甕	口径24.7	ナデ	ナデ	外 - 灰黄 内 - 浅黄	5 mm以下の砂礫を含む	スス付着
16	"	壺	口径 5.0	ミガキ	ナデ	外 - にぶい橙 内 - 黒	2 mm以下の粒、細砂粒を含む	スス付着
17	"	壺	底径 3.3	ナデ	ナデ	外 - 浅黄橙 内 - 黒	3 mm前後の砂粒及び微小な粒を含む	
18	"	ミニチュア壺	底径 1.2	ナデ	ナデ	外 - 灰黄 内 - 灰黄	1 mm以下の微小な粒をこくわずかに含む	
19	住居 5	甕	口径16.2 器高19.0	ハケ	ナデ	外 - 橙 内 - 橙	0.1~2 mmの粒と0.5~4 mmの砂粒、砂礫を含む	
20	"	甕	口径10.4 器高11.2 底径 3.4	不明	ユビオサエ ナデ	外 - 淡赤橙 内 - 橙	0.1~2 mmの粒と0.5~4 mmの砂粒、砂礫を数多く含む	スス付着
21	"	鉢	口径24.3 器高16.1 底径 7.6	ナデ ハケ	ナデ	外 - にぶい黄橙 内 - 橙	3 mm以下の粒を含む	
22	"	高杯	口径22.0 器高18.6 底径14.4	ナデ	ナデ	外 - 赤褐 内 - 橙	礫、砂粒、細砂粒をわずかに含む	透し
23	"	椀	口径16.4 器高 9.0 底径 4.0	不明	ナデ	外 - 暗褐 内 - 暗褐	3 mm以下の砂粒を含み、2mm以下の微小な粒を少量含む	
24	"	椀	口径12.5 器高 8.5 底径 3.3	ナデ	ナデ	外 - 灰黄褐 内 - にぶい黄橙	3 mm以下の粒を含む	鉢か?
25	住居 6	甕	口径13.3	ナデ	ナデ	外 - にぶい橙 内 - にぶい橙	4 mm以下の砂礫をかなり多く含む	スス付着
26	"	甕	口径19.6	ナデ	ナデ	外 - 黄褐 内 - 明黄褐	4 mm以下の砂礫を含む	スス付着
27	"	甕	底径 4.8	ナデ	ナデ	外 - にぶい赤褐 内 - にぶい黄橙	4 mm以下の砂礫を含む	スス付着
28	"	壺	口径 8.8	ナデ	ナデ	外 - 浅黄橙 内 - 浅黄橙	1 mm以下の粒を含む	
29	"	高杯	底径16.0	不明	ミガキ	外 - 浅黄橙 内 - 浅黄橙	5 mm以下の砂粒、細砂粒を多く含む	
30	住居 7	甕	口径17.5 器高22.5	不明	ナデ	外 - にぶい褐 内 - 橙	4 mm以下の砂粒を多く含む 1 mm以下の粒を少量含む	

出土土器観察表 2

遺物 番号	出土遺構	器 種	法 量 (cm)	器面調整		色 調	胎 土	備 考
				外 面	内 面			
31	住居 7	甕	口径 5.2	不明	ナデ	外-にぶい黄褐 内-にぶい黄橙	3mm以下の粒を含む。2mm以下の粒をわずかに含む	スス付着
32	"	壺	口径12.1	ナデ	ユビオサエ ナデ	外-にぶい橙 内-にぶい橙	3.2mm以下の礫、粒を多く含む	
33	"	壺	底径 5.5	不明	ナデ	外-浅黄橙 内-褐灰	3mm以下の粒を含む	
34	"	壺	口径11.3	ナデ	ナデ	外-にぶい橙 内-にぶい橙	3.5mm以下の礫粒、細砂粒を多く含む	
35	"	高杯		ミガキ	ナデ	外-浅黄橙 内-浅黄橙	砂粒、細砂粒を多く含む 礫石英を少し含む	
36	"	器台	底径19.7	ハケ	ナデ	外-にぶい黄橙 内-にぶい黄橙	砂粒を多く含む	
37	"	ミニチュア鉢	器高 6.5 底径 2.7	ナデ ハケ	ナデ	外-淡橙 内-淡橙	0.5~4mmの砂粒、砂礫を多く含む	
38	住居 8	甕	口径13.2	ナデ ハケ	ナデ	外-にぶい橙 内-にぶい橙	2mm以下の粒を含む	
39	"	鉢	口径18.0 器高13.7 底径 7.0	ミガキ	ミガキ ナデ	外-にぶい黄橙 内-にぶい黄橙	3mm以下の粒を含む	
40	"	高杯		ナデ	ミガキ	外-橙 内-橙	3mm以下の砂粒、細砂粒を多く含む	
41	住居 9	ミニチュア鉢	口径 7.9 器高 6.4 底径 2.2	ナデ	ナデ	外-褐灰 内-灰黄褐	1mm程度の粒を含む	スス付着
42	"	ミニチュア甕	口径 3.6 器高 4.0 底径 1.1	ナデ	ナデ	外-黄橙 内-黄橙	0.5~3mm程度の砂粒を含む	
43	住居10	甕	底径 6.0	ハケ ナデ	ナデ	外-浅黄橙 内-黒	2mm以下程度の砂粒を含む	
44	"	壺	口径11.1	ナデ	ユビオサエ	外-明赤褐 内-明赤褐	7mm以下の砂礫と3mm以下の粒を含む	線刻
45	"	鉢	口径24.6	ナデ	ナデ	外-にぶい黄橙 内-にぶい黄橙	砂粒、細砂粒を多く含む	スス付着
46	"	高杯	底径13.7	ヘラケズリ ナデ	ナデ	外-橙 内-橙	砂粒を少量含む	
47	"	器台	口径30.0	ミガキ	ミガキ ナデ	外-にぶい褐 内-明褐	4mm以下程度の砂粒を多く含む	透し
48	"	コップ形土器	底径 4.4	ナデ	ナデ	外-にぶい黄橙 内-にぶい黄橙	砂粒、細砂粒を多く含む	
49	住居12	甕	口径12.7 器高16.1 底径 4.8	ナデ	ナデ	外-にぶい黄橙 内-にぶい黄橙	7mm以下の砂礫を含む	
50	"	壺	底径 5.6	ハケ ミガキ	ハケ ナデ	外-にぶい黄橙 内-褐灰	2mm以下の砂粒を含む	
51	住居13	甕	口径14.2 器高20.2 底径 6.2	ナデ	ナデ ミガキ	外-にぶい褐 内-にぶい黄橙	3mm以下の砂粒と細砂粒を多く含む	
52	"	高杯	底径12.3	ミガキ	ミガキ	外-にぶい黄橙 内-黒褐	2mm以下の砂粒を少量含む	
53	"	ミニチュア鉢	器高 7.9 底径 3.7	ナデ ミガキ	ナデ	外-灰黄 内-黒	2mm以下の砂粒を含む	
54	住居15	壺		ミガキ	ナデ	外-浅黄橙 内-黒	2mm以下の砂粒を含む	免田系
55	"	椀	口径 9.0 器高 5.3 底径 3.0	ナデ	ナデ	外-褐色 内-褐色	3mm以下の砂粒を含む	
56	住居16	壺	口径 8.4 器高15.7 底径 2.7	ナデ ミガキ	ナデ	外-淡赤橙 内-にぶい橙	砂礫を微量含む	
57	"	高杯		ナデ	ハケ ナデ	外-にぶい橙 内-にぶい橙	細砂粒を多量に含む	
58	"	ミニチュア壺	底径2.1	ナデ	ケズリ	外-黄灰 内-黄灰	砂粒、細砂粒を少量含む	
59	住居19	甕	底径8.0	ナデ	ナデ	外-浅黄橙 内-黄橙	砂礫を多く含む	
60	"	甕	底径5.6	ナデ	ナデ	外-にぶい黄橙 内-明黄褐	砂粒、細砂粒を含む	スス付着

出土土器観察表 3

遺物 番号	出土遺構	器 種	法 量 (cm)	器面調整		色 調	胎 土	備 考
				外 面	内 面			
61	住居19	壺	口径14.3	ハケ ナデ	ナデ	外-灰白 内-にぶい黄橙	3mm以下の砂粒を含む	スス付着・ 線刻・ヘラ記号
62	"	壺	口径 8.1 器高18.5 底径 3.5	ハケ ナデ	ハケ ナデ	外-浅黄橙 内-浅黄橙	3.5mm以下の砂粒を少量含む	スス付着
63	"	蓋		ナデ	ナデ	外-にぶい黄橙 内-にぶい褐灰	砂粒、細砂粒を多く含む	
64	住居20	甕	口径18.0 器高30.5 底径 6.0	ナデ	ナデ	外-橙 内-黄橙	砂粒を少量含む	スス付着
65	"	甕		ナデ	ナデ	外-にぶい橙 内-橙	5mm以下の砂礫を含む	連続刺突 スス付着
66	"	甕	口径14.7	ナデ	ナデ	外-にぶい褐 内-にぶい黄褐	5mm以下の砂礫を含む	スス付着
67	"	甕	器高18.2	ハケ ナデ	ナデ	外-にぶい橙 内-浅黄橙	3mm以下の砂粒を含む	
68	"	甕	底径 7.0	ナデ	ハケ ナデ	外-橙 内-灰	2mm以下の砂粒を含む	
69	"	甕		ナデ	ナデ	外-灰黄 内-橙	4mm以下の砂礫を含む	スス付着
70	"	甕		ナデ ハケ	ナデ	外-にぶい黄橙 内-にぶい黄橙	3mm以下の砂粒を少量含む	
71	"	壺	器高21.2	ナデ ハケ	ナデ ハケ	外-浅黄橙 内-にぶい橙	2mm以下の砂粒を微量含む	スス付着
72	"	壺	口径 8.3	ナデ ハケ	ナデ ハケ	外-浅黄橙 内-淡黄	3mm以下の砂粒を多く含む	線刻
73	"	壺	口径10.9	ナデ ハケ	ナデ ハケ	外-にぶい褐 内-にぶい黄褐	2mm以下の砂粒を含む	線刻 スス付着
74	"	壺		ミガキ ナデ	ミガキ	外-橙 内-にぶい黄橙	砂粒を少量含む	穿孔
75	"	壺	底径 5.3	ハケ	ナデ ハケ	外-にぶい黄橙 内-にぶい黄橙	4mm以下の砂粒を含む	
76	"	壺	底径 2.3	ハケ	ハケ	外-灰黄 内-にぶい褐	2mm以下の砂粒を含む	スス付着
77	"	壺	底径 2.7	ナデ	ナデ	外-にぶい褐 内-黒	5mm以下の砂礫を含む	
78	"	壺	底径 1.2	ナデ	ナデ	外-浅黄橙 内-灰白	2mm以下の砂粒を少量含む	
79	"	鉢	口径16.6 器高12.9 底径 3.0	ナデ	ナデ	外-にぶい黄橙 内-にぶい黄橙	5mm以下の砂礫を含む	
80	"	高杯	底部12.6	ナデ	ナデ	外-赤 内-赤	5mm以下の砂粒を含む	
81	"	高杯	底部15.8	ナデ	ナデ	外-明黄褐 内-灰白	4mm以下の砂粒を含む	
82	"	高杯		ナデ	ナデ	外-赤褐 内-赤褐	3mm以下の砂粒を多く含む	
83	"	高杯	底径16.2	ナデ	ナデ	外-にぶい黄橙 内-にぶい黄橙	3mm以下の砂粒を含む	
84	"	器台		ハケ ナデ	ハケ ナデ	外-橙 内-にぶい橙	6mm以下の砂粒を多く含む	透し
85	"	椀	口径12.4 器高10.2 底径 3.6	ナデ	ハケ ヘラ ナデ	外-にぶい橙 内-褐灰	砂粒を少量含む	
86	"	椀	器高11.4 底径 6.0	ナデ	ナデ	外-にぶい褐色 内-にぶい橙	砂粒を含む	
87	"	蓋	口径17.0 器高 9.2	ナデ	ナデ	外-にぶい橙 内-にぶい橙	6mm以下の砂粒を含む	
88	"	ミニチュア鉢	口径 8.1 器高 6.8 底径 3.1	ナデ	ナデ	外-にぶい橙 内-にぶい橙	3mm以下の砂粒を含む	
89	"	ミニチュア壺		ミガキ ナデ	ナデ	外-にぶい黄橙 内-にぶい黄橙	3mm以下の細砂粒を含む	朱痕
90	住居21	甕	口径17.9	ナデ ハケ	丁寧なナデ ハケ	外-浅黄橙 内-浅黄橙	3mm以下の砂粒を含む	

出土土器観察表 4

遺物 番号	出土遺構	器 種	法 量 (cm)	器面調整		色 調	胎 土	備 考
				外 面	内 面			
91	住居21	壺	器高29.8	ハケ	ナデ ハケ	外- 橙 内- 橙	3mm以下の砂粒を含む	
92	"	壺	口径10.5	ナデ ハケ	ナデ	外- 浅黄橙 内- 褐灰	3mm以下の砂粒を微量含む	
93	"	鉢	器高 9.3	ミガキ	ナデ	外- 浅黄橙 内- 浅黄橙	3mm以下の砂粒を含む	スス付着
94	住居22	甕	底径 8.0	ナデ	ハケ	外- にぶい褐 内- にぶい橙	砂粒を含む	
95	"	甕	底径 5.7	ハケ	ケズリ	外- にぶい褐 内- 灰黄褐	砂粒を多量に含む	スス付着
96	"	高杯	底径11.3	ミガキ	ナデ	外- 浅黄橙 内- 浅黄	2mm以下の砂粒を少量含む	透し
97	"	小型丸底壺	器高 9.1	ミガキ ハケ	ミガキ ナデ	外- にぶい橙 内- 橙	細砂粒を多く含む	土師器
98	竪穴状遺構1	甕		ハケ ナデ	ハケ ナデ	外- にぶい橙 内- にぶい橙	砂粒を多量に含む	スス付着
99	"	壺		ナデ ミガキ	ハケ ナデ ミガキ	外- 橙 内- 灰白	砂粒を微量含む	
100	"	壺		ナデ	ナデ	外- 橙 内- 橙	細砂粒を多く含む	浮文
101	竪穴状遺構2	高杯	底径15.7	丁寧なナデ	丁寧なナデ	外- にぶい赤褐 内- 黒褐	3mm以下の砂粒を多く含む	
102	"	ミニチュア鉢	口径 9.7 器高 8.3 底径 3.5	丁寧なナデ	ハケ	外- 浅黄橙 内- 橙	6mm以下の細砂粒を含む	
103	"	椀	口径 7.0 器高 5.8 底径 3.4	ナデ ミガキ	丁寧なナデ	外- 浅黄橙 内- 橙	3mm以下の砂粒を含む	
104	竪穴状遺構5	甕		ハケ	ハケ	外- にぶい橙 内- にぶい橙	砂粒を少し含む	連続刺突 スス付着
105	"	壺		ミガキ	ナデ	外- 橙 内- 橙	3mm以下の砂粒を多く含む	長頸壺
106	"	高杯	底径12.1	ミガキ	ナデ	外- 浅黄橙 内- にぶい橙	微細粒を含む	スス付着
107	竪穴状遺構6	壺	口径15.0 器高14.6 底径5.1	不明	ナデ	外- 浅黄橙 内- 浅黄橙	微細粒を多く含む	穿孔
108	竪穴状遺構12	壺		ナデ ミガキ	ハケ ナデ	外- にぶい黄橙 内- 橙	砂粒を含む	スス付着
109	竪穴状遺構13	甕	口径12.8 器高21.0 底径 5.7	ナデ	ナデ	外- 橙 内- にぶい黄橙	2mm以下の砂粒を含む	スス付着
110	"	壺	口径17.0 器高17.2 底径 7.0	不明	ハケ ナデ	外- 橙 内- 橙	3mm以下の砂粒を多く含む	穿孔
111	竪穴状遺構14	甕	口径19.2	ハケ	ナデ	外- 橙 内- 浅黄橙	砂礫を多く含む	スス付着
112	竪穴状遺構17	甕	口径31.7 器高33.2 底径 6.5	ハケ ナデ	ナデ	外- 橙 内- にぶい橙	細砂粒を多く含む	刻目突帯 スス付着
113	竪穴状遺構23	甕	口径12.6 器高17.0 底径 5.5	ナデ ハケ	ナデ	外- にぶい黄橙 内- にぶい黄橙	3mm以下の砂粒を多く含む	
114	竪穴状遺構24	壺	口径 9.3 器高21.0 底径 4.3	ナデ	ハケ	外- にぶい橙 内- 橙	3mm以下の砂粒を多く含む	線刻
115	竪穴状遺構25	甕		ナデ	ナデ	外- にぶい黄橙 内- 浅黄橙	5mm以下の砂礫を含む	スス付着
116	"	鉢	口径19.1 器高15.3 底径 7.1	ミガキ	ミガキ	外- 褐 内- 橙	2mm以下の砂粒を含む	スス付着
117	"	高杯	口径22.1	ミガキ	ミガキ ナデ	外- 明赤褐 内- 橙	2mm以下の砂粒を含む	
118	"	椀	口径11.8 器高8.8 底径5.0	ハケ ナデ	ナデ	外- 橙 内- 橙	2mm以下の砂粒を含む	
119	"	ミニチュア鉢		ミガキ	ミガキ	外- にぶい黄橙 内- にぶい黄橙	1mm以下の砂粒を少量含む	穿孔 スス付着
120	貯蔵穴1	甕		ナデ	ハケ ナデ	外- 浅黄橙 内- 浅黄橙	5mm以下の砂粒を含む	

出土土器観察表 5

遺物 番号	出土遺構	器種	法量 (cm)	器面調整		色調	胎土	備考
				外面	内面			
121	貯蔵穴1	壺		ナデ ミガキ	丁寧なナデ ハケ	外-黄橙 内-黄橙	砂粒を含む	
122	"	壺		ナデ	ナデ	外-橙 内-橙	4mm以下の砂粒を含む	
123	"	壺		ナデ ハケ	ナデ ハケ	外-にぶい黄橙 内-にぶい黄橙	3mm以下の砂粒を含む	長頸壺
124	"	壺	器高21.2 底径4.2	ハケ ナデ	ハケ ナデ	外-浅黄橙 内-浅黄橙	4mm以下の砂粒を含む	長頸壺
125	"	器台		丁寧なナデ	ナデ	外-にぶい橙 内-にぶい橙	3mm以下の砂粒を含む	透し
126	"	器台	底径20.7	ナデ	ナデ	外-にぶい黄橙 内-にぶい黄橙	3mm以下の砂粒を少量含む	透し
127	貯蔵穴3	甕		ナデ ハケ	ナデ ハケ	外-黒褐 内-灰黄褐	砂粒を含む	スス付着
128	"	甕	底径3.9	ハケ ナデ	ハケ ナデ	外-浅黄橙 内-黒褐	砂粒を含む	壺か?
129	"	甕	底径5.0	ハケ ナデ	ナデ	外-にぶい橙 内-にぶい橙	3mm以下の砂粒を含む	スス付着
130	"	甕	底径5.1	ハケ ナデ	ナデ	外-にぶい黄橙 内-灰黄褐	4mm以下の砂粒を多く含む	
131	"	高杯	底径13.4	ミガキ	ミガキ ナデ	外-にぶい橙 内-浅黄橙	砂粒を少量含む	スス付着
132	"	蓋	口径12.3 器高7.2	ミガキ	ナデ	外-灰黄褐 内-にぶい黄褐	3mm以下の砂粒を多く含む	
133	"	ミニチュア鉢	口径7.6 器高7.1 底径0.8	ミガキ	ナデ	外-にぶい黄橙 内-にぶい黄橙	砂粒を含む	
134	貯蔵穴4	甕		ナデ ミガキ	ナデ ミガキ	外-灰黄褐 内-浅黄橙	砂粒を少量含む	スス付着
135	貯蔵穴5	甕	底径6.0	ハケ	ナデ	外-明黄褐 内-明黄褐	5mm以下の砂粒を含む	
136	貯蔵穴7	甕	口径12.6	ナデ	ナデ	外-にぶい褐 内-にぶい橙	砂粒を少量含む	スス付着
137	"	壺	底径6.7	ハケ ナデ	ナデ	外-にぶい橙 内-灰	1mm以下の細砂粒を多く含む	
138	"	壺	口径19.0	ハケ ナデ	ハケ	外-にぶい橙 内-にぶい黄橙	細砂粒を多く含む	
139	"	器台	底径18.5	ハケ ナデ	ナデ ミガキ	外-にぶい橙 内-にぶい橙	砂粒を少量含む	透し
140	"	ミニチュア鉢	底径2.9	ハケ ナデ	ハケ ナデ	外-浅黄 内-暗灰黄	2mm以下の砂粒を含む	
141	貯蔵穴15	甕		ハケ	ハケ ナデ	外-にぶい橙 内-にぶい黄橙	細砂粒を多く含む	スス付着
142	"	甕	口径16.8	ナデ	ナデ	外-淡赤橙 内-淡赤橙	4mm以下の砂粒を含む	スス付着
143	"	甕	底径6.6	ハケ ナデ	ハケ ナデ	外-浅黄橙 内-浅黄橙	3mm以下の砂粒を含む	
144	"	壺	底径6.3	ミガキ	ハケ	外-橙 内-灰白	砂粒を多く含む	
145	"	壺		ミガキ	ハケ 丁寧なナデ	外-にぶい橙 内-にぶい橙	砂粒を多く含む	長頸壺
146	"	高杯	口径25.3 器高20.9 底径12.8	ミガキ	ミガキ ナデ	外-明黄褐 内-明黄褐	3mm以下の砂粒を多く含む	
147	"	ミニチュア甕	口径5.6	ナデ ミガキ	ナデ	外-にぶい黄橙 内-にぶい橙	3.5mm以下の砂粒を多く含む	
148	貯蔵穴16	甕	口径21.0 器高28.2	ハケ ナデ	ハケ ナデ	外-明黄褐 内-明黄褐	砂礫を含む	
149	"	甕	底径5.3	ナデ	ナデ	外-橙 内-にぶい橙	4mm以下の砂粒を含む	スス付着
150	"	甕		ナデ	丁寧なナデ	外-浅黄 内-にぶい黄橙	砂粒を含む	スス付着

出土土器観察表 6

遺物 番号	出土遺構	器 種	法 量 (cm)	器面調整		色 調	胎 土	備 考
				外 面	内 面			
151	貯蔵穴17	甕	口径22.6 器高27.4 底径 7.6	ハケ ナデ	ナデ	外-灰黄 内-灰黄	2 mm以下の砂粒を含む	刻目突帯 スス附着
152	貯蔵穴18	甕	口径13.3 器高14.7 底径 5.3	ハケ ナデ	ナデ	外-黒 内-にぶい橙	4 mm以下の砂粒を多く含む	
153	"	甕	口径11.3 器高14.0 底径 3.0	ハケ ナデ	ハケ	外-にぶい橙 内-橙	6 mm以下の砂粒を含む	
154	"	甕	器高13.25 底径 3.4	ハケ ナデ	ハケ	外-にぶい橙 内-にぶい橙	6 mm以下の砂粒を多く含む	
155	"	壺	口径10.2 器高29.8 底径 5.0	ナデ	ハケ 丁寧なナデ	外-にぶい橙 内-にぶい黄橙	5 mm以下の砂粒を多く含む	絵画
156	"	壺	口径 9.8 器高24.2 底径 3.4	ミガキ	ハケ ナデ	外-にぶい橙 内-にぶい橙	4.5mm以下の砂粒を含む	
157	"	壺	口径 7.6 器高20.2 底径 1.3	ナデ	ナデ	外-にぶい黄橙 内-褐灰	3mm以下の砂粒を多く含む	絵画
158	"	壺	口径10.0 器高23.8 底径 5.4	ハケ ナデ	丁寧なナデ	外-にぶい橙 内-にぶい橙	7 mm以下の砂粒を含む、細砂粒 を多く含む	絵画
159	"	壺	口径 9.6 器高20.0 底径 4.2	ナデ ミガキ	ナデ	外-にぶい橙 内-褐灰	10.5mm以下の砂粒を多く含む	
160	"	壺	口径 8.5 器高20.0 底径 3.5	ハケ ナデ ミガキ	ハケ	外-にぶい橙 内-にぶい橙	3 mm以下の砂粒を多く含む	
161	"	壺	口径 9.0 器高23.5 底径 5.8	ミガキ	ナデ	外-浅黄橙 内-浅黄橙	3 mm以下の砂粒を含む	長頸壺
162	貯蔵穴19	甕	口径20.5 器高32.0 底径 6.2	ハケ ナデ	ハケ	外-にぶい黄橙 内-にぶい黄橙	3 mm以下の砂粒を含む	
163	"	甕	口径18.7 器高26.0 底径 5.2	ハケ	ハケ	外-赤橙 内-橙	3 mm以下の砂粒を含む	スス附着
164	"	甕	口径16.3 器高18.2 底径 4.3	ハケ ナデ	ハケ ナデ	外-にぶい橙 内-にぶい橙	3 mm以下の砂粒を多く含む	穿孔 スス附着
165	"	甕		不明	ナデ	外-浅黄橙 内-褐灰	4 mm以下の砂粒を多く含む	
166	"	甕		ハケ ナデ	ナデ	外-浅黄橙 内-浅黄橙	砂粒を含む	スス附着
167	"	壺	口径11.3	ナデ ミガキ	ナデ ハケ	外-浅黄橙 内-にぶい黄橙	3 mm以下の砂粒を含む	スス附着
168	"	壺	底径 4.4	ミガキ	ハケ ナデ	外-にぶい黄 内-にぶい黄	4 mm以下の砂粒を含む	
169	"	壺	口径11.6	ナデ ミガキ	ナデ ミガキ	外-橙 内-橙	4 mm以下の砂粒を少量含む	長頸壺
170	"	壺		不明	ハケ	外-にぶい黄橙 内-にぶい黄橙	1 mm以下の微細粒を少量含む	
171	"	壺	底径 6.4	ナデ	ナデ	外-にぶい赤褐 内-にぶい黄橙	0.3mm以下の細砂粒を多く含む	
172	"	ミニチュア壺		ナデ	ナデ	外-にぶい橙 内-にぶい橙	微細粒を多く含む	
173	"	高杯	器高18.3 底径13.8	ナデ ミガキ	ナデ ミガキ	外-にぶい橙 内-にぶい黄橙	5 mm以下の砂粒を含む	
174	土坑2	甕		ハケ	ナデ	外-浅黄橙 内-にぶい黄橙	細砂粒を含む	刻目突帯 スス附着
175	"	甕		ナデ	ナデ	外-にぶい黄橙 内-にぶい褐	砂粒を含む	刻目突帯
176	"	壺		ナデ	ナデ	外-にぶい橙 内-黄褐	砂粒を多く含む	刻目突帯
177	"	壺		ナデ	ナデ	外-にぶい橙 内-にぶい橙	砂粒を多く含む	刻目突帯
178	"	壺		ミガキ	ミガキ	外-黒 内-褐灰	1 mm以下の砂粒を含む	はりつけ突帯
179	土坑3	甕		ナデ ハケ	ナデ ハケ	外-にぶい橙 内-黒	砂粒を多く含む	刻目突帯
180	"	甕		ナデ	ナデ ハケ	外-にぶい黄橙 内-黄橙	細砂粒を多く含む	スス附着

出土土器観察表 7

遺物番号	出土遺構	器種	法量 (cm)	器面調整		色調	胎土	備考
				外面	内面			
181	土坑3	小型壺		ハケナデ	不明	外-橙 内-浅黄橙	砂粒を多く含む	
182	土坑12	壺	口径10.7 器高23.65 底径 5.5	ナデ	丁寧なナデ	外-にぶい橙 内-にぶい黄橙	砂粒を多く含む	線刻
183	土坑17	甗		ハケナデ	ハケナデ	外-にぶい橙 内-にぶい橙	砂粒を含む	
184	"	壺	底径 4.9	ミガキ	ナデ	外-赤褐 内-赤褐	砂礫を含む	長頸壺 頸部に沈線
185	"	壺		ナデ	ナデ	外-にぶい橙 内-にぶい橙	砂粒を多く含む	浮文
186	"	ミニチュア壺	口径 2.5 器高 7.2 底径 2.3	ハケ	ユビオサエ	外-にぶい橙 内-にぶい橙	細砂粒を含む	無頸
187	土坑19	甗		ナデ	ハケ	外-にぶい橙 内-灰褐	細砂粒を含む	波状文 スス附着
188	土坑22	甗	口径21.8 器高29.9 底径 7.2	ナデ	ナデ	外-にぶい橙 内-にぶい橙	細砂粒を多く含む	スス附着
189	"	甗	口径19.3 器高24.9 底径 7.0	ナデ	ハケナデ	外-にぶい黄橙 内-褐灰	3 mm以下の砂粒を含む	スス附着
190	"	甗	口径16.4	ナデ	ナデ	外-灰黄褐 内-灰黄褐	2 mm以下の砂粒を多く含む	スス附着
191	"	甗	底径 6.0	ナデ	ナデ	外-にぶい黄橙 内-にぶい黄橙	3 mm以下の砂粒を少量含む	
192	"	甗	口径19.0	ハケナデ	ナデ	外-にぶい黄褐 内-橙	砂礫を含む	スス附着
193	"	甗	口径18.0 器高14.8 底径 5.7	ミガキナデ	ミガキナデ	外-にぶい橙 内-橙	3 mm以下の砂粒を多く含む	スス附着
194	"	甗	底径 6.2	ナデ	ナデ	外-にぶい橙 内-黄灰	5 mm以下の砂粒を多く含む	
195	"	甗		ハケナデ	ナデ	外-橙 内-黄橙	3 mm以下の砂粒を含む	スス附着
196	"	壺	口径11.5 器高22.5 底径 4.5	ハケナデ	ナデ	外-にぶい橙 内-にぶい黄褐	砂粒を含む	突帯 スス附着
197	"	壺	口径12.6 器高19.3 底径 4.5	ナデ	ナデ	外-浅黄橙 内-にぶい黄橙	砂粒を多く含む	無頸壺 スス附着
198	"	壺	底径 2.7	丁寧なナデ	ナデ	外-にぶい黄橙 内-黒	2 mm以下の砂粒を多く含む	
199	"	壺	底径 4.8	丁寧なナデ	ナデ	外-にぶい黄橙 内-黄灰	砂粒を含む	線刻
200	"	器台	底径12.7	ハケナデ	ナデ	外-橙 内-黄褐	3 mm以下の砂粒を含む	
201	土坑28	甗		ハケナデ	ナデ	外-灰白 内-にぶい黄橙	砂粒を多く含む	スス附着
202	"	甗		ハケナデ	ハケ 丁寧なナデ	外-褐灰 内-褐灰	砂粒を多く含む	スス附着
203	"	壺		ハケナデ	ナデ	外-橙 内-黒	1 mm以下の細砂粒を含む	線刻
204	環濠 1	甗	口径22.2	ミガキ	ミガキ	外-橙 内-橙	砂粒を多く含む	
205	"	壺	底径 5.7	ナデ ミガキ ハケ	ナデ ハケ	外-にぶい黄橙 内-灰黄	砂粒を少量含む	はりつけ突帯
206	"	壺	底径 6.0	ミガキ	丁寧なナデ	外-浅黄橙 内-浅黄橙	3 mm以下の砂粒を含む	
207	"	壺	底径 8.0	ミガキ	ミガキ	外-黄橙 内-橙	砂粒を多く含む	
208	"	壺	底径 7.1	ミガキ	丁寧なナデ	外-浅黄橙 内-浅黄橙	2 mm以下の砂粒を含む	スス附着
209	"	壺	底径 6.6	ミガキ	ミガキ	外-にぶい黄橙 内-浅黄橙	3 mm以下の砂粒を多く含む	
210	"	壺	底径 6.9	ミガキ	ミガキ	外-にぶい黄橙 内-にぶい黄褐	2 mm以下の砂粒を含む	

出土土器観察表 8

遺物 番号	出土遺構	器種	法量 (cm)	器面調整		色調	胎土	備考
				外面	内面			
211	環濠 1	壺		ミガキ	ミガキ	外-橙 内-にぶい黄橙	砂粒を含む	
212	"	鉢	底径 6.9	丁寧なナデ	丁寧なナデ	外-灰黄褐 内-にぶい黄橙	3mm以下の砂粒を含む	
213	環濠 2	甗		ナデ ハケ	ナデ ハケ	外-にぶい橙 内-橙	砂粒を多く含む	はりつけ突帯
214	"	甗		ナデ ハケ	ハケ	外-褐灰 内-にぶい橙	砂粒を多く含む	スス附着
215	"	甗	底径 6.3	ハケ ナデ	ハケ ナデ	外-にぶい橙 内-にぶい橙	砂粒を含む	スス附着
216	"	甗		ナデ	ナデ	外-にぶい黄橙 内-にぶい橙	砂粒を多く含む	刻目突帯
217	"	壺		ミガキ ナデ	ミガキ	外-にぶい橙 内-橙	砂礫を多く含む	はりつけ突帯
218	"	壺		ナデ ミガキ	ミガキ	外-赤橙 内-にぶい黄橙	砂粒を多く含む	沈線
219	"	壺	器高16.7 底径 3.3	ミガキ ナデ	ナデ	外-にぶい橙 内-黒褐	砂粒を多く含む	スス附着
220	"	壺	底径 1.0	ナデ	ナデ	外-橙 内-橙	3mm以下の砂粒を多く含む	長頸壺 刺突
221	"	壺	底径 8.1	ハケ 丁寧なナデ	ハケ	外-にぶい橙 内-にぶい橙	3mm以下の砂粒を多く含む	
222	"	壺	底径 2.0	ミガキ	ハケ	外-橙 内-灰白	砂粒を多く含む	
223	"	鉢	口径13.6 器高11.25 底径 4.5	ナデ ミガキ	ミガキ	外-にぶい橙 内-にぶい橙	3mm以下の砂粒を多く含む	スス附着
224	"	ミニチュア鉢	底径 4.0	ナデ ハケ	ナデ	外-にぶい橙 内-にぶい橙	砂粒を多く含む	
225	環濠 4	甗		ナデ ミガキ	ナデ	外-にぶい黄橙 内-にぶい黄橙	砂粒を多く含む	刻目突帯
226	"	甗	底径 7.3	ハケ	ハケ	外-にぶい橙 内-赤橙	細砂粒を多く含む	
227	"	甗	底径 6.5	ハケ	ハケ	外-にぶい褐 内-暗黄灰	細砂粒を多く含む	
228	"	甗	口径14.9 器高21.6	ナデ ハケ	ナデ	外-にぶい黄橙 内-にぶい黄橙	4mm以下の砂粒を含む	スス附着
229	"	壺	底径 7.0	ミガキ	ナデ	外-浅黄橙 内-浅黄橙	3mm以下の砂粒を多く含む	スス附着
230	"	壺	底径 7.0	ミガキ	不明	外-にぶい黄橙 内-にぶい黄橙	砂粒を多く含む	スス附着
231	"	高杯	底径13.5	ナデ ミガキ	ナデ ミガキ	外-橙 内-橙	砂粒を多く含む	はりつけ突帯
232	環濠 5	甗		ナデ	ナデ	外-明黄褐 内-灰黄褐	砂粒を多く含む	刻目突帯
233	"	壺	器高40.0 底径 8.8	ミガキ ハケ ナデ	丁寧なナデ ハケ	外-にぶい橙 内-にぶい橙	砂粒を多く含む	沈線
234	"	壺	底径 7.5	ハケ ナデ	ナデ	外-橙 内-浅黄橙	砂粒を含む	スス附着
235	環濠 6-1	甗	口径24.6 器高41.3 底径 3.5	ナデ ハケ	ナデ ミガキ	外-浅黄橙 内-橙	4mm以下の砂粒を含む	はりつけ突帯
236	"	甗	口径24.0 器高33.8 底径 7.7	ハケ	ナデ	外-にぶい橙 内-にぶい橙	5mm以下の砂粒を多く含む	スス附着
237	"	甗	口径20.7 器高33.2 底径 5.6	ハケ ナデ	ハケ ナデ	外-浅黄橙 内-浅黄橙	砂粒を含む	スス附着
238	"	甗		ハケ ナデ	ハケ ナデ	外-灰黄褐 内-にぶい黄橙	砂粒を含む	スス附着
239	"	甗	底径 7.5	ハケ ナデ	ハケ ナデ	外-明赤褐 内-にぶい赤褐	1mm以下の砂粒を含む	
240	"	甗		ナデ	ナデ	外-にぶい黄橙 内-黒	微細粒を含む	

出土土器観察表 9

遺物 番号	出土遺構	器 種	法 量 (cm)	器面調整		色 調	胎 土	備 考
				外 面	内 面			
241	環壕6-I	甕	底径 7.2	ナデ	不明	外-にぶい黄橙 内-褐灰	細砂粒を少量含む	
242	"	甕		ハケ ナデ	ナデ	外-灰黄 内-灰褐	砂粒を少量含む	
243	"	甕	底径 7.9	ハケ ナデ	ハケ ナデ	外-浅黄橙 内-褐灰	砂粒を含む	
244	"	壺	口径15.5 器高34.0 底径 5.5	ハケ ナデ	ハケ ナデ	外-にぶい黄橙 内-黒	砂粒を含む	
245	"	壺	口径13.6 器高32.0 底径 4.7	ナデ ハケ	ナデ ハケ	外-灰褐 内-浅黄橙	砂粒を少量含む	長頸壺 竹管文
246	"	壺	口径12.1 器高31.8 底径 4.7	ハケ 丁寧なナデ	ハケ ナデ	外-にぶい橙 内-灰黄	8mm以下の砂礫を含む	線刻
247	"	壺	口径13.25	ナデ ミガキ	ナデ	外-橙 内-黒褐	砂粒を多く含む	長頸壺 沈線
248	"	壺		ナデ	ナデ ミガキ	外-橙 内-橙	細砂粒を含む	
249	"	壺	口径8.4	ナデ ハケ	ナデ	外-明赤褐 内-赤	微細粒を多く含む	口縁部沈線
250	"	壺		ナデ ハケ	ハケ	外-にぶい橙 内-にぶい橙	6mm程の砂礫を多く含む	浮文 連続山形文
251	"	壺		ハケ ナデ	ナデ	外-にぶい橙 内-にぶい橙	3.5mm程の砂粒を含む	浮文 連続山形文
252	"	鉢		ミガキ	ミガキ	外-にぶい橙 内-にぶい橙	細砂粒を含む	
253	"	鉢		ナデ ハケ	ナデ ハケ	外-赤橙 内-橙	砂粒を多く含む	
254	"	高杯	底径17.1	ミガキ	ナデ	外-にぶい褐 内-にぶい黄橙	砂粒を多く含む	透し
255	"	高杯	底径12.3	不明	ナデ	外-橙 内-橙	細砂粒を多く含む	透し
256	"	器台	器高16.2	ハケ ナデ	ハケ ナデ	外-にぶい橙 内-にぶい橙	砂粒を含む	透し スス附着
257	"	椀	器高 7.8 底径 3.3	ナデ ミガキ ハケ	ハケ 丁寧なナデ	外-橙 内-橙	砂粒を少量含む	
258	環壕6-II	甕	口径25.7 器高30.2 底径 5.9	ナデ ハケ	ハケ ナデ	外-にぶい黄橙 内-にぶい黄橙	砂粒を含む	スス附着
259	"	甕	底径 5.5	ナデ ハケ	ナデ	外-明赤褐 内-明赤褐	砂粒を含む	
260	"	甕	口径17.6	ナデ ハケ	ナデ	外-にぶい黄橙 内-にぶい黄橙	1mm以下の砂粒を含む	スス附着
261	"	甕		ナデ ハケ	ナデ ハケ	外-にぶい黄橙 内-橙	3mm以下の砂粒を多く含む	スス附着
262	"	甕	底径 4.6	ハケ ナデ	ハケ ナデ	外-にぶい橙 内-にぶい橙	砂礫を多く含む	
263	"	甕	口径14.4	ナデ ハケ	ナデ ハケ	外-赤褐 内-赤褐	2mm以下の砂粒を少量含む	スス附着
264	"	甕		ナデ	ナデ ハケ	外-にぶい橙 内-褐灰	砂粒を多く含む	
265	"	甕		ナデ	ナデ	外-にぶい橙 内-にぶい橙	砂粒を多く含む	突帯・沈線
266	"	甕	口径23.7 器高22.2 底径 7.5	不明	ハケ ナデ	外-にぶい橙 内-にぶい橙	5mm以下の砂粒を多く含む	スス附着
267	"	壺	器高37.8 底径 6.0	ハケ 丁寧なナデ	ハケ ナデ	外-明黄褐 内-褐灰	砂粒を含む	
268	"	壺		ナデ ハケ	ハケ ナデ	外-橙 内-橙	砂粒を含む	はりつけ突帯 口縁部に沈線
269	"	壺		ナデ	ナデ	外-橙 内-橙	砂粒を多く含む	
270	"	壺		ハケ ナデ	ナデ ハケ	外-赤橙 内-にぶい黄橙	砂粒を多く含む	

出土土器観察表 10

遺物 番号	出土遺構	器種	法量 (cm)	器面調整		色調	胎土	備考
				外面	内面			
271	環濠6-II	壺	底径 4.0	ナデ ハケ	ナデ ハケ	外-浅黄橙 内-黒	砂粒を少量含む	スス付着 長頸壺
272	"	壺		ハケ	ハケ	外-にぶい褐 内-褐灰	砂粒を多く含む	
273	"	壺	底径 4.5	不明	ハケ ナデ	外-にぶい黄橙 内-にぶい黄橙	細砂粒を多く含む	
274	"	壺	底径 4.3	ハケ ナデ	ハケ	外-橙 内-橙	細砂粒を多く含む	
275	"	壺		ハケ ナデ	ナデ ハケ	外-にぶい黄橙 内-にぶい橙	1 mm以下の細砂粒を多く含む	
276	"	壺	底径 6.0	ナデ ハケ	ナデ ハケ	外-にぶい黄橙 内-にぶい黄橙	砂粒を少量含む	線刻
277	"	壺		ハケ	ナデ	外-にぶい橙 内-にぶい橙	細砂粒を多く含む	二重口縁壺 口縁部に波状文
278	"	高杯		ナデ	ナデ	外-淡赤橙 内-浅黄橙	1 mm以下の砂粒を含む	
279	"	高杯	底径15.5	ナデ	ナデ	外-赤橙 内-にぶい黄橙	5 mm以下の砂粒を多く含む	
280	"	高杯		ミガキ	ミガキ	外-橙 内-黒	細砂粒を含む	透し
281	"	器台	口径15.0 器高12.2 底径14.0	ナデ ハケ	ナデ	外-浅黄橙 内-浅黄橙	砂粒を少量含む	体部に沈線
282	"	器台	口径18.3 器高16.6 底径16.4	ナデ	ナデ	外-浅黄橙 内-浅黄橙	2 mm以下の砂粒を多く含む	口縁部・体 部に沈線 透し
283	環濠6-III	甗	口径15.5	ナデ	ハケ ナデ	外-橙 内-にぶい橙	砂粒を含む	スス付着
284	"	壺	器高52.3 底径 7.5	不明	ナデ	外-橙 内-褐灰	砂粒を多く含む	はりつけ突帯 浮文
285	環濠6-IV	壺		ナデ	ナデ ハケ	外-にぶい黄橙 内-褐灰	砂粒を含む	
286	"	壺		ナデ ハケ	ナデ ハケ	外-にぶい黄橙 内-にぶい黄橙	3 mm以下の砂粒を多く含む	
287	"	壺	口径11.6	ナデ	ナデ ハケ	外-にぶい橙 内-にぶい橙	砂粒を含む	線刻
288	"	壺		ナデ	ナデ	外-浅黄橙 内-浅黄橙	1 mm以下の砂粒を含む	
289	"	壺	底径 4.7	ミガキ	ナデ	外-にぶい橙 内-黒	2 mm以下の砂粒を含む	平行沈線文 重弧文
290	"	高杯	器高23.0 底径16.1	ナデ ハケ	ナデ	外-にぶい橙 内-にぶい橙	5 mm以下の砂粒を多く含む	朱痕
291	"	鉢	底径2.0	ナデ	ハケ	外-淡橙 内-淡橙	3 mm以下の砂粒を含む	壺か?
292	環濠7	甗	口径20.2 器高32.7 底径 7.0	ハケ ナデ	ナデ	外-にぶい橙 内-にぶい橙	4 mm以下の砂粒を含む	口縁部に沈線 スス付着
293	"	甗	口径19.1 器高25.5 底径 5.7	ナデ ハケ	ハケ	外-にぶい黄橙 内-にぶい黄橙	5 mm以下の砂粒を多く含む	スス付着
294	"	甗		ナデ ハケ	ナデ	外-にぶい橙 内-にぶい黄橙	砂粒を多く含む	スス付着
295	"	甗		ナデ	ナデ	外-灰褐 内-にぶい橙	砂粒を含む	
296	"	甗	底径 5.2	ハケ ナデ	ナデ	外-明褐 内-にぶい橙	砂粒を含む	木の葉底 壺か? スス付着
297	"	壺	口径12.5	ナデ ハケ	ナデ	外-にぶい橙 内-にぶい橙	砂粒を多く含む	口縁部に沈線
298	"	壺	口径13.9	ナデ	丁寧なナデ	外-橙 内-橙	砂粒を含む	
299	"	壺	口径12.8	ナデ	ハケ ナデ	外-橙 内-橙	砂粒を多く含む	
300	"	壺		ハケ	ナデ ハケ	外-橙 内-明赤褐	砂粒を多く含む	口縁部に波状文

出土土器観察表 11

遺物 番号	出土遺構	器種	法量 (cm)	器面調整		色調	胎土	備考
				外面	内面			
301	環濠7	壺	口径12.0 器高23.4 底径4.0	ナデ	ナデ	外-浅黄橙 内-浅黄橙	砂粒を少量含む	長頸壺 線刻
302	"	壺	底径3.5	ナデ	ナデ	外-にぶい橙 内-にぶい橙	細砂粒を多く含む	
303	"	壺	底径6.8	ナデ	不明	外-にぶい橙 内-褐灰	砂粒を多く含む	
304	"	壺	底径2.1	ミガキ	ナデ	外-にぶい橙 内-にぶい橙	3mm以下の砂粒を少量含む	
305	"	器台		ミガキ	ナデ	外-橙 内-にぶい橙	砂礫を多く含む	体部に沈線 透し
306	"	椀	底径4.8	丁寧なナデ	ハケ ナデ	外-橙 内-橙	砂粒を多く含む	線刻
307	"	椀	口径8.6 器高5.2 底径3.9	ミガキ	ナデ ミガキ	外-にぶい褐 内-にぶい褐	砂粒を含む	
308	"	小型丸底壺		不明	不明	外-灰白 内-灰白	細砂粒を多く含む	
309	"	小型丸底壺		ハケ ナデ	丁寧なナデ ハケ	外-にぶい黄褐 内-にぶい褐	砂粒を多く含む	
310	"	高杯		ナデ	ナデ	外-明赤褐 内-明赤褐	砂粒を少量含む	
311	環濠8	甗	底径5.0	タタキ	ハケ ナデ	外-浅黄橙 内-浅黄橙	砂礫を多く含む	スス付着
312	"	甗	底径5.6	タタキ	ハケ ナデ	外-にぶい黄橙 内-にぶい黄橙	砂粒を含む	
313	"	壺	底径5.3	ミガキ	ハケ	外-にぶい橙 内-暗灰	砂粒を多く含む	免田系 平行沈線 重弧文
314	"	壺		ナデ	ナデ	外-橙 内-浅黄橙	砂礫を多く含む	刻目突帯
315	環濠9a	甗		ナデ ハケ	ナデ	外-橙 内-暗灰黄	細砂粒を多く含む	はりつけ突帯
316	"	甗	口径24.5	ハケ ナデ	ナデ	外-にぶい褐 内-黄褐	砂粒を含む	連続刺突 スス付着
317	"	壺	口径11.2 器高30.1 底径4.9	ナデ ハケ	ナデ	外-にぶい黄橙 内-にぶい黄橙	砂粒を多く含む	はりつけ突帯
318	"	壺		ナデ	ナデ	外-にぶい橙 内-にぶい橙	砂粒を多く含む	
319	"	高杯		ナデ	ナデ	外-橙 内-赤橙	砂粒を多く含む	
320	"	鉢	底径5.1	ナデ ミガキ	ハケ ナデ	外-にぶい橙 内-にぶい橙	細砂粒を多く含む	
321	"	椀	口径12.0 器高9.3 底径4.8	ナデ ハケ	ナデ	外-にぶい橙 内-にぶい橙	砂礫を多く含む	
322	環濠9b	甗	口径20.2 器高19.2 底径6.1	ハケ	ナデ ハケ	外-橙 内-褐灰	砂粒を含む	スス付着
323	"	壺		ミガキ	ナデ ハケ	外-明赤褐 内-にぶい橙	砂粒を多く含む	免田系 平行沈線 重弧文
324	"	壺	口径11.6	ナデ ミガキ	ナデ ハケ	外-橙 内-橙	砂粒を多く含む	長頸壺
325	"	壺		ナデ ハケ	ナデ ハケ	外-橙 内-にぶい橙	細砂粒を多く含む	長頸壺
326	環濠9c	壺		ナデ	ナデ	外-にぶい橙 内-にぶい橙	砂粒を含む	
327	"	壺		ナデ	ナデ	外-にぶい橙 内-にぶい橙	砂粒を多く含む	刺突
328	"	壺		ナデ	ミガキ	外-にぶい黄橙 内-にぶい黄橙	9.5mm以下の砂礫を多く含む	
329	環濠9d	甗		ナデ ハケ	ナデ ハケ	外-にぶい黄橙 内-にぶい黄橙	砂粒を多く含む	
330	"	甗		ハケ	ナデ		砂礫を多く含む	

出土土器観察表 12

遺物 番号	出土遺構	器 種	法 量 (cm)	器面調整		色 調	胎 土	備 考
				外 面	内 面			
331	環濠 9 d	甕	底径 7.0	ハケ ナデ	ハケ ナデ	外- 橙 内- 黄	砂粒を少量含む	壺か
332	"	高杯		ハケ	ハケ ミガキ	外- 橙 内- 橙	砂粒を多く含む	
333	"	壺	底径 4.6	ナデ ハケ	ナデ ハケ	外- にぶい黄橙 内- にぶい橙	砂粒を含む	
334	環濠 9 e	甕	口径14.8	ナデ ハケ	ナデ ハケ	外- にぶい橙 内- にぶい橙	砂粒を含む	連続刺突
335	"	甕		ミガキ	ハケ	外- にぶい黄橙 内- 黒	3mm以下の砂粒を多く含む	壺か
336	"	壺	口径 7.4 器高 9.8 底径 3.8	丁寧なナデ	ナデ	外- にぶい橙 内- にぶい橙	細砂粒を多く含む	
337	"	壺		ミガキ	ハケ	外- にぶい黄橙 内- 黒	砂粒を多く含む	
338	環濠 9 f	甕	器高26.8 底径 6.8	ナデ	ナデ	外- にぶい橙 内- にぶい橙	砂粒を多く含む	スス付着
339	環濠 9 g	壺		ミガキ	不明	外- 浅黄橙 内- 黒	5mm以下の砂粒を多く含む	
340	"	壺	口径11.4 器高21.2 底径 5.0	ミガキ	丁寧なナデ	外- 橙 内- 橙	3mm以下の砂粒を含む	線刻
341	環濠 9 h	甕	口径24.0 器高29.1 底径 6.2	ナデ ハケ	ナデ	外- 明赤褐 内- 橙	3mm以下の砂粒を少量含む	スス付着
342	"	甕	口径20.9 器高27.4 底径 8.0	ナデ	ハケ ナデ	外- 橙 内- 黄橙	砂粒を含む	スス付着
343	"	甕	口径21.8 器高25.8 底径 3.7	ナデ	ハケ ナデ	外- 明褐灰 内- 明褐灰	砂粒を多く含む	スス付着
344	"	甕	口径22.2	ハケ	ハケ	外- 橙 内- にぶい橙	3mm以下の砂粒を多く含む	スス付着
345	"	甕	口径20.0	ナデ	ナデ	外- 黄橙 内- 黄橙	細砂粒を含む	スス付着
346	"	甕	口径10.3 器高13.8 底径 6.0	ナデ	ナデ	外- 黄橙 内- 橙	砂粒を多く含む	スス付着
347	"	壺		ハケ	ハケ ナデ	外- にぶい橙 内- 暗赤灰	砂粒を多く含む	
348	"	壺		ナデ	ナデ	外- 浅黄橙 内- 浅黄橙	砂粒を含む	
349	"	壺		丁寧なナデ	ハケ ナデ	外- にぶい橙 内- にぶい橙	微細粒を多く含む	
350	"	壺	底径 4.9	ミガキ	ハケ ナデ	外- にぶい黄橙 内- 灰色	砂粒を含む	スス付着
351	"	壺	底径 6.8	ナデ	不明	外- 橙 内- にぶい橙	砂粒を多く含む	長頸壺
352	"	壺	口径10.0 器高12.0 底径 3.5	ミガキ	ミガキ	外- にぶい橙 内- 橙	砂粒を多く含む	穿孔 朱痕
353	"	壺		ハケ ナデ	ハケ	外- にぶい橙 内- にぶい黄橙	砂粒を多く含む	
354	"	壺		ハケ ナデ	ハケ ナデ	外- にぶい橙 内- にぶい橙	砂粒を含む	スス付着
355	"	壺		ハケ ミガキ	ハケ ナデ	外- にぶい黄橙 内- にぶい黄橙	細砂粒を含む	平行沈線 重弧文 兔田系
356	"	高杯		ミガキ	ミガキ	外- にぶい橙 内- にぶい橙	砂粒を含む	
357	"	高杯	底径16.0	ミガキ	ミガキ 丁寧なナデ	外- 橙 内- 橙	砂粒を多く含む	
358	"	高杯		ミガキ	ミガキ ナデ	外- 橙 内- 橙	砂粒を少量含む	透し 朱痕か?
359	"	鉢		ナデ	ナデ	外- 橙 内- 明黄褐	砂粒を含む	
360	"	椀	器高7.75 底径 5.0	ハケ 丁寧なナデ	ハケ	外- 橙 内- 橙	砂粒を多く含む	

出土土器観察表 13

遺物番号	出土遺構	器種	法量 (cm)	器面調整		色調	胎土	備考
				外面	内面			
361	環濠9h	椀	器高7.45 底径4.0	ハケ ミガキ	ナデ ハケ	外-にぶい黄橙 内-黒	砂粒を少量含む	
362	"	蓋	器高4.8	丁寧なナデ	ハケ	外-にぶい黄橙 内-にぶい黄橙	砂粒を少量含む	
363	溝状遺構1	甕		ハケ ナデ	ハケ ナデ	外-明黄褐 内-にぶい黄褐	6mm以下の砂礫を含む	はりつけ突帯
364	"	甕	底径8.1	ナデ ハケ	ナデ ハケ	外-浅黄橙 内-浅黄橙	砂粒を含む	スス付着
365	"	壺	口径14.9	ナデ ミガキ	ナデ	外-橙 内-橙	砂粒を多く含む	沈線・長頸壺
366	"	器台	口径13.7 器高20.7 底径14.9	ミガキ ナデ	ナデ	外-明赤褐 内-明赤褐	5mm以下の砂粒を含む	
367	"	ミニチュア甕	器高12.0 底径3.2	ミガキ 丁寧なナデ	ナデ ハケ	外-にぶい黄橙 内-にぶい黄橙	砂粒を多く含む	
368	"	ミニチュア壺	底径2.6	ハケ	ハケ	外-にぶい黄橙 内-橙	砂粒を多く含む	スス付着
369	土器溜り	甕	底径7.5	ハケ	ユビオサエ	外-橙 内-にぶい黄橙	砂粒を多く含む	
370	"	壺	底径9.5	丁寧なナデ	丁寧なナデ	外-橙 内-灰黄	細砂粒を多く含む	
371	"	高杯		ミガキ ナデ	ミガキ	外-明赤褐 内-明赤褐	砂粒を含む	
372	"	高杯	底径15.0	ミガキ	ナデ	外-橙 内-暗灰黄	2mm以下の砂粒を多く含む	
373	"	高杯		丁寧なナデ	ナデ	外-灰褐 内-明褐	砂粒を含む	スス付着
374	北側テラス一括	壺	底径2.0	丁寧なナデ	丁寧なナデ	外-にぶい赤褐 内-明赤褐	砂粒を含む	スス付着
375	"	高杯		ミガキ ナデ ハケ	ナデ	外-にぶい黄橙 内-黒	細砂粒を多く含む	透し 朱痕
376	"	高杯		ナデ	ミガキ	外-にぶい褐 内-にぶい褐	砂粒を含む	暗文
377	"	高杯		ナデ ハケ	ナデ ハケ	外-にぶい黄橙 内-灰黄褐	砂粒を少量含む	
378	"	椀	底径4.0	ナデ	丁寧なナデ ハケ	外-にぶい橙 内-にぶい橙	細砂粒を含む	
379	環濠6一括	壺	器高17.4 底径2.6	ケズリ ナデ	ケズリ ナデ	外-黄橙 内-黄灰	砂粒を含む	
380	"	高杯		ミガキ ナデ	ミガキ ナデ	外-浅黄 内-黒	細砂粒を含む	透し
381	"	器台 壺		ミガキ	ミガキ	外-にぶい橙 内-褐灰	3mm以下の砂粒を多く含む	朱痕

出土土器観察表 14

遺物番号	器種・部位	調整	文様	色調	胎土	備考
410	深鉢・口縁	内面 ナデ 外面 ナデ	はりつけ突帯 はりつけ突帯	黒 黒	砂粒、透明な粒を含む	
411	深鉢・胴部	内面 ナデ 外面	楕円押型文	にぶい黄橙 にぶい黄橙	砂粒、細砂粒を多く含み、砂礫を少し含む	
412	深鉢・胴部	内面 ヨコナデ 外面	山形押型文	にぶい黄褐 明黄褐	砂粒を含む	
413	深鉢・胴部	内面 貝殻茶痕 外面 沈線文	貝殻茶痕 沈線文	明赤褐 黒褐	砂粒、細砂粒を多く含む	
414	深鉢・胴部	内面 土ぶきナデの 外面		褐灰 褐灰	黒や透明の粒を含む	
415	深鉢・胴部	内面 ナデ 外面	撚糸文	にぶい黄橙 にぶい黄橙	砂粒を含む	
416	深鉢・口縁	内面 ナデ 外面	貝殻文、爪形文	にぶい赤褐 褐	砂粒、細砂粒を含む	
417	深鉢・口縁	内面 ナデ 外面 ナデ	沈線文	にぶい赤褐 にぶい赤褐	礫、黒や透明の粒を多く含む	刻目あり
418	深鉢・口縁	内面 外面	沈線	にぶい赤褐		

出土石器計測表

番号	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	出土地	備考
382	磨製石鏃	6.1	3.1	0.35	8.87	シルト岩	住居 1	
383	磨製石鏃	5.0	2.4	0.2	3.68	"	竪穴状遺構 6	
384	磨製石鏃	5.8	2.6	0.3	6.31	"	環濠 9 b	
385	磨製石鏃	3.75	1.9	0.25	2.43	"	住居 22	
386	磨製石鏃	3.7	1.9	0.2	1.89	"	貯蔵穴 1	
387	磨製石鏃	3.65	1.8	0.25	2.28	頁岩	"	
388	磨製石鏃	2.65	1.95	0.25	1.43	"	竪穴状遺構 4	
389	磨製石鏃	2.55	2.3	0.2	2.02	"	環濠 1	
390	磨製石鏃	3.05	2.5	0.25	3.32	"	表面採集	
391	石包丁	3.6	4.7	0.5	7.83	"	竪穴状遺構 1	
392	石包丁	-	4.0	0.75	(33.15)	"	貯蔵穴 12	
393	石包丁	-	4.3	0.65	25.35	"	貯蔵穴 5	
394	石包丁	9.3	4.8	0.65	46.21	"	住居 21	
395	石包丁	9.05	5.2	0.9	63.17	"	住居 3	
396	石包丁	11.0	5.05	0.92	79.13	"	住居 1	
397	石包丁	10.0	5.0	1.05	71.09	"	住居 16	
398	石包丁	9.5	4.9	0.7	52.16	"	表面採集	
399	扁平片刃石斧	4.15	1.5	0.45	4.29	"	環濠 9 a	
400	石錘	9.0	6.6	2.65	195.0	砂岩	貯蔵穴 12	
401	石錘	7.0	9.2	2.05	220.0	"	土坑 2	
402	石錘	7.1	4.8	1.85	90.0	"	竪穴状遺構 2	
403	石錘	4.8	6.0	2.0	86.65	"	表面採集	
404	石錘	6.5	4.05	1.55	58.24	頁岩	"	
405	石錘	5.6	4.8	1.2	51.98	"	竪穴状遺構 21	
406	蛤刃形石斧	-	6.3	3.3	307.0	安山岩	土坑 2	
407	敲石	10.9	10.3	4.4	763.0	"	表面採集	
408	砥石	15.7	10.1	3.1	468.0	頁岩	"	
409	砥石	10.1	6.3	1.35	165.0	"	貯蔵穴 3	
419	石匙	2.1	2.6	0.5	2.72	黒曜石	表面採集	
420	石匙	5.5	8.2	1.3	32.26	"	環濠 8	
421	異形石器	5.1	5.3	1.2	20.12	"	表面採集	
422	剝片尖頭器	9.7	3.0	1.3	41.3	砂岩	トレンチ 1	
423	ナイフ形石器	4.35	2.35	1.25	11.11	頁岩	"	
424	ナイフ形石器	5.3	3.0	1.35	18.97	砂岩	"	
425	ナイフ形石器	4.3	3.1	1.0	13.34	頁岩	"	
426	三稜尖頭器	2.7	1.2	-	1.59	"	"	
427	ナイフ形石器	8.6	3.6	1.3	35.82	"	環濠 2	
428	剝片尖頭器	4.6	2.75	1.25	13.38	シルト岩	表面採集	
429	剝片尖頭器	5.1	2.8	1.25	-	頁岩	"	
430	三稜尖頭器	2.9	1.55	0.8	4.96	"	"	

第三章 ま と め

①旧石器・縄文時代について

下郷遺跡において旧石器時代・縄文時代共に多くの遺物が弥生時代の遺構埋土から出土し、表面採集もされた。旧石器時代はトレンチ1のV層黄色土上層（シラス 一部でAT）のIV層褐色土より、剥片尖頭器1点、ナイフ形石器3点、三稜尖頭器1点、使用痕剥片5点、剥片52点、碎片21点、石核1点が出土し、それらは10cm以内のレベルから出土しており、時間的制約から、整理段階において接合関係等を見ることができなかったが、AT降灰後の石器群と考えられ、表面採集、弥生時代の遺構埋土より出土した遺物もその時期と考えられる。

縄文時代は縄文早期と前期の鍵層となるアカホヤ火山灰が本遺跡では確認されておらず、集石遺構から遺物が出土していないため縄文時代の如何なる時期とは記すことはできず、遺物においても、多くが表面採集と弥生時代の遺構への流れ込みで、トレンチにおいては遺物が多くは出土しなかったため、層位的な見地から語ることはできないが、出土遺物を個々に見てみると縄文時代早期中葉から後葉の桑ノ丸式土器、押型文土器、平椀式土器、塞ノ神式土器と中期の阿高系の土器と後期の市来式土器が出土しており、縄文時代においては少なくとも4時期の存在が考えられる。

②弥生時代について

土器について

下郷遺跡の出土遺物についてみていくと、大きく4時期に分けることができる。以下、石川悦雄氏の編年を基礎として分類を行っていく（註1）

1期

甕

- a類 口縁部が外反せず、口縁部に三角断面の刻目突帯を持つもの（204）
- b類 口縁部とその直下に三角断面の刻目突帯を持つもの（175・216）
- c類 口縁部と胴部に1条ずつ三角断面の刻目突帯を持つもの（174）
- d類 口縁部とその直下、胴部に2条の三角断面の刻目突帯を持つもの（225）

壺

- a類 口縁部が大きく外反し、頸部外面、口縁部内面もしくは頸部内面に三角断面の刻目突帯を持つもの（176・177）
- b類 肩部に2条の突帯を巡らし、その直下に縦方向の沈線を施し、内外面にミガキを施すもの（178）
- c類 口縁部が短く外反し、球形の胴部を持ち肩部と頸部の境に突帯を巡らし、底部は平底を呈し、外面にミガキを施すもの（205）
- d類 口縁部が強く外反し、頸部に沈線を巡らし、内外面にミガキを施すもの（218）、中位で著しく張った胴部を持ち、肩部と頸部の境に2条の沈線を巡らし、胴部外面にミガキ

を施すもの (233)

高杯

a 類 杯部と脚部の境とその直下に突帯を巡らすもの (231)

212 の鉢も 204・205 と同位で出土しており、それらと同時期と考えられる。

2 期

下郷遺跡において 2 期に相当する遺物は他の時期に比べて非常に少なく、遺構も土坑 19 のみである。

a 類 口縁部が僅かに外反し、丸みを帯び、1 条の沈線を持つ台形断面の突帯を巡らす甕 (187・242)

3 期

甕

a 類 口縁部が「く」の字に外反し、胴部が張らないもの。(115・201・202・329) 最大径が口縁部にあり、口縁部が「く」の字もしくはカーブを描いて外反し、胴部が僅かに張るもの (111・258～261・322)

b 類 胴部が張り、口縁部が「く」の字に外反し、口縁部下に刺突を巡らすもの (65・104・316・334)

c 類 充実した底部を持ち、口縁部が「く」の字に外反し、胴部が張らず、口縁部下に突帯を巡らすいわゆる中溝式と呼ばれる在地系のもの (112・151)

壺

a 類 口縁部が朝顔形に開くもの (99・108・138・285・286・328)

b 類 口縁部が朝顔形に開き端部で T 字気味に肥厚し、肩部と頸部の境に突帯を巡らすもの (268)

c 類 鋤先口縁を呈するもの (100・250・251)

d 類 口縁部が T 字に肥厚し、沈線を有するもの (249)

e 類 短い頸部を持ち、口縁部が緩やかに外反するもの (246・299)

f 類 胴部が「く」の字もしくは丸く張り、口縁部が短く強く外反するもの (74・107・110・336・352)

4 期

下郷遺跡では、この時期の土器は大量に出土しており、器種によってもそれぞれバリエーションに富んでいる。

甕

a 類 胴部が張るが最大径は口縁部にあり、口縁部が「く」の字に外反し、上げ底を呈するもの (188～190・341・342)

b 類 口縁部が「く」の字に外反するか、もしくはカーブを描いて外反し、胴部が張り、口縁

部径と胴部径がほぼ同じになるもの（19・51・90・141・236・343・345）

- c 類 胴部が張るが最大径は口縁部にあり、口縁部が「く」の字に外反し、口縁部下に突帯を巡らすもの（179）
- d 類 口縁部が「く」の字に外反するか、もしくはカーブを描いて外反し、最大径が胴部径になり、上げ底を呈するもの（64・148・162・293・338）
- e 類 口縁部が「く」の字に外反するか、もしくはカーブを描いて外反し、最大径が胴部径になり、平底を呈するもの（30・237）
- f 類 最大径が胴部にあり、口縁部が「く」の字に外反し、口縁部下に突帯を巡らすもの（213・235・315・363）
- g 類 ドーナツ状の上げ底を呈し、器壁外面にタタキ調整を施すもの（311・312）
- h 類 最大径が胴部中位にあり、口縁部がT字気味に肥厚し、端部に沈線を施すもの（292）
器高が15 cm以下の小ぶりの甕は共伴するもの同志（152～154等）でも器形が全く異なり、一定の規格によって製作されていない

壺

- a 類 口縁部が短く外反する長胴の壺（33・62・71・72・91・114・128・155・156・158・182・196・287・317・326・327・347）
- b 類 球形の胴部を持つが、頸部があまり締まらないもの（56）、頸部が締まり、平底を呈するもの（198・219）、頸部が締まり、丸底を呈するもの（157）、平底を呈するもの（272～274・350）
- c 類 丸く張った胴部を持ち平底を呈するもの（199・267・276・348）、「く」の字に張った胴部を持ち、平底を呈し、僅かに頸部が伸びるもの（159・160・168）、「く」の字に張った胴部を持ち、平底を呈し、頸部が伸びないもの（167）
- d 類 径の狭い頸部を持ち、平底を呈する長頸壺（124）、径の狭い頸部を持ち、丸底を呈する長頸壺（220）、径の大きい頸部を持ち平底を呈する長頸壺（245・301）、径の大きい頸部を持ち丸底気味を呈する長頸壺（123）
- e 類 平底を呈する免田系の長頸壺（271・289・313）、丸底気味の平底を呈する免田系の長頸壺（54）、免田系の長頸壺の器形を有するが平行沈線文、重弧文を施さないもの（145・271）
- f 類 口縁部が「く」の字に外反し、端部が肥厚し、頸部に沈線を施す長頸壺（184・247・365）、口縁部が「く」の字に外反し、端部が肥厚し、頸部に沈線を施さない長頸壺（351）
- g 類 二重口縁壺で波状文を施すもの（277）
- h 類 単口口縁壺だが端部に波状文を施すもの（300）

鉢

鉢は器形に一定の規格が見られず、それぞれによって形態が異なっている。

- a 類 丸底を呈し、口縁部が短く外反するもの（6）
- b 類 平底を呈し、口縁部が短く外反するもの（253）

- c 類 上げ底を呈し、内湾気味に立上がり、口縁部が「く」の字に大きく外反するもの (21)
- d 類 上げ底を呈し、内湾気味に立上がり、口縁部が短く外反するもの (39)
- e 数 充実した底部を持ちほぼ直線的に立上がるもの (116)
- f 類 脚台状の底部を持ち、内湾気味に立上がるもの (359)
- g 類 内湾しながら立上がり、口縁部で垂直に立ち、浅いもの (45)、内湾しながら立上がり、口縁部で垂直に立ち、深いもの (79)

高杯

- a 類 脚部が「ハ」の字に外反し、杯部がほぼ直線的に立上がり、稜を持って口縁部が垂直方向に外反し、端部が肥厚するもの (290)
- b 類 口縁部が垂直方向に外反し、端部が肥厚するもの (278・356)
- c 類 脚部が「ハ」の字に外反し、杯部がほぼ直線的に立上がり、稜を持って口縁部が垂直方向に外反するもの (22・117・146・173)
- d 類 脚部が「ハ」の字に外反し、杯部が内湾気味に立上がり、稜を持って口縁部が外方向に外反するもの (29) 杯部が内湾気味に立上がり、稜を持って口縁部が外方向に外反するもの (371)
- e 類 杯部下位で稜を持って口縁部が大きく緩やかに外反するもの (332)
- f 類 脚部が「ハ」の字に外反するもの (46・80・82・83・101・319・372)
- g 類 脚部が「ハ」の字に外反し、端部で肥厚もしくは上方に立上がるもの (81・96・106・254・255・279・280・357・358)
- h 類 脚裾部が屈曲して、内湾しながら開くもの (131)

器台

- a 類 体部が直行し、裾部、口縁部で外反し、透しを持たないもの (200・366) b～d 類に比べ造りが粗雑である
- b 類 体部が短く、裾部、口縁部に向けて外反し、透しを持つもの (36・84・125・126・139・305)
- c 類 体部が短く、裾部、口縁部に向けて外反し、透しを持ち、体部に沈線を数条施すもの (282) 体部が短く、裾部、口縁部に向けて外反し、透しを持たず、体部に沈線を数条施すもの (281)
- d 類 口縁部が垂直に外反し、口唇部で三角状に立上がり、体部内面に突帯を持ち、透しを持つもの (47)

蓋・椀・ミニチュア土器

4期の土器に共伴して、蓋、椀、ミニチュア土器が多く出土した。今回蓋として取り扱った14・63・87・132・362の内、つまみを持つものは14のみで、他は鉢の可能性も考えられる。ミニチュア土器は住居、貯蔵穴から多く出土しており、367が甕を小型化した形を呈する他は、多様なバリエーションを見せる。

1期は石川氏のI c期～II a期(前期後葉から中期前葉)、2期はII c期(中期中葉)、3期

はⅢb期～Ⅳ期（中期末～後期初頭）、4期はⅤ期（後期前葉～後葉）に相当すると考えられる。

4期においては高杯（a～c類→d類）、器台（a類→b～d類）へ形態変化することから4期中でも細分化が考えられるが、宮崎平野における弥生時代後期の甕の編年の系譜（胴部径の肥大化、底部の上げ底化）が3期と4期では見られるものの、4期内では共伴関係からそれを読み取ることはできなかった。また、甕4h類、壺4f類、器台4c類は、瀬戸内系の特徴を持っており、従来、宮崎平野における瀬戸内系土器の流入は本遺跡の3期（石川氏のⅣ期）のみに見られる特徴であることから、それらは本来ならば3期とすべきものだが、4期の土器と共伴しており、瀬戸内系土器は3期で途絶えずに、4期に入ってからその特徴は僅かながらも残ると考えられる。また、壺3c類とした口縁部がT字に肥厚し、沈線を施すものも新田原遺跡、中溝遺跡出土のそれらと比較するとT字の肥厚が退化傾向にある。また、甕3b類としたものも胴部の張りが4期的な特徴を持つ。以上のことから、壺3c類、甕3b類も4期になる可能性がある。

絵画土器について

本遺跡からは線刻の入った土器が19点出土した。すべて壺に刻まれており、線のみのももの（73・124・246）、記号的なもの（44・72・123・182・276・287・301・327・340）絵画的なもの（62・114・155・157・158・199・203）に分類される。246のみが4期で、他は5期と考えられる。線のみのももの、記号的なものは中岡遺跡を代表とし、宮崎県内でも類例は多い。しかし、絵画的なものでも155・157・199・203については、幾種類もの線によって刻まれており、単体のもの表現している下那珂遺跡出土の「飛鳥」を代表とする、県内の弥生時代後期後半（石川氏Ⅴ期、下郷4期）の絵画土器よりもむしろ、畿内第Ⅳ様式的な印象を受ける。しかし弥生時代において、日向地方が畿内の影響を受けるのは畿内第Ⅴ様式（石川氏Ⅴ期、下郷4期）に入ってからが通例となっているため、下郷遺跡出土の絵画土器が畿内第Ⅳ様式の影響を直接受けたとは現段階では考えにくい。

線刻土器の内155・157・158は貯蔵穴18内から7個配置された状態で出土した壺の内の3点である。共伴した土器は生活色の強い小型の甕が3点で、高杯、器台は出土しなかったため、祭祀儀礼に使用したものかは解らないが、線刻土器も含めて7個の配置された壺は他の遺構から出土した壺よりも明らかに造りが丁寧であるため、やはり特別な壺であったと考えられる。

遺構について

住居

住居は22軒検出された。多くが削平されており、全体のプランがはっきり解るものが少なく、現況で方形プランが4軒、長方形プランが7軒、方形間仕切りが1軒、台形プランが1軒、不定形プラン（住居9・16）が2軒検出された。不定形プランを呈するものは他の遺構との切

り合い若しくは他遺構との切り合いも考えられるが、土層断面での切り合いでは確認することができなかった。長方形プランを呈するものは、住居1・2を除いて、長軸方向の長さが3.5m以内と他遺跡で検出される住居よりも小型である。出土遺物から住居1～10・12～13・15・16・19～22は4期と考えられる。

竪穴状遺構

竪穴状遺構は25基検出された。方形もしくは長方形プランを呈するが、住居にするにはあまりに小型であるものを竪穴状遺構としたが、その中でも様々なバリエーションがあり、それぞれ遺構の性格も違うと考えられる。竪穴状遺構1・22・24・25は方形プラン、楕円形プランを呈するが、深さが70cm以上と深く、下郷遺跡で検出された貯蔵穴とあまり変わらず、竪穴状遺構22においては貯蔵穴18の様に壺が置かれた状態で出土しているため、以上の竪穴状遺構は貯蔵穴的な性格のものだと考えられる。出土遺物から竪穴状遺構1・6・13・14・17・25は3期、竪穴状遺構2・5・24は4期と考えられる。また3期に比定した竪穴状遺構13・14・17周辺には同タイプの竪穴状遺構が他に3基（竪穴状遺構15・16・18）あり、このタイプの竪穴状遺構が周辺に群集する状態になっているため、竪穴状遺構15・16・18についても3期と想定できる。

貯蔵穴

貯蔵穴は22基（竪穴状遺構で貯蔵穴としたものも含む）検出された。北側2段目テラス、西側斜面部、東側の斜面部の3箇所群集しており、断面形が袋形、ビーカー形、壁面の一部に膨らみを持つものがあり、平面プランは円形、楕円形、方形（竪穴状遺構で貯蔵穴としたもの）を呈する。貯蔵穴17は3期、貯蔵穴1・3～5・7・16・18・19は4期と考えられる。

土坑

土坑は31基検出された。出土遺物から、土坑2が1期、土坑19が2期、土坑28が3期、土坑3・12・17・22は4期と考えられる。

環濠

環濠は2重に検出された。内側に位置する環濠1～5（以後 内環濠）は底幅の狭い逆台形もしくはV字形を呈する。外側に位置する環濠7～9（以後 外環濠）は底幅の広い逆台形を呈する。遺物量は、内環濠に比べ外環濠の方が圧倒的に多く出土しており、内環濠では環濠1・5から1期の遺物が底面から出土しており、環濠2・3の埋土中からも1期の遺物が中心に出土しているが、埋土上層からは4期の遺物も出土している。また内環濠は3・4期に相当する別の遺構に多く切られている。よって、内環濠は1期に掘り込まれ、3期の時代には土がある程度堆積し、環濠としての役割を果たさなくなったと考えられる。

外環濠では4期の遺物を中心に大量に出土しており、4期に比べると僅かであるが、環濠9b・dから322・329等が出土しているため、環濠9については掘り込まれた時期自体は3期の可能性がある。しかし、環濠7・8についてはほとんどが4期の土器で3期の土器は破片でしか出土しておらず、環濠7、環濠9間は現在谷部となっているため、掘り込まれた時期については若干の差があるとも考えられる。環濠8においては弥生時代後期前葉（石川氏Va期、

下郷4期の初め)に流入が考えられている畿内系のタタキ調整の甕(甕4g類)と免田系の長頸壺でも古相の形態を呈するもの(289・313)が共伴して出土しているため、その時期には環濠8は存在していたと考えられる。外環濠の下層から出土する土器は4期で終わっており、4期を最後として役割を果たさなくなると考えられ、つまりはその時期が環濠集落の終焉だと考えられる。

環濠10・11は遺物が出土しておらず、後世の造成により遺構自体の残りが悪く、内環濠と外環濠のいずれに繋がるかが問題となるが、環濠が丘陵全体を完周するという前提に立つならば、内環濠に繋がると考えられる。

環濠6は環濠10・11のような前提に立つならば、内環濠に繋がるものと考えられる。しかし、環濠6から大量に出土した土器は3期、4期になるものがほとんど(2期は小破片で流れ込みと考えられる)で、1期に掘り込まれ3期には役割をすでに果たしていなかったと考えられる内環濠とは時期的なずれが生じる。また環濠6に「環濠」という名称を与えたものの、環濠(溝)のような形態をしておらず、3つのテラスが検出されたのみで溝の掘り込みと断定できるものは確認できなかった。だが、環濠11を除いた他の内環濠が標高29m前後に立地することから、環濠6の掘り込まれてある斜面部分に内環濠と繋がる別の環濠が存在していたか、谷地形という自然の要害を環濠として利用していたかが考えられる。また環濠6はその想定される環濠に別の遺構を掘り込んだと考えられる。内環濠と環濠6・10・11の内側を1期、2期における集落とした場合、その面積は4,000m²となる。

環濠以外の遺構では内環濠が存在した1期・2期に相当する遺構は土坑2・19のみで、それ以外の遺構は外環濠の3・4期に相当している。遺跡中央部付近の礫層面までカットを受けた部分にも弥生時代の遺構が存在していたことは間違いのないため、一概に検出された遺構のみの量で遺跡の隆盛時期は計れないが、内環濠と外環濠とでは圧倒的に外環濠の遺物量が多く、その中でも4期の遺物がほとんどであることから、下郷遺跡の隆盛時期は4期(弥生時代後期前葉~後葉)だったと考えられる。しかし、1期においても環濠を造る程の大土木工事を行っているため、礫層面部分にその時代の生活遺構が多数あったと考えられる。

また外環濠の環濠7・8の東側の続き、環濠9の南側の続きについては後世の造成によって全く不明となっている。下郷遺跡の立地する丘陵の南側には標高約26m(最高28.5m)の下郷遺跡よりも広大で比較的フラットな丘陵(第2図参照)が存在しており、外環濠はその南側の丘陵へ延び、その丘陵上を巡っていた可能性がある。つまりは3期、4期における集落は下郷遺跡の立地する丘陵にだけでなく南側の丘陵にも展開していたと考えられ、外環濠の立地する標高26~27m付近の高さで南側にも環濠が巡っていると仮定した場合、その面積は31,000m²と広大なものとなり、この時期の周辺地域の拠点的な集落として充分考えられる。

下郷遺跡南東部裾部分の宮崎大学茶園遺跡からは下郷1期、2期、茶園遺跡の東側に位置する垣下遺跡からは下郷1~3期の遺物が出土しており、2遺跡ともに半径300m以内に位置しており、2遺跡から出土した遺物は下郷遺跡に住んでいた集団によってもたらされた可能性が高く、また下郷遺跡の北北東約1.6kmの位置の低地帯(標高約10m)に弥生時代後期後半の

遺物が大量に出土した黒太郎遺跡（調査面積約 500 m² 現在は水田地帯）があり、住居は検出されなかったものの、集落の一部と想定される周溝状遺構、柱穴、溝状遺構が検出された。下郷遺跡と同時期の存在も考えられ、拠点集落の下郷遺跡が周辺地域にどれ程の影響力を及ぼしていたかが問題となる。（註 2）また、大淀川下流域には下郷遺跡以外に石ノ迫第 2 遺跡、塚原遺跡（国富町、大淀川支流本庄川）の 2 つの環濠集落があり、台地もしくは丘陵縁辺部の平野を望む下郷遺跡と似た位置に立地している。2 遺跡ともに弥生時代中期中葉～後期後半に位置付けられる集落で、それらが周辺地域の拠点集落として繁栄した時期とはほぼ同時期に下郷遺跡も存在しており、特に大淀川を挟んで西に約 3 km に位置する石ノ迫第 2 遺跡（註 3）と下郷遺跡は密接な関係があると考えられ、今後、その遺跡間の比較検討をすることを課題としたい。

また、環濠集落としての下郷遺跡は弥生時代後期後半を最後とし、それ以降古墳時代の遺物は数点出土しているのみで集落は衰退もしくは移転したと考えられ、その原因、集団の動向については、今後の研究、調査例を待ちたい。

最後になりましたが、梅雨の時期、真夏の暑い時期に発掘調査に従事して頂いた作業員の皆様方に心からお礼を申し上げます。

（註 1） 参考文献以外に、平成 10 年 11 月宮崎考古 36 回例会の発表資料も参考

（註 2） 平成 11 年度報告書刊行予定

（註 3） 平成 10 年度報告書刊行予定

<参考文献>

石川悦雄 「日向考古資料 I」『研究紀要』No 10 宮崎県総合博物館 1984

石川悦雄 「宮崎平野における弥生土器編年試案—素描（M k II）」『宮崎考古』第 9 号

面高哲郎 「宮崎県下出土の線刻のある弥生土器」『考古学雑誌』1980

中岡遺跡 宮崎市教育委員会 1987

垣下遺跡 宮崎市教育委員会 1991

塚原遺跡 東原 A・B・C・D 地点 国富町教育委員会 1995

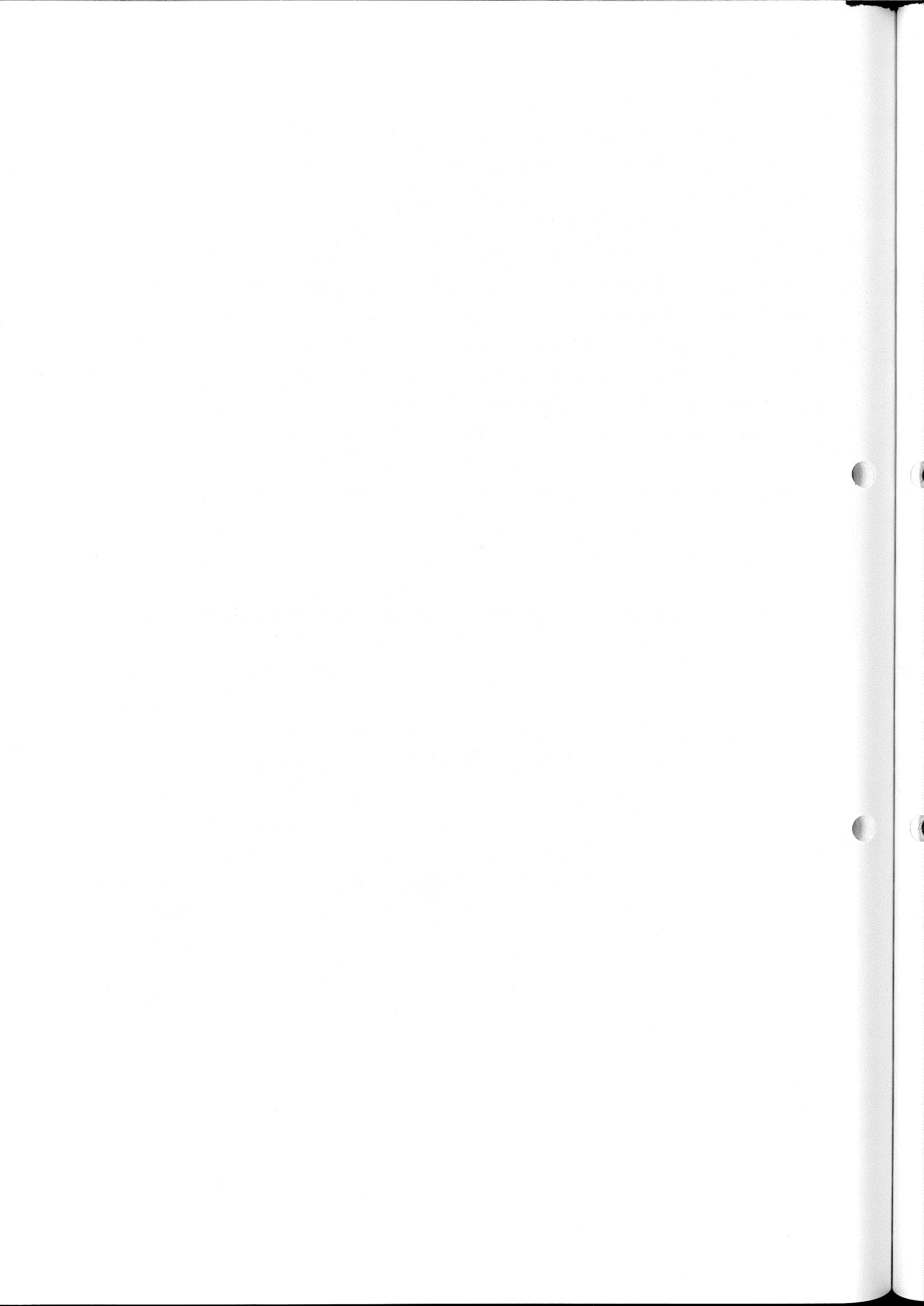
塚原遺跡 東原 E・F・地点 国富町教育委員会 1996

持田中尾遺跡 『持田中尾遺跡発掘調査概要報告書』高鍋町教育委員会 1982

鏡遺跡 『鏡遺跡・藤掛遺跡（新富町文化調査報告書 2 集）』新富町教育委員会 1983

生目古墳群周辺遺跡発掘調査報告書 宮崎市教育委員会 1996

柳瀬遺跡 下関市教育委員会 1997





図版 1 下郷遺跡全景 1 (上空より)



図版 2 下郷遺跡全景 2 (東上空より)

図版 3
北側1段目・2段目テラス
(上空より)



図版 4
環濠1周辺 (上空より)





図版 5
環濠 4・9 周辺
(上空より)



図版 6
環濠 6 周辺 (上空より)

図版7
環濠3土層断面



図版8
環濠3周辺



図版9
環濠6遺物出土状況①



図版10
環濠6遺物出土状況②



図版11
環濠6完掘状況①



図版12
環濠6完掘状況②



図版13
環濠7遺物出土状況



図版14
環濠7、8合流点遺物出土状況



図版15
環濠9、貯蔵穴2・20



図版16
環濠9g遺物出土状況



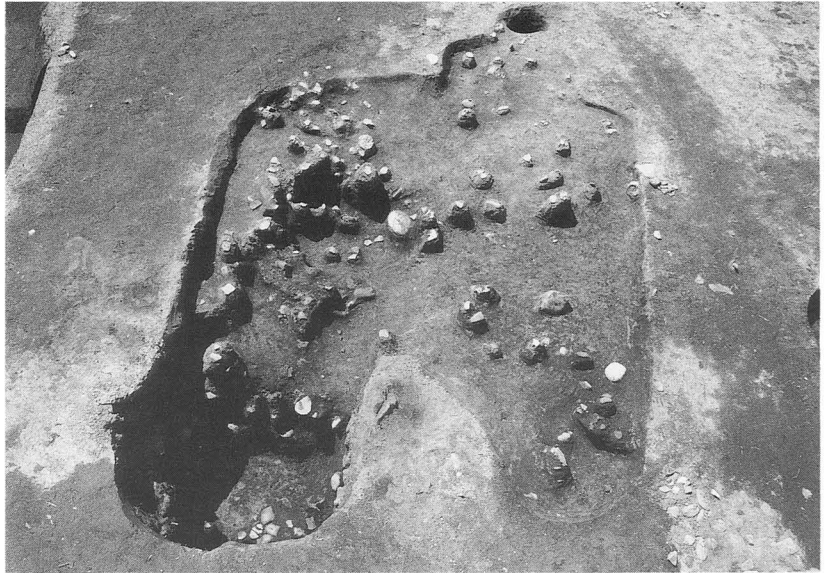
図版17
住居1・2遺物出土状況



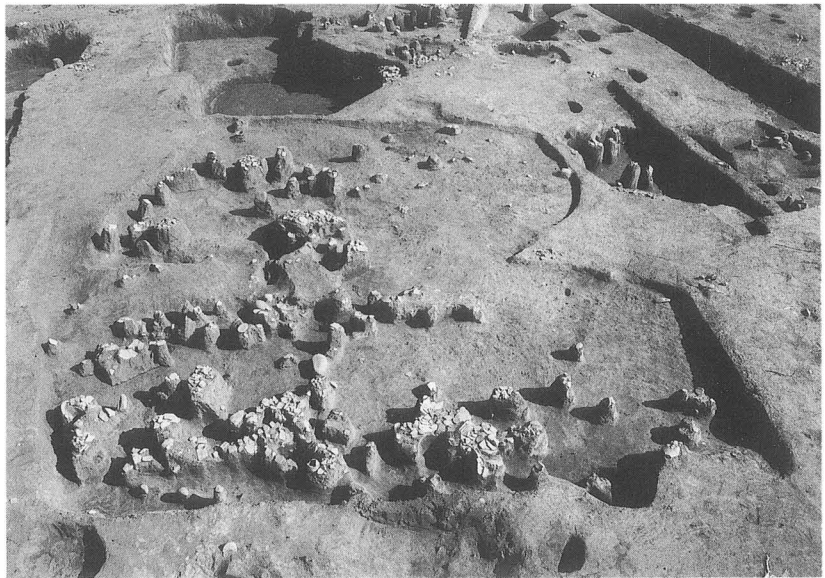
図版18
住居4遺物出土状況



図版19
住居9遺物出土状況



図版20
住居15遺物出土状況



図版21
住居20遺物出土状況



図版22
住居21遺物出土状況



図版23
竪穴状遺構2、土坑2完掘状況



図版24
竪穴状遺構6完掘状況





図版25
 豎穴状遺構13遺物出土状況



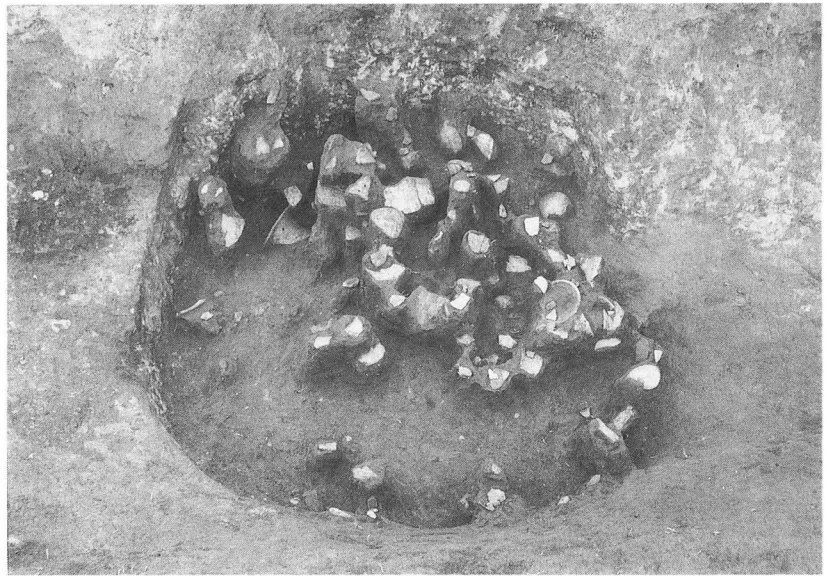
図版26
 豎穴状遺構15遺物出土状況



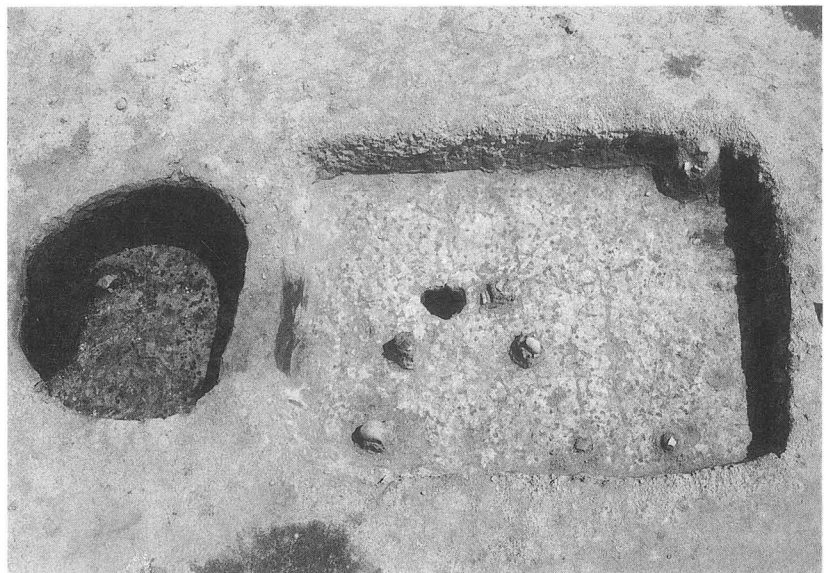
図版27
 豎穴状遺構24遺物出土状況①



図版28
竪穴状遺構24遺物出土状況②

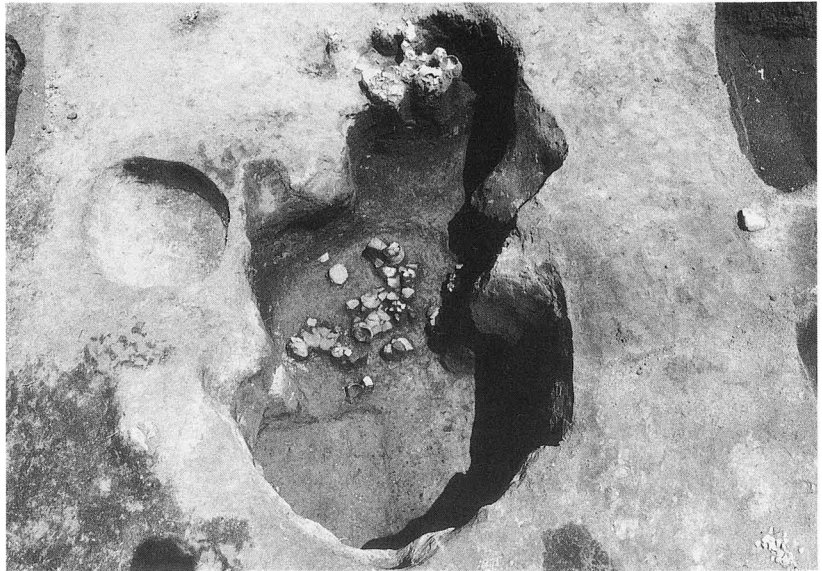


図版29
貯蔵穴1遺物出土状況

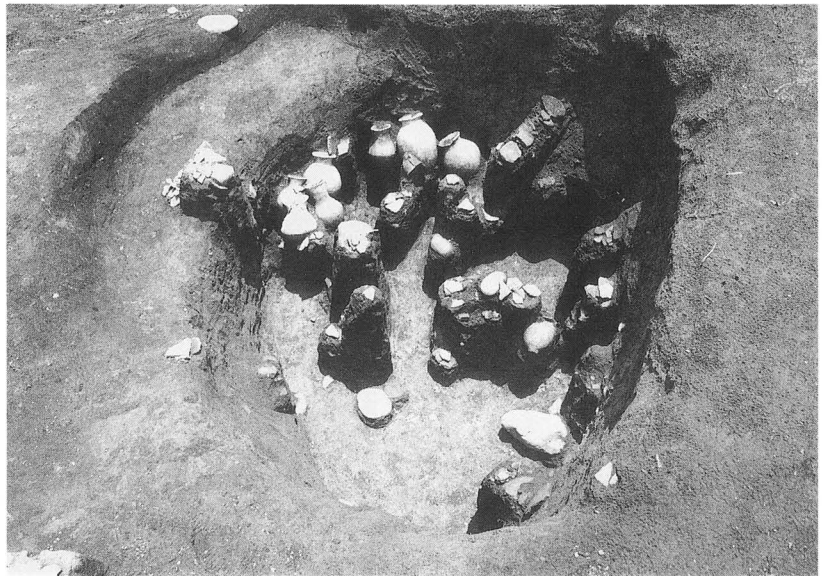


図版30
貯蔵穴4、竪穴状遺構7

図版31
貯蔵穴8・15・16、
土坑9遺物出土状況



図版32
貯蔵穴18遺物出土状況①



図版33
貯蔵穴18遺物出土状況②



図版34
貯蔵穴19遺物出土状況①



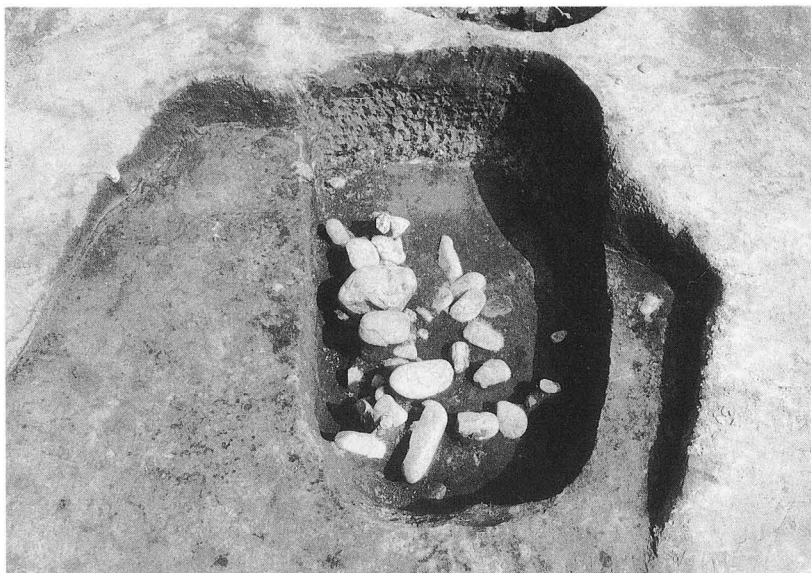
図版35
貯蔵穴19遺物出土状況②



図版36
貯蔵穴19遺物出土状況③



図版37
土坑8遺物出土状況



図版38
集石遺構1



図版39
集石遺構2



図版40
集石遺構3



図版41
集石遺構4



図版42
トレンチ1遺物出土状況

